

フゴッペ洞窟・岩面刻画と文化交流の
フィールドステーション作りの基礎研究

(研究課題番号：12791004)

平成12～14年度科学研究費補助金(地域連携推進研究費(2))研究成果報告書

平成15年3月

研究代表者 赤松守雄

(北海道開拓記念館)

は し が き

本研究は、フゴッペ洞窟を中心とする縄文社会の文化交流と岩面刻画の成立過程を明らかにし、当時の環境を復元することから、文化財を題材とした体験学習、生涯学習の場の環境を整えることを究極的な目的として進めた。

研究の成果としては、およそ 2000 年前にはじまった縄文社会の人やものの移動や生産などから日本列島はもとより、北はサハリン、さらに対岸の大陸文化といった交流の道をさぐることができた。また、その背景となる古環境の変化なども人やものの移動においても明らかになってきた。さらに、フゴッペ洞窟の岩面刻画の成立にかかわる年代、その岩面刻画の持つ意味についても、おおよその方向が明らかになってきたと考えられる。この成果については、北海道開拓記念館で開催した第 55 回特別展「洞窟遺跡を残した縄文の人びと」で公開し、関連事業として講演会などを実施した。

研究の公開としては、シンポジウム、フォーラムなどを開催し、多くの研究者に参画していただき学際的な視野でフゴッペ洞窟の研究に取り組んでいただいた。また、文化財としてのフゴッペ洞窟は、将来どうあるべきかなどといったことについて、余市町はもとより北海道、さらに本州からの参加者で、議論していただいた。

これらを基に、文化財をテーマとした「フィールドステーション」のモデルとして、フゴッペ洞窟に新たないくつかの提案を行った。現在、進められている「史跡フゴッペ洞窟」の保存施設の整備事業などに、それらの成果が繁栄することができ、平成 16 年 4 月オープンするリニューアル施設が公開されることとなっている。

本報告書は、これらの成果をとりまとめたものであり、今後の「史跡フゴッペ洞窟」の発展に役立てられれば幸いである。

最後に研究分担者ならび研究協力者、研究連携をいただいた余市町、余市町教育委員会、史跡フゴッペ洞窟保存委員会の方々、この研究を支えていただいた関係諸氏に感謝する次第である。また、ロシア共和国での調査では、ハバロフスク州郷土博物館の N.ルバン館長をはじめ、A.パノマリョーヴァ副館長ならびに関係諸氏に多大なるご協力をいただいた。記して感謝するものである。

研究代表者 赤松守雄

研究組織

研究代表者／赤松	守雄(北海道開拓記念館・学芸部・特別学芸員)	平成12～14年度 地質学的調査と古環境復元本研究総括
研究分担者／氏家	等(北海道開拓記念館・事業部長)	平成12～14年度 民俗学的調査と比較研究、その資料活用
	山田悟郎(北海道開拓記念館・学芸部・主任学芸員)	平成12～14年度 地質学的調査と古環境復元、その資料活用
	小林幸雄(北海道開拓記念館・事業部・主任学芸員)	平成12～14年度 資料保存と分析学的研究、その資料活用
	右代啓視(北海道開拓記念館・学芸部・資料課長)	平成12～14年度 考古学的調査・研究と文化財活用
	為岡進(北海道開拓記念館・学芸部・写真技術員)	平成12～14年度 写真資料による比較研究、その資料活用
	添田雄二(北海道開拓記念館・総務部・学芸員)	平成13～14年度 地質学的調査と古環境復元
	鈴木琢也(北海道開拓記念館・事業部・学芸員)	平成14年度 考古学的調査・研究
	福田正巳(北海道大学低温科学研究所・教授)	平成12～14年度 洞窟遺跡の保存科学的研究
	菊池徹夫(早稲田大学・文学部・教授)	平成12～14年度 考古学的調査・研究
	小川勝(鳴門教育大学・学校教育学部・助教授)	平成12～14年度 岩面刻画の美術史学的比較研究、その資料活用
研究協力者／木村	重信(大阪大学・名誉教授)	平成12年度
	大塚以和雄(発見関係者)	平成12年度
	大塚誠之助(発見関係者)	平成12年度
	佐々木史郎(国立民族学博物館・助教授)	平成12年度
	小泉格(北海道大学・名誉教授)	平成12年度
	三浦定俊(独立行政法人東京国立文化財研究所)	平成12年度
	下川浩一(独立行政法人産業技術総合研究所)	平成12年度
	利輝夫(余市町教育委員会・教育長)	平成12～14年度
	盛昭史(余市水産博物館・館長)	平成12～14年度
	乾芳宏(余市水産博物館・文化財兼学芸係長)	平成12～14年度
	浅野敏昭(余市水産博物館・学芸員)	平成12～14年度

交付決定額(配分額)

	直接経費	間接経費	合計
平成12年度	15,500	0	15,500
平成13年度	15,300	0	15,300
平成14年度	12,700	0	12,700
総計	43,500	0	43,500

研究発表

(1) 学会誌等

浅野敏昭「フゴッペ洞窟及び手宮洞窟研究史の概要について」フゴッペ洞窟・岩面刻画の総合的研究,科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))研究成果報告書,2002.3.31

右代啓視「フゴッペ洞窟岩面刻画と出土資料」本郷, No. 33, 吉川弘文館 2001

右代啓視「フゴッペ洞窟の成因とその考古学的復元」フゴッペ洞窟・岩面刻画の総合的研究,科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))研究成果報告書,2002.3.31

右代啓視「フゴッペ洞窟・岩面刻画と文化交流のフィールドステーション作りの基礎研究」北海道開拓記念館だより, Vol.32, No.6, 2003.3.1.

右代啓視「縄文時代の洞窟遺跡」第55回特別展洞窟遺跡を残した縄文の人びと,北海道開拓記念館.2002.9.13.

浜田雄二・赤松守雄「過去2000年の古環境と人のかかわり」第55回特別展洞窟遺跡を残した縄文の人びと,北海道開拓記念館.2002.9.13.

山田悟郎「縄文時代に利用された植物」第55回特別展洞窟遺跡を残した縄文の人びと,北海道開拓記念館.2002.9.13.

乾 芳宏「考古学的概観」フゴッペ洞窟・岩面刻画の総合的研究,科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))研究成果報告書,2002.3.31

乾 芳宏・浅野敏昭「フゴッペ洞窟の岩面刻画」第55回特別展洞窟遺跡を残した縄文の人びと,北海道開拓記念館.2002.9.13.

小川 勝「世界の岩面刻画とフゴッペ洞窟・岩面刻画」第55回特別展洞窟遺跡を残した縄文の人びと,北海道開拓記念館.2002.9.13.

菊池徹夫「フゴッペ・手宮の岩面刻画の意味するもの—シベリア沿海州スクパイとの比較から—」フゴッペ洞窟・岩面刻画の総合的研究,科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))研究成果報告書,2002.3.31

菊池徹夫「洞窟遺跡に見る縄文以降の諸文化—アイヌ文化形成論の視点から—」第55回特別展洞窟遺跡を残した縄文の人びと,北海道開拓記念館.2002.9.13.

(2) 口頭発表

- 木村重信氏「フゴッペ刻画と世界の岩面画」フゴッペ洞窟シンポジウム 2000. 11. 19.
大塚以和雄氏・大塚誠之助「フゴッペ洞窟発見あれこれ」フゴッペ洞窟シンポジウム
2000. 11. 19.
- 乾 芳宏「フゴッペ洞窟の考古学的位置づけ」フゴッペ洞窟シンポジウム 2000. 11. 19.
小川 勝「フゴッペ洞窟の岩面刻画の位置づけ」フゴッペ洞窟シンポジウム 2000. 11. 19.
佐々木史郎「民族学から見たフゴッペ洞窟」フゴッペ洞窟シンポジウム 2000. 11. 19.
小泉 格「フゴッペ洞窟の立地環境と気候」フゴッペ洞窟シンポジウム 2000. 11. 19.
三浦定俊「フゴッペ洞窟の保存と活用」フゴッペ洞窟シンポジウム 2000. 11. 19.
- 盛 昭史「奈良周辺における史跡の保存と活用」フゴッペ洞窟フォーラム2001
2001. 11. 24.
- 乾 芳宏「九州における史跡の保存と活用」フゴッペ洞窟フォーラム2001 2001. 11. 24.
浅野敏昭「ハバロフスク州の岩面刻画とその活用」フゴッペ洞窟フォーラム 2001
2001. 11. 24.
- 右代啓視・添田雄二「ロシア極東地域の岩面刻画とその活用」フゴッペ洞窟フォーラム 2001
2001. 11. 24.
- 小川 勝「ヨーロッパの岩面刻画とその活用」フゴッペ洞窟フォーラム 2001 2001. 11. 24.
- 盛 昭史「盛岡市・仙台市における史跡の保存と活用」フゴッペ洞窟フォーラム 2002
2003. 3. 29
- 盛 昭史「東京における史跡の保存と活用」フゴッペ洞窟フォーラム 2002 2003. 3. 29
浅野敏昭「北陸における史跡の保存と活用」フゴッペ洞窟フォーラム 2002 2003. 3. 29
- 乾 芳宏「ヨーロッパにおける史跡の保存と活用」フゴッペ洞窟フォーラム 2002
2003. 3. 29
- ## (3) 出版物
- 小川 勝「フゴッペ洞窟・岩面刻画の総合的研究」科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))研究
成果報告書, 2002.3.31
- 右代啓視・赤松守雄・山田悟郎・添田雄二・為岡 進・鈴木琢也「第 55 回特別展洞窟遺
跡を残した縄文の人びと」北海道開拓記念館, 2002.9.13.
- 赤松守雄・浅野敏昭・乾芳宏・右代啓視・鈴木琢也・添田雄二・山田悟郎「国指定史跡フ
ゴッペ洞窟」北海道開拓記念館・余市町教育委員会, 2003.3.31.

目次

I 研究事業実施報告	1
II 発見50周年記念「フゴッペ洞窟シンポジウム—過去・現在・未来—」	7
1 木村重信「フゴッペ刻画と世界の岩面画」	
2 大塚以和雄・大塚誠之助「フゴッペ洞窟発見あれこれ」	
3 乾 芳宏「フゴッペ洞窟の考古学的位置づけ」	
4 小川 勝「フゴッペ洞窟の岩面刻画の位置づけ」	
5 佐々木史郎「民族学から見たフゴッペ洞窟」	
6 小泉 格「フゴッペ洞窟の立地環境と気候」	
7 三浦定俊「フゴッペ洞窟の保存と活用」	
8 討論：コメンテーター／木村重信、菊池徹夫、福田正己、 司 会／赤松守雄	
III フゴッペ洞窟フォーラム2001「フィールドステーションとしてのフゴッペ洞窟」	109
1 盛 昭史「奈良周辺における史跡の保存と活用」	
2 浅野敏昭「ハバロフスク州の岩面刻画とその活用」	
3 乾 芳宏「九州における史跡の保存と活用」	
4 右代啓視・添田雄二「ロシア極東地域の岩面刻画とその活用」	
5 小川 勝「ヨーロッパの岩面刻画とその活用」	
6 討論・コメンテーター／菊池徹夫、福田正己、利 輝夫、赤松守雄 司会／右代啓視	
IV フゴッペ洞窟フォーラム2002「これからのフゴッペ洞窟」	149
1 盛 昭史「盛岡市・仙台市における史跡の保存と活用」	
2 盛 昭史「東京における史跡の保存と活用」	
3 浅野敏昭「北陸における史跡の保存と活用」	
4 乾 芳宏「ヨーロッパにおける史跡の保存と活用」	
5 討論・コメンテーター／利 輝夫、菊池徹夫、福田正己、小川 勝 赤松守雄、氏家 等、山田悟郎 司会／右代啓視	
V 史跡フゴッペ洞窟関連トレンチ調査報告書	171
VI 資料集	203
1 フゴッペ洞窟シンポジウム配布資料	
2 フゴッペ洞窟フォーラム2001・2002 配布資料	
3 北海道開拓記念館,2002;第55回特別展洞窟遺跡を残した縄文の人びと、	
4 北海道開拓記念館・余市町教育委員会,2003;国指定史跡フゴッペ洞窟、	

I 研究事業実施報告

I 研究事業実施報告

1 平成12年度研究実績

(1) 国外の野外調査(岩面刻面の調査)

- ①サカチアリアンの刻面の調査、ハバロフスク州郷土博物館での資料調査などを実施(4名、9月29日～10月7日)。
- ②カムチャツカの岩面刻面の調査、考古・民族学的資料調査、環境復元にかかわる地質調査などを実施(3名、9月18日～10月3日)。

(2) シンポジウムの開催

タイトル/「発見50周年記念フゴッペ洞窟シンポジウム」

開催日/11月18～20日

開催場所: 余市町中央公民館 シンポジウム参加者/242名

シンポジウム内容:

- 1) 記念講演 木村重信氏(大阪大学名誉教授)「フゴッペ刻面と世界の岩面画」
- 2) 記念報告 大塚以和雄氏・大塚誠之助氏 「フゴッペ洞窟発見あれこれ」

3) シンポジウム

乾 芳宏氏(余市町文化財係長兼学芸係長) 考古学、「フゴッペ洞窟の考古学的位置づけ」
小川 勝氏(鳴門教育大学・助教授) 先史美術、「フゴッペ洞窟の岩面刻面の位置づけ」
佐々木史郎氏(国立民族学博物館・教授) 民族学、「民族学から見たフゴッペ洞窟」
小泉 格氏(北海道大学大学院理学研究科理学部教授) 地質学、「フゴッペ洞窟の立地環境と気候」

三浦定俊氏(東京国立文化財研究所・保存科学部長) 保存科学、「フゴッペ洞窟の保存と活用」

- 4) 討論: コメンテーター/木村重信氏(大阪大学名誉教授・先史美術)、
菊池徹夫氏(早稲田大学文学部・教授)
福田正己氏(北海道大学低温科学研究所教授)、
司 会/赤松守雄

6) エクスカーション/フゴッペ洞窟など余市町内の文化財関係を中心に実施。

5) シンポジウム事務局/

北海道開拓記念館/吉田和夫氏(館長)、赤松守雄氏(研究代表者)、氏家 等氏(研究分担者)、山田悟郎氏(研究分担者)、右代啓視氏(研究分担者)、添田雄二氏(研究協力者)

余市町教育委員会/利 輝夫氏(教育長)、江戸栄男氏(教育次長)、盛 昭史氏(文化

財課業務係長)、乾 芳宏氏(文化財兼学芸係長)、浅野敏昭氏(学芸員)

(3) 国内の野外調査

学術調査としては、フゴッペ洞窟の成因にかかわる地質調査を実施(11月6～10日)。

フィールドステーションづくりの基礎調査としては、文化財の保存施設の現況について現地調査を実施(奈良・熊本・佐賀、1月～2月)。その他、関連する北海道内の調査を実施。

(4) フゴッペ洞窟に関する情報・写真などの収集と学術レプリカ作成

フゴッペ洞窟にする基本図書の整備(41冊)、フゴッペ洞窟出土の骨角器の複製(46点)、記録写真等の収集などを行った。また、当館収蔵のフゴッペ洞窟出土資料の整理を行った。

(5) その他

第1回研究会議を6月28日に開催。10月19日開催のフゴッペ洞窟保存委員会に出席し、本研究との相互連携をはかる。

2 平成13年度の研究実績

(1) 国外の野外調査(岩面刻画の海外調査)

① シェルメチュエヴォ、キーヤの刻画の調査、ハバロフスク州郷土博物館の資料調査などを実施(4名、10月22日～11月3日)。

② ソニエツカガーヴァニーなどの調査、考古・民族学的資料調査、環境復元にかかわる地質調査などを実施(3名、10月22日～11月6日)。

(2) フォーラムの開催

タイトル/フゴッペ洞窟フォーラム 2001「フィールドステーションとしてのフゴッペ洞窟」開催日/11月24日 開催場所/余市町中央公民館 参加者/150名

フォーラム内容

報告1: 盛 昭史氏(余市町教育委員会文化財課長)「奈良周辺における史跡の保存と活用」

報告2: 浅野敏昭氏(余市町教育委員会学芸員)「ハバロフスク州の岩面刻画とその活用」

報告3: 乾 芳宏氏(余市町教育委員会文化財係長兼学芸係長・考古学)「九州における史跡の保存と活用」

報告4：右代啓視氏・添田雄二氏(北海道開拓記念館学芸員)「ロシア極東地域の岩面刻画とその活用」

報告5：小川 勝氏(鳴門教育大学助教授・先史美術)「ヨーロッパの岩面刻画とその活用」

コメンテーター：菊池徹夫氏(早稲田大学文学部教授)

福田正己氏(北海道大学低温科学研究所教授)

利輝夫氏(余市町教育委員会教育長)

赤松守雄氏(北海道開拓記念館学芸部長)

司会：右代啓視氏(北海道開拓記念館学芸員)

(3) 国内の野外調査

学術調査としては、フゴッペ洞窟の成因にかかわる地質調査を実施(11月6～10日)。フィールドステーションづくりの基礎調査としては、文化財の保存施設の現況について現地調査を実施(新潟・九州、12月～2月)。その他、関連する北海道内の調査を実施。

(4) フゴッペ洞窟に関する情報・写真などの収集と学術レプリカ作成

フゴッペ洞窟に関する外国基本図書の整備(62冊)、フゴッペ洞窟出土の骨角器等(6件)の複製、記録写真等の収集などを行った。また、当館収蔵のフゴッペ洞窟出土資料の整理を行った。

(5) その他

第1回研究会議を6月28日に開催。

10月19日開催のフゴッペ洞窟保存委員会に出席し、本研究との相互連携をはかる。

3 平成14年度の研究実績

(1) 国外の野外調査(岩面刻画の保存と活用に関する調査)

フランス、スペインの岩面画、岩面刻画を保存・活用している施設の調査(ラスコー洞窟、アルタミラ洞窟など)。12月10日～12月19日の10日間。

(2) フォーラムの開催

タイトル/フゴッペ洞窟フォーラム2002「これからのフゴッペ洞窟」

開催日/3月29日 開催場所/余市町中央公民館 参加者/80名

フォーラム内容

報告1：盛 昭史氏(余市町教育委員会文化財課長)「盛岡市・仙台市における史跡の保存と活用」

報告2：盛 昭史氏(同)「東京における史跡の保存と活用」

報告3：浅野敏昭氏(余市町教育委員会学芸員)「北陸における史跡の保存と活用」

報告4：乾 芳宏氏(余市町教育委員会文化財係長兼学芸係長・考古学)「ヨーロッパにおける史跡の保存と活用」

コメンテーター：利輝夫氏(余市町教育委員会教育長)

菊池徹夫氏(早稲田大学教授)

福田正己氏(北海道大学教授)

小川 勝氏(鳴門教育大学助教授)

赤松守雄氏(北海道開拓記念館特別学芸員)

氏家 等氏(北海道開拓記念館事業部長)

山田悟郎氏(北海道開拓記念館主任学芸員)

司会：右代啓視氏(北海道開拓記念館資料課長)

(3)国内の野外調査

学術調査としては、フゴッペ洞窟の成因にかかわる地質調査を実施(5月～6月)。フィールドステーションづくりの基礎調査としては、文化財の保存施設の現況について現地調査を実施(東京、北陸、宮城など、10月～2月)。その他、関連する北海道内の調査を実施。

(4)フゴッペ洞窟にかんする情報・写真などの収集と学術レプリカ作成

フゴッペ洞窟に関する外国基本図書の整備(31冊)、フゴッペ洞窟出土の遺物の複製(4件)、記録写真等の収集などを行った。また、当館収蔵のフゴッペ洞窟出土資料の整理を行った。

(5)その他

研究会議を9月、3月に2回実施。5月、11月に開催されたフゴッペ洞窟保存委員会に出席し、本研究との相互連携をはかった。フゴッペ洞窟のフィールドステーション作りの一環のため、カタログ・ガイドブックを刊行した。

また、本研究の成果として、北海道開拓記念館で第55回特別展「洞窟遺跡を残した続縄文の人びと」を開催した。関連事業として、講演会、バス見学会等を開催(当館予算で実施)。

(6)報告書の作成：3年間実施した調査・研究の成果を総括し、報告書を作成。

II 発見 50 周年記念

「フゴッペ洞窟シンポジウム—過去・現在・未来—」

フゴッペ刻画と世界の岩面画

木村重信

(大阪大学名誉教授)

はじめに

お手元にレジュメがあると思いますが、テーマのように、「フゴッペ洞窟刻画と世界の岩面画」との比較を行いたいと思います。世界の美術には、時代、地域、民族の違いを越えて、類似した現象が沢山あり、したがって、それらを比較研究することができます。しかし、注意しなければならないことがあります。それは、複数の文化に由来する類似した美術現象は、必ずしも同じ意味を持つとは限らないことです。しかしながら、その比較により特定の美術現象の背後にある可能因子を示唆することができます。いい換えると、比較研究の有効性とその限界であります。そのことはレジュメの冒頭に書きました。

今回は、フゴッペ洞窟刻画の壺状穴と人物像に限り、世界各地のそれらとの比較を行います。その場合、フゴッペ洞窟と非常に深い関係にあります東北アジアだけでなく、世界全域の現象を取り上げたいと思います。なぜなら壺状穴や人物像は、旧石器時代から現代まで世界中の岩壁画、および一部の石のモニュメントに頻出するからです。

1 壺状穴

フゴッペ洞窟にある刻んだ穴です。少し苦がはえて緑色になっていますが、丸い穴が並んでいます。しかも単独ではなく、対をなしたり、複数であったり、規則正しく1列、2列に並んでいるものが多くあります。フゴッペ洞窟の場合、円形は比較的浅く小さく刻まれているのはつきりしませんが、通例「壺状穴」(英語で Cupule)と呼ばれています。

わが国では、古くは明治19年(1886年)に坪井正五郎さんが、片手で持てる大きさの石に彫られているのを「凹石」、それよりも大きい石にうがたれた、多くの凹みのある石を「多凹石」と称されました。明治29年(1896年)鳥居龍藏先生が、これを「くぼみ石」ないしは、蜂の巣のように多くの穴があいている石を「蜂の巣石」と呼び、その目的は発火用の火おこしのための組織に用いた石だと考えられました。その後、「凹石」という名称がずっと続きます。

昭和56年(1981年)山口市の神田山一号墳から出土した石棺の蓋石表面にうがたれた21個の凹んだ穴があり、その「凹石」について、国分直一さんが、英語の Cupule を翻訳して「壺状石」と命名されました。その時の論文が、「壺状石の系統とその象徴的意味」(山口市埋蔵文化財調査報告第12集「神田山石棺」)という論文です。その中で次のように述べておられます。「壺状穴が性シンボルを象徴していることは、ほぼ明瞭になったと考えられるが、さらに広い事例を通して考えていきたい。一つの共通した意図、すなわち再生や不滅の象徴を目的とした兆候である」と。これらが壺状穴と呼ばれる理由は、この穴の

断面が盃の形、蟻地獄のような形をしているからです。大きさはまちまちで、直径1～2cmから50cmくらいまであります。そして穴の底は磨かれていることが多いです。

(1) 盃状穴の分布

古今東西の盃状穴を紹介し、フゴッペ洞窟との関係を吟味したいと思います。

まず、フゴッペ洞窟と非常に状況が似ている *Feles* 洞窟を見ましょう。南太平洋にバヌアツ共和国があります。昔はニューヘブリディーズ諸島と呼ばれていました。そのバヌアツ共和国に、*Feles* という非常に大きな入口をもつ巨大な洞窟があります。フゴッペ洞窟と類似している理由は、①洞窟の岩壁に刻まれていること。②目の前が海であり、フゴッペ洞窟も海に近いこと。③盃状穴が非常にたくさんあり、ご覧のように列をなして、直線状に刻まれています。④時代が何万年前とか何千年前というように古くないこと。*Feles* の場合はカーボンテストによって、910年というデータがでています。フゴッペ洞窟が3世紀頃ということですから、比較的近いわけです。*Feles* には盃状穴がたくさんありまして、このように黒い絵の具を塗っている場合があります。逆にこれは穴に白い絵の具を塗っています。ほかにも大小さまざまな盃状穴がたくさんあります。

バヌアツだけではなく、南太平洋の各地に、このような盃状穴がうがたれた石が多くあります。今見ているは、マルキーズ諸島(マルケサス諸島)のもので、フランス領ポリネシアの一番東の方にある諸島です。その南の方のイースター島の盃状穴です。ご承知のようにイースター島には、モアイと称される巨石人像が千体ほど残っておりますが、その千体のモアイのいくつかの背中にこのような穴が施されております。

一番たくさんありますが、インドネシアのスマトラ島です。その南部にデンボという山があります。富士山のような秀麗な形をしていますが、しかも富士山のように非常に広大な裾野をもっています。パセマ高原です。そこにたくさんの巨石のモニュメントがあり、のように、ドルメンの上の石に深い盃状穴が百以上もうがたれています。パセマ高原の盃状穴の例をいくつか紹介します。このようになりにかなり摩滅しているものもあります。非常にきつぱりと刻まれているものもあります。次は、人物の頭部の頂に盃状穴が彫られています。このようにパセマ高原には盃状穴を施した多くの巨石が分布しています。

ブラジル東部のピアウイ州の岩壁の盃状穴です。メソアメリカにもあります。メキシコに一番古いオルメカ文化というのがありますが、このオルメカ文化には数メートルもある巨大な人物頭部彫刻があります。その彫刻の右下に盃状穴が彫られています。これもオルメカの人物頭部ですが、ここにも盃状穴があります。

これは東南アジアと南太平洋の地図ですが、南太平洋における民族移動を示したものです。南中国を起点として、一つはフィリピンへ、一つはマレー半島を通過してインドネシアへ移住します。アボリジニーはオーストラリアへ行きます。それから紀元前3000年くらいに、バヌアツ、ニューカレドニア、フィジーへ行きますが、西サモア辺りでとどまります。別の流れが、フィリピンからマイクロネシアのマリアナ諸島へ、さらにマーシャル諸島に移動します。これがだいたい紀元前3000年から1200年くらいです。紀元後4世紀に、西サモアからマルキーズ諸島へ移動します。サモアへマルキーズ諸島は約4000kmもあります。マルキーズ諸島を起点としてイースター島やタヒチ島へ行ったり、一部はニュージーランドへマオリ族が移住します。その後タヒチ島を起点としてハワイ諸島へ行きます。

ご承知のヘイエルダールが「コンチキ号探検記」を書きまして、イースター島のモアイは南米から来た、アメリカ大陸からやってきた人たちによって作られたといいました。しかしそれは間違いで、イースター島の栽培植物および動物はすべて東南アジア由来であり、南米由来と思われるのはサツマイモだけです。サツマイモは、マルキーズ諸島と現在のペルーとの間で一時的に接触した人たちによってもたらされたのでしょう。だから南太平洋における歪状穴の分布は歴史的な経過、民族移動の経路、その他を勘案すると非常に意味があります。ただ日本との関係は不明ですので、フゴッペ洞窟とどのような関係があるかもわかりません。

(2) 旧石器時代の歪状穴

こういう歪状穴は、いつ頃から作られ始めたのか、一番古いのはどれか。

人類が彫刻や絵画のようなものを作り始めたのは、普通、後期旧石器時代というふうにも考えられています。約4万年前に、我々の直接の祖先であるホモ・サビエンスがこの世に現れてからだ。そしてそれ以前のネアンデルタール人などは、絵画・彫刻のような造形的作品は残していないと考えられるのが普通であります。ところが中期旧石器時代の Mousterian 期に La Ferrassie において、歪状穴が作られています。作例はここだけです。これはずっと以前に見えられましたので、作られた年代については異議がありますが、当時の発掘記録その他を調べてみたら、Mousterian 期に間違いなさだろうと考えられます。この La Ferrassie の歪状穴は非常に重要な作品ですので、少し詳しく申し上げます。

これは La Ferrassie 洞窟遺跡の平面図ですが、約 15m 四方に敷石が並べられております。そこから六つの遺骸が出てきました。一番奥の、狭い所に小さな遺骸がありましたが、その遺骸の上部を、両側の厚さが 80cm と 15cm の細長い三角形の石灰岩が覆っていました。これはペロニーという人が発見しました。彼は次のように述べています。「我々はその石を持ち上げて、ひっくり返した。下面には、平らな面の一角に、他の一連の歪状穴と組み合わせられた小さな歪状穴があった。最初、我々はこれらの穴は自然にできた穴だと思った。しかし注意深く調べてみると、自然にできた穴とは異なる点が幾つか見られたので、我々はそれを人工のものであると確信した。すなわち、穴が規則正しく並んでいたこと、特に対をなしてうがたれていたことで、人間によって作られたものであることを確信したのである」。

「この石の細密な観察から、Mousterian 期以来人間は、後のオーリニャック期、さらにソリュトレ期、マドレーヌ期という後期旧石器時代、および新石器時代にみられるものと同様の歪状穴を石につけることを行ったことがわかる」。新石器時代の歪状穴は随分多く発見されていますが、それがどこまで遡るか、中期旧石器時代の Mousterian 期まで遡るということを見ました。彼は「これらの穴は、その形からみて、さらにその位置からみて、何かの記号ないし象徴で、たぶん儀礼的な機能を有していたらしい。坑の上に石塊を裏返して置いたのは、墓を作った人々が意識的にやったものと思われる。どのような解釈をなされようと、いま我々の眼前には全く新しい何ものかがある。すなわち、これまで後期旧石器時代のオーリニャック期のものが最も古いと思われていたが、中期旧石器時代の Mousteian 期にも図形表現があったという証拠が見出された」と述べています。

Mousterian 期における歪状穴はこの一例しかありませんが、次の後期旧石器時代のオー

リニャック期、ソリュート期、マドレーヌ期になりますと、たくさん歪状穴が見出されます。それらは単独に一つある場合もあれば、多くの歪状穴が群をなして表されているもの、あるいは他の動物、女性の性器や乳房、手、男根などと組み合わせられて表される場合もあります。

これは、また La Ferrassie のものであります。先ほどと同じ遺跡から出てきました。この石には、六十の歪状の凹みがあり、穴がはじめは無秩序にうがたれていると思われていましたが、その後、螺旋状になっていることがわかりました。完全な螺旋ではありませんが、螺旋形への傾向が見られます。

先ほど歪状穴が単独にはなく、他の形象と結合して表されると申しましたが、Cellier の例がそうです。左の方にかなり深い凹みがあり、その右側に円形が三つありますが、下方に裂け目の線がありますので、これは女性の性器で、陰門です。女性器と歪状穴とが、関連して表される例が他にもあるので、歪状穴は多産とか出産とか豊饒とかと関連するのではないかと考えられるわけです。

これは La Ferrassie 出土の石塊で、三角形のようなものは陰門です。縦の裂け目が表されています。それが下の方に四つ、上の方に一つの歪状穴と結合しているわけです。これも La Ferrassie のもので、女性の下半身があらわされており、右の方に風船状のものがあり、それと歪状穴が結合されています。Lauerie-Haute 出土の石塊では、動物と関連しています。左上に大きな深い歪状穴があり、その歪状穴の輪郭線と真ん中の馬の背中の輪郭線とが一致しています。これをフランス語で「輪郭をめとる」というようないい方をします。つまり動物の輪郭線と歪状穴の輪郭線が共通しているわけで、一つの輪郭が二つの図形の輪郭になっています。このように「輪郭をめとる」場合、当該動物、この場合は馬ですが、馬と歪状穴とが結合してなんらかの意味を表しているわけです。この馬の場合、腹が少し大きいことから、多産の呪術と関連して、馬の出産というか多産というか、そういう意味が込められているのでしょう。

歪状穴の場合、非常にきつぱりと彫られているものは、人工だといえますが、先ほどのインドネシアのパセマの例のように、かなり摩滅している場合があります。ですから人工か自然か、その区別をつけにくいことがあります。この Les Eyzies 出土の石の場合、歪状穴ではなく円形ですが、非常にきつぱりした形をしています。これは人工だろうと思われがちですが、自然に出来た円形です。皿の形をした貝が石にべたっとひっついて、自然に残された円形です。この石はイノシシの形をしていますから、おそらく多産の呪術に関係したのでしょう。そのことは出土状況からわかります。その辺に転がっているわけではなく、特別のところから出てきますので、そのようにいえるわけです。

最近、日本の前期旧石器について眞原論争がありました。非常に古い時代の石器の場合、摩滅したりしているので、人工的に作られた古い時代のものなのか、それとも自然にできたものか非常に判断のしにくい例が多々あります。

(3) 新石器時代の歪状穴

新石器時代になりますと、この歪状穴は、ヨーロッパの場合、北はスカンディナヴィアから南はイタリア半島やバルカン半島まで、非常に広く分布しています。国名でいいますと、ノルウェー、スウェーデン、フィンランド、イングランド、フランス、スペイン、イタリ

ア、スイスなどに広がっています。そして、盃状穴がたくさん施された、かなり大きい石塊が至る所で発見されます。この場合、盃状穴の周りにもう一つ同心円のような円を刻んだり、二つの盃状穴をひとつの円形が取り囲んだり、キリストの十字架のような十字形があります。そして盃状穴の彫り方も、末期にはブロンズが用いられますので、きわめて明快です。これはスイスの Col du Torrent というところから出土しました。

(4) 古代の盃状穴

やがて歴史時代にはありますが、メソポタミアおよびエジプトで最初の文明が起りました。エジプトの Karnak の石板は、アヒルの背中の上のところに大きな円形の凹みがあります。エジプトの場合、太陽を表す象形文字は、中心に赤い点のある円からできています。古代の祭式用象形文字の刻銘においては、太陽または太陽神を表すシンボルは、盃状穴の中に丸い球を入れるという形です。いい換えますと、それは盃状穴と球体との二重形式です。太陽の持つ、生命を与える力や繁殖力を示すという意味が付与されています。したがって、この Karnak 神殿のオベリスクの場合、「太陽神ラーの息子」をあらわす象形文字は、ラーの盃状穴と、「息子」を意味するアヒルの組みあわせでできています。

次の写真では、左の面に、八つの非常に深い盃状穴があります。右の面にはファラオ(王)が表されています。Tell El Amarna のアク・エン・アトン王の石碑ですが、時代は紀元前 14 世紀です。上のほうをご覧になって頂きたいのですが、誰でも正面はアク・エン・アトン王が表された面であると思いがちですが、違います。正面は盃状穴のある面です。というのは、盃状穴のある面の頂が丸くなっているからです。アク・エン・アトンは自分と家族の浮彫を、元からあった、盃状穴のある石碑のせまい方の面に彫らせたのです。その浮彫は、太陽の生命を伝える光線が王の一家の上に天蓋のようにひろがる有様を表しています。光源を示す円形は、太陽であるアトンの象徴ですが、革新的なアク・エン・アトンは、擬人的なエジプトの神々を、この円形の盃状穴におきかえたのです。

これはメンヒルです。メンヒルというのは立てた石です。ドルメンはテーブル石で、四つのメンヒルの上に大きな石をのせたものです。そのメンヒルの四方に、このような盃状穴を全面に彫っています。これは地中海のマルタ島 Tarxian 神殿にあるものですが、このメンヒルは男根を表しています。

(5) 盃状穴の意味

旧石器時代から新石器時代、さらには歴史時代へと、盃状穴が至るところで作られたわけですが、この盃状穴の意味については、19 紀の中頃から 20 世紀の初めにかけて大変議論がありました。特に盃状穴のある大きな石が 10 個も 20 個も群をなしているところは、なんらかの宗教的な儀礼が行われた場所だろうと考えられています。それはスイスのアルプス山中の Monte Pego 地方に多いのですが、標高が 2000 m から 2500 m ある大変高いところに、非常に沢山の岩面刻画があります。約 2 万点ほどの岩面刻画がありますが、その中に盃状穴を施したものが多くあります。これは Zermatt のものです。

19 世紀の中頃から盃状穴の意味について、様々な議論があったわけですが、1864 年にスイスの考古学者の F. トゥロワイヨンという人が、盃状穴のある石塊は「明らかに祭壇であり、石塊にある盃状穴は神酒を入れるためのものであろう」と述べています。そして

事実、スウェーデンの特定の地方では、壺状穴に酒を入れてお祈りをする儀礼が、19世紀中頃、現に行われていたという事実があります。たとえば、病気の子供を治すため、その子供をあらわす人形を酒の代わりにやわらかい獣脂を入れた壺状穴のある石の上におきます。

壺状穴の施された石が多くある場所はなんらかの意味において、祭事を行う聖なところだったと考えられます。壺状穴は、4万年前の Mousterian 時代からのエジプトの歴史時代まで数万年間の時代的経過がありますが、初めからずっと同じ意味を持ち続けたとは考えられません。おそらく時代の経過にともなって、地域や民族の違いに従って、その意味も多様であると考えられます。ですから種々の説があります。すなわち、先にいいました豊饒、多産、光などのほか、星のある天体のイメージであるとか、文字であるとか、特別の属性をもつ雨水を入れる容器であるとか。

以上は、ヨーロッパおよび古代オリエントの例ですが、アメリカ大陸でも壺状穴が施された石がたくさん集積しているところがあります。この写真は南米のボリビアの東コルデイラ山のふもとにチマネ・インディアン（インディアン）の遺跡で、現にここで祭祀が行われています。女性の陰門と壺状穴が結合したのが彫られています。

フゴッペ洞窟は北海道にありますので、シベリアや中国北部の方の例を出すべきですが、明日、佐々木さんや小川さんがたくさん作例をだされると思いますので、私はスライドを少ししかもってきませんでした。これは内モンゴルの・山の岩面刻面です。これは新疆天山のものですね。

(6) 日本の壺状穴

では、日本ではどうか。特に注目すべきものは、レジメに写真を入れておきましたが、兵庫県に加古川下流の飯盛山テラスです。ここには非常にたくさんの壺状穴が彫られています。これらの日本の壺状穴は、かつては発火器具（発火用紐錐）説、石器制作具説、聖果類割具説があります。しかし、古い時代のものについてはよくわかりません。ただ、加古川下流の飯盛山テラスの場合は祭儀が行われた場所であろうと考えられています。飯盛山テラスの壺状穴は非常に深く丁寧に彫られています。

そしてこの壺状穴は中世以降もずっとあります。このように石鳥居に非常にたくさんの壺状穴があります（山形市元木）。こういう石鳥居であるとか、常夜灯（加西市雨月厄神）とか、神社や寺の手洗石とか。その手洗石の縁に彫られています（加古川市阿用神社など）。また、石段とか石棺の蓋（加古川市報恩寺四尊石棺仏、小野薬師堂石棺など）にこういう壺状穴が彫られる。このように、鳥居、常夜灯、手洗石、石棺、碑（宮城県多賀城）など、社寺の造形物にこういう壺状穴が多い。そういう意味で宗教的な意味があると考えられます。中世以後の場合、奉納した年月を刻んだものがあり、新しいものには明治13年の常夜灯基壇石の壺状穴があります。

日本では縄文時代から近代に至るまで、壺状穴がいろいろなものに施されるわけですが、これらの壺状穴が旧石器時代の Laugerie-Haute の馬と壺状穴の結合のように、他の事物と関連する場合があります。これはフゴッペ洞窟の例ですが、右の方に横線一本があり、縦線が四つあります。これは四足動物の略画と考えられます。これを峰山巖さんは「フゴッペ人が狼のような霊力を持つ動物に対しトーム的な信仰を有していたのだろう」といわ

れています。この中国の北方系の岩面刻画の場合、横線一本と縦線が三つないし四つあるのは動物を表すことが多いです。

フゴッペ洞窟にはこのようになり大きな丸い穴があります。大きさは直径 50cm 深さが 17cm です。この中から土器が出土しました。大きな盃状穴であることは事実ですが、他にこのような例があるか調べてみました。これは先ほどの La Ferrassie の例です。馬と盃状穴が、馬の背中と穴の輪郭が一致しています。最初にお見せしたバヌアツの Feles 洞窟にも大きな穴があります。フゴッペ洞窟の丸い穴から土器が出土したことは、その穴が特別な意味を持つのだろうと思いますが、どのような意味を持つのかはわかりません。とにかく大きな穴は他の事物と関連する場合があるということだけを申し上げておきたいと思っています。盃状に彫った穴は、イラクのカルバラ近郊のアル・タールという、日本の調査隊が数年間発掘した洞窟にもありました。

(7) 色彩による斑点と列

バヌアツの Feles では盃状に彫られた穴がたくさん並んでいましたが、赤い絵の具で描かれた赤い円形の列もあります。このような色彩による円形は単独の場合もあれば、列をなしている場合、他の図形と関連する場合、動物と関連する場合などさまざまです。そして、だいたい赤ですが、黒色のものもあります。旧石器時代にもこのような斑点があり、有名なブルーイユは、この斑点がこれから壁画が始まるころとか、洞窟の中の池や砂山の前にありますので、洞窟内の道しるべだと考えました。しかし旧石器時代の人たちの鋭敏な感覚を考えたら、そういう道しるべとしての目印は不必要だったと思われるので、現在は否定されています。しかし赤色で描かれた円形、黒色で描かれた一部の円形は、盃状穴と同じ範疇に属して、なんらかの儀礼的な意味を持つらしいことが多くの学者によって指摘されています。その理由は、斑点ないし盃状穴が動物像と関連する場合、Pech-Merle のような例があるからです。この馬はオーリニヤック後期に描かれたましたが、馬の頭の輪郭は表わされていません。岩壁の割れ目を馬の頭に見立ててタテガミと胴体を描いたわけです。多くの斑点が描かれていますが、その斑点は馬の輪郭線の内側にも外側にもあるので、馬の身体を装飾するのではなく、動物を強化するための特別な意味を有することが明らかです。馬の背の上に手形があります。動物と関連した手形は当該動物を捕らえたいという欲求と関連していると考えられています。また、Pech-Merle には手形を囲む赤い斑点の列があり、これは多産への訴えを示しているのだろうと考えられています。

(8) 抜き穴

盃状穴は、二つ繋がると抜き穴になります。フゴッペ洞窟もそうですが、盃状穴というのは穴が盃形になっているからです。その穴を表と裏からうがつと、二つの盃状穴が連結して、真ん中が狭まった抜き穴になります。旧石器時代の場合、岩の出っ張りがあり、そういうところに抜き穴が作られています。なんのためにあけたのか。あるいは独立した石にこの抜き穴がある場合があります。これについては、家畜化した動物を繋ぎ止めるための穴ではないかという説があります。あるいは野生の動物を生け捕りにし、それを一時つなぎ止めるための穴とも考えられます。また、かなり高いところにある穴は、捕ってきた動物の肉を、下に置くか蟻がたかかりますから、吊り下げるために作られたとか、色々な説

があります。しかし、穴の形が二重の盃状穴となっているという、その特殊な形から考えて、なんらかの呪術的意味があるとする意見が強いです。

旧石器時代の人々の主な食料は野生の動物で、その野生動物の肉を食べます。皮は衣服にします。骨で様々な道具を作りました。骨や角で作った器具を骨角器といいます。骨角器の中に、こういうのがあります。T字型になっていて、抜き穴があります。イヌイットにこれとよく似たものがある、彼らはこれを首にぶら下げてネクタイ代わりに用います。オーリニャック期のものは穴があいているだけで、装飾はありません。マドレーヌ時代になると、このような抜き穴がある指揮棒(呪術儀礼を指揮した棒。呪師がこの棒を持って儀礼をとり行つたと考えられて、このように呼ばれています)に線刻の装飾が施されます(図 27)。この棒は、毛皮を鞣すための道具と考えられましたが、摩滅したり、すり減ったりしていませんので、儀礼に用いられたと考えられているわけです。その指揮棒にこのような抜き穴が施され、2頭の馬、牝鹿の頭部、蛇、3人の仮装人物が正確かつ繊細に刻まれており、呪術的気分が濃く感じられます。これは Teyjat から出土しました。この Le Souci の棒には七つの抜き穴があります。これは骨なのですぐ折れてしまいますから、実用品であるとは思えません。このような抜き穴がある骨棒がたくさん出てきます。それに関連して、骨の円盤に鹿のような動物が表され、その真ん中に抜き穴があるというのがあります。抜き穴は鹿を捕らえたい、殺害するという呪術と関連するのではないかと考えられます(Laugerie-Basse 出土)。洞窟壁画にも体に矢とか槍の突き刺さっている動物がたくさんあります。旧石器時代の人々にとりましては、現実の獣と描かれた獣との間に区別の意識がありませんので、絵に描いた獣に、槍を突き刺して殺せば、現実の動物に影響を与える事ができると考えたわけです。それを称して呪術というんですが、呪術はある意味で現在の我々の科学と同じと考えていいと思います。つまり、酸素と水素が一定の割合で化合すれば H_2O (水)という現象が生じるように、絵に描いた獣に槍を突き刺して殺せば、現実の動物が死ぬと考えたわけです。ただ酸素と水素が化合する場合、時間と空間が一定でなくてはなりません。100年前の酸素と100年後の水素は化合しない、あるいは100m 向こうの酸素とここの水素は化合しません。しかし時間・空間を異にする二つの事象の間に関連をつけるということ、これが人間の意識活動の第一歩であったわけです。

2 人物像

次は人物像について話します。峰山さんは、フゴッペ洞窟の人物像を大きく二つに分類されます。一つはコケシのような形をした直立像、次はご覧のように手を両側に大きく広げ、足も左右に広げる、開脚立像、この二つに分けられます。さらにこれらの人物が仮装することがフゴッペ洞窟には多いわけですが、ご覧のように①翼を広げた鳥に似た人物が非常にたくさんあります。有翼人、翼を持つてい人物です。②それから角としっぽのある動物に仮装した有角人。③何に仮装したのかわからない人物像です。おそらく仮面をかぶっているのではないかと峰山さんはいっています。そこで世界各地の岩面画に現れる人物像を見ましょう。

(1) 開脚人物

サハラ砂漠に膨大な岩壁画があります。アルジェリアの Tassili-n'Ajjer、マリの Adrar Iforas、チャドの Ennedi や Tibesti、ニジュールの A 1 など。このスライドは時代が随分後期のもので、サハラ砂漠にラクダが西アジアから入ってきた紀元前後の絵ですが、ここに古代ティフィナグ文字とともに、峰山さんがおっしゃる開脚人物が多く描かれています。

南のカラハリ砂漠や南アフリカ共和国では、ブッシュマンが紀元前 5000 年くらいから 19 世紀まで、数千年間にわたって岩壁画に描き続けてきました。現在、カラハリ砂漠に住んでいるブッシュマンの先祖です。その中のような開脚人物がたくさん現れます。インドでも同じで、この人物は馬に乗っていますから時代は紀元前後だと思われれます。これはハワイです。ホノルル近郊に岩面刻画があり、このような開脚人物が多い。次は、1985 年に大阪大学創立 50 周年記念として「南太平洋学術調査」を行いました。そのときマルキーズ諸島のヒヴァ・オアという島で私たちが発見した開脚人物です。次は最初にみましたバヌアツの Feles 洞窟の彩画で、歪穴とか円形の列の他に、こういう開脚人物像もあります。中国の新疆天山や広西左江流域の寧明県花山にフゴッベ洞窟と同じ開脚人物像があります。カザフスタンにもフゴッベ洞窟と同じ人物像があります。もっと西へ行くとアゼルバイジャンにあります。オーストラリアにはアボリジニーが、現在もこういう開脚人物を描き続けています。このように無数と言ってもいいほど開脚人物像があるわけです。それを整理しますと、だいたい 5 種類に区分できます。

- ①頭、胴体、脚、手のプロポーションが自然主義的といえますか、非常にリアルで、あまりデフォルメが行われていない人物。これは自然主義的様式と名付けることができます。
- ②体が非常に長く引き伸ばされ、細い人物像です。帯のように引き伸ばされているという意味で、私は帯状人物様式と名付けています。
- ③上半身は細く、脚だけが非常に太いです。厚脚人物と呼んでいます。
- ④手も脚も胴も非常に細い針金のような線に還元されている線状人物像。フゴッベ洞窟の場合だいたい線状人物です。これはブッシュマン岩面画ですが、これも一種の線状人物です。つまり頭と体が一本の線になって、脚とペニスがあるわけです。
- ⑤それから三角形を二つ逆に重ねたような、砂時計型人物ないしディアボロ型人物もよくあります。

だいたい、5 種類くらいに大別できます。このほか釣鐘型人物というんですが、女性のスカートが釣鐘のような形になっているのがあります。これが中石器時代の東スペインのレバント岩面画、北アフリカのサハラ砂漠にある Tassili-n'Ajjer の岩壁画に現れます。

(2) 仮装人物

峰山さんがおっしゃいました仮装人物についてですが、①翼のある人物は鳥に仮装しています。ラスコー洞窟壁面の鳥の頭をした 4 本指の人物も、鳥の仮装人物と考えられます。イースター島の西南端にオロンゴという碑があり、そこに鳥と人間が合体したタンガタマヌ(鳥人)が岩盤に浅浮き彫りでたくさん表されています。写真が取りにくいものなので、天花粉を水で溶いて輪郭線にそれを入れました。雨が降りますと白い線は無くなってしまいます。チョークなどでやるとなかなか消えませんが、南米のポリビアのディアワナコ、ここに太陽門があります。この門に彫られているのは鳥と人間との合体像です。鳥と人間

が合体する例は、ほかにもたくさんあります。

②峰山さんがおっしゃる有角人、角を有する人物像。これは、ブラジルのピアウイ州の岩面画ですが、こういう角をつけた人物がいます。もっと時代を遡ると、旧石器時代の岩面画にもあります。少し退色してわかりにくいんですが、発見当初 Breuil が模写した図があります。鹿の角をつけ、フクロウのような目で、山羊のような髭があり、体は馬で尻尾があり、足は人間です。それからペニスがあります。腰をかがめて踊るような格好をしています。Les Trois-Freres という南フランスの遺跡の岩面画で、ここには何千という刻画があります。その中で唯一、刻画と彩画を併用したのがこの絵です。それは5メートルほど高い所に表され、何千という動物像を支配するかのような場所に描かれていますので、動物に仮装した呪術師と考えられています。Les Trois-Freres にもう一つ、バイソンの仮面をかぶり笛を吹く人物像があります。Tassili-n'Ajjer でもご覧のように、角をつけて、その角の間に穀物のようなものがたくさん詰まっている、こういう人物もいます。体に斑点が入っていますが、これは瘡痕です。現在もアフリカの黒人が行っている瘡痕身体装飾の例です。ブッシュマン岩面画の場合も羚羊に仮装して動物に近づく人物のいる、このような狩猟図があります。

(3) 仮面または冠物をつけた人物

これはフゴッペ洞窟です。頭に何かかぶっているような人物像です。このような人物像を他の例でみます。Tassili-n'Ajjer には今のフゴッペ洞窟の人物と同じ頭をした、2.5m もある大きい人物像が描かれています。こういう仮面をつけた人物も登場します。これも Tassili-n'Ajjer ですが、頭の上に円形の物体を乗せています。頭の上にアンテナのようなものをつけた人物もいます。これはデニケンが宇宙人だといった人物像です。横向きになって泳いでいるような格好の人物像もあります。デニケンは宇宙遊泳しているといえます。しかしフゴッペ洞窟もそうですが、人物が立っているか、横になっているか、逆さまになっているかは、あまり意味がないんです。岩壁画の場合、人物像や動物像の向きはまちまちで、天地とか左右とかはほとんど顧慮されません。したがって、横になっているから宇宙遊泳しているとはいえません。Tassili-n'Ajjer のこの円頭人物は、カーボンテストその他によって紀元前 6000 ~ 4000 年という数字が出ています。ですから宇宙人説はまやかします。

(4) 人物像の持物

これはフゴッペの有角人で、手に P 字形のものを持っています。これはシャーマニズムの太鼓だという人がいますが、どうでしょうか。インドに岩壁画がたくさんあります。特に Bhimbetka という山だけで約 500 の岩壁画遺跡があります。その中に踊るような人物がいて、ほとんどの場合このような円形の物を持っています。この持物は何か。おそらく宗教儀礼に関する物でしょう。しかしよくわかりません。フゴッペのこの人物は腕に何かぶら下がっていますが、こういう例もたくさんあります。これは Tassili-n'Ajjer ですが、手の先に風船のような物を持ち、肘のところに三角巾をぶら下げています。身体に瘡痕がありますが、瘡痕装飾は黒人特有の風習ですので、現在の黒人の中にこういう物はないかと探しますと、ドコン族が祭礼を行うときに手提げの袋を持ちます。したがって、そ

れに似た物ではないかと思われます。しかし民族学的類同については最初に申しましたように、あるところによく似た現象があるから同じであるというわけにはいきません。フゴッペ洞窟の持物もよくわからないといわざる得ません。

(5) 舞踊図

フゴッペにこのような図があります。踊っている図だと峰山さんはおしゃっています。こういう踊りの場面も各地にたくさんあります。西アフリカのドコン族にカナガという十字架が二つ重なったような形をした仮面があり、岩壁面に表されます。“出”という字のような形ですが、その仮面をつけて、大勢の人たちが踊っています。

イベリア半島の新石器時代から青銅器時代にかけての岩面画に、非常に抽象化された人物像がたくさん出てきます。ご覧のように人物が群れになっていますから、おそらく舞踊図でしょう。これに類似する舞踊図、特にフゴッペの手をつないだダンサーの表現は、Tassili-n'ajjer、中部インド、ブラジルなど、世界各地の岩面画に頻出し、人物様式もフゴッペと同じ線状人物です。

そこで問題は、フゴッペ洞窟の、縦長の凹みの連続です。これは女性の性器が並んでいるといわれるんですが、果たしてそうか。これは *Feles* です。このように丸い縦形の凹みあるいは縦線が並んでいますが、これは明らかに人物です。これはブラジルです。頭や足らしいものが認められますから、これも人物の列です。次は刻面でフゴッペ洞窟と同じように彫られて、そこに赤色が塗られています。したがって峰山さんが女性の性器といわれるものは、様式化された人物と考えられます。そのことは、フゴッペにも縦形の凹みに足をつけた、明らかに人物と思われる形象が彫られていることから明らかです。

(6) 狩猟と舟

これはレバント岩面画で、狩人がイノシシを追っている狩猟図です。次はブッシュマンが大型のエランドを狩猟しています。これはフゴッペ洞窟で魚を捕っているところといわれる刻面です。インドの場合、網の中に魚が入っている、漁労を表した絵があります。

フゴッペ洞窟には舟に乗った人物を表したものがいくつかあります。舟に乗った人物を表す刻面はシベリアなどにもたくさんあります。あるいは、中石器時代のスカンディナヴィア半島にもたくさんあります。スカンディナヴィア半島には極北美術といわれる石器時代の岩面画と、ブロンズ時代の紀元前 1500～1600 年以後のかなり抽象化された絵と、2種類あります。ノルウェーの *Bardal* では、一つの岩壁に石器時代はかなり写実的な動物の刻面があり、刻線に白色を埋めています。赤いチョークを埋めたのは、後の青銅器時代の刻面で、非常に大きな舟に何十人という人が乗っています。こういう舟がたくさん残っています。(図 48) はスウェーデンの *Tanun* の、次はアゼルバイジャンの舟の刻面です。

(7) 4本指

手が 4 本指だということを峰山さんが力説されています。しかし、世界の岩面画では、古今東西を問わず、2 本指、3 本指、4 本指、5 本指と、まちまちです。簡略化した絵なので、指だけを 5 本きっちり表す方がむしろ例外的であります。それに関連して手形が至るところにあります。旧石器時代の *Gargas* (フランス) の手形を見ますと、親指だけが長く、

他の指は第一関節で切られています。このように一指もしくは二指以上が切断された手形が非常に多いです。パプア・ニューギニアでは、お父さんが死んだ場合、人差し指を切断します。親の死を悼むという気持ちです。それをそのまま旧石器時代に適用するわけにはいきませんが、指が切断された手形はなんらかの意味で宗教的意味を持つと考えられています。手形は旧石器時代から現在まで、世界至る所にあります。したがってアトランダムにお見せします。これはインドネシアのスラウェシ(旧セレベス)南部のマロスというところで、私が発見しました。パプア・ニューギニアの東方にあるトロブリアンド諸島に Kitava とという孤島があり、その島で 1968 年に洞窟壁画が発見され、それを調べにきました。この手形は指が 4 本しかない。親指がないのですが、これは切断されたのか、親指だけを曲げて絵の具を吹き付けたのか、わかりません。次も 4 本指で小指がありません。おもしろいのはこのように絵の具を吹き付けて表された手形は、だいたい左手であります。右手は少ししかありません。ブッシュマンの岩面画にも手形があります。これは陽型です。お相撲さんの手形のように手のひらに絵の具をぬって押しあてるわけです。インドの岩壁画には手形が何百もある壁画があります。これは中部のヴィンディヤ山脈のもので、そしてインド政府が Tribals(部族民)と呼んでいる、先住民の家の壁に同じ手形が表されています。だから、手形の伝統が現に続いているというわけです。

(8) 男女図形

ルロワ・グーランというフランスの有名な民族学者が、旧石器時代における様々な図形を整理しました。これは全部女性図形です。一番下は横向きの女性像で、漸次右のような形になると。他の 4 種は陰門です。下降三角形(A)が反対向き(B)になるというわけです。これは全面的には承認されていません。(D)は普通、楕圓形といわれます。そして、これは男性図形です。そうすると、ルロワ・グーラン説に従えば、フゴッペ洞窟の歪状穴の列は男性図形ということになりますが、彼の説は承認されていませんので、なんともいえません。フゴッペ洞窟と非常に関連の深い北東アジアの岩面画図形については中国の牛克誠という人が分類しています。これはレジュメに載せておきました。上の方に男性図形・女性図形、それから雄雌の動物の違いはある程度わかるんですが、下の方になるとどうもという感じがしないでもない。

世界中に歪状穴も人物像も、あるいは男女両性記号も非常にたくさんありますので、そういうものとの関連の中でフゴッペ洞窟の図形なり人物も考えるべきだろうと思います。昔は手宮の場合もそうですが、古代文字説がありました。今はそういう説はありませんが、現代の我々の考え方に従って古い時代の美術作品を解釈することは、非常に危ないと思います。

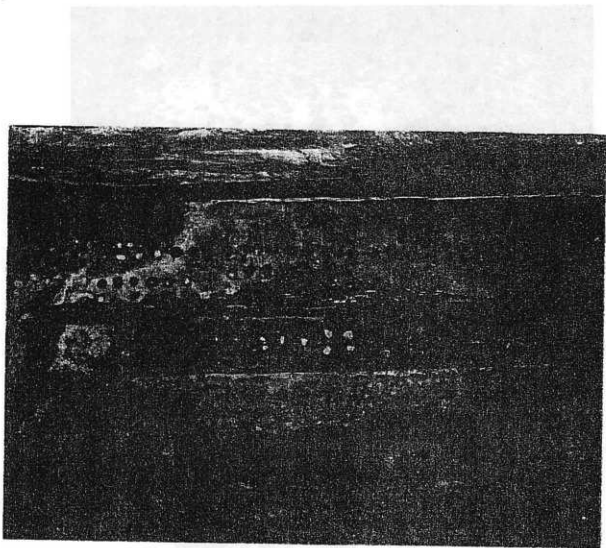


図1 盃状穴の列 Feles(ヴァヌアツ)

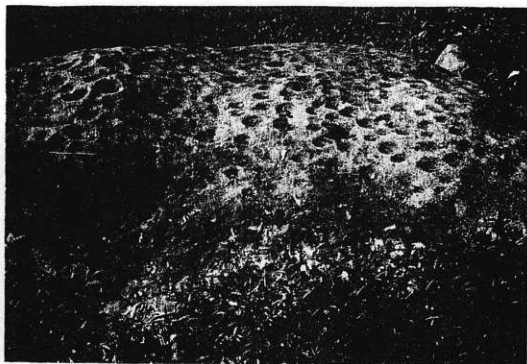


図2 盃状穴のあるドルメン Pasemah(インドネシア)



図3 盃状穴のある石 La Ferrassie(フランス)

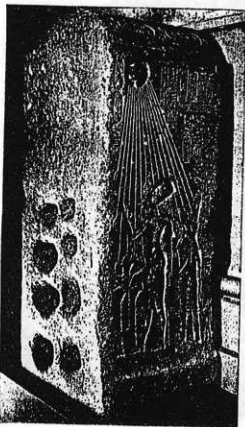


図4 アク・エン・アトン王の石碑 Tell El Amarna(エジプト)



図5 飯盛山祭祀テラス (兵庫県)



図6 鳥人浮彫 Easter(チリ)



図7 笛を吹く呪術師 Les Trois-Freres(フランス)



図8 有角人物 Sefar, Tassili-n'Ajjer(アルジェリア)



図9 仮面をつけた人物 In Aouanrhat, Tassili n'Ajjer(アルジェリア)



図10 舟に乗る人たち Tanun(スウェーデン)

㊦ : 男性生殖器 一 : 男性生殖器 ㊧ : 女性生殖器 ・ : 女性生殖器 ㊨ : 雄の動物
 ㊩ : 雄の動物 ㊪ : 雄の動物 ㊫ : 雌の動物 ㊬ : 雌の動物 ㊭ : 雌の動物

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
I												
II												
III												
IV												
V												
符号	㊦	㊧	㊨	㊩	㊪	㊫	㊬	㊭	㊮	㊯	㊰	㊱

図11 中国北方系岩面画における記号(牛克誠による)

フゴッペ洞窟発見あれこれ

大塚以和雄・大塚誠之助

(発見関係者)

司会：右代啓視
(北海道開拓記念館 学芸員)

1 フゴッペ洞窟に対する思いについて

大塚以和雄：50 年になるということですが、私にとって生涯忘れる事ができない出来事です。私の娘が嫁にいったのを心配するように、いつも洞窟の事に関しては気にかけております。最初は、こんな国指定なるような重要なものとは思っていませんでした。フゴッペ洞窟が、余市の便利な所にあり、山の中でも危険な海岸でもなく、交通に便利な地にあるということは本当によかったなともいつも思っています。

2 海水浴に行って発見したときのメンバー・グループについて

大塚誠之助：札幌の中島中学時代にクラスメイトと一緒に蘭島に海水浴に行くことになりました。クラブというわけではないのですが、中学2年生頃から近隣や私が住んでいた当時、豊平町の中の島の高台等で、石器や土器などを興味があったので集めていました。そして、中学校2年生あたりから仲間と一緒に、学校の文化祭などで発表などをしていました。兄が高等学校で考古学をやっていたので、私が仲間と海水浴に行くということを知って「フゴッペに古代文字があるんだよ」と言われました。今のフゴッペ洞窟の南側の鉄道のすぐ側です。断面の方に、旧フゴッペといわれている古代文字だといわれた場所があります。そういう場所があるといわれて、海水浴に行ったついでに蘭島からフゴッペ洞窟に行ったというわけです。そして、その辺をあちこち探索しました。まず、旧フゴッペ洞窟の場所を見たり、周りの畑も見ました。近所の方がぶどう畑に土を運び、その土を運んだことにより小穴が空いていました。今にして思えば、入口の天井の部分が30cmほど小さな小穴が開いていたわけです。そして、興味があったので、その辺を見ると周りに土器片が散らばっていました。これはただの穴ではないと思い、土器片を何点か拾い家に持って帰り、兄に「こういう事があったんだ」ということを伝えました。これは兄の方から説明した方がいいと思いますが、早速、自分一人でフゴッペ洞窟の方に調べに行ったというのが発見のきっかけだと思います。これまでは、海水浴に来て偶然発見したとか、ある本では雨が降って雨宿りをしていたら偶然にみつかったとかいう書き方をしている本もありますが、そんなドラマチックな事ではありませんでした。ある程度、何かあるのではないかと見に行き、たまたまポッカー空いた穴を見つけました。その時は発見など意識は全くありませんでしたが、これはただの穴ではないという事だけは感じました。

2 中学校の同級生と何名くらいで行ったか？

大塚誠之助：正式なクラブなどではないので、普段の遊び仲間5人くらいの男の子達です。彼らも、特別興味あったわけではありませんでした。最近、中学校のクラス会などで、その当時のことを「知っているか？」と聞くと、私は当然一緒に行ったはずだと思っている人物が「そんな事があったかい？」と、歳も今65歳ですからあまり記憶がないみたいです。私は鮮明に覚えています。

3 中学生の時、色々な土器をお兄さんから借りて展示会などをされたみたいですが具体的にどのような展示会をされたましたか？

大塚誠之助：中学2年生頃から文化祭などで、私自身が平岸の天神山や高台で集めた土器や、近所の子供達と一緒に拾った何百点もある土器を集めて展示会などをしていました。3年生になってからは、フゴッペ洞窟はまだ洞窟だと確認されていませんでした。たまたま兄はあちこちに行って土器の状態のいい物を拾ってあったので、私自身が集めた土器以外の札幌南高の兄の学校から土器を何点か借りて、展示するという事はやっていました。

4 国後島で生まれて、小さい頃から考古学に興味をもたれてとということですが、そのことについてお話ししていただけますか？

大塚以和雄：私たちは北方領土の国後島で育ちました。家の周りに竪穴とか遺跡がたくさんありましたので、子供の頃から興味がありました。何故、考古学に興味を持ったかといえますと、網走に昭和21～22年に引き揚げました。そして網走中学に入学しました。モヨロ貝塚や北見郷土博物館というのがありまして、そこに米村喜男衛さんという人がいました。そこに何度か通い、後に考古学に興味を持ちました。次の年に札幌に移り、今の札幌西高ですが札幌第二中学に入学しました。そこで郷土研究部が昭和22年にでき、それから考古学に興味を持ちあちこち発掘に走ってました。そして、そこで色々な先生に出会い、北は礼文島から斜里、南は函館の方まで色々発掘に行きました。当時、考古学ブームがあり、札幌第二中学だけではなく各学校に郷土研究部ができ、発掘をしていました。何故フゴッペ洞窟が発見出来たかという、私が札幌南高に移った前の年ですが、個人的に余市のフゴッペ洞窟の付近や手宮の古代文字、忍路ストーンサークル、旧フゴッペ洞窟の彫刻してある所に取りに行き何回も通ってました。特に旧フゴッペ洞窟の彫刻に興味を持ち何回か行きました。そして、たまたま弟が海水浴に行くというので「見てこい」ということで発見につながったと思います。

大塚誠之助：私が住んでいた場所は泊村といって、国後島の中では一番大きな部落でした。私が住んでいた部落は学校から約3kmくらい離れていたと思います。毎日学校に通う道程で、雨が降れば黒曜石が散乱しているのを見つけて拾っていました。小学校の低学年の時、防空壕を作るために穴を掘っていたら(もちろん、私が掘っていたわけではありません。)、土器片や状態のいい土器が出てくるといことはありました。

戦後ソ連が入った直後、私たち家族は根室に引き揚げようと思っていたのですが、根室に小舟が着かないで風連港に着くということがあり、1ヶ月くらい過ぎて網走に1年間住みました。当時、家が今の網走博物館(当時：北見博物館)の近くでしたので、私自身も博物館をよく訪れていました。当時の館長の米村喜男衛さんの話を子供ながら一生懸命聞いた記憶があります。

昭和 22 年 4 月に札幌に移り、その時、私は小学校 5 年生でした。その頃から千島時代の事があって、近所の高台に行けば単なる破片や黒曜石の欠片などではなく、かなり状態のいいものが収集出来ました。約 600 点くらいは、小学校の 6 年生から中学 3 年生にかけて集めました。それらについては、南校の郷土研究部に寄付しました。

5 日曜日に行かれていたのは、近くの平岸の林檎畑ですか？

大塚誠之助：高台は、林檎畑です。ある時はたまたま林檎の収穫期にぶつかり、林檎園の人から林檎泥棒と間違われた時もありました。しかし、林檎など一つも持っていませんでしたし、また持っていたのは土器片か石器だけだったので、注意を受けてもすぐ許してもらったこともありました。

6 フゴッペ洞窟の発見について、また発掘にも携わっているということなので、その辺を具体的にお聞きしたいと思います。旧フゴッペ洞窟の刻画について当時はどのように見ていましたか？

大塚誠之助：当時は、鉄道の丸山の刻画に金網も充分していないような状態でした。覆いも、金網もすっきり傷んだような形でした。ただ当時は、偽物説の方が強かったと思います。私たちが見ても、「誰かが悪戯した」という感じでした。むしろ、これは本当の文字ではないと・・・、私たちが見には行きましたが、悪戯ではないかという感じしか抱いていませんでした。昨日、札幌から来る途中、フゴッペ洞窟に寄って来ましたが、旧フゴッペ洞窟の痕跡は全くありませんでした。

7 お兄さんは、個人的にも旧フゴッペ洞窟や手宮によく行かれていたそうですが当時の旧フゴッペ洞窟についてはどのように見てましたか？

大塚以和雄：当時は偽物説の方が強く、旧フゴッペ洞窟は昭和 2 年(1927)に発見されて雑誌などに載っていました。それで、昭和 24 年(1949)くらいにそこに行くようになりました。

8 人面画を見ましたか？

大塚以和雄：古い写真には左の方に人面画があり、右の方に彫刻があり、それは全然記憶にないのです。ただ鉄道の枕木がかけてあり、ザラザラした感じで、彫刻といった感じではなかったです。当時からあまりよくわからなかった状況で、とにかく偽物といった感じでした。

9 フゴッペ洞窟の周辺に遺跡があるということは当時ご存じでしたか？

大塚以和雄：それは、忍路ストーンサークルですね。西崎山ストーンサークルは、昭和 25 年に発見されたので当時は無かったです。あまりフゴッペ洞窟の周辺の遺跡は、よくわかりませんでした。見て歩いて、探して歩いた状態です。当時からものを見たら全部遺跡に見えてしまって……。

10 発見した当日は 8 月の初めでかなり暑い日でしたか？

大塚誠之助：中学生で今こんなことしたら怒られると思いますが、実は蘭島の海の家に泊まっていた。雨も降っていなかったので、仲間を連れて行きました。ですからフグツベの海岸で泳いではいません。

11 8月の何日かという具体的な日には思い出せませんか？

大塚誠之助：日記などそういう記録は全くありませんので8月の初めだと思いますが、もしかしたら7月の末かもしれません。普通中学校生は、休みに入るのは7月の24・25日だと思いますので、それ以降であるのは間違いありません。休みになってすぐではないと思うので、やはり8月の初めだと思っています。

12 発見したことについてお兄さんに土器が散乱していたことをお話ししたそうですが、その時お兄さんはどのように感じましたか？

大塚以和雄：昭和24年に何回か行った時は、全然穴はありませんでした。あるはずがないと思っていましたが、弟が土器片を拾って「穴があった」ということを教えてくれたので、夏休みも終わる頃、一人で汽車に乗って行きました。そして、土を運んだ小柄さんを訪ねて行きお話を聞きました。それから穴を掘って見たら、これは普通の穴ではないと思いました。弟から話を聞いた時も、これは面白いと思っていました。実際行って掘ってみましたら、すぐに洞窟だとわかりました。帰ってすぐに島田智善先生の所に行き、郷土研究部を作り発掘調査をする事になりました。

13 小柄さんに聞いたお話とそのときの状況を教えてください。

大塚以和雄：貝塚の跡なので、土は畑にすごくいいと思います。小柄さんのところに行くと、「土器がたくさんあった」と、お土産に完全な土器を一個もらって帰りました。その時もらった土器は、縄文の土器です。

14 発見したときの洞窟の口の開き具合を詳しく教えてください。

大塚誠之助：斜めになっているものですから、客土もそんなにまだ大がかりな客土ではありませんでした。今の入口の天井部分が高さが30cm、横が40cmくらいの穴でした。それが今の天井部分にあたると思います。入口に土器があり、それは洞窟の中の土器ではなく上から落ちてきた土器だということは後でわかりました。客土したために、そこに土器が入ったわけではないと思います。入口周辺は、上から落ちてきた土器だと思います。

15 小柄さんから聞いた話で中からたくさん蛇が出てきて蛇穴だと言われてたと聞きましたが。

大塚以和雄：それは、作り話だと思います。そういう話は、聞いた事ありません。レジメに写真が載っていますが、札幌南高が初めて調査して、3回目くらいだったと思います。半袖を着てるので夏場だと思います。真ん中あたりの横に黒い所があります。それが最初に空いている穴です。写真の左側です。

16 札幌南高の島田智善先生を代表にして発掘を行ったそうですがその辺を教えてください。

大塚以和雄：8月の末頃から始めて、6回日曜日ごとに行って発掘しました。穴を広げたのではなく、手前の方を掘りました。そんなに、重要なものだとは思っていませんでした。その時、西崎山ストーンサークル(9月25日～10月5日)の発掘が丁度、同じ時期に実施していました。その時、発掘していた東京大学の駒井和愛先生や東京女子大学の小林知生先生、名取武光先生が見に来ました。発掘を6回行い10月の末頃になり、冬が近づいてきたので終わりにしました。

17 毎週日曜日ごとに発掘をしていたとのことですが、その時、弟さんは同行していましたか？

大塚誠之助：私は、まだ中学生だったので、参加していません。

18 その後、弟さんも札幌南高の郷土研究部に入られて、フゴッペ洞窟を総合学術調査で本格的に発掘されるのですが、その発掘に参加されていた時のお話を聞かせて下さい。

大塚以和雄：札幌南高の郷土研究部だけでは手に負えないため、名取武光先生にお願いして総合調査団が昭和26年7月に結成されて、第1回目の学術的な調査が実施されました。その時、札幌南高も発掘に召集されました。また、小樽市の潮陵高など、色々な方々が発掘に参加されました。発掘は、7月の末頃から行いました。

19 発掘の時、宿泊はどの辺りに泊まっていたんですか？

大塚以和雄：蘭島中学校に泊まり、フゴッペ洞窟に通ってました。

20 中村米吉さんほどのようなことをお手伝いしていただきましたか？

大塚以和雄：中村さんは、当時から考古学で有名な方で、ストーンサークルを管理していたり、発掘の親方みたいな感じで、いろいろなことを全部手配してくれました。先生方は中村さんの家に泊まり、私たちは向かいの中学校に泊まっていたんです。

21 弟さんも参加されていますね？

大塚誠之助：高校1年生だったので、発掘には最初から最後まで参加していました。遺跡までの距離は、かなりありました。発掘の時期は夏で、もうすごく暑く歩くのが大変だったと記憶しています。

22 何人くらいで発掘は行われていましたか？

大塚誠之助：札幌南高の1、2年生が一番多かったと思います。およそ20人くらいだったと思います。他に、小樽市潮陵高の数名とか、札幌東高の方もいたということを後から聞きました。発掘すると、次から次へと土器や石器類が出てきますが、刻面は手に持てるくらいの崩れた岩にもありました。すべて終わった段階で、今でしたらトラックで運ぶと思いますが、札幌南高の生徒達が1つ1つ持って帰り、名取武光先生が館長をしていた北海道大学の博物館に苦勞して運んだという記憶があります。

23 発掘した土はどうしてましたか？

大塚誠之助：それは遠くに運んだのではなく、馬車やリヤカーを使って屎尿処理施設の南側の方にぶどう畑があったのですが、そこに運びました。

24 昭和 26 年と 28 年に発掘され 27 年は発掘されていませんが、なぜですか？

大塚以和雄：発掘の団長の名取武光先生が体の具合が悪くて 1 年間休みました。

25 最近の洞窟にある岩面刻画と発見当時の岩面刻画は、違っていますか？

大塚以和雄：気になったのは、グリーンぼいということです。刻画にグリーンがありませんでした。発掘当時のことです。写真を見てもやはりグリーンが多いと思います。

26 発見した当時は、刻画は何処まで埋まっていたか？

大塚以和雄：全面刻画は埋まっていました。

27 石膏型を取る作業はやりましたか？

大塚以和雄：昭和 26 年と 28 年の発掘の後に何人かの方が担当して、測量と石膏取りと写真の作業をやっていたと思います。私は、直接関わっていません。

28 発掘していくと黒い煤や赤い絵の具みたいのもので塗っていると思いますが、それは発掘した時にはありましたか？

大塚以和雄：おそらく当時に人が生活をしていたと思いますので、燻された黒い煤は記憶にあります。赤いものは記憶にありません。

大塚誠之助：私も赤いものは、記憶にありません。

29 札幌南高の学校祭でフゴッペ洞窟を取り上げて発表しとことがあると思いますが、そのことについて教えて下さい。

大塚以和雄：当時、一緒に発掘していた弟の同級生に、飯田勝幸さんという北海道大学の教授になった方がいました。その方が物を作るのが好きで、フゴッペ洞窟を約 1/3 に縮小して作りました。

大塚誠之助：この学校祭は、昭和 26 年の発掘の終わった後の学校祭だと思います。飯田くんは、そういう能力がありましたので、みんなで力を併せて徹夜で準備をしたのを覚えています。そういう記録は、当時の「THE MINAMI」という札幌南高の新聞に大きく写真入りで残されています。

30 発見されて発掘にも携われ、どういう気持ちで発掘されていましたか？

大塚以和雄：こんなに重要なもので、国の指定史跡になるとは考えていませんでした。ただ、今になってみたら、もっと深く発掘しておけばよかったと思います。

大塚誠之助：昭和 25 年といいますが、まだ文化財の保護が交付されたばかりで、一般にはまだよく知られていない時期でした。そんな中で、発掘に関わる事が出来たということ、また発見が早かったため最初から学術的な調査が出来たということ、さらに文化財としてはほとんど無傷のままに残され国の史跡になったことなどがあります。私にとって、

この大きな仕事に関係できるということは、大きな喜びです。

31 島田先生はご健在ですか？

大塚誠之助：昨年3月31日にお亡くなりになりました。85歳だったと思います。

32 いろいろな人に、発見者の写真を飾って欲しいと言われるそうですが、飾ってもよろしいですか？

大塚誠之助：説明をされている川端さんに中学3年生のときの写真を送りました。今の施設が出来る前その後もお邪魔していますが、写真の中に島田智善先生や私自身が発掘している写真があります。

33 発掘していた時は自炊していたんですか？

大塚誠之助：当番制でした。女性も手伝いに来たことはありますが、男性が中心になってやっていました。

34 発見から50年たち、これからフゴッペ洞窟はどうあるべきか一言お願いします。

大塚以和雄：完全な形で現在研究されているということは、発見関係者として最高の喜びです。一番希望することは、完全に調査されて報告が完全な形でできればいいと願っています。最初に研究された名取武光先生、札幌南高郷土研究部で指導していただいた島田智善先生には深く感謝したいと思っています。

大塚誠之助：国の史跡になった遺跡の発見や、発掘に参加出来たということは、本当に大きな喜びです。これからは、現在の岩面壁面の調査や研究をされることを望むとともに、北海道を代表する重要な遺跡ですので保存に万全を期して頂きたいと思います。そのためにも、シンポジウムを主催された北海道開拓記念館の方々をはじめ、余市町教育委員会の力は絶対欠かすことはできないわけですし、各方面の専門の先生方のご支援がなければうまくいかないと思いますので、ご援助をよろしくお願いします。

※なお、フゴッペ洞窟の発見関係者として、大塚ご兄弟にお話いただいた。司会との対話形式で進め、その内容についてまとめた。

フゴッペ洞窟の考古学的位置づけ

乾 芳宏

(余市町文化財係長兼学芸係長)

現在、岩面刻画が残されているのは、余市町と小樽市の手宮洞窟があります。手宮洞窟について若干説明しておきたいと思います。

手宮洞窟は慶応2年(1886年)に長兵衛さんという方によって発見され、その後明治時代の初めにイギリス人のジョン・ミルンさんという方が学会で紹介したり、あるいは開拓使によって明治13年に手宮洞窟の紹介ということが行われています。

手宮洞窟の刻まれた模様については、文字ではないかという論議があり古代文字という事でいろいろな方が解説を試みています。その後、本物が偽物かという刻画の問題になり、それがずっと続いていたというような事がありました。その後フゴッペ洞窟の問題という形になっていくわけです。フゴッペ洞窟は現在、独立丘陵のような形で丸い山のようになっています。かつては、明治37年函館本線をつくる時に鉄道線路のために丘が切られたということがありました。それまでは、ちょうど坪状にずっと続いていた部分の先端部がフゴッペ洞窟という状態でした。

昭和2年に島田で保線工事の方が来られ、丸山の南壁に刻画と人面の描かれたような岩が出てきたということで、新聞等で報道された事があり、それが旧フゴッペ彫刻と呼ばれているものです。旧フゴッペの彫刻そのものが本物が偽物かというのがありまして、当時は偽物ではないかという風潮があり、ほとんど注意されないうちに終わっています。ところが昭和25年に大塚さんの発見が続き昭和26年以降の本格的な学術調査によりフゴッペ洞窟が非常に刻画の出る重要な洞窟である事がわかり、その後手宮洞窟の刻画の問題についてもこれは偽物ではなくて本物でないかと学術的に比較されていくというような経過があったという状況です。

そこでフゴッペ洞窟の発掘ということで、昨日、大塚さんのほうから聞いた話とその後私が調べたのと比較しながらフゴッペ洞窟の発掘史というものにふれていきたいと思えます。フゴッペ洞窟は昭和25年の夏に発見されて秋に発掘調査が行われ、その時、札幌南高校の島田先生と生徒が中心になって土曜、日曜と6回程度発掘して50人くらいで発掘されました。その後本格的に北海道大学の名取先生の指導のもと発掘が始まり現在までフゴッペ洞窟は3回発掘されています。

第1次の発掘は、昭和26年7月26日から8月6日までの約2週間弱の発掘が行われています。第1次の発掘については、7月26日から29日までの4日間は洞窟が塞がって土砂がたくさんあるということで土砂をとる作業にとても時間がかかったということで、実際は1週間くらいの発掘調査だと思えます。その後、第2次の発掘調査が昭和28年に行われています。本来であれば昭和26、27年と2年間連続で調査をされたほうがよかったということですが、名取先生の体調が悪いということで1年おいて昭和28年に第2次の

発掘調査が行われています。昭和 28 年の発掘ですが 3 回に分けて行われています。第 1 回目は 8 月 18 日から 22 日まで 5 日間、第 2 回目は 8 月 26 日から 29 日までの 4 日間、最後は 9 月 13 日から 10 月 18 日までの 36 日間です。実際の発掘調査は 8 月 18 日から 29 日の約 1 週間くらいの発掘調査が行われ、最後の調査については、発掘というより刻画の石笥のレプリカを作る作業に費やされています。実際に昭和 26 年と 28 年の発掘調査を合わせると約 20 日間のフゴッペ洞窟の発掘調査が行われていたということがわかります。その後、昭和 28 年 11 月には国の指定になり、異例の早い国指定になりました。それだけ非常に価値が高かったと言えると思います。第 3 次の発掘調査は現在の建物を作るということで、洞窟の前庭部を昭和 46 年に行いました。9 月 20 日から 10 月 9 日の約 2 週間発掘調査が行われました。その後、現在の日本で最初のカプセル方式の一般公開施設が昭和 47 年に完成しています。

こうしてみると、発掘が行われてから国指定まで非常に早い時間ですぐに保存の検討がされています。昨日、昭和 25 年という話がでておりましたが、実は昭和 24 年にどういことがあったかと言うと、昭和 24 年 1 月に法隆寺の本堂が焼けており、2 月には愛媛県の松山城が焼失、6 月には松前城が焼けるといった非常に貴重な文化財の損失があり、昭和 25 年 5 月に文化財保護法が国会で成立され 8 月 29 日から施行されています。文化財保護法が施行されると同時にフゴッペ洞窟の発掘調査が開始されています。

発掘調査の報告書は現在 2 冊公式に出されています。1 つは昭和 28 年に出された『フゴッペ洞窟』。それから昭和 45 年に出された『フゴッペ洞窟』。まとめて書かれているのは、昭和 45 年の報告書です。フゴッペ洞窟の当時の状況は 50 年前のもので、フゴッペ洞窟の調査というものは報告書を丹念に読んで、いかに理解するかということがフゴッペ洞窟の様子を知る唯一の手だてではないかと思えます。当時の報告書の特徴は、とにかく色々な記録がされていて層位的に調査されています。土器については詳細に文様の分析がされています。統計的な処理は非常にこまめに行っているというのが報告書の特徴としてみることが出来ます。

フゴッペ洞窟の平面図をみると大きく 4 つに分けて発掘調査が行われているのがわかります(第 1～3 図)。A 地区、B 地区、C 地区、D 地区と分担して発掘調査が行われ、それぞれの A から D 地区の遺物数も数えられています。洞窟の真真中に、1953 年ボーリング A' 区というのがありますが当時発掘調査した時、洞窟の一番下はどこまであるか調べるために洞窟の真真中を垂直に掘っています。下の洞窟断面略図を見ると深さ 3m ほどのボーリング調査が行われています。3m ぐらいになると遺物は出ないようです。つまり現在の洞窟面から 3m くらい下まで調査されているということがわかっています。当時の高さですが略図をみると基準が 0m と書いた上に 1、2、3、4、下に -1、-2、と書いていますが、基準の 0 を設定してそれから何 m 上か下かということで当時は調査されています。当時の基準の 0m は現在の標高 4.6m に相当していますので、それから 3m 下ですの標高約 2m くらいの所まで調査されています。洞窟の上は、約 7m くらいまで土砂がたまっていたということがわかります。土層断面を見ると、A 地区の断面を示した図面ですが、真真中に大きな石が落盤している事がわかります。それを移動するのに大変な作業だったと聞いています。落盤の横に彫刻された石の破片が土層の中に入っているというような事からある程度の年代推定は出来ます。

次に第4図の復元可能な土器というのを見ていただきたい思います。一番右のA区の4という所に線を引いて絵を書いています。それは落盤の横から出た彫刻の文様で、写真を見て私が書きました。A区の4層から出ている文様はこういった足を広げたような文様の彫刻石が落ちていたわけです。それぞれの地層から色々な遺物が出てきて、土器の破片が何処の地区のどの層と接合出来るかということを図で示しているわけですが、上の層と下の層がかなり接合されていることがわかり、例えば1mくらいの土砂の差があっても土器が上下で接合しています。20～30cmぐらいのものであれば多くの土器が接合しています。遺物の土器の接合というものを合わせて、平面図と垂直的に見た場合、洞窟全体の遺物が平面的にも接合することがあります。土器を割って洞窟の中に置かれているという状況が考えられます。それから上と下の土器が接合するということは、それほど時間的な差がないということがわかります。例えば1mくらいの堆積があっても、それほど時間的に差がないような間に土砂が崩れてきているということが言えると思います。

第5図を見ていただきたいと思います。ここには刻画の全体像の一部が載っていますが、基準の0～4mの範囲で刻画が上から下までびっちり描かれています。一番左手にある刻画の文様はほとんど0mに近く、発掘調査をすると地下2mくらいの所までは遺物が出土していると言うことですので、刻画というものは現在の高さの刻画よりさらに下に出る可能性があります。遺物についてもその下からも出てきているということが言えると思います。

遺物の出土状況ということで、土器の方で見たいと思いますが第6図にその土器を載せています。ここに載せている土器は三段になっていますが、一番上が上の層から出てきて4、5、6がだいたい1m前後から出てきている土器です。一番下の7番という土器がだいたい0m付近のところから出てきている土器です。土器の模様という後北式土器と呼ばれています。後北式土器は昭和8年に薄手縄文土器を前期、後期と分けたものです。後期北海道式薄手縄文土器A、B、C、Dの略称になるわけです。それをとって後北式土器と呼ばれています。7番目の土器が後北C₂式という土器になります。4、5は後北のC₁・D式といわれているものです。1、2、3は後北C₁・D式から北大式といわれている土器です。少なくとも刻画の面についてはこのような土器が下層から上層に出てきているというふうに考えられます。下層から出てきている土器はどうかというと、後北B式が出ています。

昭和46年に発掘調査された土器がありますが、北海道新聞のフゴッペ洞窟という記事に写真が載っています。この土器は後北A式という土器で、土器の中から鹿の肩胛骨が出ています。これは古い等のト骨ではないかといわれていて呪術的な要素が強いものといわれています。この洞窟では後北A式から北大式が出てきています。刻画はどこから出ているかというと、刻画は後北C₁・D式の遺物と一緒に出てきているので、少なくとも刻画は後北C₁・D式よりも古い時代に描かれている可能性はあると言えるのではないかと思います。後北Aから後北C₁・D式頃に刻画が描かれていると考えられます。昭和46年の発掘調査には石柱状の石が出土し、そこに刻画が描かれたものがあります。これは四角のような円を描いたような刻画の文様があり、洞窟に基準の0mから3mに見られている模様と少し違った刻画が発見されています。この刻画の文様は、後北式の初期段階の文様に非常に近いところがあるのではないかと考えています。初期の後北式土器の文様から見る

と、格子目の粘土紐を貼付けてつないでいくもの、円を基準に文様を付けるものがあります。後北 C・D 式になると、円というより半円を基準にして文様を描かれることが多いわけですが。そういう点からみると、刻画も古い段階と新しい段階で若干ある意味で変わっているものもあるのかな、と思っています。このようにフゴッペ洞窟では、色々な遺物とともに貝塚等も出土しているわけですが、こういった後北人が実際どういう生活様式であるのかということも実はよくわかっていないというのが現状です。

北海道で後北式文化の遺跡が発見されているのですが、住居跡はほとんど発見されていません。発見されているのは、お墓が大半で実際の生活様式はよくわからないところがあります。そういった中、フゴッペ洞窟でこれだけ貝塚があって生活的な要素を持っていることは、非常に価値の高い洞窟ではないかと思っています。土器の中では一部、鈴谷式と呼ばれている土器の破片等も発見されているので北方的な要素もなきにしもあらずということも考えられます。

フゴッペ洞窟は刻画もさることながら、貝塚や炉跡が見られるなど生活状態も知ることが出来る重要な遺跡であると思います。私もフゴッペ洞窟について遺物は十分まだ検討しておらず、あまり実際見ていないので、今後土器や他の遺物を通してこまめに観察してさらに報告書とつき合わせていきたいと考えています。私の見た限り、フゴッペ洞窟の土器を見ますと、多くのに彩色された土器があり赤や白などを塗っています。祭祀的なものの要素の土器というのも一部使われている可能性があると思っています。

土器を中心に話しをしましたでしたが、一般的に土器の文様と刻画の文様が共通すればいいのですが、なかなか文様が一致しないという面があり、非常に不可解な事があります。例えばアイヌの人々の意匠などをみますと、使われている道具・着物は文様的に類似したものが多々ありますが、お話したようにフゴッペ洞窟の土器に出てくる文様と刻画は共通性が非常に少ないということがあり生活の文様と刻画の文様は異質なのかなと思っています。

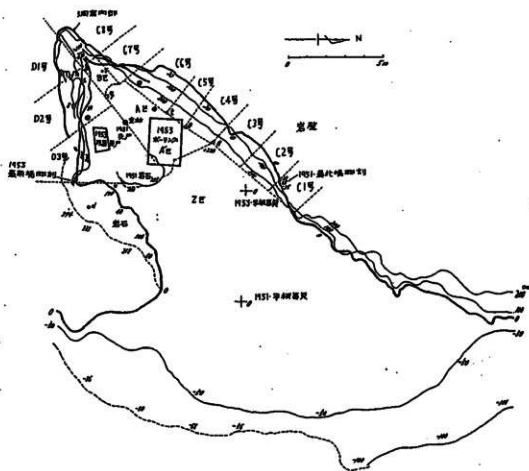
(質問)

1 フゴッペ洞窟の刻画は従来、縄文時代の後期くらいであったと記憶していますが、後北 A 式土器になると恵山文化から描かれたような感じがしますので、江別式土器（後北式土器）の初期段階とかさなります。その辺の年代についてはどうか。

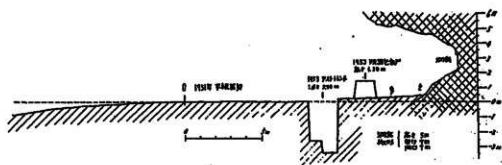
実は非常に問題になるところなのですが、0m 付近のところに刻画があります。というと、寝ころんで文様を描くわけではないので、おそらくその下にも文様が出る可能性があると思います。残念ながら当時、壁面にそって 2m くらい下げただけならば刻画がどこまであるかわかって、土器との相対関係がとれたわけですが、残念ながらボーリング調査は刻画のない洞窟のご真ん中を上げていますのでよくわかりません。昭和 46 年に発掘調査された記録をみると、鹿の肩胛骨の入った土器と刻画が並んで出てきている状況から判断して、かなり近い時期のものではないかというふうに言われています。堆積状況の方から見ても後北 C・D 式あるいはそれよりも古い時代に描かれている可能性はあるのではないかと思います。

2 アイヌ民族ではないかというニュアンスのお話でしたが、どういう民族だったのか？

アイヌ民族との関係は、現在のところわからない状況です。あくまでも後北の人たちというか、フゴッベ洞窟人という形でお話しさせていただきたいと思っています。

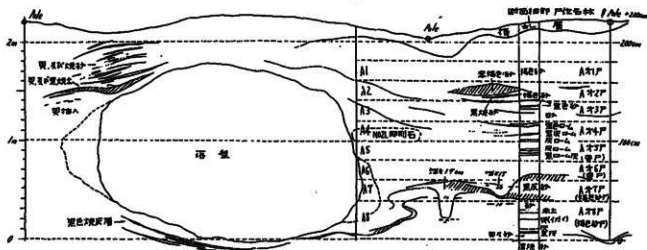


第1圖 1951-1953年度 洞窟平面圖

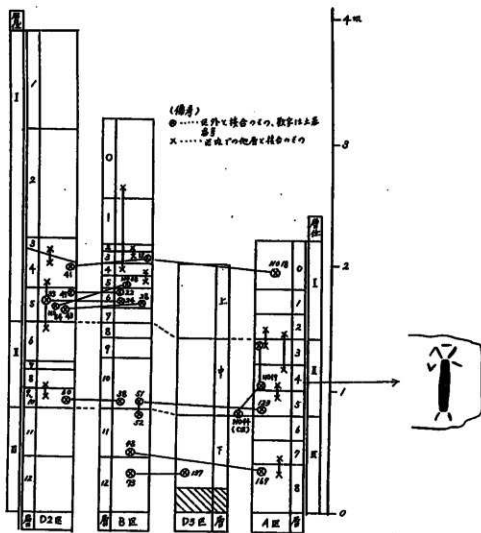


全道断面略圖

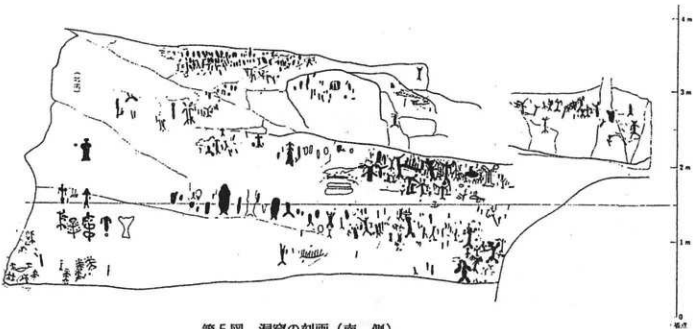
第2圖 洞窟断面略圖



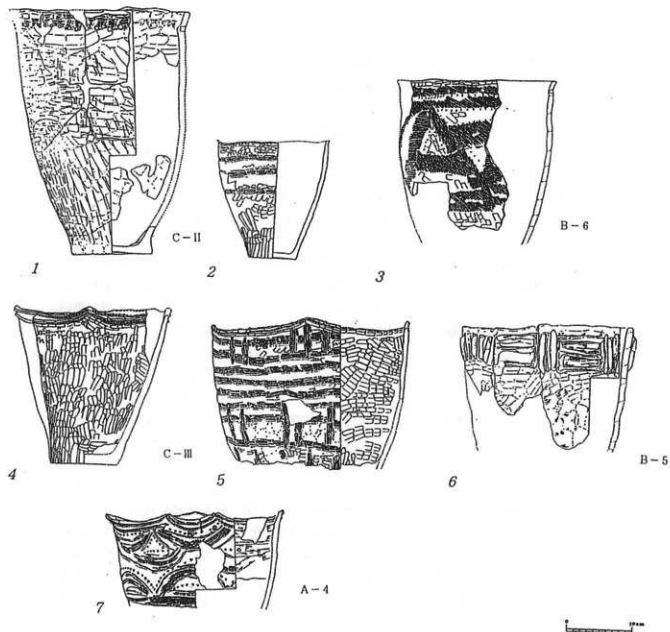
第3図 洞窟前A区断面及び層位名称図



第4図 復元可能な土器の散布状態



第5図 洞窟の刻画(南側)



第6図 洞窟出土の復元土器実測図

フゴッペ岩面刻画の位置づけ

小川 勝

(鳴門教育大学助教授)

はじめに

私が解釈したものを、「フゴッペ洞窟の岩面刻画」という形で掲載したものが 있습니다。これは、まだ一度見ただけで、先生方の報告を基に当時、私が考えていたことを書いたもので、不十分なものであります。また、小樽市の手宮洞窟の作品に関しては、ほとんど消えて見えないなど、誤解を生じような表現を書いており、関係者の皆様にご迷惑をかけたことを、この場で改めてお詫びしたいと思います。

その後、フランスなどに10ヶ月間の研修に行っており、なかなか北海道の方へ参る機会がなかったわけですが、1995年に文部省科学研究費を得まして、「フゴッペ洞窟岩面刻画の美術史的研究」という課題で3年間、個人研究としてようやく集中的にフゴッペ洞窟を調査することができるようになりました。この3年間の研究の際には、北海道の先生方のご協力を得まして、主に北海道開拓記念館に所蔵されています石膏型を調べさせて頂きました。また、フゴッペ洞窟では制作されている作品の詳細を検討して、実際に作者がどのような形を意図して壁面を刻んだのかということ調べてまいりました。そのうち石膏型のものに関しましては、野村崇先生の遺稿記念論集に書かせて頂いています。今年の7月、オーストラリアの学会で発表しました時に、石膏型に関する論文を私自身が英訳して報告した論文もあります。もう一つ、余市水産博物館の研究報告の第一号に「フゴッペ洞窟の岩面刻画：美術史的研究の可能性」というのも書かせて頂きました。これは、調査方法や理念などを抽象的に述べたもので、実際の調査の成果というものはここではまだ発表できておりません。すでに作者が意図した本当の形を、私が判断し発表しているべきだと思いますが、なかなか難しい問題があります。来年度中には新しい図面というようなものを皆様にもお見せできるかと思っております。

北東アジアの先史岩面画というものは、朝鮮半島東南部の事例を中心にとすることで、この後分布ということでもお話ししますが、やはり我が国の、しかも北海道の余市町と小樽市にしかない岩面刻画をより広い視野から位置づけるために、この数年ロシア・中国など限られた場所ではありますが作品を見学に行っております。その中の朝鮮半島の事例を紹介したものを今年の春に「民族芸術」という雑誌に発表しております。先ほども少しお話ししましたが、今年の7月「オーストラリア岩面画学会」で日本の事例などを報告できたのは貴重な機会だったと思います。1997年に3年間の個人研究を終えまして、翌年の1998年から5人による共同研究で、文部省科学研究費を得まして2001年度まで継続する予定です。メンバーは私を代表に、昨日記念講演をされた木村重信先生、北海道開拓記念館の主に考古学を担当されている平川静洋氏と右代啓視氏、そして洞窟の成因などを調べるために通産省の筑波におられます下川浩一氏、この5名で共同研究ということで「フ

「ゴッペ洞窟岩面刻面の総合的研究」という課題で現在研究を継続しているところです。

さらに、本日のシンポジウムを主催している地域連携推進研究のメンバーにも加えて頂きました。今年の9月にはロシアへ調査に行ってきました。最初に見てから10年以上、集中的に調べてから5年ぐらい経っていますが、簡単におかるといふ研究対象ではありません。最初の3年間、個人で研究している時は、制作年代に関して、なかなかきっかけも得られない。不勉強のせいもありますが、非常に難しい問題であると感じていましたので、共同研究をする事になって少し見えてきたかなと思っております。

ただし、これから申し上げる内容は、あくまで私個人の見解でありまして、まだまだ共同研究の皆さんからの賛同を得ている内容でもありませんのが、敢えて仮説という段階であります。主に年代に関して、この場で発表させて頂きますのでご了承下さい。

私が与えられましたテーマは「フゴッペ岩面刻面の位置づけ」というタイトルで、この場合の位置づけということは、様々な位置づけがあります。最も重要なものは、制作年代になります。

その前に呼称・技法などテクニカルな問題からはいっていきたいと思います。5年前に小樽市で開催されました手宮洞窟を記念するシンポジウムで、かなりの時間を割いて作品の呼び方を議論しています。ここにフゴッペ・手宮の作品に関して主に用いられた呼称を列挙しております。それぞれの研究者が、それぞれの考えに基づいてどう呼ぼうが自由であると思いますが、共通した基盤で考えるためにはある程度統一しておいた方がいいと思います。私は1988年にオーストラリアで発表したときRock Engravingという英語を用いました。その翻訳として、岩面刻面を用いております。岩の面に刻んで平面的な表現を意として刻むという手法で作品にしたものというようなことです。この地域連携推進研究のタイトルにも岩面刻面を採用して頂いておりますので、一つの統一した呼称として私はこれを考えております。

私が研究しております先史美術について説明させていただきます。文字を用いなかった人々が制作した造形作品の総称で、文字的性格も含んだ重要な役割を社会内で果たしていたと考えられると定義しています。この場合の「文字的性格も含んだ」というところですが、これは文字だと言っているわけではありません。やはり文字と呼ぶには、体系的、かつ文法的な統一した規則的なものが前提になります。絵文字という場合もあるかもしれませんが、この場合どこまでが文字かというのは、非常に難しい問題です。勿論あらゆる美術的な作品にも、文字的な内容も含まれているわけです。ただそれが、ある一つの言語を理解する人にとって約束事としてもすでに決められていて、誰もが同じ意味で理解できる背景を持った社会の中で統一的に作られたものとしてあれば、それは文字と呼んでいいと思います。先史美術の場合、現在我々が考えている何か造形的な形で鮮やかな感覚的な対象というよりは、人間が社会生活を営むうえでお互いに何かを理解し合う内容も含めた非常に重要な役割を果たしていました。そういうものとして、現在普通に考えている美術よりも社会内で大きな存在であったものとして、先史美術というものを考えたいということで、先史時代の美術を重要なものとして研究しているということになります。

先史美術の一つのジャンルに岩面画(Rock Art)というのがあり、世界中のあらゆる時代に制作されています。人類がこれまで作り出してきた美術作品の中でも、その重要性はまだまだ認識されているとは言い難いです。最も古いものでは、3万2000年前からつい

最近に至るまで、人類が永遠に作りだしてきたものとして岩面画あります。我が国では一般に岩絵と訳されていますが、もともとこの分野はフランスを中心に展開してきたということもあり、基本的な用語はフランス語で考えることがあります。それは、*l'art rupestre* という言葉になります。この場合 *rupestre* というのは、岩の面のという意味があります。単に岩、英語で Rock と言っているのとは、少し違い英語の訳の方が不十分だと思います。それで本来、使われている *rupestre* という言葉を重視して、私は岩面画という言葉を一貫して使っております。

岩面画の中には、色をつけた岩面彩画、線を刻んだものを岩面線刻画、そして岩面刻画と 3 つの主なものがあると考えております。従来、フゴッペの作品を英語では、Rock Engraving と呼んでいたんですが、今年の夏にオーストラリアで発表しようと思ってタイトルと要約を学会に送ったところ、petroglyph と直されて戻ってきましたので、少しオーストラリアの担当の先生と議論しました。近年、世界的に Engraving というものを限定的して捉える傾向があります。フゴッペ洞窟のような作品は、現在世界的なスタンダードによれば petroglyph と呼ぶのがよいという主張に押し切れ、今回夏に発表していたものを petroglyph に直して発表しました。petroglyph というのは、petro というのが「岩」、glyph というのが「刻んだもの」という意味ですので、あまり意味の主張のない中世的な言葉です。逆に、このようなニュートラルな表現の方が、フゴッペ洞窟や手宮洞窟を指す場合にいいのではないかという気もします。もともと 70 年代の報告書には、英語で Wall Engraving という言葉を使っています。作品をどのように呼ぶかという小さな問題でも、その時期の考え方の変化があります。フゴッペ洞窟・手宮洞窟は、我が国のものというよりも世界の文化遺産であるので、統一的な呼称で考える方が望ましいのではないかと思います。

1 技法

フゴッペ洞窟が世界の中でも非常にユニークな位置を占めるとすれば、非常にシャープな造形感覚、あまりほかのところでは見ることのできない作品があるところが誇りと言えるかもしれません。このようなシャープな感覚は、abrasion と呼んでいます。これも最近までわたしは、cutting (切削法) という用語を使っていましたが、最近の世界的なスタンダードの用語法に従い abrasion と呼ぶようにしています。abrasion という比較的柔らかい岩質の岩を石で削り取り、そして削った面を磨き上げるようなテクニックというものは、やはりフゴッペ洞窟の柔らかい岩質に最も相応しい表現技法であります。フゴッペ洞窟を前にした作者達が最も相応しいテクニックとして、新たに作り上げそして完成させたテクニックではないかと評価しています。また、直線的な線の強さと磨き込まれたような面の滑らかさが abrasion というテクニックの特徴だと思います。

これは、峰山巖先生が「哲学者」と呼んでいる作品ですが、非常に浅い形のをベッキングと呼んでいます。これは比較的硬い岩質で切り刻めるような岩ではありません。非常に硬い岩質のものを石器で叩いて表面を剥離させながら、剥離する部分を連続させて何度も何度も叩きつけ、徐々に深みをもたせ意図する形を形成していく方法です。ベッキングは北東アジアの岩面刻画で極めて一般的な方法であり、世界的にも岩面刻画の場合ほ

ぼベッキングが使われています。それは硬い岩質に相応しいテクニックであると同様に、硬い岩質に作られるということはそれだけ作品に耐久力が続いて長い間形を維持するということもあり、現在残っている岩面刻画の中ではベッキングによる技法のものがほとんどであるといっているかと思えます。アブレイジョンによる非常に鋭い作品も世界各地で作られているのかもしれませんが、元々柔らかい岩質のところに作られているものですから、あまり耐久性がなくなりのものが消えてしまっていて結果的にベッキングによる技法のものが多く残るということかもしれません。

刻んだ岩面の中にベンガラと考えられている赤い顔料をペインティングしているのが5作品ぐらいに認められています。また、剥落した刻面の石片からも赤い顔料が見出せますのでわかりませんが、制作当初はかなりの作品に、赤い顔料が充填されていた可能性があります。これの意味はなかなか難しいわけですが、現在我々が見るような形とは異なったものとして、作者達が作品を受け止めていたということは充分に注意しておくべきところかもしれません。

南壁の一番入口に一番近いところで、非常に柔らかい岩質に硬めの道具で、切るように何度も何度も道具を往復させない線を刻みつけているものを、インサイジョンと呼んでいます。大きく分けると、ベッキングのような瞬間的な打撃による方法と、持続的に道具と壁面が接触し続けるアブレイジョンのような方法があります。インサイジョンは大きく分けると、アブレイジョンに属する技法になります。同様に昨日、木村重信先生が強調されていた穴の部分ですが、こういうところは基本的には尖った道具を長時間、接触させ続けながら回転させるように、柔らかい岩質のものに穴をあけていくことを、ドリリングと呼んでいます。これも広い意味では、アブレイジョンに属する技法であると言うべきかもしれません。

これはスペインにあるアルタミラのピゾンと呼ばれている作品です。基本的には、赤と黒による2色のペインティングです。目のところに、刻んだ線が若干見えるかもしれません。また顎のところに、わずかに細い線が刻まれているのがわかります。このようなものを狭い意味でのエングレイビングと最近呼んでいる技法で、石灰岩の少し変色した表面を石器によって、一度だけすり落とすことにより表面を掻き落として、表面のより白い岩を見せてそれを線として表す方法です。現在では、アルタミラの作品で1万4500年前と言われているので、洞窟内部の非常に条件のよい環境にあったとはいえ、非常に長い年月の間に表面自体が変化して、現在では非常に見分け難くなっています。制作された当時は掻き落としの技法によって、表面内部のより白い線がくっきりと浮かび上がっていただろうと考えられています。エングレイビングというのは、もともと版画の用語で銅版面などに非常に細い線を一筆で刻んでいくものですから、本来の意味では非常に微妙な線をエングレイビングと限定して呼んだ方が良いのかもしれません。

立体的に制作される技法をカーヴィングと呼んでいます。フゴッペ洞窟の作品は、基本的に平面的な形を作り出そうと意として、そのためにアブレイジョンまたはベッキングという技法で、岩を凹まして立体的に作り上げますが、作者が意としていた形というものは平面的な人物像であるだろうと思います。そういう意味で岩面刻画と呼ぶのが相応しいだろうと考えております。

2 分 布

次に、分布の問題です。朝鮮半島東南部の慶尚南道というところにある盤龜臺・川前里良田洞・尚州里というのが慶尚南道の一端にあります。下関市にある彦島杉田。中国の賀蘭山・賀蘭口と呼ばれているものは、黄河上流域の寧夏という回族自治区というところの中心都市の郊外にあります。ロシアのハバロフスクの近郊にはサカチ・アリャンがあり、キアは少し南の方にあります。

これが盤龜臺の動物像です。ベッキングで硬い岩質のところにあります。重要なのは輪郭線内部の線で、これらはサカチ・アリャンや賀蘭山にも見られますので、北東アジアの動物像を代表するようなスタイルであると言えます。鯨や舟を結びつける線のようなものが刻まれているということで、捕鯨を示していると韓国の研究者が解釈している作例です。仮面と呼ばれているのも北東アジアの先史岩面画を特徴づける要素として盤龜臺にも見られます。

これは、川前里というところのもので、非常に抽象的な非幾何学的な文様が中心的なところですが、おそらく朝鮮半島に入ってきた岩面画制作の伝統の中で、新たにこの地域で形成された形態ではないかと考えております。文字が刻まれているのも、川前里の特徴です。次は、良田洞というところで、非常に状態が悪くわずかに四角線が見えます。四角を積み重ねて丸い穴を空けて周囲に放射状の線を引いているような、非常に独特な形が見られます。これは日本の装飾古墳との関係から、弓を入れて背負う道具であるという非常に自然主義的な解釈も日本の考古学の先生でおっしゃっている方もいます。やはり、仮面・顔というものが非常に独特な形で、この場所で展開したものでしょうと考えています。

これは下関市にあります岩面刻画です。これに関しては、古代文字であるというようなとんでもない説を、西日本中心に展開されている吉田信啓先生という方がおられて、こういう作品に関して公に批判すると再批判がきて、非常に攻撃されたというような怖い話もあります。実際、私もこれを調べたいのですが、現在のところ調べにくい状況です。

これは中国の賀蘭山のもので、人面と中国では呼ばれています。これは、サカチ・アリャンの仮面のようなものがあります。同じように、これは賀蘭山の動物像で、重要なのは内部に充填されている複雑な装飾の要素で、こういうものが北東アジアの動物像の特徴になります。サカチ・アリャンの動物像も、ほぼ同じような装飾内容が見られます。これはキヤヤの色を使った作品の舟です。賀蘭山、サカチ・アリャンは、非常に距離が離れていますが、非常に共通した要素が見られます。これに関しても、それぞれ地元の先生方が新石器時代であると言ったり、紀元前後と言ったり、年代幅があってなかなか確定しがたい問題です。私自身は、動物内部の装飾的なモチーフが、スキタイ的のものであると考えております。紀元前5世紀くらいに、西方の草原から東西に延びていた民族で、西の方では古代ギリシアと接触して、非常に精緻で金属的な装飾がなされた動物像を残しています。それが東の方にも広がり、もともとあった青銅器のタガール・オールドスという文化と結びついて、動物的な、装飾的な文様を作ったと考えています。紀元前5世紀くらいに一つの貴重な岩面画を制作する伝統というものを考えております。

3 年 代

フゴッペ洞窟・手宮洞窟は、紀元後1世紀後半から2世紀前半と、これまで述べられていた意見よりも、また先ほど乾芳宏氏がおっしゃられた堆積層との関連から考えられる年代よりも、約100年くらい早い年代を、現在私個人は考えております。いずれにしても、こういうものを紀元後のものであると考えますと、紀元前5世紀という数値も私が考えている数値で確定しているわけではありませんので、かなりの年代的な格差があるというのはいふまでもありません。

フゴッペ洞窟・手宮洞窟の位置づけというのは、技法的にも、分布的にもきわめて孤立した位置づけにならざるを得ないというのが結論です。年代的にも、紀元後2世紀、3世紀、4世紀ということになると、西の方から入ってくるものと、北の方から入ってくるものということで、日本にも2系統の岩面刻画の伝統があり、一番近いものはロシア極東部にあらうかと思います。こういうところのものとも、現在のところは年代的にもかなりの差があります。

年代の議論をとばしたうえで結論的なことも申し上げられないわけですが、一つのストーリーとして、後北式の土器が北海道を中心に発見されたにもかかわらず、岩面刻画のある遺跡がフゴッペ洞窟と手宮洞窟に限られている。これを考えると外来的な要素、しかも北方的な流れの要素を考えていきますと、紀元2世紀前後、今から約1900年前にフゴッペ洞窟、手宮洞窟に岩面刻画の伝統をもつ、タガール=オールドス=スキタイ文化の複合と呼んでいる人々の流れが積丹半島に到達し、最初はベッキングでフゴッペ洞窟、手宮洞窟の作品を作り上げました。そして、フゴッペ洞窟ではより柔らかい岩質に応じたアブレイジョンというきわめて斬新でシャープなテクニックを、ある意味でオリジナルに作り出して完成させ、フゴッペ洞窟を特徴づけるような、きわめてシャープな形態が残されています。それが幸いに、洞窟中に埋まり発見されるまで大気に触れることなく、制作時のシャープな味わいが、そのまま残されて、ようやく我々の前にもう一度現れたと考えるべきだと思います。

<質問>

フゴッペ洞窟にいた人々は舟を作る技術はもっていましたが、壁画には幼稚性が見られますが脳の進化について教えてください。

フゴッペ洞窟だけではなく、岩面刻画または先史美術に対して皆さんが、何か幼稚で技術が単純ではないかと初期段階にある美術として先史美術を受け止めるのは一般的な考えだと思います。しかし、先史美術を専門に研究するものとしては、全くそのように思っておりません。それは社会というものが想定され、社会が必要とする形を、その時、手にできた最高の技術で作上げたものが先史美術だと思っております。それぞれの時代・地域の人々が、その時代と地域に相応しい技術と表現方法をもって作っていたと理解しています。芸術感の違いという非常に大きな問題がありますので、なかなか納得いけるようにお話はできませんが、先史美術を専門に研究するものとしては、そういうことを考えております。全く美術に時代・地域によって優劣というものではなく、それぞれの時代・地域に相応しい形を残したんだと考えております。

民族学からみたフゴッペ洞窟 —ツングース系諸民族の図像表現とその機能—

佐々木 史郎
(国立民族学博物館助教授)

今日お話しされる講師の中で、私だけがフゴッペ洞窟に関しては全くの素人です。フゴッペ洞窟を見学したことも2回しかありません。考古学に関しても美学的な事に関しても全くの素人ですので、技法や年代に関しては全くわかりません。

フゴッペ洞窟に描かれている絵の群を見ていると、その場における特殊な雰囲気、数々の踊っている人物、羽を付けた人たちなどを見ていると何とも言えぬ、妖気が漂ってきて、イメージが膨らんでいきます。実際にどういうふうに使われていたかと考えるのも大事ですが、素人として見学する時、非科学的・非学問的と言われるかもしれませんが、やはり、それぞれのイメージを膨らませながら見学されるのがいいのではないかと思います。

「民族学から見たフゴッペ洞窟」ということを講演して欲しいと依頼され、私自身、文化人類学を厳密な科学と考えている者としては、非常にやりにくい話です。私が研究しているのは、文化人類学の現在を研究する学問なので、せいぜいできて100年前、文献を使っても200年から300年前の事実を掘り起こしてくれるのが精一杯です。

フゴッペ洞窟の年代に関しては、色々総合討論で議論があるかと思いますが、紀元前1世紀、2世紀、3世紀というのは、今から2000年近く前の作品ですので、その人達の生活を今から再現する事は、ほぼ文化人類学的な観点から見ると絶望的です。今までは、例えば100年くらい前に、ヨーロッパを中心にして流行した進化主義という考え方では、簡単に説明できますが、世の中に残されている進化の遅れた諸民族、つまり未開民族と呼ばれる人たちの技術レベル・知能レベルは、ヨーロッパ人の石器時代の人々と同じであると勝手に結びつけ、ヨーロッパの石器時代を現在の未開民族を調査すればいいということで、さかんに未開民族（我々は未開という言葉に『』をつけて使っています。）その人達の生活や文化を研究して、そこから自分たちの1万年、2万年前の生活を再現しようとしてきました。しかし、そういう研究は、今から80年前に覆されてしまいました。例えヨーロッパ人が原始未開だと言ってる狩猟採集を行っている人々も、やはりヨーロッパ人と同じ年月を過ごしているわけで、2000年前の状況を現在に求めるのは全く不可能であるということに、研究者が気づかざるを得なくなっています。ですから、私が今日お話しする話も、直接フゴッペ洞窟の時代を生きた人々と結びつけて考えられては困ります。ですが、一応同じ人間、ホモ・サピエンスです。今から10万年前、5万年前に現れた新人ホモ・サピエンスです。小川勝先生が紹介されたアルタミラやラスコーも我々も、それなりに共鳴するものを得ることが出来るわけです。人間としての共通性という広い観点から、フゴッペ洞窟の絵画を描いた人たちの絵画を見て、共感を覚えた人達にとって、どういう機能を果たしていたのかということ、現在の民族例から考えてみたいと思います。つまり、一つの考えるヒント、見学される人にとってはイメージを膨らませていくためのヒントと

いうものを提供するものだと思って聞いていただければ幸いです。

私が専門的に研究・調査している地域は、ロシアのシベリアです。シベリアから極東部といわれているところです。沿海州からアムール川流域にかけての地域が、私の専門とするところ。そこに住んでいる人たちは、今ほとんど 95 %以上がロシア系もしくは、ヨーロッパ系の移民の子孫です。ですが、1860 年に沿海州のアムール地域が完全にロシア帝国の領土になるまで、そこに住みついていたのは、ツングース系と呼ばれている言語を話す人々、それと樺太とアムール川の河口付近、昔はギリアーク、今はニブフ、ニブヒと言っていますが、ちょっと言語系統のわからない言葉話す人々が暮らしていました。総人口はなかなかわかりませんが、18 世紀半ばの中国の文献から類推すると総人口は 2 万人～3 万人くらいの人々がアムール川から沿海州の地域にかけて居たと推定することが出来ます。この数字は、非常にあやふやですが・・・。

現在 1989 年段階の統計調査ですと、アムール川の先住民は、あの地域の人口構成のわずか 3 %程度しかありません。最も大きな移民民族であるナーナイという移民民族でも人口 1 万 2 千人、ウリチは 5 千人くらい、ニブフも 5 千人くらい、ウダが 2 千人程度で、ネギダールという民族は 700 人くらいしかいないという。しかも、これは戸籍に登録している人の数で、実際 1860 年まで固有の言語として使われていたナーナイ語、ウリチ語といったツングース系の言語、それからニブヒ語と言われている特殊な言語を話せる事が出来る人たちは総人口 25 %～30 %程度、つまり 1/3～1/4 程度の人しか話せません。言語によっては、ネギダール語、樺太にいるウィルタ語。ウィルタ語は、アイヌ語と同じようにほとんど絶滅に瀕していて、誰も話せなくなっている状況で、ほとんどがロシア語化されています。

今日の話は、アムール川の人達を中心とした図像の使い方、つまりフゴッペ洞窟も一つの図像表現であると考えて、お話をしていきたいと思います。シベリアからロシア極東にかけて暮らしてきた先住民の人たちの図像表現は、基本的に二つのやり方があり、一つは丸堀にしてしまう、つまり一木から木を彫刻して立体的な偶像を作ってしまう場合と平面的な素材その中には岩壁が含まれるわけです。今、よく使われているのは紙なんです、紙が普及する以前は、例えば白樺の樹皮も平面的な図像を描く素材になります。それから魚皮をとって、大きな平面を作って絵を描く素材になります。毛皮の裏側も絵を描く素材に使われます。こういったものを題材にしてそこに絵を描いて図像を表現するということが行われてきました。この図像表現も基本的に大きく二つのものを表す分類が出来ます。つまり、絵として描かれるものは何を意味するかということで、一つはフゴッペ洞窟の絵の解釈でも使われるように、一種の自然的な意味を表す宗教的な意味であり信仰を表すもの。具体的に言うと、精霊像(Spirits)神様の姿を表す、もしくは神様と交信することが出来るシャマンという宗教的な職能者たちです。その姿を表すものとして描かれている絵があります。もう一つは世俗的な自分の普段の生活を表す。ただし、今の芸術絵画のように象徴的に表すのではなく、文字のようにもっと直截的に「私は今、こういうことをやっています。」ということを表現するために描かれる絵もあります。その二つの観点からフゴッペ洞窟を皆さんに想像してもらいたいと思い 2 種類の絵画表現の例を紹介していきたいです。

これは、シベリアのど真ん中に住む、エベンキというトナカイ飼育狩猟民の描く一つの

絵画表現です。これは、ツングース語で「ナム」と呼ばれるんですが、エベンキはそれぞれが氏族に分かれています。各氏族には、それぞれ自分のトナカイの放牧地や狩りを行う土地を持っています。厳密に境界が分かれているのではなく、他の氏族の者が使ってはいけないという決まりがあったわけではないんですが、一応この辺は自分たちのオリジナルな土地だという事を主張する場所があります。その中に聖なる場所「聖地」といものもあり、元来この「ナム」というのは聖地に描かれる自分たちの土地の絵だったそうです。これは布に描かれているもので、何を意味しているのかというと、左に丸く輝いているのが太陽、右に三日月がありますが、これは一日の姿が東から太陽が昇り沈んでいくという世界全体を表すと考えられています。

周りにたくさんトナカイがいますが、エベンキがトナカイの繁殖を自分たちの一族の守護霊に祈願するという意味を持って描かれています。ここにいる人物が守護霊です。エベンキ語ではセベキと言います。杖を持った人物がトナカイの群れの所有者、この人が順をかけています。この人が自分の守護霊の後をついて進んでいくと、そうするとトナカイが増えていくということを表現したものです。これは現在、布に描かれています。ロシアの研究者の説だと、本来は聖地の岩壁に描かれていたというふうに言われています。これも同じエベンキの「ナム」の一種です。

こちらはトナカイ飼育の「ナム」ではなくて、狩猟テリトリーに描かれていた「ナム」です。これも布に描かれています。本来は岩壁に描かれていたものです。氏族の所有印である「タムガー」と呼ばれる家畜の所印員として使われる印なんですが、様々な動物、熊、白鳥、トナカイ、ガチョウなどが描かれています。太陽・月・上に並んでいるのが星で、ここに立っている人物がセベキと呼ばれる守護霊です。これも守護霊にたくさんの獲物が自分たちの土地から捕れますように、ということを祈願するために描かれるものだとされています。

これはシベリアのど真ん中に住む、エベンキと呼ばれるグループの画像です。つぎに、私が主に調査してきたアムール川のナーナイと呼ばれる人たちについてお話しします。ナーナイという人々は、基本的には中国文明の大きな影響があり、中国との関係は我々日本人と兄弟にあたるような人々です。現在は、ロシア帝国の支配下に入って140年ほどたっているのに、言語も言葉も完全にロシア化され、言葉や考え方もほとんどロシアに同化されています。彼らの中にはこういった世界が一部の人々の間に生きています。

これは一般的に「ニオ」と呼ばれているもので、ナーナイの人々が崇拝している自分たちの祖先の像ですが、皆さんもはっきりわかるように非常に中国的な姿で描かれています。

これは特殊な画像で、「オニンカ」と呼ばれる氏族のシャマンが自分の守護霊として精霊達を描いたものですが、なぜか「オニンカ」氏族の祖先霊は、一番下の3人で、上の6人は他の氏族の祖先霊だそうです。他の氏族の祖先霊の方が強力な場合は、そちらの方にもシャマンがいろんな儀礼を行うときの手助けを頼めるというので、こういうものを書いて画像を自分の祭司場に飾って儀礼を行うそうです。

これは祭司場の姿としては、あまりよくないのですが、写真としてはシャマンの衣装を写したのですが、背後に先ほどの守護霊が描かれて自分の儀礼の場に掲げて、ここで太鼓を叩きながらトランス状態に陥って、祖先の霊と交信するということを行います。衣装にも守護霊が描かれています。守護霊や補助霊を身につけて腰に金具をつけて儀礼を行

います。こういった非常に中国由来の図像とともに、ナーナイのシャマニズムには独特の世界観を描いた画像もあります。

これはミルカンとか、「ギルキ」と呼ばれている画像ですが、これも白い布か魚皮に描かれるものです。これはイヤンロパーチンという 20 世紀の初めに活躍したナーナイを研究したロシア人の研究家の絵です。ギルキというのは、本来この精霊群を表しています。これは狩猟をつかさどる精霊群で彼らにお願いすると、熊、鹿等の獲物をたくさん持ってきてくれます。ギルキにお願いして狩りが成功した場合、こういった「ビルカギルキ」と呼ばれる絵を作り、もしくはシャマニに作ってもらい、この前にたくさん供物を置いて「ギルキ」達に御礼をする、そのために使われる画像だそうです。足のはえた魚の化け物だとか、宇宙人だとかに思えますが、また双子の精霊であるとか、門の中に中国風の衣装をきた精霊達がいますが、これが一番偉い精霊かもしれません。こういった人の精霊であるとか、馬などが精霊として信じられていて、こういった社会の中にいる人達に狩りの成功を依頼して御礼を言う、そういった時に使われる画像です。今までの儀礼は 1970 年代まで実際にナーナイの間で行われていたそうです。シャマニが使う本来の図像だったそうです。

これは明らかに中国のもので、いろんな絵があり、これは女性の三位一体の図です。一般的なものは中国の道教の神々を表した図像で、一番真ん中に玉皇上帝がいて官邸など道教の神様が自分の神様が 2 列に表されて、一番下に虎と狼の図像がくるのが、それが神様として一番一般的なものです。ナーナイの人たちが、自分たちの神々である「セベン」という独自の古い神々がいるんですが、それでも病気が治らない場合、こういった道教由来の神様に頼むと、日本でいうと、仏教がダメなら神道で、神道がダメならキリスト教で、キリスト教がダメならイスラム教でと、乗り換えるようにいろんな宗教を彼らはいっぺんに信仰していたわけです。そういった形の一つの画像です。

それが 20 世紀はじめに、こういった画像が使われていたのが、1950 年代くらいから神様が名前を変えたのです。我々は三信・悟道などと読めてしましますが、ナーナイの人には漢字は全くの絵画で、あり記号です。何を書いているのかわからない、でも神様が変わりに名前を書いた「ありがたいもの」であると、全く同じ効力を持つ画像として信仰します。

これは私の写真ではありませんが、私も実際フィールドワークに行くと、こういうものもたくさん見えています。実際、こういうものを使っているシャマニのお婆さんは、こんな神聖なものを家の中に入れてはいけないと言うので、家の外に特別な安置する場所を置き、そこに字を描いた布を大切にしまっておくと、そしてシャマニの儀礼を行う時に、それを持ってきて(家の中に持ってきてはいけない。)、画像を使う儀礼の時には家の外で行うと言っていました。

お婆さんに「これは何が描いているのですか？」と聞くと「1 個、1 個、何が描いていられるかわからないが、非常にありがたいものだ」といいます。「どうやって描いたんですか？」と聞くと「私が描いたのではなく、ハバロフスクに住んでいる中国系の人に描いてもらった」と、私が見たものは、おもしろいことに左の端に年号が書いてありました。その年号を見てみると、民国 65 年と書いていました。民国というのは中華民国の民国です。つまり台湾の年号で書いてありました。それを計算してみると民国元年が 1911 年ですので、それに 65 を足すと 1976 年ソ連まっさかりの時代です。そんな時代にナーナイのシャマニ

のお婆さんたちは、ハバロフスクでこういうものを頼んで中国人に描いてもらって、これを聖霊達を表す非常にありがたい画像であるとして大切に使っていたようです。

世界観として一つの信仰の対象として、画像を使うということはいくも行われています。フゴッペ洞窟も、あそこに描かれている翼の生えた人間であるとか、角が生えている人物とか、翼の位置が高いのか、その判断に苦しみますが、頭に角が生えたような人物であるとかというように、我々が考える限りにはどう見ても通常の世界に存在しないような姿のものが描かれているところを見ると、どちらかといえばこの世界観に近いような絵画だったのではないかというふうに想像できるわけです。

ただ、フゴッペ洞窟の文字説もあったように、画像は自然的なものを描くだけではなくて、人間同士のコミュニケーションにも画像というのを使います。実はシベリアの先住民達は自分たちの独自の文字というのを持っていなかったんですが、直接面と向かってコミュニケーションが取れない場合、間接的に離れた相手にメッセージを伝えたい、離れた相手からメッセージを受け取りたいという時に、我々が手紙を書くように画像を使っていました。これはエベンキの人たちが使っていた画像用の記号の一種です。

これはトゥゴルトフというソ連の民族学者が調査したときに集めた資料です。1969年に書かれた本からとってきたんですが、これは1981年に名古屋市立大学の斉藤先生が翻訳していて、81年に「トナカイに乗った狩人達」という題名で刀水書房というところから出版されています。一番上は、数字です。明らかにロシア人との接触以降に使われるようになったと思うんですが、ローマ数字の1みたいなものが1で、ローマ数字の10みたいなX印が10を表すそうなので、明らかにヨーロッパ人の影響です。

この波形は、トナカイの群を率いて移動している最中ということを表すそうです。人の中に人がいる、これはお腹に赤ちゃんをもった女性を表しています。これはナイフですが、ナイフの刃の部分を上を向いているマークは、生活が苦しいということ言っているそうです。下を向いている場合は、まずまずの生活をしているということだそうです。これもロシア人との接触以降の記号だと思われそうですが、上に十字架がついていて、これは墓地を表しているそうです。十字架が真ん中にあると中年の人のお墓、左側にあると年をとって死んだ人のお墓、右側にあると子供のうちに亡くなった人のお墓と意味するそうです。

こういったものは山です。一番下は見づらんですが、2本線は川を表すというように彼らは説明しています。この川のマークは広く民族を越えて使われていたようです。エベンキの例で具体的にこういった記号はどういうふうに使われているか確認することはできませんでした。

民族は、違いますが非常におもしろいはっきりしたメッセージ制をもった図像の例を上げてみます。これはツングース系の人々とは全く違って、ユカギールと呼ばれるロシアの北のはずれの方にあるサハ共和国という大きな共和国があります。サハ共和国は昔はヤクト自治共和国と呼ばれ、ヤクト民族の大きな組織です。共和国と名乗っていますがただの地方自治体です。その東のはずれの方に、コリマガーという川が流れてまして、コリマガーの上流域は世界で最も寒い北半球で最も寒い地域です。コリマガーの中流域にいる人々ですが、ユカギールと呼ばれていて、現在総人口1000人前後です。そのうちのほとんどが、コリマガーの下流のツンドラ地帯に住んでいるトナカイ飼育民で、これからお見せする絵は、ツンドラのトナカイ飼育民の方ではなくて、上流の方の狩猟民のユカギールが

使っていた絵記号です。現在、そこには、数百名のユカギールしか残っていません。その中でもユカギール語を話せる人はわずか一桁台になっていますので、ユカギール語の死滅も時間の問題という状況になっています。

これは百年以上も前に有名なワルデマール・ヨヘリソンという民俗学者が、政治犯として逮捕されシベリアに流罪になって流されました。その流された先がコリマガーの流域でした。そういった機会を利用して、ユカギールたちと長い間暮らし、その中からユカギールの生活を苦勞しながら書き留め、後にはソ連民族学の開祖となるぐらいの学者になりました。彼はアメリカの財団の援助を受けて、再びコリマガーを調査し、その結果を以前の自分の流罪時代のデータと一緒にして、大きな民族史を書き上げます。「ユカギールとユカギール化したツングース達」という厚さ 5cm もあるような巨大な民族史を書きました。その中に紹介されているユカギールの絵地図です。ヨヘリソンは“LETTER”と書いてありますが一種の手紙です。この絵は、自分たちの活動状況を表しています。2本の線で書かれているのは、川です。こちらがコリマガーで、これがコリマガーの支流です。線が人々の行動の道順を表しているそうです。扇の骨を伏せたような形これは、テントです。円錐形のテントを表しています。これがボート、小型のカヌーを表しています。ボート一艘につき家族と書いています。テント3つで、2つの家族でかなり大人数なのでしょう。ボート二艘とカヌー四艘を使って移動して、この地域に住みついたこと、ここから二家族が分かれて、支流の方に入り込んでここに住んでいる。これは夏は自分たちの位置を遅れた仲間に伝えようとしていたそうです。ヨヘリソンの説明だと彼らがこの川沿いを旅をしているときに、自分の案内人が木の幹に、こういう絵が刻みつけられているのを発見したようです。それを見て案内人は「彼らは今こういう状況にいるよ。」だからここにに行けば人に会えるということを、ヨヘリソンに教えてくれたといえます。つまり、離れた相手に自分の意志を伝えるための絵画だったわけです。この二つの絵画もそうですが、より具体的に自分たちが、今何をしているということを表したものです。

上の絵の場合は、犬櫓で狩りに出かける風景、冬のキャンプでこちらは冬の臨時のキャンプのようです。櫓やスキーがあり、二人の狩人が犬櫓を使って狩りに出かける。櫓の上に子供が乗っていますが、この子供は狩人の世話をする子供達のようなようです。下の絵は狩りの絵をもっと具体的に表したもので、野生のトナカイを狩りに出かけた状況を示し、時間的には下から上に向かって推移していくようです。狩りの準備をし、始めて野生トナカイの群を追いす。次の段階で、一人の狩人が銃でトナカイ2頭をねらって1頭に当たったという絵です。上の場面はキャンプ地に戻ってきてゆっくりしているところで、一人は木の上に止まっている鳥を拳ちに忍び寄っている姿なんだそうです。これを見ると3人が何をしているところか他の人たちにわかるというわけです。こういうものを、木の幹や白樺の樹皮に刻みつけて置かれていたということです。どの動物も一見具体的に描いているように見ながら、それぞれ全く抽象化、記号化されています。トナカイも全部同じ姿で描かれていますし、人間も同じ姿で描かれています。写実的な絵画というより完全に記号化されたものです。だからこそ、手紙として通用するということです。

これは、夏の漁労風景を表したものだそうです。これも共通の記号で表されているので、見た人間は誰が何処で漁をしているか、何処でボートに乗って旅をしているか一目で見てわかるというわけです。今我々が何をしているのかということ表現したものです。

これは川です。川の上における氷上漁です。これは雷鳥をとるための罠、リス撃ち、ウサギを仕掛け罠で撃ち止めようとする場面です。これは、キャンプ地です。キャンプ地の周りに鳥の畏がしかけられています。ヨヘリソンによると、メッセージ制の強い絵画は二つの機能があって、空間的に離れた相手に自分の意志を伝えようという目的が一つ、もう一つは子供達や若い人達に、自分たちの技術がどんなものであるか、技術伝承のための手段であり、狩りや漁労の技術を教えるための手段として使われると彼は言っています。

よく地図が描かれますが、地図も重要な教育手段で、川の水系を絵に描くことによって、子供達に自分たちの世界がどういふ山からできているのか、地理的感覚を身につけさせる為の一つの手段として、こういった図像が使われるそうです。ユカギールにはもう一つ非常に奇妙な図像があります。これもメッセージ制の強い図像で彼らの世界観を表しているのではなくて、ある種特定の内容を示します。

これは女の子達のラブレターです。傘を折り畳んだような形が人間を表します。2本の線が足で閉じた傘のように見える2つの線が手を表しているそうです。男女の違いもあり、見分け方は点線があります。これが女の子を象徴する三つ編みのおさげを表しています。上の線のつながりが二人の愛情の強さを表現するそうです。人物を取り囲んでいる線は家を示すそうです。中心に描かれている人間は男の人なのですが、彼が家を出ようとしているということを表しているそうです。周りではカップルが出来てきて、カップルは出来てはいるんですが、実は女の子たちはこの男の子に気があるということを表しているそうです。この場合は、こっちの女の人が、そろそろこっちの男の人と結婚しようかな、ということを表しているそうです。

これはロシア女性を表しているそうです。あとはユカギールの女性で主人公はこの女性らしいです。この女性はこっちの細い線で描かれた男性と本当は結ばれたいと思っていて、ところがこの男性はロシア人女性の方に気を取られて子供も出来そうだといいています。こっちに一人男の人がいますが、彼はこの女の子に気がある。ところが完全な片思いで、この女の子にとってはこっちの男の子とくっつきたいのに向こうはロシア人女性と一緒にあって子供も出来そうな状況になっているという状況です。私自身はこんないやな男に言い寄られて困っているということを表すそうです。

このようにシベリアの狩猟採集民は、多くの文献に未開な狩猟民と紹介されてきましたが、彼らの描く図像表現は完全に記号化していて決して稚拙な絵画ではありません。それぞれの記号が意味するもの、それはそれぞれの間で共有されてなければいけない、ラブレターの場合は一般に公開するために描くものではありませんが、例えば白樺の樹皮に描いて後から来る人たちに知らせるためのメッセージ性の強い絵の場合、かなり広い範囲の人たちが記号の意味を共有していないと使えないわけです。ツングースやエベンキの例にしても、ユカギール、ナーナイにしても、それぞれの記号が何を意味しているのか、意味を共有していたので、お互いに意志を伝え合うことが出来たわけです。

そういうことを考えながらフゴッベ洞窟を見た場合、図像で描かれたということは、洞窟の中に入った人の目には触れるわけです。描いた人間だけがわかる秘密の絵と解釈するのは不自然であり、例えばフゴッベ洞窟の絵を描いた人全員が、あれを見ることができたり、見てわかったりすることが無いにしても複数人間があれを理解しあわない限りあれを描く意味はないわけです。フゴッベ洞窟の絵を描いた人たちの間では、羽の生えた人間の

姿、踊っている人間の姿それぞれに意味を持ったものとして理解し合って、あのメッセージを確実に受け止めることが出来たのではないかと考えられます。どういう人たちが、それを受け止めていたのか知るには、フゴッベ洞窟から出てくる遺物から探るしかない。

私が今、紹介したのは、図像によっていくらでもメッセージを送ることが出来るという例を上げたつもりです。先ほど質問の中で人間の知性の発達に関する問題が出てきましたが、こういった絵画は技術的に劣っているのではなく、逆に記号化、抽象化が進んでいると見た方が無難ではないかと考えています。図像や絵画といったものはどのくらい文字に近いかということと言いますと、的確にメッセージを伝えるということに関しては文字に匹敵する機能をもっていますが、文字と全く違うのは音が対応していません。文字の場合、基本的には音と対応するはずですが、ところが図像は音とは対応していません。その典型的な例は、ユカギールの女の子のラブレターです。

日本の言語学者がよく、ユカギールに行って調査しているそうです。その人から話を聞きましたら、このラブレターは今でも女の子達の間で使われているそうです。学校の授業の一環として、ユカギールの伝統文化として教えられているそうです。ただし、これを書いている女の子達は、ユカギール語は全く話せないそうです。ロシア語だけの世界です。しかし、ロシア語でもって、この絵を説明しながら描いている。つまり、言語と図像とが結びついていない。結びついていないのは意味の方であって、言葉の単語とか文法とか語彙ではないそうです。そういった意味でこれは、文字ではないんです。ですが文字を持たない人が時間的、空間的に離れた人にメッセージを送りたい、というときに図像が使われる。そういった事例を参考にしながら、もう一度フゴッベ洞窟に入って絵と対面されると、非常に豊かなイメージが膨らんでくるのではないかと思います。

<質問>

- 1 ツングースという言葉が文献などで拝見していますが、どのような民族がツングースなのか、またその由来について。
- 2 文字ではないということですが、意志を伝達するために刻画したと私は思います。そのことについてお願いします。

ツングースという言葉はよく聞くとと思いますが、これは厳密的には言語学的な言葉でツングース系の言語の塊があり、その中にはエベンキ語・エベン語・ナーナイ語・ウリチ語・ウデヘ語・オロチ語・ネギダール語・ウィルタ語・満州語・シボ語が含まれています。大きな特徴があり、一定の語彙が共通しています。文法が日本語と同じように助詞を使います。これを膠着語と言います。お互いに近接しあっています。池上次郎先生は4つぐらいのグループに分け、ナーナイ語は満州語に近いのですが、アムール・ツングース語として独自の言語としています。歴史的に見て明らかにツングース語の仲間に入れることが出来るのは女真語までです。何故かという文字資料が残っていて、文字資料を解析すると、語彙の面でも、文法の面でも、ツングース語に近い。現在の満州語の祖語の一つだろうと言われています。靺鞨等ですが、これは蓋然性です。つまり女真が靺鞨の後裔であろうと、子孫であろうと、考えると靺鞨はおそらく言語的に女真語に近い女真語の祖語になるよう

なものを話していたんだろうということ。ツングース語に近いものだろうということ、古い地名や、高句麗、靺鞨等の人名から判断して、高句麗くらいまではツングース系の言葉に近いツングース系の祖語になるような言葉ではないかと推定されています。靺鞨と高句麗は推定であって、言語資料がないので確定出来ません。

ツングースとパレオアジア・小アジアという二つの文化の対立を耳にすることもありますが、これは非常に荒っぽい議論で、ツングース系の言語を持つ人でもエベンキからアムール、ツングースから満州に至るまで非常に広い範囲にいろんな人たちがいるわけです。ですからこれは言語的な共通性であって文化的な共通性は全く保証できない。それぞれ影響し合っていて、例えば私がナーナイという民族を見ていると、中国や満州の影響は非常に強いですが、信仰や狩りの方法の中にエベンキと通じるものがありました。そういう形で、共通性がお互いに個別に見られますが、一つのツングース文化というのは大きな共通文化というものを指定するのは困難だと思います。

パレオアジアに至っては、もっと無責任な分類で、これはパレオアジア=その他諸々という意味です。今から150年前にレオポルト・ボン・シレンクというアムールの専門家が、今まで言語学の支流であったウラルアルタイに対してウラルアルタイ系の言語に入らない、言語を十把一絡げして、おそらくウラルアルタイよりも前にシベリアにいた人だろうという推定の元にパレオアジア（古いアジア人）と命名を付けたと思います。そこに入っているのは、いろんなグループの人が入っていて、ましてやパレオアジア文化というのは存在しません。ギリヤークの文化は独特のアムールの文化で非常にツングース系、つまりアムールツングースとの共通性もあり、中国の強い影響下にもありました。また、満州の影響も受けていますし、独特の樺太アムールの生態系によく適応したものもあります。非常に複雑な文化を持っています。同じパレオアジアだからといってチクチ、コリヤークと同一に扱うのは厳密性にかける議論になっています。

それから、もう一つの文字性の問題ですが、私も文字の定義というのは言語学者ではないのではっきり調べてきたわけではないのですが、音との対応関係は文字にとって非常に大事だと思います。例え一対一に対応しなくても、ある一定の範囲の音と一つの文字が対応するという関係は非常に大事なものだと思います。先ほどのユカギールのラブレターも、言語はなくなっても意味だけは残っています。つまり意味だけを共通に受け継ぐ事が出来るということは、やはりこれは文字ではなく文法構造を全く表していません。ですのであれは、絵文字と言ってしまうえばそれまでですが、記号のたぐい、つまり絵のたぐいではないかと思われま。手宮洞窟やフゴッペ洞窟の場合、音とどのように対応しているか今から復元するのは不可能です。甲骨文字の場合は連続と金石文字から受け継がれており、今から2000年以上も前に甲骨文字と漢字を書く時代との対応関係は出来ています。そういう文字の場合は明らかに文字の祖先であって、この文字とこの文字は絶対対応するとわかっていますので、おそらく音とも対応していたんだろうと、文字だと断定出来ますが、手宮洞窟やフゴッペ洞窟の場合、間を繋ぐものがありません。各要素の分析をきちんと行い、形を区分し、どういう配列で並べられているのか、コンピュータを使って図像の専門家に解析していただかなければいけない問題だと思います。このような分析を行ったうえで、一定の文法構造を表すように並んでいるのかを確認して始めてアレが文字であるか確認できるのではないかと思います。別に絵だからアレは文字ではないということにはなりません。

ん。羽根のある人物像が、なんらかの限定された意味をもった文字である可能性もゼロではありません。ゼロではありませんが、いわゆる未開読文字を読むような形の手続きを踏んだ上で判断されるのが無難ではないかと思います。非常に優等生的な答えになってしまってみなさんの期待に添えないかもしれませんが、私はそう思います。

フゴッペ洞窟の立地環境と気候

小泉 格

(北海道大学教授)

始めに立地の条件について話します。図1は右代啓視氏からお借りした空中写真です。非常にいい写真だと思います。写真の右側に洞窟があり、河川が運んできた土砂が河口付近の低地にたまっていきます。洞窟の入り口は東の方に向いています。風は西から東に吹いてきます。もちろん沖合の北からも吹いてきます。入り口のところが、吹いてくる風から防げられ、洞窟を利用していた人たちは、環境に適した場所を選択的に選んでこの場所を利用する様になったと考えられます。海の波浪が崖を侵食して、天然に出来た洞窟を後の人が利用しているわけです。いつの時代にどういうメカニズムで、このような海食洞が出来たかということ、研究することが私たちが専門とする仕事です。

日本では非常に詳細な地形図が、国土地理院の仕事としてできています。図2は1/25000の地形図で、5mの等高線より低い部分を青で印しています。この部分は現在の海水面が5m上昇すると、余市湾の海水が陸へ進入してきて海になることを示しています。5mの海水面あるいは海水準上昇ということ、後氷期とよばれる1万年前以降の非常に暖かい時期を通じて3mから4mくらいの海水面が上昇している状況のなかで考えなければなりません。

1万1000年前以降、3回から4回くらい海水面が上昇した時期があります。一番最初に上昇したのは、¹⁴Cの測定年代で6300年前くらいでヒブシサーマルという時期で、気候状態が非常によくなった時期で、たぶん5mくらい海水面が上昇したのではないかと推定されています。その後4000年前であるとか、2500年前であるという時期には5mまでいかないで3mくらいの上昇がありました。

その前は氷期でして、この時期がいつまで遡るかというところと8万年くらい前までです。一つ前の間氷期の時代は8万年から15万年くらい、平均して12万年前と仮しておきます。12万年前は、今と同じ間氷期でしたので先ほどお話しした6300年前の海水面と同じくらい、あるいは酸素同位体比によります氷河量の復元によりますと、6300年前よりも海水面が高かった可能性があります。気温が1万年前以降よりも12万年から15万年前のほうが高く暖かかったという証拠がたくさんあります。

フゴッペ洞窟が波浪によって形成されたとなると、海水面が上昇した温暖期に形成されたわけです。その時期は6300年前に限らないことは後で述べます。皆さんにお配りしている概要や北海道新聞の夕刊には、「最近では」とことわって6300年前云々と書いてあります。午前中に講演された小川先生が、時間がなくて年代に関することをあまりお話になりませんが、小川先生の概要の中に非常に大事なことが書かれています。そのことについては一番最後にお話します。

図3は北海道開拓記念館の人たちがまとめられたものです。先ほどお話ししましたように洞窟の入り口が、東の方を向いていて、西風が入ってこないということはおわかり頂け

るでしょう。さらに入口が、海に面しているので、洞窟を利用した人は、海に関係のある人たちであることがわかります。図3左側の柱状図にみられるように、出土した土器の年代からフゴッベ洞窟を利用した人たちの時代の次はオホーツク文化の時代になりますので、オホーツク文化に先立った人々、あるいはこの文化時代に連続している人たちが利用した可能性があります。

標高が4.6mで基盤高度が0.9mですから、厚さ3.7mの堆積物が積もっているということです。一方、洞窟の方を見ても、幅と長さ洞窟の高さが6mあります。先ほどお話したように、海水面が上昇して波浪によって洞窟が形成されたとすると、今より7mくらい海水面が高くなって欲しい訳です。この海水面高度はヒブシサーマルの時代や、弥生時代の海水面の高さと比べて若干高いわけです。そうすると、この地域が隆起したのかもしれないということ、それからもう一つの選択肢としては、ヒブシサーマル期よりも前の12万年から15万年前の温暖期に、この海食洞が形成された可能性があるということをお話します。

次は年代に関してです。厚さ3.7mの堆積物の間に文化層が何層か入っています。その文化層の中から出土したものの放射性炭素(^{14}C)の年代測定をしています。

炭化したクルミを使った放射性炭素の年代は、文化層からでてきた貝の化石を使った ^{14}C の年代測定より、少し古めの年代値が出ています。結論をいうと、炭化したクルミの年代は、外した方がいいと思います。ここでは、小川先生が使われている表の中から、年代の一番大きい値と小さい値、すなわち $1670 \pm 30 \text{ y}$ と $1410 \pm 40 \text{ y}$ の間を使うことにしましょう。

放射性炭素(^{14}C)の年代測定に関わる原理的なことを簡単にお話します。まず測定した値そのものの測定値があります。次に、補正值($2110 \pm 30 \text{ y}$ 、 $1840 \pm 40 \text{ y}$)は測定値よりも若干古くなっています。補正值を使って暦年(1690y、1357y)に直しますと、少し若くなります。暦年に直すと西暦に換算する事ができ、西暦260年から575年ということになります。

小川先生の概要の中に貝の化石に基づいた測定値と補正值がでており、これが現在のところ一番信頼性の高い年代だと思えます。

炭素の中には3種類の同位体があります。 ^{12}C と ^{13}C は安定同位体、 ^{14}C は放射性同位体です。放射性同位体は非常に不安定です。そのため α 線とか γ 線とか β 線を出して、より安定した元素に変わろうとする性質があります。 ^{14}C は β 線を出して窒素 ^{14}N (^{14}N)に変わっていきます。 ^{14}C の量が半分になる年数のことを半減期といい、ルビーという人が一番最初に使った5568年を慣習的に使っています。できた ^{14}N は宇宙線の中の中性子と衝突して再び ^{14}C と陽子ができます。そうすると、これは閉じた系ですね。ある試料の中に残っている ^{14}C の量を計る事によって、どれくらい元の ^{14}C が崩壊したかということがわかるわけです。新たに生成した ^{14}C は酸素と結びついて CO_2 の形になります。大気の中に含まれている CO_2 の中に ^{14}C はどれくらい含まれているか、ということが ^{14}C の年代測定をしていく上で一つの補正になります。次に大気中の ^{14}C があるサンプル、例えば貝の化石ならば CaCO_3 中に木炭ならばCそのものですが、そのCの中どれくらい固定化されていくかということ(同位体分別)が問題となります。

それからもう一つあります。 CO_2 の量はある特定の植物に多いか少ないか、あるいは地

域によって CO₂ の存在量が違ってきます。ローカルナリザーバー、日本語で地域的な蓄積量と呼んでいます。その二つの違いを考慮して測定年代値を修正していかなければなりません。したがって、測定値は必ず書いておかなければなりません。暦年だけ表示するのではなく、どのような手続きで暦年が出てきたかということを書いておかなければなりません。

最近年代測定の分野では、暦年 (Calendar Year) で表示するという動きが日本でも出てきています。暦年表示の場合、問題になっているのは、これまで話しましたようにいろんな原理的な手続きのことですので、表 1 としてまとめました。

図 4 は、みなさんがご存じの中世の温暖期と寒冷期の気候を示しています。CO₂ の生成量がプラスになっている所は氷期です。Little Ice Age (小氷期) という時代があったのをご存じだと思います。有名な小氷期が 3 回くらいあり、小氷期の時に CO₂ の生成量が高くなっています。別な言い方をすると、温暖期になると CO₂ の生成量が減っています。温暖期は太陽活動が非常に盛んな時期であり、太陽黒点やオーロラが発生します。すなわち、太陽風が吹いてきて、磁力線が地球をブロックするエリアが増え、宇宙線の入射が妨げられるために、¹⁴N から ¹⁴C の生成される量が減少します。このような事が影響して、大気中の ¹⁴C の含有量が変わるので、その補正をしないといふと暦年は出せません。

木の年輪を数えていくと暦年が得られますので、年代のわかった木材の ¹⁴C の含有量を調べていくことができます。このようにして ¹⁴C の測定値、補正した値を使って暦年を作っていくのです。最近の放射性炭素年代測定によって、縄文時代が非常に古くなったとか、土器が非常に古くなったとかいうのは、キャリブレーションが変わったことと、もう一つは測定する精度が上がったということがあります。

私自身は海底にたまった堆積物の中に含まれている、顕微鏡サイズの藻類の微化石を使って昔の海洋がどのような状態だったかという古環境を勉強しています。最初に堆積物の採取の仕方から、研究の仕方まで皆さんに概要だけでも是非知っていただきたいのです。

図 5 にあるのは長さが 8m くらいの水道管みたいなコアラーとよぶパイプです。今は日本でも 20m くらいの長さの海底堆積物を採ることができるようになりました。1950 年から 1960 年にかけて、どれくらい長い海底堆積物を採れるかという、国際レースがありました。それに国の技術力と採ることの意義を理解している文化水準といった総合力がかかっていたわけです。その前の時代には、どれくらい大きい恐竜や哺乳類の化石を掘り出すことが出来るかということが、その国のステータスシンボルだったことがあります。今、フランスでは 50m くらいのコアを採ることができます。原理を簡単にいいますと、注射器で採血するのと同じです。注射器で血を採る場合は中のシリンダーを引っ張ります。そうすると、注射器の中が真空になるので血が入ってきます。中のシリンダーを抜く代わりに外側の筒を堆積物の中に重力で自由落下させ堆積物の表面円盤状のピストンでふたをしてから、堆積物のつまったコアラーを引き抜くという方式です。

私たちは 20m くらい普通に採れるようになりましたが、20m だと短かすぎる場合には、ボーリングした試料を使ったりしています。陸上でボーリングして、地下水とか温泉を当てるのと同じように海の底をボーリングして堆積物を採取する国際プロジェクトが 1968 年から始まっています。日本では文部科学省が世界でも最新のボーリングする船を作り始めました。

図6のコアには、 ^{14}C の測定年代値9300年が得られた火山灰と底生動物の違った跡がみられます。底生動物が違った跡は海底に酸素が供給されていて、底生動物が生息し得たということを示しています。その下では還元的な海底環境となっていて、違い跡がありません。海底が無酸素の還元環境下環境であるというのは、海水の垂直運動がなかったことを示しています。酸素は大気圏から海水中に持ち込まれますので、2000mや3000mの海底へ酸素が供給されるためには、海水が垂直循環していないといけません。このような環境の変遷を堆積物が教えてくれます。

1万年前を境にして最後の氷期から現在の間氷期に移っていくとき、対馬海峡付近では短い間に大量の東シナ海の沿岸水が入ってきて、8000年前からは、対馬暖流が本格的に流入するようになってきます。対馬暖流に生きている *Fragilariopsis doliolus* という珪藻の化石が、堆積物の中にどの位含まれているかを調べて表示してあります。

図6は8000年前から対馬暖流が、日本海に入ってきたことを示しています。日本海は1万年前から8000年前にかけて非常にげく劇的に変わりました。8000年前以降に対馬暖流の流入がどう変わったかということ調べた結果について紹介します。それはフゴッペ洞窟と非常に関係しています。図7の左から右へすなわち南から北へ4本のコアが、示されています。コアに含まれている珪藻化石から求めた夏の表層海水温を横軸にとり、縦軸には堆積物の厚さが取ってあります。堆積物の厚さが何年前であるかは、先ほどの火山灰の ^{14}C の年代や、堆積物の中に含まれている CaCO_3 の殻を持った動物化石の ^{14}C の年代測定から年代値を決めています。図7の右側に年代値を示してあります。南から北に向けて対馬暖流が、短期間に規則的にしかも激しく大量に入ってきた時期が4回あることがわかります。その年数が古い方から6500年、これが先ほど話したヒブシサーマルという時期です。その後4500年、2500年、750年という4回の時期に、どのコアでもピークが見られます。これは大変な出来事です。何故かという、暖かい時期と寒い時期が2000年くらいの期間で交互に循環しているからです。

図8は、日本海側では島根の沖に隠岐堆と呼ぶ海底が少し高まりになっている場所と、太平洋側では小名浜の沖合から採った2本のコアに含まれている暖流系珪藻の頻度を示しています。二つのグラフを見て振幅の違いに気づくと思います。太平洋の方が日本海に比べて海の大きさがずっと大きく開放的ですが、日本海の方は対馬海峡や津軽海峡、宗谷海峡で仕切られた閉鎖海域です。対馬海峡から入り津軽海峡から出ていく対馬暖流の準動が横軸の振幅縦に誇張されています。日本における海況の変遷は共鳴箱のように増幅されているわけです。なお、軸は ^{14}C の測定年代値に換算してあります。

日本海における海況の変遷を分析し、陸上で得られた環境変遷の分析結果と対応させてみると、日本史で勉強するような歴史時代、あるいは縄文や弥生などの先史時代を通じて、海と陸の気候変化が運動している様子をはっきりと見えます。

温暖期のピークとピークの間には寒冷期があります。温暖期よりはむしろ寒冷期の持っている意味の方が大きいようです。フゴッペ洞窟は、古墳寒冷期と呼ばれている著しい寒冷期に相当します。これは、日本近海だけではなく北半球全域に認められるビッグイベントです。この時期に気候が非常に悪化したために民族の大移動が起こっています。同じように、縄文時代の終わりから弥生時代にかけても、中国の南部から朝鮮半島を経て民族の大移動が起きました。

四大文明が崩壊していくのが、4000年から3500年くらい前の「3500年前の気候悪化」と呼ばれる時期です。このようなことが海からの情報としても提示することができるようになりました。

対馬暖流は、大陸からの西風におされて本州の日本海側に押しつけられますので、対馬暖流は非常に狭いベルトでしかありません。北緯40°以北にある大部分の海域は、中間的な水塊であることが現在の海水温や塩分濃度からわかります。私たちは、現在の知識に基づいて、過去の環境を復元しようとしています。

どのような手順で絶対値(海水温)をだすかということをお話しします。図9は現在の夏(8月)における表層海水温を示しています。気象庁の観測船がそれぞれの地点における海水温や塩分濃度を測っています。番号の付いた地点では、海底堆積物の表層部分を厚さ1cmくらい取り、その中に含まれている珪藻の種類と頻度、これを群集組成といいます。それを調べて、表層水との関係を統計的に解析していきます。

珪藻化石群集に基づいて表層堆積物のグループ分け(Qモード因子分析)をすると、90点くらいあった表層堆積物が、4つの環境要素(因子)としてまとめられ、珪藻化石群集の特徴で説明されます。因子の1番は対馬暖流の流入の影響を受けています。黒い丸の直径が強さを示しています(図10)。本州の沖合いで圧倒的に頻度が多くなっています。因子2は朝鮮半島の沖の方にも広がっていますので、これは東シナ海の沿岸水の影響を受けている因子であることがわかります。因子3は、見てすぐわかるように北の方に点があるので、日本海の北方域や日本海のリマン海流と呼ばれている海流の影響を受けていることがわかります。因子4は、日本海の周辺部に散らばっています。陸上からの河川などによる沿岸水の影響を受けています。したがって、因子4は塩分濃度の影響を受けた因子でもあることがわかります。

この4つの因子の関係を表す数式から計算した表層海水温と実測値は非常に強く相関しており、図11に見られるように、特に夏(8月)の表層海水温では相関関係の二乗0.8もあります。

こういう関係式が現在の表層堆積物を分析した結果から導かれますので、過去の堆積物に適用することができるわけです。図7の横軸はこのようにして得た夏(8月)の表層海水温を示しています。

ここで使っているコアの年代は測定年代値ですので、フゴッペ洞窟も測定年代値を使っています。フゴッペ洞窟の堆積物は、横線を引いた間隔の中に収まっています。

奥尻島の南の堆積物では、海水温が前の時代に比べて摂氏3度くらい低くなった一番寒くなった時期、海面が3~4m低下した時期です。フゴッペ洞窟を利用した人たちは、北の方から移ってきた可能性が考えられます。

これまで話したのは、沿岸から離れた沖合の海の環境について8000年くらい前から現在までです。こういった研究は、陸上や海岸でも同じようにして行われています。北海道開拓記念館の赤松さんは貝の研究をされていて、古くから図12の真ん中にありますような貝化石による海岸付近の環境解析をされています。今日は、よくまとめられている紀藤さんたちの結果を使わせてもらいましたが、残念ながらフゴッペ洞窟に相当する2000年前のところ、縄文時代後半から擦文時代にかけての産出が欠けています。

左端は尾瀬ヶ原の泥炭層中の花粉分析を阪口さんが分析した結果です。縄文時代後半

に相当する古墳時代において著しく冷涼化することを「古墳寒冷期」と呼んできました。陸地でも海岸のところでも海の沖合でもフゴッベ洞窟が利用された 2000 年くらい前は、非常に寒い時代で海面が低下していた時代であるということがわかります。そして、先ほどお話したように、古墳寒冷期は、民族移動が非常に激しかった時代です。

右代さんたちがまとめられた積丹半島における岩陰遺跡や洞窟の調査報告では、フゴッベ洞窟で、昭和 46 年に人骨が出土したと書いています。三国でも人骨が出土したと書いてあり、人骨が出たということがたくさんあります。残念ながらこれらの人骨では DNA 分析がなされておりません。是非分析をして欲しいものです。

最後に、フゴッベ洞窟に関わって、いくつかの提言をしたいのですが、1 つ目はフゴッベ洞窟の保存に関してです。見学者には、岩面の様子が非常に見にくいのでレプリカを作って欲しいのです。レプリカを作って、お客さんたちに岩面の刻画がどのようになっていくのか代表的な図形を見やすくする必要がありますのではないかと思います。

2 つ目は町おこしの提案です。オーストラリアのパスでは、先住民アボルジニの洞窟画や紋章のコピーがおみやげ品として売られています。この紋章はフゴッベ洞窟にある刻画とよく似ているものです。岩面にある刻画を商品化して町おこしに使えるのではないかと思います。フゴッベ洞窟は学術的な研究をするための学者の専用物ではないと思います。もちろんそれも大事ですが、こういうものを作って歴史感覚を育成し盛り上げていくのは大事なことだと思います。今のフゴッベ洞窟は非常に見ずばらしい。もっと立派にしなければならぬと思います。

3 つ目はここの運営についてです。5m の水深を入れた地図(図 2)を見ればわかりますように、フゴッベ洞窟とフゴッベ貝塚、西崎山ストーンサークルは3つで1セットになります。ストーンサークルにいたっては、自動車で来る人には便利になっていますが、歩く人にはどこにあるのか見当もつきません。あれはすごく不親切です。今は歩くことがブームになっていますので、散策道を作ってその3点を結ぶような道を作って案内することが必要であると思います。

さらにまた、シンポジウムのテーマが「過去・現在・未来」です。多くの講演者が指摘なさったように、現象論だけではなく、もう一歩踏み込んで、どんな人々がフゴッベ洞窟に関わってきたか、人間の生活の仕方や生き方を語らなければならないということがあります。もう一つは、ストーンサークルから始まりフゴッベ貝塚、フゴッベ洞窟へと連続性をもたせるようなストーリーを組めるような姿勢で取り組んでいかれた方がいいのではないかと思います。

しばらく前から日本では地域研究が非常に盛んになっています。これは地域から地球規模の世界に向けてのメッセージを発信しようということが基底にあります。地域研究は非常に大事ですが、大事にするあまり「井戸の中の蛙大海を知らず」になる可能性があります。そのことは、基調講演で木村先生が「グローバルにフゴッベ洞窟の存在を検討しなければならぬ」と言われました。地域にどっぷりつかるとは、世界の中でのフゴッベ洞窟の位置づけを確かなものにしていく努力が今必要とされているのだらうと思います。

1 昔、余市川は河口まで凍りました。今はほとんど凍らないのは海面が上がって塩

水が相当上流までできているのだらうと学術的に言われています。もう一つは、今のフゴッペの所から 100m くらい沖まで砂地がありました。砂丘のように大きな波を打ち海岸まで行くのに相当距離がありました。今は国道沿いまで波がきています。過去において日本海は温度や水温の変化が頻繁にあったのか教えてください。

私が今お話しした事と少し時間的な分析の精度が違いますが、沖合まで砂地あるいは浅状態が今なくなったのは、一つは海流系が変わっていることがあります。それは流れ込んでいる河川の出口との関係からです。海流系で言うところの沿岸流と言いますが、今は削られる方、削られた分はどこかにまわって行って堆積します。全体としてはバランスが取れていますのでどこかで堆積していて、今ちょうど余市のフゴッペ洞窟のある海岸では削られている現象だと思います。削られているからといって、波浪のためのブロックを置いたりしないようにしないといけません。人工的なコンクリートで囲んでいるようなものは置かないようにするべきだと思います。今の質問は我々の研究精度の桁を上げないとあるいは 100 年前から現在までのところを詳しくやっつけていかないとお話しできません。

2 岩面の細画は前面にある堆積物や、考古学的な出土からは年代は決められないのではないかと・・・

その通りなんです。岩面や洞窟は入れ物です。その入れ物の中に泥がたまっているわけですから、岩面に描かれた絵の時代とその前にたまっていた堆積物とは関連がありません。それはこの間問題になった旧石器の出土の話と同じ事があります。

3 2000 年前前後、海水温が低くなっています。北方の方から民族の移動があったとお話されていましたが、寒冷期を迎えたとき先住民が移動してその後継の民族が入った可能性はありますか？

北方から来たということは、私のもっているデータからは出て来ません。そういう意味では言い過ぎたかもしれません。例えば、本州と北海道を繋ぐ津軽海峡は現在の水深が 140m と非常に深いので、陸続きになったことは最近の歴史ではありません。アイスブリッジ(氷橋)になったことはあると思いますが、それに比べて、北の方の宗谷海峡や間宮海峡は浅いのですぐ陸続きになります。それに、寒くなると北の方の人間は元気がでるので、南下してフゴッペあたりに来たことはあり得るでしょう。

◎放射性炭素測定年代値 (Measured ^{14}C age (y BP)) : 試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から現在 (1950年AD) から何年前 (y BP) かを計算した年代値.

◎補正放射性炭素測定年代値 (Conventional ^{14}C age (y BP)) :

(1) 大気 CO_2 から ^{14}C が試料に固定される際の炭素同位体に関する同位体分別について、試料中の $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 測定値から $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の同位体分別の程度を推定し補正する.

試料の年代値 $t = (T_{1/2}/0.693) \ln [1/(1+\Delta^{14}\text{C}/1000)]$

$$\Delta^{14}\text{C} (\text{‰}) = \delta^{14}\text{C} - 2(\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}} + 25) \times (1 + \delta^{14}\text{C}/1000)$$

$$\delta^{14}\text{C} (\text{‰}) = [(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{試料}} / (^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{標準}} - 1] \times 1000$$

$$\delta^{13}\text{C} (\text{‰}) = [(^{13}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{試料}} / (^{13}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{PDB}}] \times 1000$$

(2) 宇宙線の照射量は極地域と赤道地域では約4倍程度も異なっているので、大気中の CO_2 生成量もそれぞれの地域で異なっていたはずであるし、大気循環や海水循環によってさらに複雑になっている (地域的蓄積量) .

◎暦年代 (Calibrated ^{14}C age (cal BP)) : 過去の宇宙線強度の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動に対する補正 (年代既知の樹木年輪の ^{14}C 測定やサンゴのU-Th年代と ^{14}C 年代の比較により補正曲線を作成すること) によって、暦年代を算出する.

表1 放射性炭素(^{14}C)による年代測定



図 1 余市湾上空からフゴッペ洞窟（右側の崖面）を望む（平成12年7月10日、北海道開拓記念館提供）



図 2 フゴッペ洞窟の周辺地域における地形状況(標高5m以下を青色で塗色、2万5千分の1地形図「余市」国土地理院) -67-

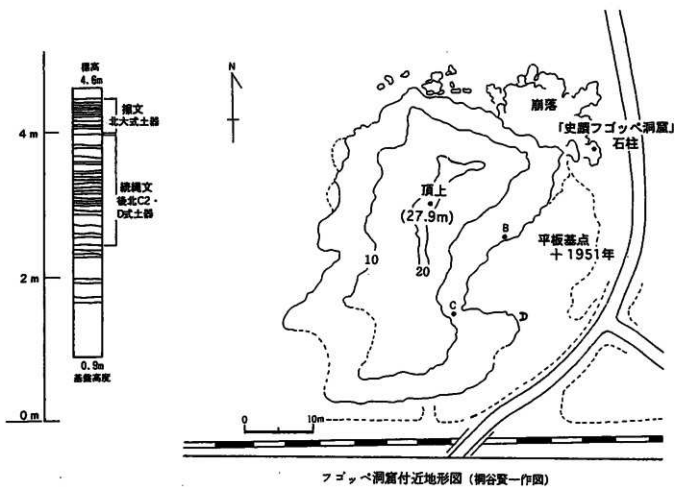


図 3 フゴッペ洞窟付近の地形図とフゴッペ洞窟内堆積物の柱状図

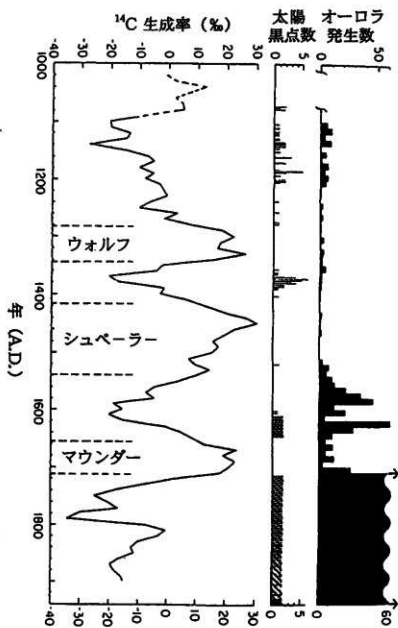
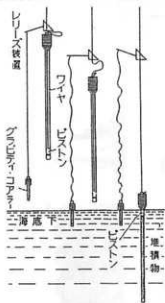
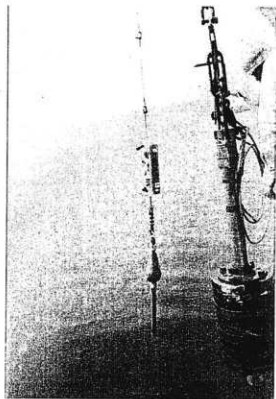


図 4 放射性炭素の木の年輪中への蓄積率から推定された3大極小期とオーロラおよび太陽黒点の観測記録 (Stuiver and Quay, 1980)



トリガーコアラーが着底すると、リリース装置のフックがはずれてピストンコアラーが自由落下する。ピストンは海底面に止まったまま、パイプだけが自重と落下の勢いで堆積物の中に貫入する。ピストンによって生じる陰圧がパイプ内壁と堆積物との間の摩擦力と釣り合ってパイプ内には乱されない堆積物がつまる。抜き取る時には、ピストンはパイプの上端に固定されたフランジで止まって、コアラー全体・堆積物の全重量・引き抜き加重を支える。

図 5 海洋堆積物のピストンコアリング

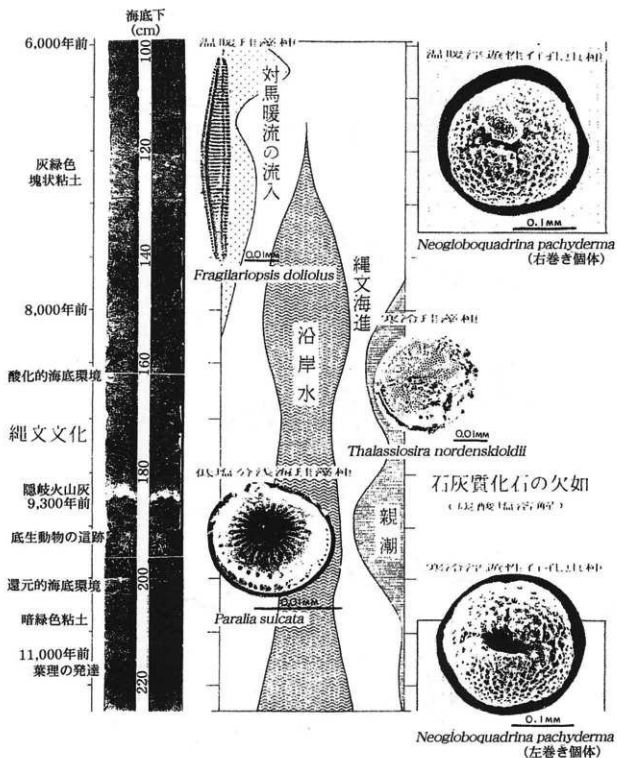


図 6 海洋的の日本文明の誕生期における山陰沖での海洋環境の変動

南 ← 古水温 (°C) → 北

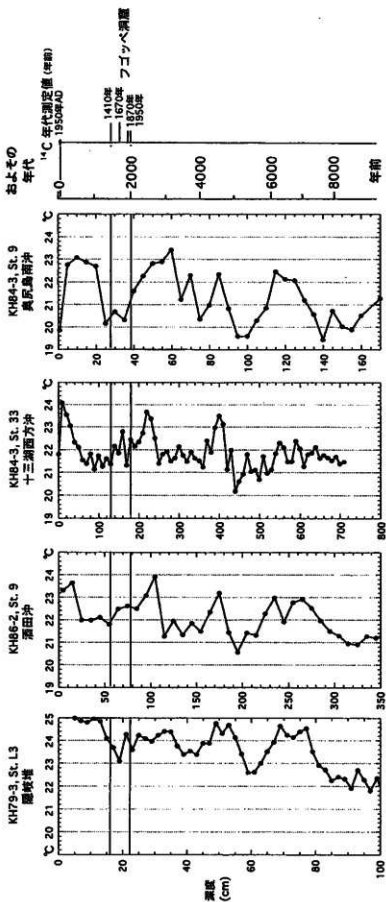


図 7 日本海東縁域の南北から採取した海底堆積物コア中の埋蔵化石群集から復元した過去9000年間に於ける夏期表層海水温の変動

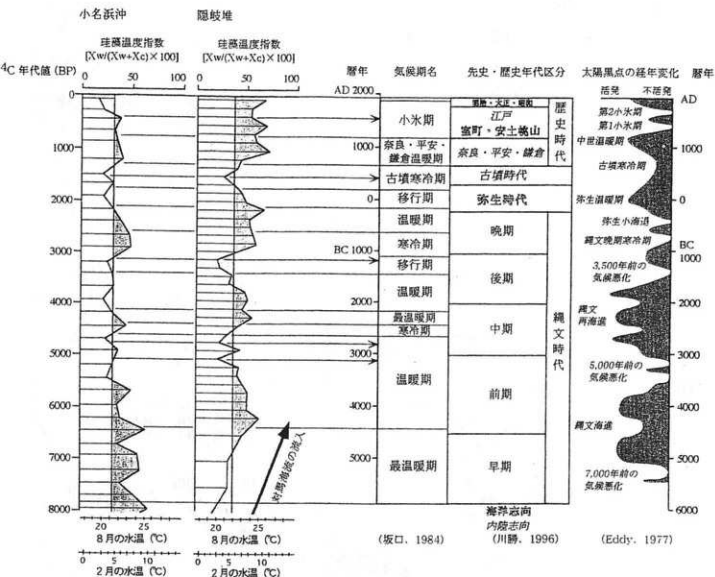
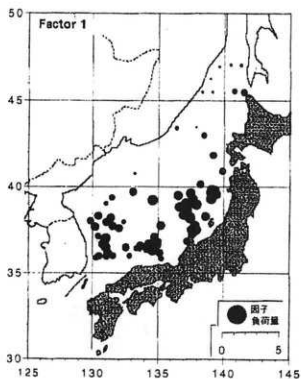
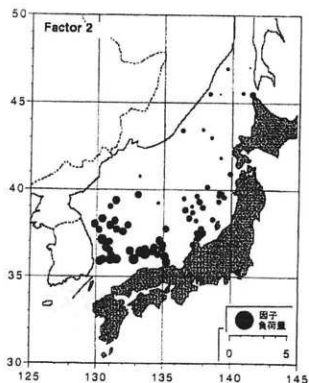


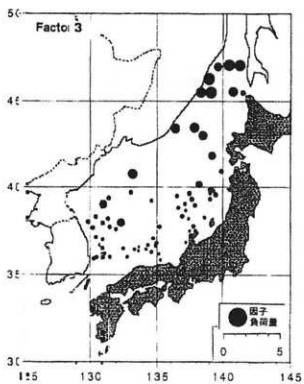
図 8 太平洋小名浜沖と日本海隠岐堆における柱燻温度指数、尾瀬ヶ原における花粉分析による古気候区分(坂口、1982)と木の年輪中に含まれる¹⁴C蓄積量から復元した太陽活動の周期的変動(Eddy、1977)との比較、袋文字の時代は日本人が海洋を指向した時代(川勝、1996)



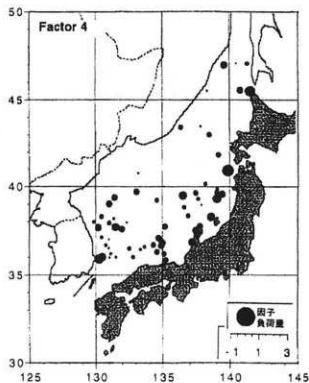
因子1：産出頻度が南東部に多く、
対馬暖流の影響を受けている。



因子2：南西部と南東部に多く、
東シナ海沿岸水の影響を受けている。

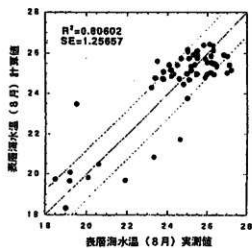


因子3：北部と北西部に多く、
リマン海流の影響を受けている。

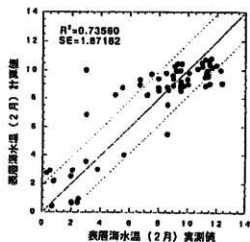


因子4：周辺部に多く、
沿岸水の影響を受けている。

図10 日本海の表層堆積物における珪藻化石の地理的分布に基づく群集型



$$\text{表層海水温(8月)} = 2.60 \times F1 - 8.56 \times F2 + 1.21 \times F3 - 1.80 \times F4 + 25.57$$



$$\text{表層海水温(2月)} = 4.23 \times F1 - 8.72 \times F2 + 3.17 \times F3 - 3.09 \times F4 + 7.77$$

図11 日本海表層堆積物72点中の珪藻化石群集に基づく変換関数法から求めた夏期および冬期の表層海水温および塩分濃度とそれらの観測地との関係図

フゴッペ洞窟の保存と活用

三浦定俊

(東京国立文化財研究所 保存科学部長)

「これからのフゴッペ洞窟をどのように残していくべきなのか」と、ということについてお話ししたいと思います。これまでの先生方のお話しにもあったように、フゴッペ洞窟には数多くの岩面刻画が残されています。岩面刻画をきれいに残す事が一番大事なことです。保存上大変難しい問題があります。

石碑のように単独で置かれている場合は、色々な保存の措置の仕方がありますが、地盤につながっている洞窟の刻画の場合、水などの動きがある中で岩体そのものを保存しなければなりません。フゴッペ洞窟の場合、丸山そのものの保存をどうするか、ということまで広く考えていかないと、なかなか保存の問題は解決できません。

昔、私が関係していたある装飾古墳の問題で言われたことは、「保存を考える人間は、いわば女性の肌の表面のことだけ考えていることになるけれども、人間の「美」を保つためには健康のことまで考えなければいけない」と、いうことでした。まさしくその点がフゴッペ洞窟の保存については大きな問題です。

フゴッペ洞窟の現在の施設ができたのは昭和 47(1972)年です。その頃より前に、1971年に福島県のいわき市にある中田横穴で保存施設がつくられています。多分これが最初の方だと思います。中田横穴の保存施設は横穴の前に小さな部屋を作り、その部屋から小さな覗き窓を通して中を見ろという形なのでゆっくり見学できるという環境ではありません。

その後にはフゴッペ洞窟の保存施設が出来たわけです。フゴッペ洞窟の保存施設は、世界でみても当時、非常に先進的な施設です。その後にはきた奈良県の明日香村の高松塚古墳の施設設計にも大変大きな影響を与えています。高松塚古墳は、保存を考えて作られた施設ですが、フゴッペ洞窟の場合は、公開をよく考えて作っている施設で、その後には作られた虎塚古墳の保存施設にも大きな影響を与えました。フゴッペ洞窟は日本の古墳保存の歴史の中で記念すべき施設であり、世界的にも誇っていいことだと思います。

施設ができたのは昭和 47 年ですが、その前の昭和 43 年から 45 年にかけて東大の先生方を中心に調査を進め、その成果を基にこの施設が作られたわけです。その当時の施設の調査報告書を読んでも、フゴッペ洞窟の保存において一番の問題は、この地が寒冷地であるということ。冬期、温度が下がりますので、岩体に水が含まれているとその水が凍り温度が上がると解けるといふ凍結 - 融解の繰り返しによって岩体が侵食されていき刻画が失われていきます。そういったことをどうやって防ぐかということが問題になっています。

今回の保存委員会の委員長でもあり、昭和 43 年から 45 年の調査においても活躍なさっ

た福田先生の調査によると、当時、大変寒さが厳しかったせいもありますが、1年に5cm位ずつ壁が後退していったという報告があります。かなり激しく凍結・融解の繰り返しにより壁が侵食されていくことがわかっています。そのため、この建物を設計する場合、洞窟の内部を0℃以下に下がらないようにすることが大きな課題になっています。そこで作られた施設が、前室を設け、展示室からカプセルで中を見学する構造で、外からみると二重の構造になって守られています。洞窟内は空調設備を設け、気温5℃から15℃に保たれるような設計にして作られています。フゴッペ洞窟のように、洞窟面に向かってガラスが非常に多い構造は大変珍しいです。装飾古墳では、小さな覗き窓から中を覗く構造になっていますので、ガラス張りで広く中を見れる構造になっているのは、公開機能をよく考えて作られた施設であると思います。また、刻画を近くで見ることができる構造は見る側にも大変うれしい。

洞窟壁画は中央フランスからスペインにかけて数多く、そういう所ではどんな公開をしているか、次にお話します。フランスのラスコー洞窟では一般の入場はできず、フランス政府の特別の許可を得られないと中には入れません。そのほかの洞窟では一日に入る人数を制限しています。夏のバカンスのシーズンは、制限がないところは非常にたくさんの人が入るので、影響が色々出てきて保存の側からすると大変心配です。洞窟によっては、洞窟の中にトロッコを引いて案内しているところもあります。その場合、たくさんの人が見学するため、炭酸ガスの影響や気温の上昇が保存上の問題になっています。

フゴッペ洞窟は保存や公開の面から色々良く考えられた施設で、なかなかこういったふうに良く考えて作られた施設はありません。比較できるとすれば、岩手県の中華寺金色堂が金色堂全体をガラスケースに入れて展覧していますので、そういう意味では似たようなものであります。それから近年改修した小樽市の手宮洞窟は、フゴッペ洞窟の設計を生かしながら作られたものとして大変面白いものだと思います。特に手宮洞窟に関しては、ただ単に見せるだけでなく、昔の人々がその中で生活をしていて、あるいは刻画が作られた状況を再現するといった意図の基に施設が作られていますので、中へ入るとその当時の雰囲気を手く見る人に伝える工夫がされています。そういったあり方は、これからのフゴッペ洞窟の新しい建物をどうするかと言うところで是非考えていって欲しいと思います。

昭和47年にできた施設は、30年近く経っていますので、様々な問題が生じてきています。1つは、崖が1年間に5cm近く侵食されるということで、どうしても建物と岩体との合わせ目の部分に隙間ができてきます。これはもうどうしようもない。岩がどんどん削られていき、その隙間から水が入ってきます。また、建物が老朽化し隙間ができ、空調設備も傷んでくる。そのため、この建物を改修しなければならないということで現在保存委員会の作業が進んできているわけです。

どんな問題があるかひとつお話ししますと、今から20年前は刻画の部分が、まだきれいに見えていましたが、その後10年くらいの間に施設が傷んでくると同時に、全体に少し緑っぽいコケが付いてきました。コケそのものが、急に刻画の部分に傷めるわけではありませんが、刻画が見えにくくなってきたということで調査を進めています。その結果、このコケは2種類の藻が原因となってできたものであるということがわかりました。

1つは緑藻それから藍藻の2種類が同定されています。藍藻はシアノバクテリアと呼ば

れ、土中に含まれる二酸化マンガンを餌にしています。地質の方に聞くと、洞窟の中で発見された例は初めてでそうで、いろんなところでいろんな物を食べる微生物があるんだなと感心しています。

「フゴッペ洞窟保存調査委員会」は、平成9年度に、北大の福田先生を委員長にして発足しました。調査内容は洞窟内外の測量調査、施設の漏水や空調、外部からの列車の振動、コンクリートの強度の問題、照明の影響調査、岩盤・壁面の経年変位量、土壌の水分量などで、最終的には設計工事へつなげるところまで考えています。

洞窟の保存の場合、よく言われることがあります。「昔見たものより色が変わっているのではないか」とか、「壁面の刻画が擦れてきている」と言われる。それは、たいていの場合、本当の事です。実際にどれくらい傷んでいるのか？いつから傷みだしたのか？判定する事は非常に難しい。特に変色については、その時照明している光が関係しますので一概に言い切れません。刻画の場合、彫りが浅くなっているとか、角が甘くなっているということも、当たる光の角度によっては彫りが浅く見えたり深く見えたりするので、きちんとしたデータを残していかなければなりません。いつも同じ角度から同じ時に、同じ照明光で写真を同じ倍率で撮る。といった作業が必ず必要になります。そのためには、正確な写真や測量をしていくことが大事なことです。

昭和47年の建物を作る際に、ある程度の測量がされていたので、今回の調査工事を進めるについては大変参考になる点は多いのですが、それでも、まだ不十分な点が多いと言うことで測量に力をいれて細かく調査しています。外側の丸山全体の地質を調べ、丸山の地形図を作っています。

図1は真上から見た図でわかりにくいので、洞窟の奥から手前に向けて切った図2で見た方がいいと思います。図2でいうと、S1、S2、Sg、この辺の地層のところは洞窟が彫りこまれているところです。Sgは天井面の部分で、S1、S2は内壁面の刻画の部分で、この辺はいずれも砂岩です。新聞記事にも概要にも凝灰岩と書いてありますので、福田先生にお聞きしたところ、この砂岩は凝灰質砂岩と呼ばれるもので、30年前の調査の頃と今は、岩石の分類の仕方が変わったためだそうです。昔、凝灰岩と言われたものが、現在、凝灰質砂岩と分類されるようになったため、決して昔の調査が間違っていた訳ではありません。大変柔らかい石なので、刻みやすく、細くて深いきれいな刻みを作ることができます。それに対して角礫の混ざった砂岩は、硬いので細かい彫りがしにくい。そういった意味では、フゴッペ洞窟の場合大変きれいで細かい文字が書き込まれているのですが、そのかわり大変傷みやすく風化を受けやすいため保存が大変になります。

石仏の保存でも似たような話があり、九州の臼杵石仏も石が柔らかい層を選んで彫刻してあります。そのかわり水がくると大変傷みやすくなります。ヨーロッパのように花崗岩や大理石を使って掘ったりすると違いますが、保存は日本の方がずっと難しいと言えらると思います。

測量調査は実際にどのように行ったかお話しすると、内部の測量調査は、とても大変な事業でした。現在、カプセルが中にありますので、そのままだと写真を撮ることが出来ません。そのためにガラスを撤去する作業から始めました。カプセルの天井に上り、カメラをセットして撮影しています。岩面には50cm間隔で水糸を張り、それぞれの刻画には座標をつけました。その結果、一枚一枚の絵としてはこのような絵が撮れます。一度、写真

を撮ると、刻画を画像強調してもっと明瞭に見易くするなど、色々な作業ができるようになります。そこで、絵を撮ること自体が作業を進める上で非常に重要な事です。一つ一つ個別に撮った絵は最終的には1枚の絵に合成します。実際にはこのように洞窟の中でいっぺんに見ることは出来ませんが、合成写真をつくることにより、端から端までどこにどのような模様が刻まれているか、はっきりわかります。

壁面については、この他にもっと細かな調査をしています。たとえば打診調査があります。壁面を軽く叩いて、音により大丈夫なところや浮いているところを調べます。

次は、施設の現況調査です。一つはフゴッペ洞窟の横に函館線が通っているため、振動の影響を調べました。それは昭和43年～45年の調査でも指摘されています。今回調査した結果、列車による振動の影響はそれほど大きくありません。昔に比べ大きな蒸気機関車が通らなくなった影響もあると思います。他の問題は施設の強度です。コンクリートは、もともとアルカリ性で、年月が経つにつれ中性化し強度が落ちてきます。建物のコアを抜き、コンクリートの中性化と強度を検査した結果、強度は保っている事がわかりました。施設をどのように改修していくか、一つの考え方として建物を新しく建て直すことも考えられます。しかし建物全部を壊す場合、洞窟への振動の影響が心配されます。この建物はまだ強度があるので、現状の悪いところを直していく方が、壁面に対する影響も小さいので、いいのではないかと思います。

次に洞窟の割れ目や落下しそうな岩の部分に変位計を付け、割れ目が開いてこないか、石が動いたりしないか、ということ調べています。結果はどうかといいますが、半年の間に2回ほど地震がありました。一回目は3月の末頃、2回目は8月27日。その時、あちこちに置いてある継ぎ目計、変位計がどんな変動をしたかというところ、割れ目が一番深く入っている石を見ると3月の地震では全く動いていません。8月は0.1mmくらい動いているだけです。逆に言うと、その程度でおさまっていると言えます。しかし、もっと大きな地震がきた場合はどう対応するか考えなくてはいけませんので、石が落ちて動いても大丈夫なように押さえやネットを作るなど考えながら新しい施設を考える必要があります。それから、土壌水分形計で裏山からの水がどんな風に洞窟の中に入ってきているか、洞窟の中の温度や湿度がどんな変化をしているか、ということを細かく調査しています。地面を伝わってくる水に関しては、施設の屋根と崖との取りあい部を密閉すればいいわけですが、地中を伝わってくる水ですと、水道（みずみち）を抑えておかないと、水の浸入は防げません。

新しい保存施設の設計は、現在の建物が造られた時のコンセプトと同じで、温度を0℃以下に下げない、つまり凍結融解を防ぐということ。他に水の浸入やコケ類の繁殖を防ぐ事があります。コケ類の繁殖の原因は2つあります。1つは当初の温度設定が5℃～15℃だったのですが、実際にはそれより高くなっていた。15℃というのはコケ類が繁殖しにくい温度で、高くなると繁殖しやすくなります。温度記録をみると、上の方の温度は夏に最高で21℃～22℃まで上がっています。そのため、中の温度があまり上がらないようにする必要があります。それから、コケが繁殖するためには水と養分の他に明かりが必要です。現在フゴッペ洞窟内の照明はずっとついてます。ずっと照明がついていると、もともと湿気が多いので、植物の繁殖にとって非常にいい環境になります。その辺は新しい施設の方ではもう少し考えていく必要があります。小樽の手宮洞窟では、人が中に入った

時だけ明かりをつけるといったことをしています。中に人が入ったらその時だけ明かりをつけるとか、つける明かりも照度を落とすということをしていくと、現在繁殖しているコケはだんだん枯れていくことが予想されます。

高い湿度を下げるため、地表面を伝わってくる水は施設の周囲をきちんと密閉して防ぐことはできますが、地中の水はどうやって防ぐことができるのでしょうか。現在の施設を活かした形で考えるならば、洞窟全体、山全体を覆うという方法も考えられます。こうすると中の湿度もあまり下がりにくく、外からの水の浸入もなくなりますが、2つほど問題があります。

1つは、完全に山を覆ってしまうと水が全く入らなくなります。それが本当にいいのかというと、土はある程度の水分があるからこそ水分の凝縮力で剥がれ落ちませんが、完全に乾いてしまうと風化しやすくなります。また、大きな建物をあの場所に造ること自体、景観の問題として相応しいかどうかということはあると思います。

もう一つは、実際的な問題になりますが、これだけの建物を造るには、史跡の指定地を大きく掘り崩す事になるので、難しいと思います。半分妥協して、片屋根にする、山の上部の所まで基礎で支えておき屋根を掛けていくという考え方もあります。これに似た例として、私は福島県の小高町の石仏の保存について古い屋根を改修工事をして、上から大きな素屋根をかけて、山を覆うというやり方をした事があります。ただ、フゴッペ洞窟で応用する場合には少し難しい事があるかと思っています。これは真上から見たフゴッペ洞窟の写真ですが、ここに保存施設があります。素屋根を掛けることになると、ここに大きな基礎を作ることになり、かなり大きな工事になります。そうすると、フゴッペ洞窟に入る道がなくなってしまいます。もう1つの問題は、夏の間はいいのですが冬になると、かなりの積雪量があります。素屋根の上に積雪した場合、まずその重量を保つだけの基礎をしなければならぬということ。

そこで今考えられることは、現在の施設をしっかりと改修し、展示施設を拡充し、その中に洞窟だけではなく、近くの遺跡についてのガイダンス施設を作る。また、国定の史跡指定地を色々な形で活用できる広場にして、国道との間に植林を兼ねて、クルミやミズナラなど縄文時代、食料にした実の成る木を植え、木から採れる実を使って縄文時代の暮らしを再現するイベントをしてもいいのではないかと思います。そのため人は、余市町の皆さんにボランティアとして活躍していただいでいくことはどうだろうかと考えています。施設として洞窟を保存するだけではなく、この施設があることで自分たちの昔の暮らしが身近に見えてくる、そのことを通じての教育を大事にしたいと思っています。

遺跡をこれからどれくらい保存するのかについて、福田先生とよく話します。建物の対応年数は約30年くらいですが、これまでフゴッペの遺跡は2000年間保存されてきましたので、私たちが折り返しの2000年を保存するという気持ちでいくことが大事ではないかと思っています。そのためには、保存施設を作るだけではなく、史跡を大事だと思う気持ちを持った人々を残していくという教育をしていかないと、新しい施設が出来ても本当の保存にはなりません。新しい施設を作るからには、施設を通じて皆さんにフゴッペ洞窟の重要性を意識してもらえるような場所として、作っていくべきではないかと考えています。それから、これからのフゴッペ洞窟を考えるならば、洞窟の前にある屎尿処理施設をどこかへ移転していただいて、洞窟前に広いスペースを取り、そこでいろんな事を出来るように

するということが重要ではないかと思ひます。

フゴッペ洞窟の周辺にはいくつかの遺跡があります。それらは歩いて 10 分～ 15 分くらいの距離にありますので、フゴッペ洞窟やその他の遺跡を見に来られた皆さんに、集まって頂けるようなスペースを作り、余市町の入口として一つのガイダンスをつめた施設を作って頂きたいと思ひます。史跡散歩ができ、フゴッペ洞窟が拠点になる場所になって欲しいと思ひます。残念ながら文化庁は施設に対してお金を出しますが、ソフトウェアに関してはお金を出せません。しかし、今回の場合、北海道開拓記念館によりフゴッペ洞窟を中心とした文化研究を科学研究費で進められています。その一貫としてこのシンポジウムがあります。こういった成果を上手くリンクして、新しくできるフゴッペ洞窟の施設にいかしていくことにより、素晴らしい施設ができると思ひます。

昭和 47 年の施設は、当時、類を見ないものでしたが、そういったものが今回またできるのではないかと期待しています。昭和 47 年の調査団に参加されていた先生方は、東大の岩塚先生、岸谷先生、野村先生などでした。今回の保存委員会の中には、先生方の弟子が何人も入っています。調査委員長は福田先生は、岩塚先生の弟子です。建築担当の内田先生は、岸谷先生の弟子です。私地自身も、いろんな意味で野村先生にはお世話になりました。こういうこともまた、シンポジウムのタイトルでもあります「フゴッペ洞窟の - 過去 - 現在 - 未来」に繋がっているのではないかと思ひます。私たちが、新しいものを作っていくならば、また次の世代の方々が、フゴッペ洞窟の明日をつくっていただけるのではないかと期待して今の仕事を進めています。

最後になりましたが、今回の発表のために資料の許可をいただいた史跡フゴッペ洞窟保存調査委員会および余市町教育委員会に厚くお礼申し上げます。

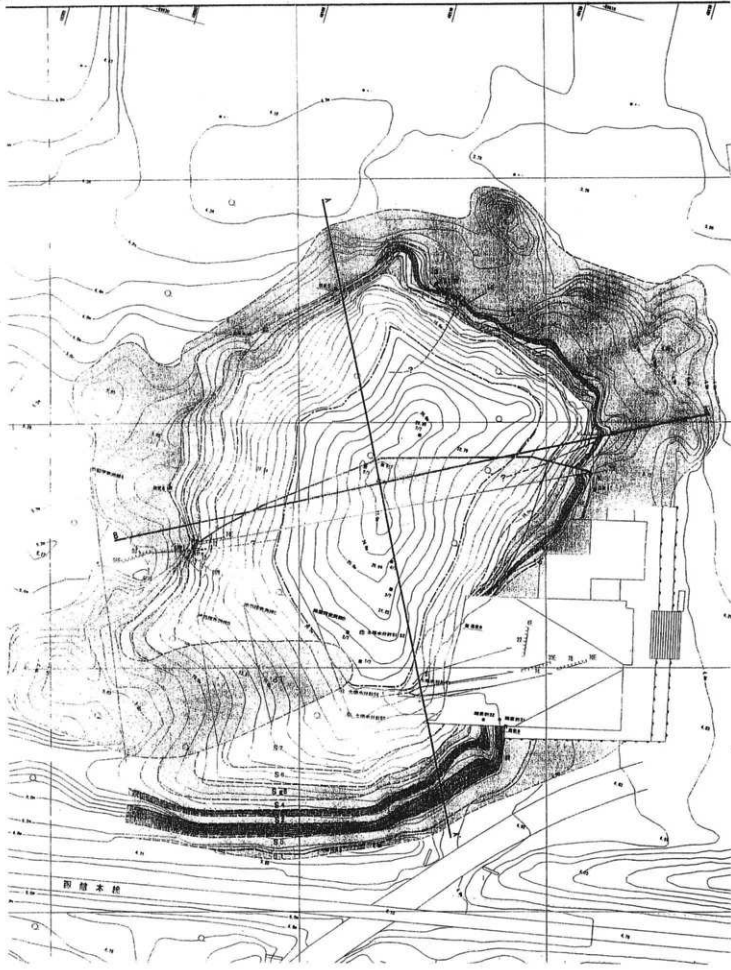


図1 フゴッペ洞窟地質平面図

B-B' 断面 地質断面図 (縮尺 S=1:200 V/H=1)

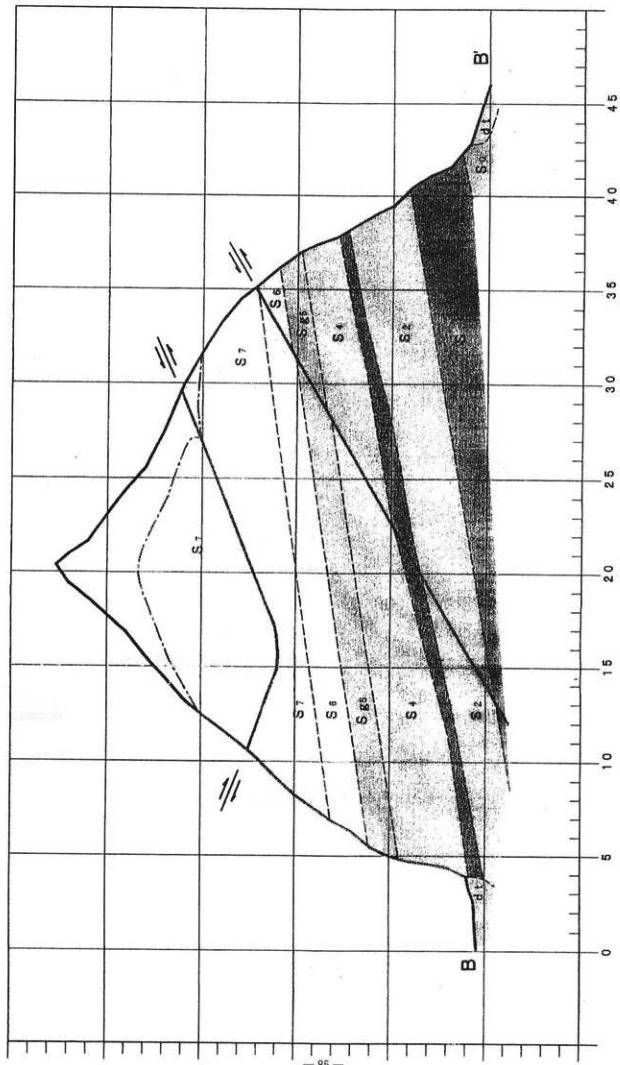
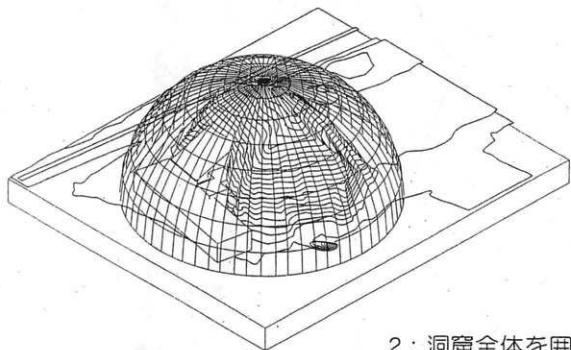
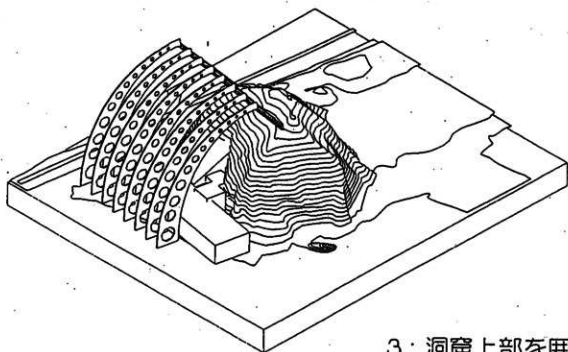


図2 フゴッペ洞窟地質断面図 (B-B'断面)



2 : 洞窟全体を囲う案
山全体

図3 丸山全体を囲う覆屋案



3: 洞窟上部を囲う案

建物上部

図4 洞窟の上部までを囲う覆屋案

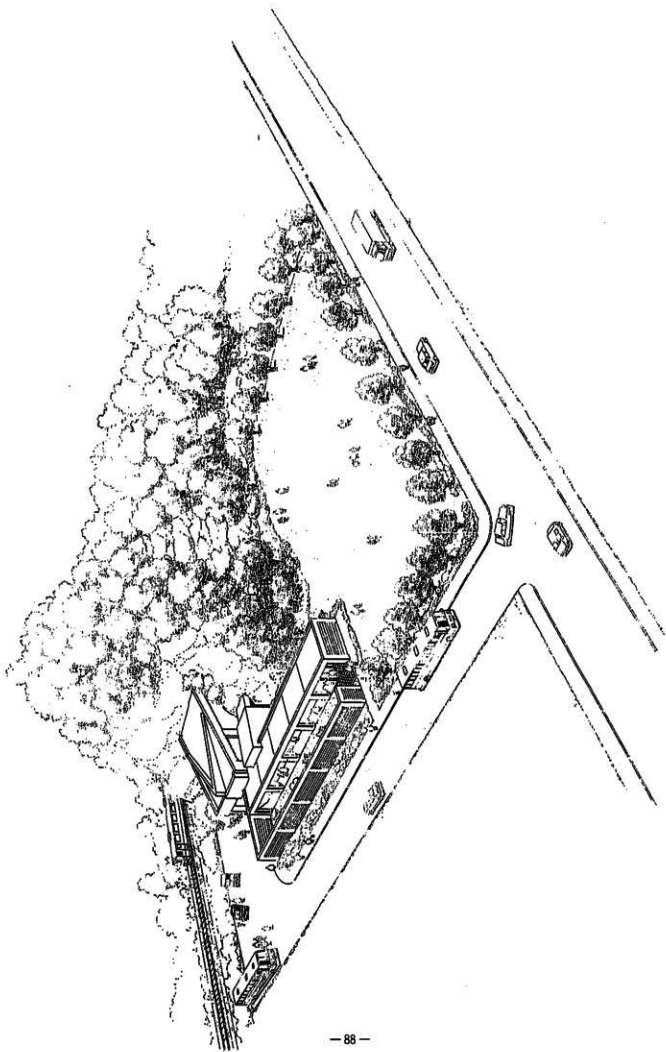


図5 想定される施設改修案

史跡フゴッペ洞窟保存調査事業

- 洞窟内外部測量調査（図化）
- 施設現況調査（漏水、空調、振動、コンクリート）
- 照明影響調査（微生物同定）
- 岩盤、壁面経年変位量測定
- 土壌水分量測定
- 電磁探査（水みち調査）
- 史跡全体調査（植生など）
- 設計・工事

地質総括表

地質時代	地層名	記号	地質	特徴	厚さ メーター スラ	層厚 (m)	下位の境界	洞窟内の分布	
新第三紀・中新世	鹿嶋地層群	dt	礫、砂	下位の砂岩層は起部の崩壊土。大岩塊の礫石層も存在する。斜面上では遺物が混入する。	-	-	-	なし	
		S 7	砂岩	所々砂層、平行ラミナ、軽石層を挟む。層厚は付近より上は風化により劣化。ラミナを境に2層以上に分割される可能性あり。(詳細は不明(遠方目視確認のみ))	A, B C? (P)	>10 ?	明瞭	なし	
		S 6	含礫砂岩	粗粒砂岩。所々小粒土層、平行・歪状ラミナ層、軽石層を挟む。塊状でしっかりとっている。大ブロック状に分離しやすい。	A, B C (P)	1~2	明瞭	覆屋内	
		Ses	角礫岩 (礫岩)	歪風化、中粒主体。上位は大円礫多い。基質は粗粒砂~細砂。層厚高い。大ブロック状に分離しやすい。	A	1~2.5	明瞭	覆屋内	
		S 4	砂岩	粗粒砂岩。塊状でしっかりとっているが縦割裂(外断層)発達。小円礫が散在。	A, B	1~2	明瞭	覆屋内	
			角礫岩	歪風化。層厚変化激しい。小~中粒主体。基質は粗粒砂。層厚低い。	A	0.2~1	漸移	天井面 横断面	
		S 2	砂岩	細粒~中粒砂岩。塊状だが浸食されやすい塊相。(崖で凹状を呈する) 軽石層を挟む。	A, B C (P)	2~3	明瞭	内壁面 横断面	
			砂岩	中粒~粗粒砂岩。平行・歪状ラミナ層、軽石層を挟む。塊状でしっかりとっている。	A, B C (P)	1~2	明瞭	内壁面 横断面	
		S 0	砂岩	中粒~粗粒砂岩。	A, B	>1.5	-	-	地面下

表2 フゴッペ洞窟地質総括表

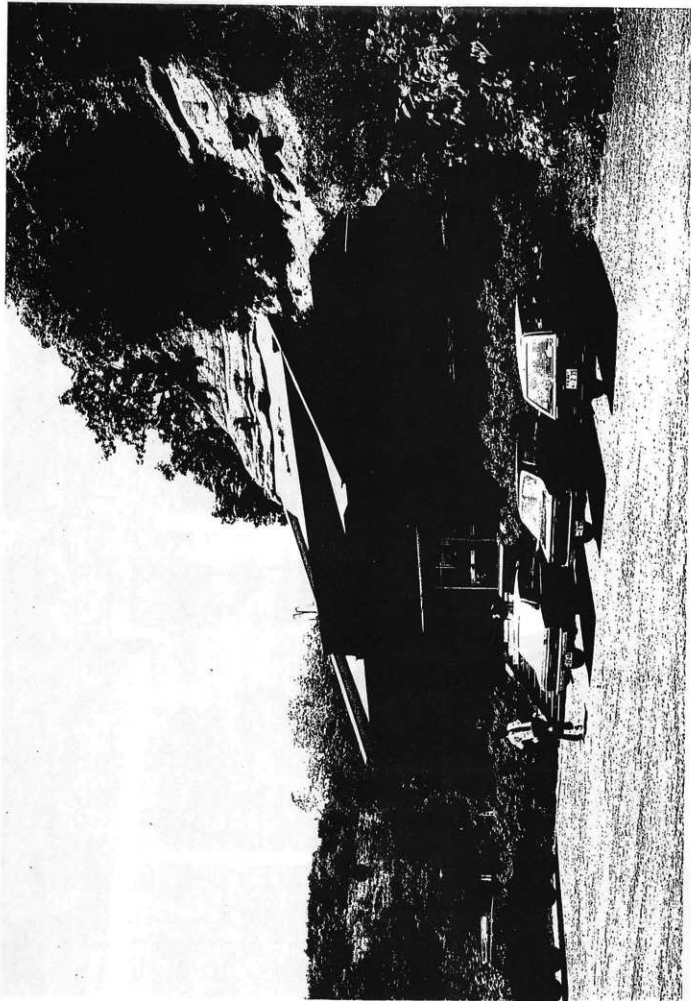


写真1 フゴッペ洞窟外観（1981年4月10日）

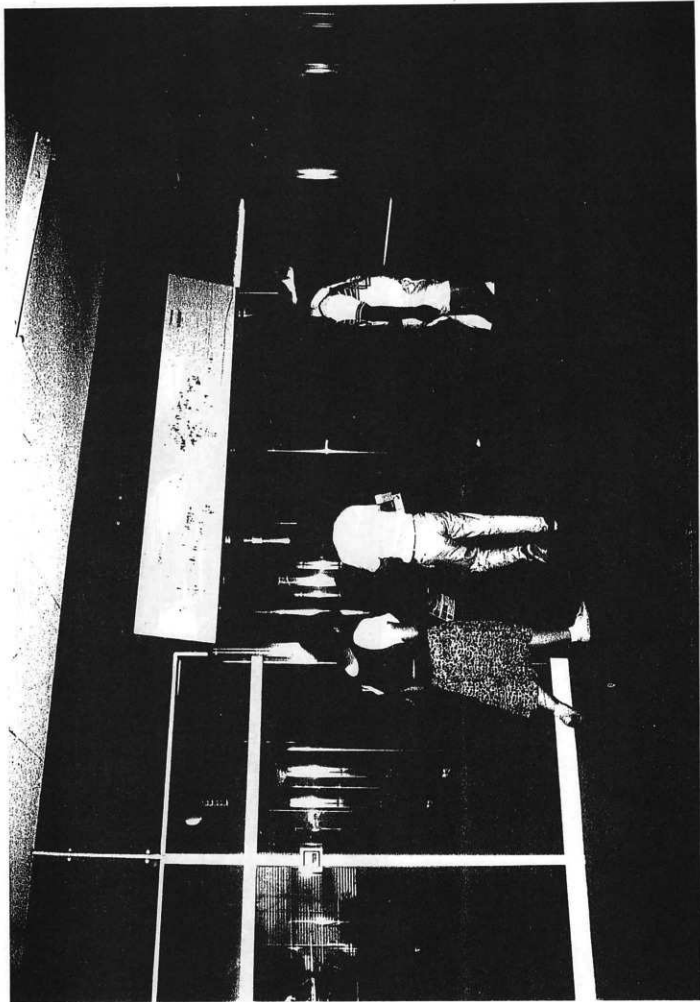


写真2 展示室からカプセルへの入口（1983年8月17日）

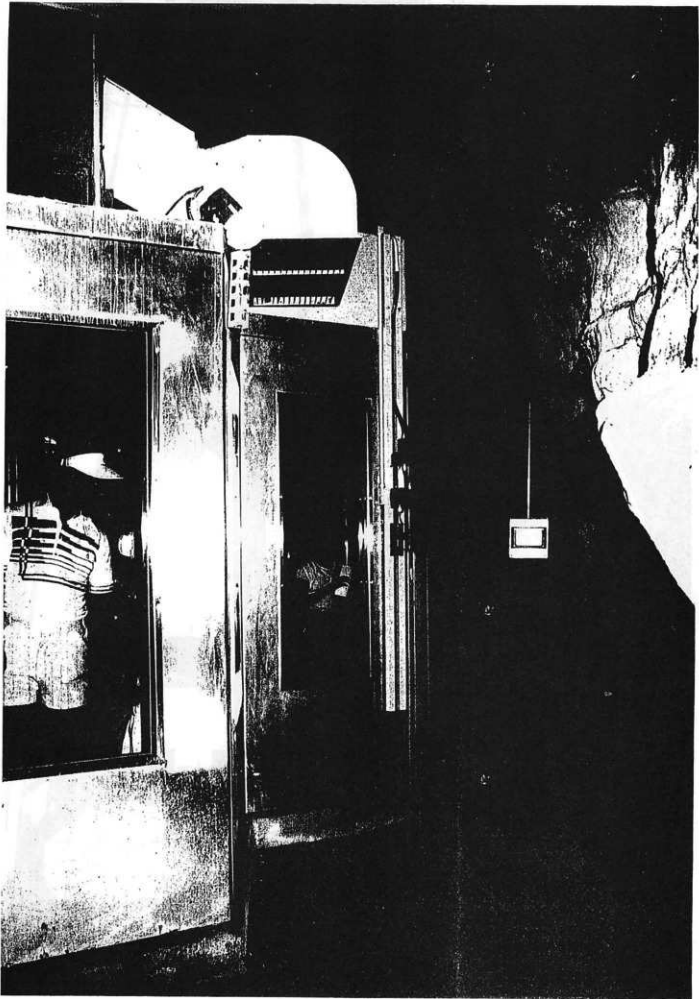


写真3 カプセル北側の覗き窓（1983年8月17日）

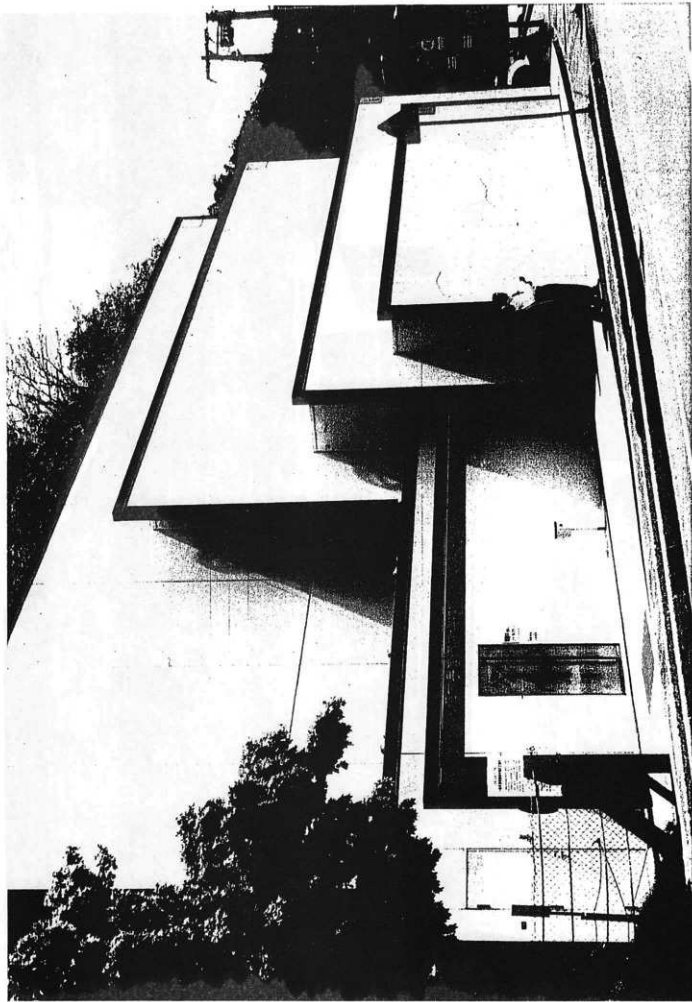
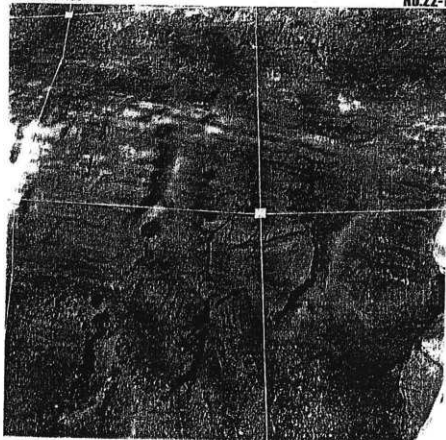


写真4 手宮洞窟外観

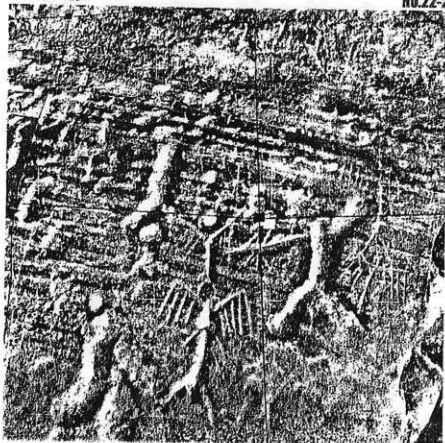
<撮影画像>

No.22-1



<編集画像>

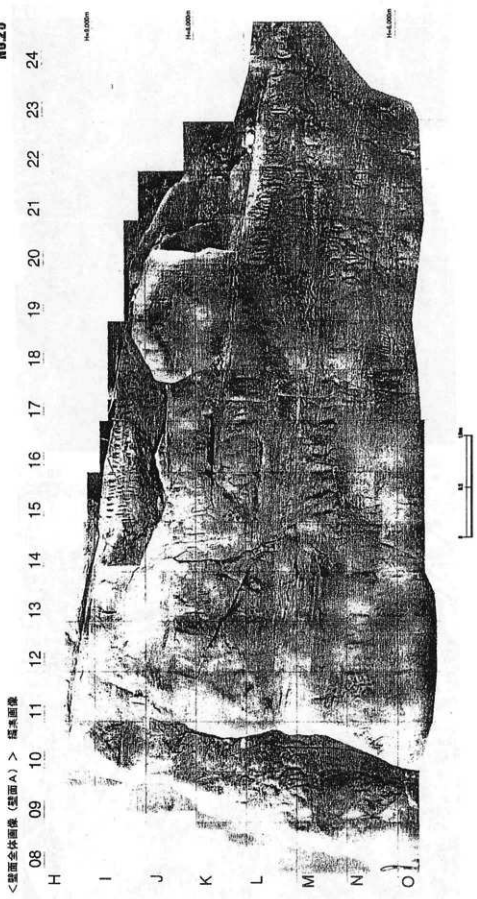
No.22-2



写-13

写真5 線刻を撮影した画像とその処理画像

No.20



＜製面全体画像（製面A）＞ 複写画像

写-8

写真6 個別の画像をつなぎ合わせてできた岩面全体の合成画像



写真7 フゴッベ洞窟の横を通過する列車

総合討論

コメンテーター：木村重信 菊池徹夫 福田正己

司会：赤松守雄

赤松守雄

昨日から今日にかけて、記念講演を含め5人の先生方からの報告がありました。最後に総合討論というかたちで「フゴッペ洞窟の - 過去 - 現在 - 未来」について、討論をしていただきたいと思います。

コメンテーターとして、最初に木村先生の方から、先史美術から見たフゴッペ洞窟ということでお話しお願い致します。

木村重信

先ほど、小川先生が時間の都合により一番大事な制作年代、その他についてお話できなかったと思いますが、そのことについてお話し下さい。その後で、あらためて私のコメントを話したいのですが、よろしくお願い致します。

小川 朋

私の時間の計算ミスにより、最も大切な部分をお話できませんでしたので、時間をいただきキーポイントになるような写真を見ながらお話ししたいと思います。

先史美術の立場から、刻面のある剥落石片についてお話ししたいと思います。1950年代の発掘の時、約70個の刻面のある石片が堆積層から発見されています。それは、基準点を0cmとして、+210cm～-160cmの下まで、非常に広い範囲にわたっています。また、水平的にも洞窟内部のかなりの範囲から発見されています。

70年の報告書には、土器、石器、骨角器に関して、どこからどういう遺物が出ているかという表が添付されています。剥落石片は北海道開拓記念館に所蔵されていますが、そのうち文書・資料が付随していないため、記念館のどの石片が報告書で言及されている石片なのか、すべて確認できていません。確認できたものは20個くらいありますが、そのうち4つが第1層、7つが第2層、11個が第3層、第4・5層からは報告書を読む限りでは石片は見つかっていません。

現時点で私の結論は、作品がすべて制作された後で、後北式土器を残した人々がフゴッペ洞窟を利用しはじめたのではないだろうかと思っていますが、この剥落石片が落ちてくる上下、垂直的な分布からは第3層以降に剥落している。それ以前に洞窟を利用していた人々は、石片が剥落したとしてもそれを取り除いていたということも考えられます。この辺はまだ回答がでないところです。いずれにしても、第3層以降の潜在している石片の分布状況を見ると、第3層以降の人々は、剥落した石片を放置していたということに私は解

釈しています。

岩面刻画は、精神文化的な当時の社会の人々にとって、きわめて大切なものだと推定されます。そのようなものが、剥落してきた場合それを放置することはないのではないかと思います。少なくとも、第3層以降の人々にとっては、岩面刻画は意味のないもので、自分たちが利用している面に、剥落して落ちてきたとしても、単なる落石として見ていただいだけであって、刻画が施されている何か貴重なものとしてはみなしていませんでしたかというふうに解釈しています。

重要な証拠としてスライドを見たいと思います。これは現在、北海道開拓記念館で展示されている、剥落石片の代表的なものです。次は、報告書で言及されているどれに当たるかは確定されていませんが、ここに非常にシャープな溝のある石片が所蔵されています。次の写真を見ると、陰をとってみるにより切削面がどういう状態かということが問題になりますが、私自身の解釈としてはこれは刻画の部分ではなく、第3層期以降の人々が剥落した石片を、別の道具を制作するために利用した痕跡ではないかと解釈しています。

先ほど放置していたと言いましたが、他の道具を作るために利用するということは、自分たちの精神文化を表す貴重なものが剥落して落石してきた場合に、そういうものを別の道具を作るために用いるかどうか、私自身としては後北 C・D の土器を作った人々が、剥落石片にそのようなことをおこなっているということは、フゴッペ洞窟を利用した後北 C・D の人々と刻画が文化的に連続していないというふうに解釈しました。

先史岩面画においては、重ね描きという特殊な造形現象があります。それは1つの作品を作り、その上から全く別の作品を制作するという現在では考えられませんが、先史岩面画ではよくあることです。ところが、フゴッペ洞窟には重ね描きというものがほとんどみられません。私が唯一重ね描きだと考えているのは、ここに少しベッキングによる大きな形があります。私がフゴッペ洞窟で作品を調べた結果、この例が唯一の重ね描きの例で、ほとんどないといつていいと思います。これは何を意味するかと言いますと、作品を描いた人々が同一の文化に属し、彼らが制作したと意味していると思います。

つまり、画像を重ねることによって作品間の混乱が起こらないように、作品をそれぞれはっきりした形で示す。そのために重ね描きというものはしない。もともと、先史岩面画に重ね描きが多いのは、異なる文化の人々が、同じ場所でそれぞれの制作を行うことにより生じたと思います。フゴッペ洞窟に重ね描きが見られないのは、ベッキング、アブレイジョンなど技法は異なりますが、同じ文化集団が制作したと考えられます。

アブレイジョンとベッキングという技法の問題ですが、異なる技法が70年代の図面に依存するならば、混合技法が使われているのは唯一、一例だけです。ベッキングとアブレイジョンという技法は、同じ文化に属する人々によってなされたテクニックだと考えられます。

手宮洞窟の例から考えると、ベッキングという北東アジアでも普遍的なテクニックが用いられ、より岩質に相応しいアブレイジョンという技法が付け加えられたのではないかと考えています。混合技法からの作品からも、同一集団による岩質に応じた使い分けであると解釈しています。

昨年11月、洞窟周辺5カ所のボーリング調査を行いました。その結果、フゴッペ洞窟が形成されたのは約2000年前という結論に至っています。

最近、私のグループで研究してきた結果、また私個人様々な現象に対する解釈を総合的に論じます。岩面刻画が制作されている場所は聖域といいます。洞窟壁画の遺跡の場合作品部分から、当時の遺物が発見された事は比較的少ないです。掃除をしていた痕跡があるのではないかと主張している研究者もいます。何か自分たちの大切な、精神的なものが制作されている場所と生活する場所は、基本的には分けますので、フゴッペにおいてもそういうことが行われていたということも考える必要があるのではないかと思います。ですから、考古的な常識といいますかその遺跡にある遺物であれば、それが壁面に制作されたものであっても当然ながらそこに人々がいた痕跡である堆積物の年代の範囲におさまる常識も承知しています。一つの問題提起として結論で述べているように、作品が制作された後で、今から1900年ないしは1850年前くらいから、後北A・Bという土器を用いた人々が洞窟を利用していました、それ以前に別の集団が制作をし、土器を作らないあるいは土器をあまり持ち運ばない岩面画を制作する文化をもった人々が、手宮とフゴッペに来て、あまりそれ以外の痕跡を残さずに後北式土器を用いる人々が利用を始めたのではないかと考えています。後北式土器は、手宮洞窟やフゴッペ洞窟といった遺跡だけではなく、それ以外のところでも道内では発見されています。しかしそういうところに、同じような岩面刻画のようなものがないというようなことも、日本にあまり先史岩面画の遺跡がないことにも関連してきます。先史岩面画は、どういう生活をしていた人々が作品を残すのかというような問題も含めて考えていかなければなりません。いずれにしても、考古学的な常識からは逸脱するかもしれませんが、フゴッペで発見されている遺物の年代とは少し遡る時代に、フゴッペとおそらく手宮の岩面刻画も制作されたのではないかと現時点で考えています。

木村重信

フゴッペ洞窟には、重ね描きらしいものが一つしかないという。これはきわめて珍しいです。世界の岩壁画の旧石器時代の古いものでも、最近のインドのものも重ね描きが一般的ですので、同じ文化集団に属した人々が同時期に描いたという可能性、もう一つは、岩面刻画を作った人々と土器を作った人々とは違うということも重要な指摘です。

岩面画というのは、世界中にあります、牧畜民と一部の狩猟民だけです。農耕民は、岩壁画はいつさい残していません。逆に、仮面は農耕民と一部の狩猟民が作って牧畜民は作らない。そういう意味で、今小川先生が岩面刻画を作った人々と、土器を作った人々は違うだろうと言った事は非常に重要な指摘です。狩猟民は土器を作りませんので、土器と岩面刻画は繋がりません。我々は、牧畜民を単純に考えていますが3つあります。一つは遊牧民、日本では牧畜民の事を遊牧民と言いますが、これは牧畜民の中の一つの形態で、モンゴルなどのように家畜を移動しているこれが遊牧民です。それから、移動牧畜民というのがあります。夏と冬に牧草を求めて2箇所移動する、これを移動牧畜民。また、1箇所定着している牧畜民もいます。これら3つを総称して牧畜民といいます。その3つの種類がある牧畜民いづれも、仮面を作りませんが岩面画は残します。

フゴッペ洞窟の刻画を描いた人々(狩猟採集民)は、土器を作りません。もしかしたら、農耕もしたかもしれませんが、現在のところ証拠がありませんので、遺物の土器と岩面刻画を直接関連づけることは出来ないだろうというお話でした。非常に重要な指摘有り難う

ございました。私のコメントは以上です。

赤松守雄

小川先生の方から、作品がすべて制作された後で、後北式土器を残した人々がフゴッペ洞窟を利用し始めたこと、作品を制作した集団と後北人とは違うという指摘がありました。また、木村先生からは牧畜民と遊牧民の話がでました。考古学的な面で菊池先生お願いします。

菊池徹夫

考古学は今、黒い霧におおわれていて、自然科学や美術史のきれいな密な夢のあるようなお話しに比べると、胡散臭いのではないかとお聞きになられると困りますが、考古学は文系の科学ですから、そのような観点からお話し致します。

50年前、大塚さん御兄弟が発見されて以来、ずっと研究が続けられてきた事を考古学的な事から、一番どう考えたら無理がないかという事を私なりの考えでお話をさせて頂きたいと思います。

手宮洞窟やフゴッペ洞窟に関しての考え方は、5年くらい前に小樽市で手宮洞窟のシンポジウムが開かれました。この記録集の中に全部私の考え方は書いていますので、どうか図書館などに配布されていると思いますので、これをお読みしていただけないでしょうか。今日お話ししたいことは、全部これに書いてあります。ただ、この時間内でそのことを全部申し上げる訳にはいきませんので、ごく簡単にダイジェストして申し上げたいと思います。

まず時代のことですが、美術史の立場から小川先生が新しい見解をお出しになり、正直ショックであります。考古学をやっている人たちは、おおかた後北A式土器から後北C2・D式、北大式、擦文土器という非常に大きな文化になっていき、このあたりの時期のものだろうと考えています。世紀でいうと、紀元後2世紀から5・6世紀あたりかなと考えております。ただ考古学をやっている人が、統一して思っているのは、洞窟の刻画とそこ前に堆積していた土層の中に入っている遺物が、これと別の時期だとはあまり考えません。竪穴住居の中に入っている土器は、竪穴住居と同じ時期ではないということになってしまつて、考古学の原理みたいなものが壊れてしまう可能性があります。

異論は少しありますが、手宮洞窟は後北C2・D式が主ではないかと思えます。ですから、フゴッペ洞窟も我々は、古くても後北A式という時期ではないかと考えております。これは推論にしすぎません。広く言つて、後北文化の所産の人たちが刻んだものだろうというしかむしろ考古学では考えられない。他に証拠がないということです。

土器の型式でいうと、後北式、江別式とも言いますが、統縄文文化の後半の文化で、どちらかという北方系だろうと思えます。南のものか北のものかという、どちらかという北方系だろうと思えます。あるいは、樺太方面からの影響も受けているかもしれせん。道央中心に作り上げられた文化だというふうには思っています。その頃南の方、または東北・道南の方では恵山式といつて縄文晩期の亀ヶ岡式系統の文化が広がっていますから、その少し後に、北海道的な北方的な文化の人たちが彫つたものだというふうには考えています。

次に文字か否かということをごさお聞きになりたいのではないかと思います。考古学の立場から言うと、やはり文字とは思えません。文法構造をもって、音と対応するような形で文章を構成するような意味での文字ではないと思います。ただ、絵文字段階があるいはその一步手前か、絵と言っておいたほうがいいのではないかとというのが私の考え方があります。

確かに昨日、質問があったように、中国の甲骨文字なんかと似ています。普遍的という意味では、世界中にこの手の文字はあります。甲骨文字もそうですし、ヨーロッパではルム文字というのがあります。御覧頂くといいと思いますが、非常によく似ています。そういう意味では広く世界と繋がると思います。しかし小川勝先生がおっしゃるように、大陸の近辺を見渡して見ても、これと同じものはなく非常に特殊だと思います。手宮洞窟とフゴッペ洞窟だけと言ってもいいと思います。そうすると、北海道でも日本海沿岸のこの辺りにしかないと言うことは、もっと歴史的な意味として考えていかなければいけないであろうと思います。

それから、何が描かれているのかということですが、昨日の佐々木史郎先生のお話の中にもありました事と同じで、わたしも同感です。つまりそこに描かれているのは、人像とか人だと思えますし、単なる人ではなくて聖霊だとか神あるいは祖霊、そういうものだろうと思います。神様達がたくさん描かれているいわばパンテオン、そういう意味でも聖なる場所だということも大賛成であります。単によく言われるように狩猟儀礼、「動物がたくさん獲れますように」というようなことだけではないと思います。もしそうだとすると、大陸によくあるようにもっと動物がたくさん描かれていると思います。人像が多いということで、祖先の霊に繋がる意味をもった後北人の聖なる場所だったと思います。

手宮洞窟で、主に出土しているのは後北 C₂D 式土器だけではないかと思います。手宮洞窟の刻画の方が少し抽象化が進んで新しく思います。これは感ですが・・・。フゴッペ洞窟の方が少しどちらかという古いかなと・・・。後北式でも前段階の古いところから描かれているのではないかなと、より具体的な絵画的な感じがするという事です。

誰が描いたのかという事、またその意味について簡単に申し上げたいと思います。私は、後北人が描いたと思います。そして、それは必然性があるのであって、だまって動物を捕りたいからというのであれば、他にもたくさんあると思います。縄文時代は狩猟時代ですから、ここだけというのは、やはり意味があつて南からは本州系の大和系の人たち(土師器や弥生式をもった人たち)が北上してきます。北の方からは北方系の人たちが降りてきます。これは気候の寒冷化温暖化と関係すると思います。

石狩・余市・積丹半島を越えた辺りや瀬棚辺りでは、もしかすると同じような洞窟があるかもしれない、探したいと思っています。もしかすると、佐渡や新潟の辺りにも怪しいものがあるのではないかとさえ思っています。

同じ様な記号が擦文土器にも描かれています。最後に擦文土器の底部に、アイヌの人達のいうイトツパに近い形で、最後まで描かれていくように思います。後北人達が最初に岩に彫りつけた自分たちの集団のシンボルだというふうに考えています。それはずっと最後まで続いて、土器文化にも繋がって行ってアイヌの人たちの文化の一部に流入しているんだろうと思います。

一番問題になるのは、年代が確定しないと仕方がないと思います。私は、考古学の立場

から年代の事を申し上げましたが、自然科学の下川浩一先生に年代についてお話していただきたいと思います。

下川浩一

レジュメの17頁に、加速器質量分析法による年代ということで、表にまとめています。このデータの測定番号は、上が新しく下が古いと。具体的な採取した場所は、13頁の第3図にあります。ここのA-1~8まで断面に示されています。表の中の一番上の貝、これがA-1から取ったものでエゾヒメボラです。表の2番目はA-3層から、これはマガキです。3番目はA-5層から、これもマガキです。4番目はA-8層から、これはイガイです。御覧になってわかるように、一番下のものがすぐ上のものより若い年代がでております。この辺は、多少誤差があると思います。

測定年代を暦年補正してみると、一番下が紀元後3世紀、次が2世紀、3世紀、5世紀。一番古いのが2・3世紀と考えられます。遺物が壁面の出てくる面までの深さまでのものであり、実際には2mまで遺物が出土するというのでありますので、当然これよりも古いものが見つかって、それと壁面との関係が明らかになるまでは、いつ頃というのは難しいと思います。ただし先ほど申しましたように、2・3世紀より古いと言えると思います。

もう一つ洞窟がいつ頃できたかについて、我々も色々調査を進めています。余市岸の方には、砂丘が何列かあります。一番奥のものが縄文海進の一番高い時期、約6000年くらい前と言われています。他の地域でも砂丘列が残されているのが普通です。縄文海進の時一番海が上がってきて、だんだん引いていく過程で砂丘が残されていくと考えられています。フゴッ洞窟の辺りは2000年くらい前の海岸付近に相当すると。おそらく、縄文海進の時にも形成されたと思いますが、2000年くらい前に主に波で削られて出てきたというような考えをもっています。ただ、その時の海面の高さが問題になります。先ほど小川先生のお話にもありましたが、ボーリング調査を今進めているところですが、この標高がデータなどの違いから、もう少し見直す必要があります。ただ、昭和47年のボーリングデータによりますと、標高が0.9mのところ基盤がでてくるということで、かなり深くなります。深さは、実際に波食面つまり海岸で波で削られて平坦面ができた時のものであるかということについて、もう少し調査が必要かと思えます。

小泉 格

今、コメンテータの先生達のお話にもありましたように、年代論に関して二つあります。一つは岩面の彫刻がいつできたかということ、もう一つは洞窟がいつできたかということです。これは入れ物の問題です。入れ物がいつできたかということと、入れ物の中に溜まっているもの、堆積物や土器などとの関係です。その入れ物ができた時代と入れ物の中にものが溜まった時代が、非常に近い時代かそれともその間にギャップがあるかということが将来の問題として論点になります。

私が勉強している地質学では、地質学の歴史を見てみると、同じ様な事がかつてあります。それは、研究の精度が悪いときは、いろんな現象がみんな連続しているように説明します。分析が進んでいくと、今まで連続していたものは、実は連続していない間にギャップがあるんだということがわかってきます。そのギャップのところに、前の時代と後の時

代と不連続になっていることが見つかってきます。それが地質学における進歩なんです。今、フゴッペ洞窟では、私たちがかつて地質学で勉強したようなことが、現実の問題になっていることを先ほど2つの点で指摘しました。そういう意味で将来の考古学も含めて入れ物と、入れ物の中に溜まったものとの関係ということで、木村先生や小川先生がお話になったことは非常に大事な問題です。もしボタンをかけ間違えると、先ほど冗談でおっしゃった旧石器と同じ問題になります。旧石器の場合も同じです。石器の問題とその石器が出土した周辺との関係です。ですから、出土した石器をきちんと鑑定しなければいけないわけです。

赤松守雄

小川先生、それに対する補足はありませんか？

小川 勝

もちろん問題提起のつもりで、断定的な言い方をしたわけですが、菊池先生を始めとするご意見も重要な問題です。私自身にも、かえって不利なデータになるかもしれません。ベンガラがついた貝殻がフゴッペ洞窟の第12層から発見されています。それは北海道開拓記念館で所蔵されています。今朝の報告でもお見せしましたが、北壁上段の敷カ所に残っているベンガラと、自然科学的な成分分析をすれば同一のものなのかということはずぐにわかると思います。

先ほど遺物を残さなかったのではないかというような一方的な意見を申し上げましたが、このようなベンガラがついてる貝殻をパレットのようにして用いたということも考えられます。そうすると、その遺物が第12層がまだどれくらいの前代なのか確定しにくいところもありますが、また別の議論も可能です。

特に土器の型式論というものは、日本が世界に冠たる精緻な議論を展開されています。これは日本考古学の世界に誇るべき成果ではありますが、そういうものが文化とどう結びついているのか、ということが少し専門外の人にはわかりにくいところがあります。例えば、後北A～Dというふうに関西型と呼ばれています。同じ型式の土器を連続して残した人々が、文化としてどの程度連続性を持っていたのか、常識で考えれば同じ型式の土器を残した人は同じ文化というものを利用していたと考えるわけです。

フゴッペ・手宮のように異質なものがあるとき、型式というものが何か文化というものと検討されずに同一視されて、そこにはその文化しかないというふうな考え方はどうなのかなという疑問をもっています。そういうところで、問題提起のつもりもあり、色々な様子を緩和すると、後北式と同じ型式をもった人々の文化と異なる人々の制作の可能性というものを主張してみたいと思ったわけです。世界的なものをすぐ日本に当てはめるということも海外研究をしている者の悪い癖かもしれませんが、世界的に土器というものは、基本的に定着民の作るものであります。

木村先生の著作にも書かれていますが、基本的に先史岩面画を残した人々というのは、牧畜民および狩猟民という誘導性のある人々が、残しているというのが世界的な視点から見ることができます。後北式土器を残した日本の土器文化は非常に特殊で、定着性のある狩猟民、また一概に一括して論じきれない対象なのかもしれません。文化という問題を、

どう型式論と結びつけていくのかということを問いかけてと思います。

木村重信

後北人の生活様式は、何ですか？

菊池徹夫

後北人の竪穴住居は、まだ見つかっていません。ごくわずかで例外的だと思います。お墓はたくさんあります。お墓は日本海岸に多く、合葬墓が多いです。解釈のしようですが、移動性の高い段階だったのではないかと考えています。その後、北大式という段階を経て、擦文文化の時代になると、非常に安定的に竪穴住居の集落が作られ落ち着いた段階を迎えます。

岩壁画を描かれたと思っている後北文化の社会は、例外的に東北地方の新潟あたりまでこの土器が出ています。農耕は、あまり盛んではなかったと思います。

木村重信

洞窟といった場合、トンネルです。旧石器時代の洞窟壁画は、トンネルです。長いものは、2000mあります。洞窟壁画というものは、暗いところにあります。岩陰壁画は、直接もしくは間接に光が入ってきます。洞窟壁画は、全部古いです。岩陰の場合は、人が入れます。生活遺物と岩面画が、直接関連することは、ほとんどありません。

最近、ブラジルで大問題になっていることがあります。9548年前という数字がでてきました。これは、岩面画を被っていた文化層からでたカボンテストのデーターですので、9548年より前ということは確かです。ベーリング海峡から北米・中米・チリを南下し、それから東北に向かってアマゾンの河口に行ったというのは定説です。北アメリカで一番古いのはメキシコの24000年前。小川先生が調査したのは9500年前。ところが、南米のペロドフラザというところは、人間が住んだルア島です。これが41500年前というすごい数字がでてきました。

岩陰刻画の場合いろんな人がきます。しかし、洞窟の場合は、入り口を塞いでしまえば奥に入れますので、入り口を塞いでいる層の年代がわかれば、その奥にある洞窟はそれ以前だということがわかります。

小川先生がおっしゃてた、岩面画の作者と土器制作者は違うということが一般論としては普通だと思います。私はフゴッペの場合そうだったとは断定しませんが、小川説はおおいに可能性があると思います。

菊池徹夫

昨日、小川先生にお聞きしたときに、刻画の時代と違う時期だと聞いて驚いていたんですが、今日のお話を聞いていると後北Aくらいだと言いますと、我々が考えていることとそう違うわけではないと思います。縄文晩期や縄文早期などといっているのとは、違いますから、我々が想定している範囲の中で一番古いところで、一時期に作られたというおっしゃり方ですからそう矛盾するわけではないと思います。これからやっつけかかないと決着がつかないと思います。

小川 勝

下川さんからお話していただいたように、洞窟の成立年代、最終的な利用可能になった時期というのも我々のグループでは、1世紀前半くらいかなと考えています。それ以前だった可能性もありますので、1世紀後半には刻画を制作する環境は整っていたとしています。文化というものを、流動性の強い土器制作民として後北土器を作った人々という非常にはっきりとした考え方を示していただいたのでありがたいと思います。

特に精神的な美術作品を作り、フゴッペ洞窟を作った人々が、いかなる文化というべきものが背景にあるのかということこれから先生方と一緒に考えていきたいと思っています。

赤松守雄

今までの議論の中のソフト面を含め、これからハード面でフゴッペ洞窟保存委員会委員長の福田正己先生の方から一言お願いします。また、時間の都合上、これを最後のコメントといたします。

福田正己

フゴッペ洞窟が残ってきた背景を考えますと、洞窟は短い時間で崖崩れの堆積物で入口が覆われたと思います。ですから、できた後にいろんな人が入ってこれません。早い時期に閉鎖されたんです。そのため、あのようにフレッシュな状態で刻画が残ったんです。それからこの地域しかないというのは言い過ぎで、あったかもしれないが風化によってなくなった可能性がたくさんあります。ですから私の想像は、フゴッペ洞窟と手宮洞窟は条件が良くて早い時期に入口の崖が崩れてきて、入口を覆ってくれたために保存が良かったため残ったと思います。

凝灰岩の柔らかいところには、一面にあったらと思う。そういうところは、条件が悪く次々に風化で見えなくなりました。あの2箇所だけが極めて条件よく残されたと考えられます。それは、先ほど三浦先生がお話されましたように、どう保存するかというヒントなんです。埋まっていた時と同じ環境を再現すれば、埋まっていた期間と同じ長さ残るだろうという考え方です。遺跡保存の時、非常に重要な概念で我々は、遺跡をどれだけ保存しなければいけないか、保証しなければなりません。それは原理的には折り返し期間であり、2000年前にできたら、次の2000年間を我々は保証しなければなりません。ただし、入口を完全に覆って元の状態を作ってしまう非常に簡単です。すなわち、残ったということは、入口が閉鎖されたから残ってきたんだということであり、同じようにまた戻すという考えがあります。

一方で、公開制と一見矛盾するのをどうやって解決するかというアイディアの第一号として、昭和47年にこの遺跡ができました。公開制と保存を両立させると、カプセルにして外界との環境を謝絶するというのは、いわば埋まっていた時と同じ環境を再現するというのが主な目的です。そういう考え方で遺跡を保存しようというのは、実はこのときの議論の結果生まれたんです。普通、遺跡保存といいますが、遮二無二何か人間が手を加えて残そうとする。ところが今回の遺跡でもわかりますように、わずか30年の間に手法が決

して万全でないということがわかってしまいました。ということは将来、より進んだ技術やアイデアでどんどん改良し、これから 2000 年、我々が遺跡を残そうとする基本的な姿勢でなければなりません。

それが、ちょうど昭和 43 年に私が大学院生の時、お手伝いに来て以来それが御縁で洞窟遺跡の保存のお手伝いをしました。基本姿勢としては、今の技術だけで途二無二押さえ込まないこと。第一にそれが残ってきた理由・条件・環境があります。その環境要素をしっかり理解した上で上手く再現したい。ところが人間がやることは完璧ではありませんので、今回、昭和 47 年にできたものに関しても色々将来に対して不安がでてきました。それをどうするかというのが今の段階です。ですから、折り返しで私たちは、未来に向かって我々のやったことの成果を問わなければなりません。こういう非常に難しい仕事が遺跡保存の本質です。

実は世の中にもう一つあります。今やったことが将来にいいか悪いか必ず問われます。それは核廃棄物です。ご存じのように、原子力発電所の核廃棄物はプルトニウムを含んでいて、これをどう安定に処分するかというのはまだ方式が決まっています。国際的機関の IAEA では最低限 300 年間きっちり管理し、1 万年間安定にそれを処分しなさいという規定があります。ところが今私たちが一生懸命知恵をだして処分施設を作っても、それがよかったのか悪かったのか誰もわかりません。それは 300 年経って初めて、あのやり方が良かったのか悪かったのか分かるわけです。同じようにフゴッペ洞窟に関しても、おそらく 100 年経ってもそれが良かったのか悪かったのか結論ができません。1000 年かもしれないし、私は 2000 年のうちだろうと。そういった極めて難しいことをしなくてはなりません。

その時、鍵になるのは、何故残ってきたのかということを取り返してみる必要があります。過去と現在と未来を繋げて考える概念が非常に重要であります。それと地形学的に考えて、波食台ができるには 1000 年とか 1 万年のオーダーです。ある海面が上がったからその時にパッとではできません。それから洞窟ができているのは、あの方向に破砕帯と断層線が走っています。もともと弱かったのが、そういうところを波食が選択的に削って侵食を起こしました。あれだけの侵食を起こすには、侵食の速度を考えると最低でも数千年から一万年のオーダーがないとあれだけの地形が成立しません。

先ほど小泉先生がお話になりました、入れ物の時代と中に住んでいた人間は全く別だと考えています。しかも、早い時間に入りが閉塞されて、よそ者が入ってこなかった。それが遺跡の保存もいいし、その時住んでいた人々の条件もうまい具合に浸透してくれました。残念ながら、他にもあったと思われるところは、条件が整わないために、今は風化で朽ち果て見えなくなっています。ですから、フゴッペ洞窟と手宮洞窟だけにあると言わずに、実は可能性としては至る所にあったはずだろうと思います。そしてこれからも、フゴッペ洞窟が見つかったと同じように、入口が崖壁によって閉鎖された洞窟は必ずあるでしょう。そうすると、そこで新たに同じような陰刻面が出てくる可能性はいくらでもあります。ですから、現状だけで判断せずにこれからの可能性を頭におきながら物事を考えるということは非常に大切です。特に保存に関しては、何度も言いますが私たちがやったことが、10 年・50 年のうちに問われるのではなく、おそらく数百年経った時に先人達はいいことをしてくれたということが分かると思います。

今日、三浦先生が指摘してくれましたように、次々の世代に遺跡の大切さを伝えなければなりません。そのためには、遺跡のサイトを学習の場にし、当時の人々の生活ぶりを学んで、遺跡を守っていくことを同時に次の世代に伝えていって欲しいと思います。そうしなければ、遺跡はすぐに朽ち果ててしまいます。次の世代に遺跡の大切さを伝えていくということは未来への私たちの期待だと思います。

Ⅲ フゴッペ洞窟フォーラム 2001

「フィールドステーションとしてのフゴッペ洞窟」

奈良周辺における史跡の保存と活用

盛 昭 史

(余市町教育委員会 文化財課長)

余市町教育委員会の盛と申します。

奈良周辺における遺跡の保存と活用ということで、30分ほどご報告をさせていただきます。この調査につきましては、平成13年の1月28日より31日まで、4日間の日程で、江戸教育次長と私が、奈良県明日香村を中心に行ったものでございます。

最初にちょっとお断りしておきたいのですが、江戸次長も私も、専門の学芸職員ではございません。いわゆる事務屋であります。明日香村といえますのは、ご存知の通り『日本書紀』『万葉集』のふるさと、日本という国家の体制が立ち上がってゆく、そのような歴史の舞台となった場所でありまして、その歴史的な位置付けや遺跡の解釈といったことになりまして、これは生涯をかけて研究しておられる方が沢山いらっしゃるわけで、とても私のような素人がにわか勉強でお喋りできるものではございません。そこで、今回は遺跡がどのように保存・活用されているのか、フゴッペ洞窟の保存と活用を考える上でヒントとなるものがないか、そんなところをポイントに調査を行ってまいりました。明日香村に二日間、奈良市を半日という行程で調査を行ったわけですが、今日は明日香村を中心に報告を行いまして、時間がございましたら奈良市についても若干触れてみたいと思います。

ただいま申し上げましたように飛鳥地方、これは「飛ぶ鳥」の飛鳥ですが、この地域の遺跡の意味するところにつきましては、さまざまな本が出版されております。これは朝日新聞社から出ている『新しい飛鳥の歩き方』という冊子ですし、中公新書からも、最近『飛鳥～水の王朝』という本が出版されています。さらに専門的な本も出されておりますので、興味のある方はぜひそれを参照していただきたいと思います。明日香村を歩いておると、あちらこちらで盛んに発掘調査が行われておりますし、近年ではキトラ古墳ですとか亀形石遺物など新発見が相次いでおりまして、今後も7世紀の日本史に新たな記述が加えられていくのだらうなと思います。

レジュメの1ページ目に、明日香村の概要ということで簡単な統計資料を載せております。余市町との比較を載せておりますが、行政面積は余市町のおよそ6分の1ぐらいですね。この面積の中には山林なんか結構な割合を占めていますので、遺跡が集中している地域というのはさらに狭くなります。3キロ四方くらいの狭い地域の中に、古いお寺や古墳、石遺物、こういった文化財が密集しています。人口は7,500人ほどですから、後志管内ですと共和町と同じくらいでしょうか。平成元年から近年まで、ほとんど増減がありません。この明日香村というのは、大阪のあべの橋から近鉄車で40分、そういう大変アクセスのいい場所にあります。飛鳥と難波というのは、7世紀でも盛んに往来があったわけですから、現代人にとってはまさに通勤圏です。あべの橋から電車に乗りまして飛鳥駅に向かいますと、途中の町にはマンションですとか、そういった大

阪の通勤圏ということを感じさせる建物が見られるわけですが、橿原神宮を過ぎたあたりから風景が変わってきます。3階建てというような建物がありません。なにかの規制がはたっている、そういった印象を受けます。といいますのも、これは昭和55年ですか、「明日香村における歴史的風土の保存及び生活環境の整備に関する特別措置法」、通称「明日香法」というのだそうですが、これが制定されまして、景観も含めた保存策がとられている。国による保護政策が行われている。そのことで、周辺の自治体に宅地化が及ぶ中で、明日香村の人口は非常に安定した傾向を見せているということだと思えます。

明日香村へのアクセスを示しましたが、奈良市からも大阪からも、近鉄を使って大体40分くらいで着くことができます。西に大阪、北に斑鳩や奈良・京都、南に下がると吉野、そういった位置関係にあります。

これはレンタサイクルの店で買ったガイドマップなのですが、お店の方が、ぜひここを回りなさいと言って丸印を付けてくれたのです。飛鳥駅を基点に、キトラ古墳、高松塚古墳、猿石、鬼の俎板、鬼の雪隠、そして有名な石舞台古墳、酒船石、このすぐ側から亀形石造物が2000年に発見されました。まだまだ古いお寺や、宮の跡があります。地域全体が史跡なのです。

ちょっと外れたところに、奈良文化財研究所の飛鳥資料館というのがあります。自転車でいろいろな遺跡を巡ってここに行きますと、今まで巡ってきた文化財の総合的な情報・知識が得られる、ガイドランスの機能を果たす、そういった施設になっています。飛鳥で発掘された様々な遺構・遺物の紹介をしています。また、ここには発掘された山田寺の回廊が復元されています。乙巳の変で重要な役割を果たしながら、後に中大兄王子に追い詰められて自害した、蘇我倉山田石川麻呂のお寺です。建物の外にも石造物のレプリカなんかがあって、私のように知識のない者にとっては、大変勉強になる施設でした。勉強になると同時に新たな興味をかきたてられる、そういった展示がなされています。

これは、近鉄飛鳥駅を降りてすぐのところにある総合案内所です。ここで様々なガイドブックを売っていたり、モデルコースの案内をしたりしています。私たちが行ったのは1月で、シーズンオフでしたからあまりお客さんはいませんでした。係の人が3人くらいいて、親切に案内をしてくれました。

これは今ご紹介した案内所で私が買った、買いあさってきたといえますか、パンフレット類なのですが、大変多くの種類が出ています。研究者向けの報告書や大判の写真集も置いてありました。私が買ったのは一般向けの解説書や地図、絵葉書類ですが、12種類買って、5千円札を出してお釣がくる、これは、非常にお買い得だなと感じました。種類が多くて、その人の関心や知識の度合いに応じて様々な資料を得られるわけですが、注目すべきは、その刊行元ですね。村や観光協会のような公的機関だけではなく、例えばこれは「飛鳥古京顕彰会」という、発掘調査に協力をしたりしている団体の発行です。地方の出版社もありますし、東京の大手出版社から出ている研究書もあります。それで、様々な種類の出版物が揃っているわけです。さすが明日香村だなと思いました。

レンタサイクルの店が、飛鳥駅前に何軒もありました。一日千円のレンタル料でした。

これからご紹介する亀石や石舞台古墳など、主だった場所がステーションになっていて、そこで乗り捨てができるシステムになっています。途中でバンクしたとかそういうトラブルがあった場合、電話一本でトラックが替わりの自転車を積んでくる、そういった対応もしてくれるということで、これはかなりな人件費がかかるなど思いました。相当な需要がなければ、商売としていいですか、事業として成り立たないですね。1軒あたり、そうですね、200台くらいの自転車があったでしょうか。夏の観光シーズンになると、予約が必要になるくらい人気があるのだそうです。たまたま、私たちが行ったときはシーズンオフで閉まっていたのですが、老人クラブ経営のレンタサイクル店までありました。

これはやはり、近鉄電車が10分、15分という間隔で大阪、奈良から走っているということ、また、遺跡の多くが徒歩か自転車でしか行けない場所にあるということ、つまり、近鉄電車で飛鳥駅まで来て、そこから自転車を利用するというのが、明日香村巡りにおいて最も実用的な交通手段であるということなのですね。こういった条件があるから、レンタサイクル店が事業として成り立っているのだと思います。

これが高松塚古墳に至る道です。ここはもう車が入りません。写真ではちょっと見にくいのですが、旧余市福原漁場に使われているのと同じ、水が土中に染み込む透水性舗装の園路です。

これが高松塚古墳です。完全に密閉をされて、これ自体は見ることはできません。何年かにいっぺん専門家の方が見えて、中の状態を調査するというので、立ち入り禁止になっています。周囲は史跡公園になっていて、散策路などが整備されています。これはただ単に公園整備ということではなくて、古墳本体を守るために周囲の環境をも含めて整備を行うということです。私たちが訪れたときにも、しきりに排水溝を覗いている係員の方たちがいました。こういう形で、高松塚古墳という点を保護するために、面的な整備が行われています。古墳の周りをぐるっと一回りしてみたのですが、竹林の間に除湿装置のようなものも見られ、保存のために大変な技術力と労力が払われているということを実感いたしました。

古墳自体は中に入れないということで、すぐそばに「高松塚壁画館」という建物がありまして、この中で精巧なレプリカを見ることができます。レプリカもさることながら、この壁画館自体のつくりにも考えさせられました。なるほど、雪がない場所ではこういう建物が造れるのかと、フゴッペの保存施設を検討している最中だけに、今更ながらにそのことを痛切に感じました。

次に石造物をご紹介します。これは「猿石」と呼ばれるもので、吉備姫王の墓とされている場所にあります。全部で4体あります。近くの水田から見つかったのだそうです。誰が何のために作ったのか、不明です。表情がちょっと伎楽の面を連想させます。この猿石から自転車ですら3分ほどのところに、「鬼の俎板」「鬼の智隠」と呼ばれる石造物があります。道を挟んで斜面の上下に別れているのですが、これはもともと一体のもので、石室の一部が滑り落ちて現在の状態になったと言われています。面白い伝説がありまして、鬼が道ゆく人を捕まえ、「鬼の俎板」で料理して食べたあと「鬼の智隠」で用を足す、そんな言い伝えがあるそうです。

次が「亀石」です。花崗岩でできていて、これは明日香村のアイドルですね。道端、

といひましても車は通れないのですが、そこに置かれていて、特に保護のための施設はありません。民家の横に庭石みたいにして置かれています。これも境界を示す石であるとか、諸説あるようですが、いつ誰がどんな目的で造ったのか、はっきりしたことは判っていません。

亀石から石舞台古墳までは、サイクリングロードが通じています。途中、飛鳥川に沿って走るあたりには、残雪がありました。道端のところどころに小さな案内板が立てられていましたが、結構迷いました。ただ、車で迷うのとは違って、自転車ですぐというのはいくらもならないものですね。後で迷った道を地図で追いますと逆に地形がわかったり、探検気分を味わえます。看板が少ないとか、案内が不親切とか、そういったことで腹をたてるよりは、見知らぬ土地に来たら迷うのが当たり前のですから、土地の人に道を聞いたり少し迷ってみたり、そんな体験をしたほうが面白いなと思いました。まあ、これものんびりと自転車だったからということとは言えると思いますが。

これは石舞台古墳の駐輪場です。広い敷地が、シーズンには満杯になってしまうのだそうです。石舞台古墳は蘇我馬子の墓という説が有力です。呆れるほど巨大な石が積み重ねられています。大変な事業だったでしょうね。今は石室の中にも入ることができます。明日香村一番の人気スポットです。売店や休憩所もありまして、高松塚と同じように、周囲が史跡公園として整備されていました。

次は、2000年に発見されて話題になりました亀形石造物です。石舞台から飛鳥寺に向かう道の途中にあります。このあたりが、飛鳥の中心地です。この亀形石造物の裏手といいますが、岡の上に酒船石があります。いずれも、占いをしたり身を清めたりした際の導水設備であろうと言われています。このすぐ横の、富本鏡が出土したあたりに、「万葉ミュージアム」という県立のでかい博物館が建つというので、ちょっと驚きました。

明日香村の主だった文化財を紹介しましたが、有料の施設につきましては、ガイドブックを兼ねたパスポートというのが売られていて、これを買って各施設に割引で入館できる、こういったシステムになっています。全体的な印象として、先ほどちょっと申し上げましたが、明日香村にはいたせりつくせりの過剰なまでの観光サービス、ホスピタリティというのはいらないです。レストランも数が少ないですし、いわゆる観光土産も多くはありません。遺跡の上に村があって、遺跡と共存しながら日常生活が営まれている。そこがまた明日香村の魅力なのだろうなと思いました。

ちょっと時間がありますので、奈良市内のご紹介をしたいと思います。

これは、私たちが泊まったホテルの前で撮った写真です。興福寺の五重塔ですね。人里離れた山奥ではなく、街の中心部にこうした古寺があります。というか、お寺の周りに街ができたのでしょうか。これは近鉄奈良の駅前にあります案内看板です。どうも、看板というのはこういったシンプルなものが一番分かりやすいようですね。大きな字と矢印、非常に分かりやすい看板でした。ホテルの隣に奈良市駐車場公社というところでやっている駐車場がありまして、奈良公園の近辺に4箇所あるのですが、面白いなと思ったのは、段階的に料金が上がっていきませんが、3時間を超えたら一律1000円なのです。4時間でも5時間でも1000円。ゆっくり奈良をお楽しみ下さいということでしょうか。最初にこのシステムを提案した人は、偉いですね。

朝早く、江戸時代の街並みが残されているという奈良町を散歩したのです。そうすると、家の玄関先にこうしてバケツが置かれている。防火用のバケツなのです。どこの家の前にも赤いバケツが置かれているのです。ちょっと中を覗いてみたら、きれいな水が入っておりまして、多分毎朝日課のようにして水を変えているのだと思います。実際に火事になったら、このバケツではとても間に合いませんが、防火意識の高揚といえますか、心構えとしてこんなふうにはバケツを置いているのだなあと思いました。

明日香村、奈良市について報告をいたしました。実は、これをどうフゴッペに活かすかという、その部分をお話しかったのですが、時間がなくなってしまいました。ひとつだけ申し上げてみたいと思います。明日香村でも奈良市でも、文化財が生活に密着している、そんなことを強く感じました。たとえば先ほどの奈良の興福寺ですが、朝の8時ころ境内に行きますと、なにせ街なかにあるものですからお寺の敷地が通勤経路になっています。見ていますと、南円堂というお堂の前で通勤途中の人が手を合わせ、そして足早に駅や職場に向かう、そんな光景が見られました。一方で、古都奈良といえどもそこで人が生活している以上、コンビニもファーストフードもあります。興福寺のすぐそばにある商店街では、マックの前に若い人たちが集まっていました。これは、古都の旅情を楽しみに来た観光客からみれば、確かにそぐわない光景かもしれませんが、それは仕方がないことだと思いました。むしろ、こんなふう考えたのです。コンビニやファーストフードというのは、良くも悪くも現在の私たちが享受している「文化」であるわけですが、50年後100年後に、果たしてそれは今の形態のまま残っているか。とても未来永劫続くものとは思えません。対して、南円堂の前で手を合わせる人々の姿というのは、多分100年後も途絶えることはないと思います。栄華を誇った藤原氏の氏寺である興福寺の歩みは、決して平坦なものではありません。南都焼き討ちや廃仏毀釈など度重なる危機に逢い、寺域の多くを失いながらも、しかし現在ではこうして地域の人々の生活の中に溶け込んでいる。文化財保護の原点といえますか、地域の人々と文化財との共存のありかた、それを通しての文化財保護のありかたについて、フゴッペにも応用できる大きなヒントが、このあたりにあるのではないかと思います。

なにか、下手くそな観光ガイドのようになってしまいましたが、これで報告を終わります。ありがとうございました。

●吉備姫王墓の猿石 (さるいし)

4体の内、3体には裏にも顔があり、いずれも猿に似ていることからこの名があるが、製作年代や目的は謎のままである。

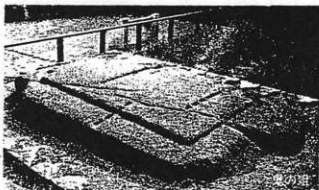
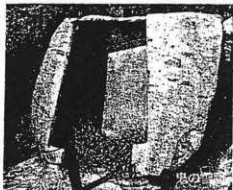


●鬼の雪隠(せっちん)

欽明天皇陵の東の小丘の斜面に鬼の俎と道をはさんで並んでいる。もとは古墳の石室の一部だったが古墳が壊され、現在の姿になって残ったとされる。

●鬼の俎(まないた)

長さ約4m、幅約2m、厚さ約1mの巨大な花崗岩。鬼の雪隠とともに古墳の石材であったと考えられている。



●亀石(かめいし)

花崗岩の巨大な自然石に、亀に似た彫刻がほぼどこまでかされている。



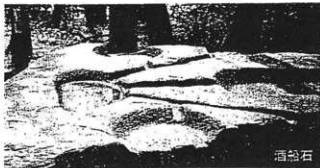
トピックス

亀石にまつわる不気味な伝説。

亀石は、以前は北向き、次に東面した。そして現在南に面しているが、西の方を向いた時、大和一斤は泥の海と化す。というこわい伝説が村に伝わっている。

●酒船石(さかふねいし)

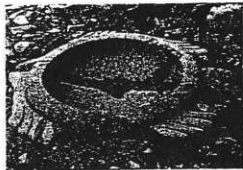
平らにした石の表面に奇妙な彫刻がほどこされた巨大な花崗岩。酒造りに使用したのいい伝えからこの名がついた。付近で石組溝や木樋が発掘されており、宮殿内への大導水施設の一部との説がある。



酒船石

●亀形石造物

全長約2.4m、全幅約2mの大きさがあり、小判形石造物から流れ出た水が、亀の鼻を回り尻尾より出ていく仕組みになっている。誰がいつ何の為に作ったかは飛鳥ミステリーのひとつである。



●石舞台(いしぶたい)古墳

我が国最大級の石室を持つ方形墳。築造には相当優れた巨石運搬技術が要求されたことを物語っている。蘇我馬子がこの付近に住んでいたのと、墓が巨大であったという記録から一般に馬子の墓とされている。



石舞台古墳

●高松塚(たかまつづか)古墳

飛鳥の西南、檜隈(ひのくま)の里の文武天皇陵近くにあり、昭和47年に彩色壁画(国宝)が発見され一躍有名になった。被葬者についてはかなり高貴な人物とされ、一説に天武天皇の皇子である忍壁(おさかべ)親王との見解があるが、あくまでも推論の域を脱していない。

●キトラ(亀虎)古墳

高松塚古墳の南にある円墳。昭和58年と平成10年の内部調査で天文図と、四神像のうち3体(玄武・白虎・青龍)が確認された。キトラの名の由来については、土地名のキタウラがなまってキトラとなった説と、盗掘口より古墳内をのぞいたところ、亀と虎の絵が見えたのでキトラと名付けられたという説がある。

ハバロフスク州の岩面刻画とその活用

浅野 敏昭

(余市町教育委員会 学芸員)

余市町教育委員会の浅野と申します。宜しくお願ひします。皆さんのお手元の資料、6ページから9ページをご覧きながらお話ししたいと思います。

今回調査に行きましたのは、シカチ・アリヤン、シェレメチェーヴォ、キーヤ周辺の岩面刻画です。昨年はフゴッペ洞窟発見50周年ということで記念のシンポジウムを行いまして、今回のフォーラムは北海道開拓記念館の3年間の科学研究調査として、国内外の岩面刻画の調査や科学研究の主題であるフィールドステーションとしてのフゴッペ洞窟をいかに充実させるかということで報告をしています。私が報告するのは、極東地方ハバロフスク州での調査についてです。

調査は10月21日から11月3日までの期間で行いました。極東地方は寒いということで、心配していたのですが、雪が積もったのが最後の三日ぐらいで、大変行程に恵まれた調査でした。調査で訪れた場所ですが、レジュメにロシア沿海州調査地と位置図とし地図を載せています。シカチ・アリヤン、シェレメチェーヴォ、それからキーヤの3地点です。かつてアムール川やシベリアの岩面刻画について、オクラドニコフさんという方の書かれた『黄金のトナカイ』の中でアムール川流域のシカチ・アリヤンとシェレメチェーヴォが紹介されていて、これを一体誰が描いたのか、どんな絵が描かれたのか、直接確かめたいということで行ってまいりました。その地方には今でもナナイですか、いろいろな先住民族が暮らしています。極東地方に暮らす少数民族がそれらの岩面刻画を描いたのかどうかはわかっていません。

はじめにハバロフスク州郷土博物館を訪れました。そのすぐそばにはアムール川が流れていました。アムール川はロシアから中国に向けて流れている川です。郷土博物館は、レンガ造りの総合的な博物館で、私達が訪問した際にはびっくりなしに親子連れなど多くの地元の方が来ていました。小学校の団体も賑やかに見学していました。郷土博物館の館内では、職員のアンナさんが主に20世紀のソ連・ロシアのことを解説してくれました。館長室では、今回の調査日程の打合せを行いました。アムール川は中国との国境となっていて、調査では軍の敷地を通過することもあって、いろいろと手続きが必要でした。

郷土博物館のすぐ近くには考古博物館があります。入口前の案内看板にはサカチアリヤンの鹿が大きく描かれていて、この鹿の絵は館内のミュージアムショップで買物をするともらえる袋のデザインにもなっています。館内には、岩絵、岩面刻画が広いスペースを割って展示されていて、鹿ですか、人の顔の刻画を見ることができます。

さらに、オクラドニコフさんが調査をされている写真が展示されていました。この写真は冬で、シカチ・アリヤンの岩絵が白くなっているのは雪です。

シカチ・アリヤンの岩面刻画についてお話しします。この刻画は、シカチ・アリヤン村にあります。村のはずれには川が流れていて、のどかな風景です。この村の中に小学校がありまして、私たちがバスで着きますと地元の小学生が首飾りのようなお土産を持って『買わない？』と集まってきました。ここには岩面刻画の調査のために、ロシアは勿論、ヨーロッパなどからも研究者が来るそうで、私達もこの子どもたちとすぐに仲良くなりました。

川岸の長い範囲に黒っぽい岩がごろごろしておりまして、この崖面から崩れた岩が転がっています。私達が訪れたのは10月の末でしたので、昨年行ったときよりも川はかなり水が引いた状態でした。冬期間の川の凍結や、雪解けの増水で大きな岩が動きます。ですから、今見ている岩も来年になると動いてしまうかもしれない。それを詳しく見ますと、岩の下のほうに水が上がってきた跡が線になっているのが見られます。刻画には、何重かの丸で顔を表わしたものが、赤色顔料が付いているものもあります。猿のような顔があります。また、動物のような顔もあります。シカチ・アリヤンでは鹿のような動物ですとか、顔、船などの種類が見られます。その印象としてはあまり動きがない画像が多いということを感じました。

固い岩にどうやって線刻が描かれたかという言い伝えを聞いたのですが、それは、昔この一帯は、太陽があまりにも近すぎたため、ものすごく暑かった時代があり、固い岩がロウの様に柔らかくなってしまって指で描くことが出来たのだそうです。もう一つの伝説のバリエーションとして、誰かが描いたのではなく、石がロウの様に柔らかくなった大昔のある時代に、さまざまな怪物が自分の姿を押し当てて残したものではないかというようなお話もあるそうです。さらに、もう一つは、太陽が熱く、川が熱く、魚も死んでしまうような厳しい環境を今のようなおだやかな環境に変えたシャマンを記念して、こういった岩絵が残ったというものです。

極東地方は寒い気候であるのに、昔は太陽が煮えたるように暑かったというのは何を指していたのか、想像の産物であれば何故そういった想像が出来たのかということですが、オクラドニコフさんが考えたのは、岩絵の分布がロシアですとバイカルとか、シベリア方面、さらには千島列島まで広がっていて、それらの分布は更に広がって、かつては暑いオセアニアにまで広がっていたのではないかということでした。

ここで、当然余市町の人間として考えるのが、千島列島まで来ているのなら、フゴッベ、小樽の手宮まで来ていたと考えたいのですが、あまりにも範囲が広過ぎます。また、描き方ですとか、モチーフもことなっているようです。

刻画の中に、サル顔のようなものがありました。これは考古博物館の看板にもありました鹿です。また、何重もの丸で猿のような顔を描いたものは、先ほどオクラドニコフさんが雪をすり込んでいた写真の刻画だと思うのですが、私達が見たときには雪ではなく、残念にも赤の綺麗なチョークが入っていました。

シェレメチェーヴォの岩面刻画についてお話しします。この刻画は、ウスリー川の岩壁にあります。ウスリー川の対岸は中国になります。私達の調査中も中国側の軍の演習でしょうか、大砲の様な音が聞こえてきていました。

このウスリー川の岩壁は、大体4mぐらいの高さだと思います。こういった黒い岩に刻画が刻まれていて、白又は茶色っぽいような、まだら模様になっているところに顔の刻画があります。ひょろ長い顔に、顔の輪郭から炎のような線が放射状に出ているものがあります。残念なことに過去に崩落があって、顔の下の部分が欠損しています。チョークが入っていて、はっきり見える刻画もあります。この刻画は、顔の楕円形の下がカットされたような状態です。また、鹿の刻画もみられます。角がありますが、前半分には縞模様を描かれていて虎のようにも見えます。水鳥もあります。最初に見た時は魚の顔にも見えました。魚の上に2本の線があつてまるで塩を吹いている顔にも見えて鯨かと思ったのですが、そうではなく首をもたげる格好の水鳥でした。船もあります。これに似た刻画はフゴッペ洞窟にもあり、船形に見える横線の上に縦線が16本ほど並んでいます。

シエレメチェーヴォは、角張った大きな岩がたくさん崖から出ていて、崖下にもごろごろと岩が転がっていて歩くのが大変で、上から今にも落ちてくるのかと不安になりながらの調査でした。

キーヤ川の岩面刻画についてお話しします。この川の左側に見える岩壁に刻画がありました。アムール虎と呼ばれている刻画があります。キーヤとシエレメチェーヴォは比較的近くにある遺跡で、双方に顔を描いた刻画がありますが、キーヤに見られる刻画で顔を描いたものを見ますと、シエレメチェーヴォと違って放射状に伸びる線が少ないものでした。例えば顔の上にチョウの触覚のような表現があります。比較的コミカルなものが多かった様に思います。また、赤い色で彩色されたものがございまして、船に見えます。シカチ・アリヤンのものと同じく横線と縦線で構成されています。刻画の表面が全体に白く見えます。石膏が皮膚のように覆っていて、刻画を偶然に保護している格好の様な印象でした。ただ時間の経過で白色の皮膚が多くなると、これに埋もれて見えなくなってしまう危機も同時にあります。

川岸を横からみますと運が悪いことに岩壁に走っている亀裂が全て落ちる方向に走っていて、岩が落下する延長線上に顔の刻画がありました。岩の落下が10年先なのか、100年先なのかはわかりませんが心配です。

今回の調査中に、刻画のあるスクパイというところの近く、グワシギという村にホームステイすることができました。川が流れていて、板を渡した橋がありましてそこを人が歩いているのですが、この川を私達のバスや先導してくれた車が渡りました。先導してくれた車が普通の乗用車で、この車が渡る時に川にはまりました。日本ですと緊急事態ですが、同乗していた副館長のラリッサさんは落ち着いたものでした。マフラーも完全に水面に沈んで車が再び走ることが出来るかどうか心配でしたが、皆で押して、牽引ロープで引っ張り上げました。ロシア側の同行した人達は平然としていました。この川は、村の中央を流れていて、生活の水はこの川の水を利用しています。飲み水はこの川から汲んだものを沸かして利用する生活をしています。今回ホームステイしたのは、お父さんがロシア人でお母さんがナナイ人という家庭でした。私たちに護衛といひましようか、随行してくれた若い警察官がいたのですが、その警察官の両親の家ということでした。

その夜にシャマンのお祭りを見学しました。中央で衣装を着たヴァレンチナさんという女性がこの村に代々受け継がれてきたシャマンの名字を持っている方で、シャマンの力を持つ方でもあります。村の皆さんが集まってお祭りの様子を再現してくれました。焚火がありまして、それを前にしてヴァレンチナさんがお話するのを通訳してもらい、踊りや楽器の説明を聞きながらの見学でした。村の若者やお年寄り、子ども達皆が集まりました。私達はカメラを持って撮影したのですが、太鼓やバチを持ちまして、小・中学生位の子も達が踊ってくれました。シャマンは、顔にマスクをかぶり、片手に太鼓を片手にバチを持ちまして、腰にじゃらじゃらと鳴るもの、金具といひますか、飾りがベルト状に付きまして、腰を振りつつ、ドラムを叩きます。私達も踊るように諭されて踊ってみましたが、かなり難しい踊りでした。踊りながら、焚火の周りをぐるぐる回るのでした。

シカチ・アリアンの小学校についてお話しします。小学校の中に小さな博物館がありました。博物館の中は想像以上に資料がありまして、例えば、貝殻や金属製品が縫い付けられたエプロンの様なものがありました。その博物館の壁高くにシャマンの絵が描かれていて、これが先程のグワシュギの村でのシャマンの装束と似ているものでした。毛皮の衣装をまとい、太鼓を持って、じゃらじゃらと鳴る帯を腰に巻いています。そしてマスクを顔につける。すごくいい絵だなと思ひまして写真を撮ってきました。また、生徒達が手作りしたシカチ・アリアンの刻画の岩を模したミニチュアといひましようか、レプリカがありました。地元の小学生が、自分たちの村にある岩絵に誇りを持っている様子が感じとれました。

マキシム君という14歳の少年がこの小学校に通ってひまして、私達にお土産を売ってくれました。マキシム君に岩絵を知っているかと尋ねたところ、彼が知ってひまして「僕はある人たちの見ていない岩絵を知っているよ」ということで、案内をしてくれました。ここに、たくさんひ刻画がありまして、「さすが、マキシム君」と皆で誉めながら見せてもらひました。

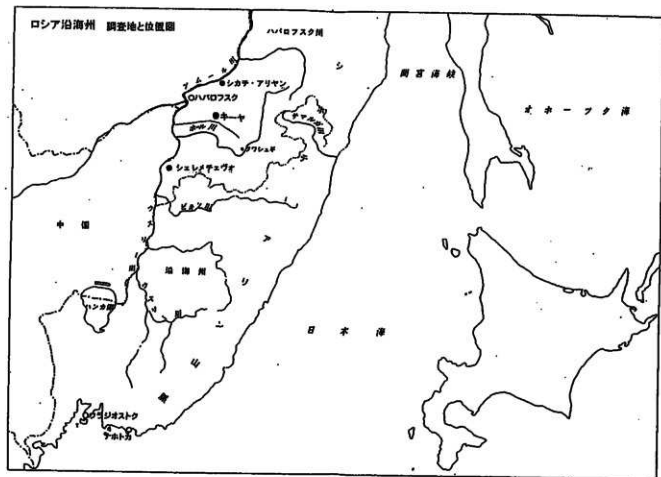
最後にナナイ人が住むサカチアリアンの村を見て頂ひしましたが、この小学校の中に博物館がありました。また、この村で小学生や地元の人が現金収入を見込んで作ったものと思われ様なお土産をたくさん目にしました。

この村とフゴッペ洞窟とを比較しながら考えたのですが、将来的にフゴッペ洞窟の保存施設はフィールドステーションという名前と機能を持つ場となります。そこは単なる保存と展示の場だけではなく、何かを出来る場所にしたひと漠然とですが考えてひます。何かを出来る場所といひるのは、体験学習が出来る場所であり、フゴッペ洞窟あるひは類似の遺跡を深く知りたひといひ人がいれば、遠く極東地方の岩絵や他の刻画が見られる場所です。同時にフゴッペ洞窟を中心とした周囲の遺跡を紹介する核となる施設にも成り得ます。周辺には大谷地貝塚や西崎山環状列石、小樽市では忍路環状列石などがあり、遺跡を巡るゾーンが出来そうです。また、それにもう少し幅を拡げて、余市町ですと、積丹半島の入口的な機能を持たせたいと考えてひます。ガイドを充実させることも可能かと思ひます。今日お集まり頂ひている方にも、現在ボランティアで解説をして頂ひている方もたくさんいらっひひまして、そういつた先輩といひましようか、年長者が中

心となって、地域住民の方から更にボランティアの輪を広げることが出来そうです。

こういったソフト、ハード両面を合わせて考えていきますと、博物館的施設とフィールドステーションの施設を兼ね備えた施設となります。あまり流行りの言葉を使うのは嫌ですがエコミュージアムという考え方がありまして、エコミュージアムとは何なのかということですが、これまでの博物館は建物があって、収集した資料があって、専門家がいて、お金を払う訪問者がいるというものだったのですが、今度は、領域があって、領域というのはぼんやりとした言い方なのですが、その領域の中に遺産があって、それらをつなげたものがエコミュージアムとなります。先程のナナイの村で言いますと、サカチアラン遺跡があって、ナナイという民族がいて、そのサカチアラン村に年長者がいて、地域の住民がいて、そういった方々が有機的に結びついていくというものです。それを余市町のフゴッペ洞窟にあてはめて、今ある色々な素材をつなげて考えてゆくことはできないものかと考えています。

「フィールドステーションとしてのフゴッペ洞窟」という科学研究で、そういったことを考えながら今回の調査旅行をしてみました。



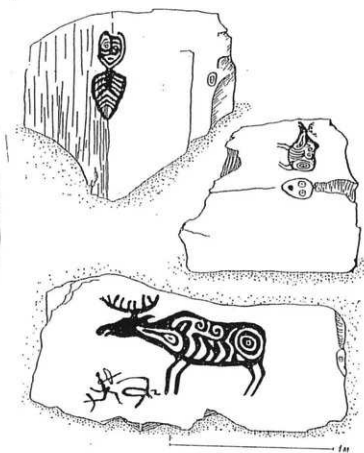
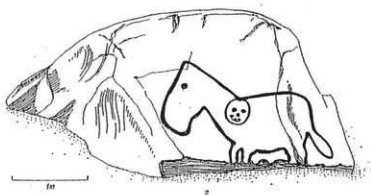
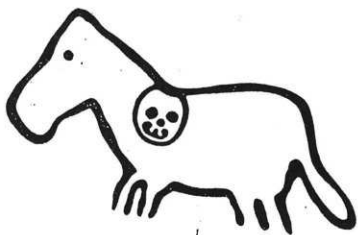


図1 シカチ・アリヤンの岩面刻画



図2 シェレメチェヴォの岩面刻画



図3 キーヤの岩面刻画

九州における史跡の保存と活用

乾 芳宏

(余市町教育委員会 文化財兼学芸係長)

みなさん、おはようございます。文化財の考古学を担当しております乾と申します。私のほうからは九州における遺跡の保存、活用ということで、話をさせていただきたいと思います。いま課長のほうからお話がありましたが、明日香村というような歴史ある町ということでご紹介があったのですが、私のほうはどちらかといいますと、博物館の活動というのを中心に見てまいりましたので、それにそってお話をしていきたいと思います。レジュメになりますので、見ていただきたいと思います。私が見てきたのは、まず一つに肥後古代の森、県立装飾古墳館でございます。

場所の確認ですが、熊本県にありまして、たくさんの古墳群がある中のちょうど真ん中に装飾古墳館というのがあります。装飾古墳というのは、亡くなった方が葬られている石室でその壁に三角形文様で赤や黒とか、奇麗な色彩で絵画を描いたりしていて、実際に本物は、ほとんど見る事ができません。この古墳館では主要な装飾古墳の実物大のレプリカを沢山展示しており、実際に大きさもわかりますし、目の不自由な方の場合には触れることもできますので、非常に役に立つものと思っています。この周辺には多くの古墳群があり、普通、古墳といいますが、墳丘に登っては行けません、ここでは自由に墳丘に登って遊ぶことができ、古墳が身近となっています。

教育普及活動も盛んにしておりまして、常にいろんな方々の、家族連れの参加を企画しています。古代体験教室というのが、ありましてそれを見ますと古代の勾玉づくり、染めもの、古代体験キャンプ、古代絵画教室、縄文土器づくり、縄文どんぐりクッキーづくり、陶器づくり、そういったいろいろな事業をしています。ここで特にお気づきの方もいると思うのですが、色というものについて非常にこだわった企画を組んでいるということがわかります。というのは、色というものが非常に大切なものですので、そういう意味では染めものとか、古代絵画とか、実際の自然色を使って事業を展開しています。

これは先ほどお話ししましたが、古代の色付けをしているもので、実際に自然の岩をくだいて色を作っていて装飾古墳にちなんだ事業といえます。フゴッペ洞窟であれば石に何かを刻むと言うことになるのかなって思います。これは装飾古墳館の裏の炊事場です。

庭が広いので、炊事、キャンプもできますし、いろいろなことが博物館をふくめて一体となった施設だといえます。これは公園の中にある売店になります。最初はなぜ、こういう丸い形をしているのかなって思ったのですが、考えてみたら、古墳群と自然の景観とを合わせた建物ということで、古墳の形をしています。このすぐ周辺には公園がありますので、子供連れで家族が楽しめる場所になろうかと思えます。

それから研究活動としまして全国の装飾古墳を、常に調査しておりまして、一年一年そういった本をまとめられ、一般の方々に配布しています。それから販売品としてのお

みやげ品はほとんどありませんが、本類はある程度まとまっております。目をひいたのが熊本県の文化財ハンドブックという小さな本があります。昭和50年からずっと現在まで同じものが販売されていますが、よくまとめられていて参考書となると思います。

それを見ると古代から最近の民俗とか、いろんな生活習慣までがわかるようになっております。縄文土器、武具、神社などが掲載され、一冊あると大体の文化財がわかるものです。博物館の方からもぜひこの本を読んでほしいとのことでしたので紹介しておきたいと思います。

このようにすばらしい施設なのですが、交通の便が悪く、案内板をあまり見かけません。

来客の大半は自家用車できているものと思います。私たちもバス停においてからガイドブックで何度も確かめて行ったしです。

次に、県立九州陶磁文化館というところですが、これは伊万里の里とも言われております。余市町で発掘調査しました大川遺跡や入舟遺跡では、非常に多くの伊万里焼が沢山出土しています。この九州陶磁館では、本家本元の焼き物の里でありまして、そこに博物館があって、博物館と町づくりとの関係が興味をひくところで。

地図を見ていただくとわかりますが、実は有田の町で開いている陶器市というのがありまして、全国から焼き物に興味のある方々が集まってきます。ちょうど有田駅を下りますと大きく九州陶磁館というのがあります。

これは何かちょっとわかりにくいと思いますが、実はいろいろな商店街のちょっとした玄関や壁に焼き物を埋め込んでいます。というのは、ここは生産地ですので、窯を一回焼きますといろいろな作品が割れたりするわけで、それをただ投げるのはもったいないということがあって、そういった割れたかけらを店の壁や橋の欄干とかに焼き物を埋め込んでデザイン化しているわけで、それが町的美観を醸し出しているようなことで非常におもしろいなと思いました。ですから、町並みをずっと買い物しながら歩いていくと、自然と陶磁文化館に入れるという形になっております。ここは料金が無料ですので、気軽にその入館が出来て貴重な焼き物を見ていく。そしてこの九州陶磁館で本物の歴史的な焼き物を見た後に、店屋さんでいい焼き物を買っていく。そういったことで非常に焼き物を見る目が養えるというとてもいい面があるかと思います。この館の特徴ですが、伊万里を研究する方、焼き物をする方は、どうしても来なければならぬと思います。ここでは、近世・近代の陶芸、現代の陶芸、それから柴田夫妻コレクションというのがあります。1000点近く展示してありまして、非常に日本の焼き物を知るうえで重要な位置を占めています。それから、教育普及活動ですが、特別展、講演会、その他に図書館もあります。販売品ですが沢山ありまして小学校から一般、専門の方々を含めた、丁寧な焼き物の本がたくさん刊行され、それから焼き物で作られたおみやげ品も置いております。

次に吉野ヶ里遺跡です。みなさんはすでにテレビ等で見ておられると思いますが、縄文時代では青森の三内丸山遺跡、弥生時代では九州の吉野ヶ里遺跡と、二つの有名な遺跡があります。吉野ヶ里遺跡は、団地造成の工事中に発見され、大変な遺跡が出たということで、一時期は魏志倭人伝にあります邪馬台国ではないかという話もありました。

現在は史跡公園として整備されているところです。吉野ヶ里駅ができ、少し歩きますと、周りは田園となっております。ずっと歩いていきますと遺跡内の樓閣が見えます。ですから非常に歩きながらわくわくして公園に着きます。以前は手前に竪穴住居ぐらいしかなかったのですが、現在はこういった樓閣ができ、整備されているということで、当時の弥生遺跡の壮大な背景というのが理解できるようになったと思います。

OHPでの説明はこのぐらいで終わりますが、全体を通して感じたことについて若干触れてみたいと思いますが、やはり史跡というのは静かなもの、心落ち着くものではないかなと思っています。やはりいろんな史跡を見る場合に交通網が整備されているかですね。交通案内等が看板等で丁寧に作られていると非常に一般の方々が行きやすいというのがあろうかと思っています。そうしますとフゴッペ洞窟という交通の便のいい場所だなあと思いますので、フゴッペ洞窟を中心とした遺跡のつながりというのが今後大きな町づくりに関係してくるのかなと私自身は思っております。

それから、出版活動ということですが、やはり専門書だけではなく、小さな子供の絵本から専門書まで本があると、わかりやすいのかなと思っています。

それから、博物館というのは、展示だけではなく様々な事業を常に行う、そういうことによっていろんな方々と交流し、それがいろんな町のイベントになって相乗効果となればと思っています。そういうことで、今後博物館活動、フゴッペ洞窟の施設を今後どう運営していくかについて非常に参考になったと思っています。このへんで、私の話を終わりたいと思います。

古代体験教室

定期開催



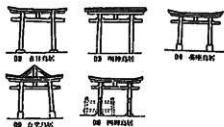
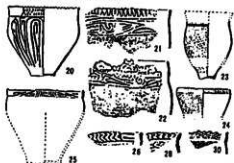
期 日	時 間	内 容	定 員
5月13日(上)	10:00~12:30	古代の粘土づくり ～滑石を削り、彫いて勾玉ペンダントを作る～	100
5月27日(土)	10:00~12:30	古代の粘土づくり ～滑石の糸取り～	100
6月10日(土)	10:00~14:00	古代の染め物づくり ～絹の糸取りと草木染めで古代の染め物を再現する～	30
6月24日(土)	10:00~12:30	古代の粘土づくり	100
7月8日(土)	10:00~14:00	古代の染め物づくり	30
7月22日(土)	10:00~12:30	古代の粘土づくり	100
7月29日(土)	13:00~12:00	古代の粘土づくり ～古代の「食」や「衣」を楽しみながら体験する～	50
8月12日(土)	10:00~14:30	古代の染め物づくり ～絹の糸 (ペンダント) を作り、石版に文様を染く～	30
8月26日(土)	10:00~14:30	古代の染め物づくり	30
9月9日(土)	10:00~14:00	古代の染め物づくり	30
9月23日(土)	10:00~14:30	古代の染め物づくり	30
10月14日(土)	10:00~13:00	縄文土器づくり(形づくり) ～粘土を練って縄文土器を作り、野焼きする～ *野焼きは、11月11日(土)	30
10月28日(土)	10:00~12:00	縄文土器づくり(形づくり) ～木の炭を焼き、焼き石でクッキーを焼き上げる～	30
11月25日(土)	10:00~12:00	縄文土器づくり(クッキーづくり)	30
12月9日(土)	10:00~14:00	形づくり(形づくり) ～古代、中性から始まった陶器を作成する～ *色塗り・窯入れは1月13日(土)	30
1月27日(土)	10:00~13:00	縄文土器づくり(形づくり) *野焼きは、2月24日(土)	30
2月10日(土)	10:00~12:00	縄文土器づくり(クッキーづくり)	30



第5図 土器資料

34

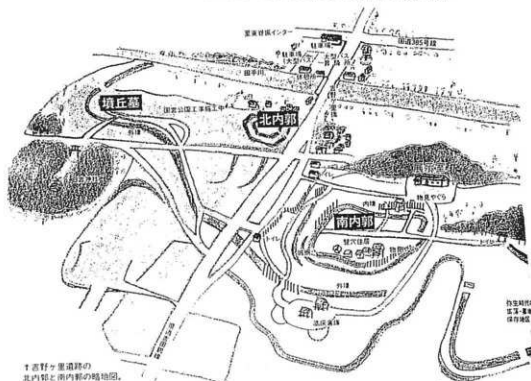
縄文式時代の土器(中期・後期)



第1図 肥後古代の森・県立装飾古墳館の関連資料



第2図 県立九州陶磁文化館と周辺地図



第3図 吉野ヶ里遺跡の概略図

ロシア極東地域の岩面刻画とその活用

右代啓視・添田雄二
(北海道開拓記念館 学芸員)

はじめに

只今、ご紹介に預かりました北海道開拓記念館の右代でございます。

この研究の中で一番の課題でもあります、余市町フゴッペ洞窟の岩面刻画がどこの地域から影響を受けて、だれが何時、描いたのかということでございますが、発見以来、ずっと不明な点がございまして解決に至っておりません。それを描いた人は、在地の人か、それとも移動してきた人たちなのかということです。しかも、岩面刻画のテクニクは、いわゆる北回りで伝わったのか、それとも南回りで伝わったのか、それとも直接、大陸から伝わったのかという伝播経路の問題もあります。それらが未だ解明されていない訳ですから大変なことなのです。午前中に浅野学芸員の報告がありましたが、大陸のアムール川の河口にある、舟の形をした刻画がありました。その刻画とフゴッペ洞窟の舟の刻画が非常に似ていたと思うのですが、それだけでフゴッペ洞窟の刻画とつながりがあるかどうかを決めるのは、非常に問題があるのです。

そのアムール川下流域の岩面刻画とか、もっと広い地域の岩面刻画がどれだけ分布している、その岩面刻画が現地で誰がどのように描いたか、年代を含めて比較研究を行い、それが余市町フゴッペ洞窟の岩面刻画とどのように関わっていくか、総合的に研究を進めるのが非常に大切なことになってきています。しかも、その中で余市町フゴッペ洞窟が、将来に向けてどうゆうように位置づけられて地域の人に愛されるような文化財になるのかというのが、これからのもう一つの大きな課題でもあります。

資料の16ページをご覧ください。北海道と対岸する大陸の地域で岩面刻画が分布しているところは、8番のシェレメチェーヴォや7番のシカチ・アリヤン、その他に、それらの近くに位置するキーヤという岩面刻画があります。こう見ていただいてもわかりますが、アムール川に沿った地域に岩面刻画が残されているわけです。その他にバイカル湖の周辺域にもたくさんの岩面刻画が残されていることがわかります。モンゴル共和国からロシアにかけて、さらに中国、朝鮮半島と広い地域に岩面刻画がたくさん分布しています。これはほんの一部ですが、15ページで示したスックバイ岩面刻、オホーツク海北西域のマーヤ川河岸の岩面刻画、さらに東シベリア沿岸のベクティメリ川河岸の岩面刻なども知られている。

これらの地域の岩面刻画の調査に出かけ、先に話した課題について念頭に置き、これまで調査してきた地域について、東シベリア海沿岸域、オホーツク海北西域域、アムール川・ウスリー川支流域の岩面刻画を三つの地域にまとめて報告いたします。

I 東シベリア海沿岸域の岩面刻画

はじめに、東シベリア海にそそぐベクティメリ川があります。海岸から川沿いに何 km か内陸に岩面刻画があります。その岩面刻画は、17 ページに 3 段の岩面刻画の図を示しました。15 ページの地図を見ていただいたらわかりますが、いわゆる東シベリア海に通じる川がベクティメリ川でありまして、河口にはロング海峡がありまして、東シベリア海に通じる、そういうような場所に位置しています。

ここに描かれている岩面刻画を見ていただいてもわかりますが、人物が多いことがわかります。ベクティメリ川河岸の岩面刻画は、これまで全部で 11 カ所の遺跡が確認されています。その中で、例えば、17 ページの上段の図ですが、これはベクティメリ川河岸にみられる 1 番目の岩面刻画ですが、こういう刻画のモチーフを数えろと 113 カ所で確認されています。それを見ますと、余市のフゴッペ洞窟と大きく違うところは、トナカイとか、鹿のたぐいだと思われる刻画が描かれています。また、イヌのような四足獣的な動物を描いている刻画があります。それともう一つは、人物像ですが、それらの頭にキノコのカサか、帽子状のものをかぶった、そういう人物の頭が描かれているわけです。フゴッペ洞窟の岩面刻画の人物を見ますと、頭に角をつけたとか、背中から羽根があったりとか、そういうような特徴的な人物が描かれているわけですが、それらを比較すると若干の違いが見られます。

次は、17 ページの中段の図ですが、これは 4 番目遺跡ということです。この特徴的な岩面刻画は、これも余市のフゴッペ洞窟にも見られるかと思うのですが、海獣、おそらく鯨に似た動物を描いたと思われるものがあります。また、それらに舟も描かれています。クジラを追って、舟がずっと追って行っているような様子を想像させる岩面刻画も残されています。また、トナカイが飼育されているような岩面刻画や鳥と思われる動物が卵を産んでいる様子とかが描かれています。

最後の図ですが、17 ページの下段の図、これは 11 番目の遺跡なのですが、河川沿いの岩場に描かれています。クジラ票を行っている様子が描かれています。大きなクジラに船のようなものを舟から突き刺しているかのように見えます。その他には、一般的な人物像、それとやはりトナカイの飼育の状況を示しているのか、それを捕獲しているのかという状況がうかがわれるわけです。また、何の動物かわからないが四足獣についても描かれています。

非常に共通したところもあるのですが、これがはたしてフゴッペと同じかということにはならないものと思われれます。また、ベクティメリ川河岸の岩面刻画から推測すると放牧民、あるいは狩猟民的な岩面刻画が見られると思います。また、岩面刻画の凹みにベンガラを充填して使用している特徴がある。

II オホーツク海北西岸域の岩面刻画

この次はビデオをお見せしたいと思うのですが、地図にもありますように、これはマヤ川で発見された岩面刻画です。ペイントで描かれているものもあります。これまでの 3 ヶ所の岩面刻画が見つかったわけですが、第 1 ヶ所目にはスベンダムという遺

跡名が付いています。もう一つはアバゲージという名前が付いています。3つ目はまだ名前が付いていないのですが、これは考古学をやっているかたが一番はじめに発見されたところから名前がつけられたものです。この遺跡は、ハバロフスクのテレビ局に働いている記者が見つけて、その映像を撮ったものがあります。これを後で、ビデオでご紹介したいと思います。

その中には人物像があったりとか、鹿などの動物が描かれていたりとか、そういうものが見られるわけです。先ほどの岩面刻画と共通しているのが、ペンガラを使って描いているということが、非常に共通しています。

III ウスリー川流域の岩面刻画

もう一つは、先ほど浅野学芸員の報告で、グワシギ村を訪ねたということの説明されたかと思いますが、スックパイという岩面刻画の情報を得ることができました。それが18ページに載せてあるものです。ウスリー川流域の岩面刻画ということで、スックパイの岩面刻画を、これも後で、ビデオでご紹介したいと思います。

これまでウスリー川の流域では、シェレメチェーヴォの岩面刻画とか、キーヤ川の岩面刻画などがありますが、それにくわえてスックパイという岩面刻画の遺跡があるということです。ちょっと見づらいかもわからないのですが、地図のところにホールと書いてあるのですが、ホール川とウスリー川があるのですが、ウスリー川の支流にホール川があり、さらにその支流にスックパイ川があります。そこの川岸の岩に、岩面刻画が描かれているのです。これは、どういう絵がえがかれているのかと申しますと、18ページになるのですが、やはり舟を思わせるような刻画があつて、さらにこれに人物や馬に乗った人物が描かれています。非常にフゴッベと共通する刻画が、頭に角状のものがあることですが、これは絵だけで比較しただけなら確かに似ているわけですが、時代とか、さらに刻画のテクニックなどを考えると、非常にギャップがあるわけです。例えば、ここに馬に乗った人物がいたり、これは、馬かどうかはわからないのですが、馬が逆にこういう地域に入ってくるとなると、やはり年代的には非常に新しい時期になるのではないかと考えるわけですが、こういう岩面刻画があります。年代を騎馬像から考えますと、渤海のころの時代を想定できるかと思えます。

その他に、グワシギ村に行ったときにいろいろな方のお話を聞いてわかったのが、カフェンという川があるのですが、これも先ほどのホール川の支流にあたるわけです。ホール川の支流にあるところに洞窟があつて、そこに岩面刻画があるという情報を得ています。これも実見したわけではありませんが、情報として岩面刻画を探そうとしたら、まだまだ無数にある可能性があるということです。また、その周辺にマギーリニ川があり、その支流の名前のつかない川にも岩面刻画があるといわれています。

もう一つは、アムール川の下流になるのですが、ここにコムソモレスクナアムールという比較的大きな町があるのですが、そこに石板状の岩に刻画が描かれているものがあるわけです。これも、調査では実見できなかったのですが、そういう情報を得たということで、これも余市のフゴッベのフィールドステーションの中で、いろんな形で反映できるのではないかとこのように思っております。

(ビデオ)

それでは、まずビデオを見ていただければと思います。

はじめに、マーヤ川の岩面刻画の状況を見ていただきたいと思います。こういうきりだった岩のところに、刻画が描かれているわけでありまして。必ず我々が調査行ったときには、山登りの服装を持ってきて調査に来るようにといわれます。また、ペインティングで描かれている岩絵があります。また、彫り込まれているものもこのようにあります。これもそうです。ちょっと見づらいのですが、点々と岩面刻画がありまして、非常に川のふちで、大変危険なところとにあります。この調査でマーヤ川の岩面刻画を実見したかったのですが、テロの問題とありまして、なかなか現地には到達できなく、情報だけで終わっております。崖の所とは、険しくなっております、そのようなところに描かれているわけです。非常にフゴッベの人物像にもよく似ているものもあります。このように、マーヤ川の岩面刻画は、危険の多いところで描かれています。人がどのようにして、ここまでたどりつき、また危険をおかし、描いたのか、疑問が多く残ります。

次はスックパイの岩面刻画のビデオを見ていきたいと思います。スックパイのほうは、3、4年前に現地に行って調査をした場面ですが、先ほどシェレメチェーヴォやキーヤ川の岩面刻画で仮面をモチーフとした報告が、浅野学芸員からあったかと思いますが、この岩面刻画は人物像が中心となるものがほとんどです。この調査を行ったのは、グワシギ村の方で、その人たちの聖地でもあります。丁度、岩絵の調査を行っているところですが、ちょっと赤っぽく、人の形をしているところが見えます。これはベンガラで岩絵を描いているものです。紙を貼り付けて形状を計測したりしているところですが、この岩面刻画も川のふちにあつて、舟をやつと岩絵の所に接岸させて、調査をしている状況がわかるかと思ひます。非常に調査条件が厳しい環境にある遺跡です。丁度、これが人物像です。これは騎馬像、馬に人が乗っている様にみえます。見ていただいてわかりませんが、舟を岸壁につけて調査を行っているというのがわかるかと思ひます。ここには、簡単に何回もこれところではなく、なかなかここまでたどり着けるところではないということを開きました。

また、川の水が少なくなる時期に出かけると聞きました。やはり、9月15日以降になりますと、狩猟期に入りますので、みなさんが狩猟に出でしまいますので、現地まで案内してくれる人がいないということもあります。フゴッベ洞窟に通じる岩面刻画が残っているということですが、このような状況で現地調査はできませんでした。

このあと、岩絵の中に、チョークで岩面刻画の範囲を描いて、全体がわかる様になります。これが今、チョークで刻画の部分塗りをしているところですが、さらにわかりやすいように作業をしているところなのです。この岩面刻画も長く保存することができると考えると、岩面に亀裂が見えるかと思ひますが、おそらく時間の問題で消滅していく岩面刻画でもあります。フゴッベのように長年保存されるというようなものではなく、自然のままにしてありますので、非常に保存を考えると消滅の危機にひんした岩面刻画であります。ロシアの場合は、ほとんど自然のまま放置していると言ってもいいかと思ひます。

ビデオありがとうございます。報告の時間が無くなりましたので、まとめにはいろいろと思ひます。

おわりに

いわゆるフゴッペ洞窟を中心とするフィールドステーションですが、第一に隣接する地域はもとより、世界各地の岩面刻画の情報を発信できることです。ロシアのこの地域についても、まだまだ調査すれば岩面刻画がまだ発見される可能性があるということです。また、このような大陸の岩面刻画と、フゴッペ洞窟の岩面刻画はどのようなつながりがあるのかということ、を、解明する一つの手がかりになるのではないかと思います。これは世界をベースとしたフィールドステーションの役割だと考えます。

さらに、第二として余市ではフゴッペ洞窟を中心とした文化財の宝庫であるということです。余市や北海道、さらに日本をベースとしたフィールドステーション作りです。それは、余市の文化財を素材した情報、発信基地であり、学術研究はもとより、地域文化の基層を作り上げる役割があると考えます。

余市では、フゴッペ洞窟の岩面刻画の重要性を評価し、先に示したことをしっかり考えて、北海道、さらには日本中に、また世界に向けて余市のフゴッペ洞窟の岩面刻画を広めていきたいと私は思っております。

時間になりましたので、これで私の報告を終わらせていただきます。有難うございます。

(質問)

1 先ほど浅野さんのレジュメのほうに刻画の時期は、新石器時代以降とございましたが、今の右代さんの報告も同じような時期と考えてよろしいでしょうか？

それについては、非常に難しいのですが、先ほどビデオでご説明したスツクパイの岩面刻画というのは、馬に乗った人物像があるということで、非常に新しい時期ではないかと考えられます。また、アムール川、ウスリー川の地域に馬がいるということは、やはり中国のいろいろな民族が入り込んでこなければと考えています。そういう時期となりますと、非常に新しい時期で10世紀時代だとか、古くても5世紀ぐらいになるのではないかと思います。どうつながるかというのは非常に難しいわけですが、あとベクティメリ川からの岩面刻画なのですが、新石器時代とか言われている時代で年代についてははっきりよくわかっておりません。ただ、紀元前1世紀とか言われているのですが、紀元前1世紀と言えれば3000年前のことですので、そのあたりからずっとあると言われてます。岩面刻画は新しいものもあって、古いものもあるのです。

2 いくつか質問しようと思っておりますけど、とりあえず簡単な方から。先ほど浅野さんが発表していただいたものと、先生が発表していただいたものを比較してみるとですね、浅野さんが発表していただいた中には人物全体像というのが見あたらないのですね。それから、今、先生が発表していただいた中には人物全体像がきちっと書かれていますね。17ページの1番ですね。これはやはり民族の違い、時代の違いかということが

一つですね。

3 それから、今、先生が説明された中でベンガラを使っていたということなのですが、そのベンガラの成分っていうのはわかっているのでしょうか？

人物については、浅野さんが報告されたのは、どちらかというともマスクなのです。私が報告したのは、いわゆる体を全部含めた人物像っていうのが多いのですが、これが民族的にどうなのかといいますと、なかなかこれは難しいところがあります。例えば、少数民族を指してではなく、生業から考えると放牧民とか、遊牧民とか、狩猟民とか、漁猟民とか、農耕民とかなどといったところから違いがでるといわれていますが、ロシアの場合、岩面刻画の発見例が少なく、明解なことはいえないのが現状です。

それと、ベンガラとか、ベニガラといわれる朱色ですが、第二酸化鉄といわれるもので、そういう鉱物を粉にして使用しているといわれています。それとも一つ朱は、水銀朱(辰砂)がありまして、先を含めると2種類があるのです。一般的にベンガラと言われているのは、第二酸化鉄のほうです。

4 フィールドステーションということになると、今までは、北のほうばかりの、そういう関係の岩面刻画が出ているわけですけども、やはり全体的に今後進めるためには、北と南との関わりを、中国大陸関係の情報とですね、進めるべきでないかと思われます。こういう国際化情報が進んでおりますから、それらを含めて大陸とのコミュニケーションをはかるといのも一つではないかと考えております。というのは、最近ですね、中国の副会長から電話が入りまして、フゴッペ洞窟の岩面刻画については中国には全然入ってきていないと直接電話が入っております。やはり情報の収集がされないためにだと思しますので、こういう機会に中国のほうと連絡を取りながら進めていった方が早い時期に古代人との、先住民族との、馬の関係や交易の関係などが解明されると思っておりますので、そのへん、開拓記念館のほうも連絡を取り合って進めていただきたいと希望いたします。

確かに、朝鮮半島にもありますし、中国のほうにもたくさんの岩面刻画があるのですね。一番進めてきている内容っていうのは、一番対岸地域の大陸にどういった岩面刻画があるのかというのをまず調査して、また将来に向けて、どうなっていくのかということ、みんなで考えていければと思っております。その機会には是非、中国も調査したいものです。



図1
- 137 -

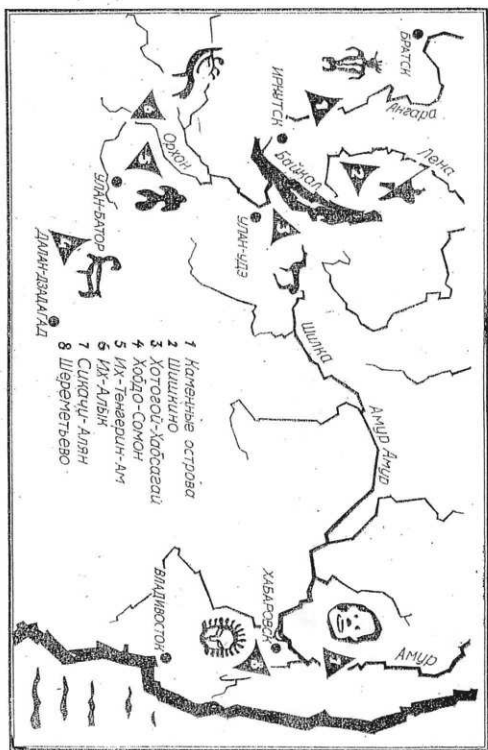
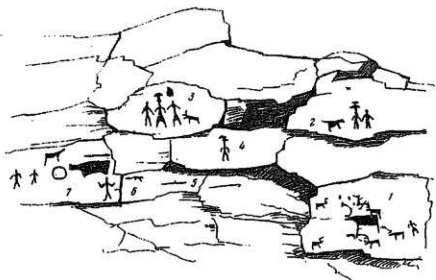
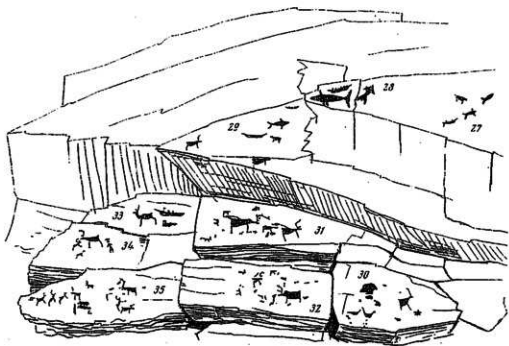


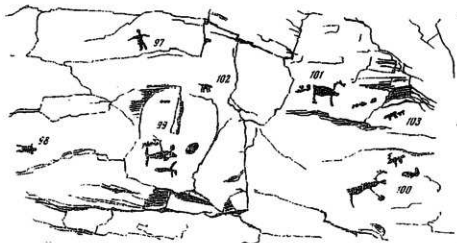
图2



I



4

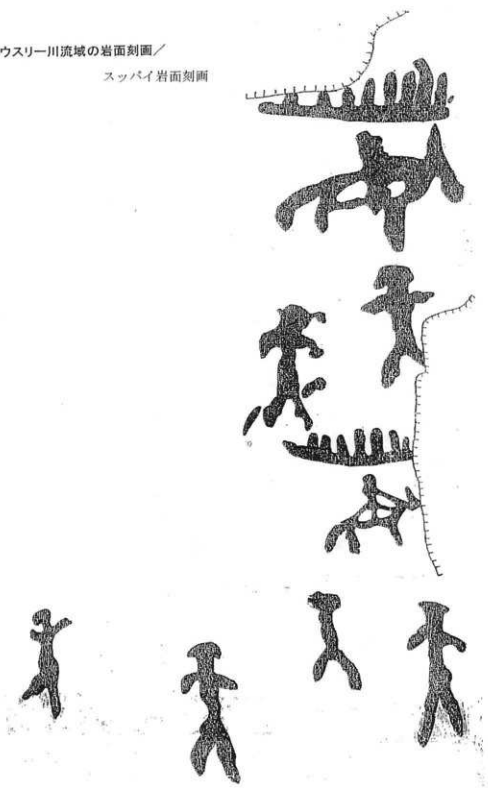


II

図3 ベクティメリ川河岸の岩面刻画

図4 ウスリー川流域の岩面刻画／

スッバイ岩面刻画



ヨーロッパの岩面刻画とその活用

小川 勝

(鳴門教育大学 助教授)

この科研では、2年間にわたってロシア・シベリアのハバロフスク周辺において調査をしてきたわけですが、来年度の予定として、ヨーロッパに視察に出かけるという可能性があります。もともと私はフランコ=カンタブリア美術・洞窟壁画を主に研究対象として勉強してきた者ですが、フィールドステーションという観点で調査をしたことはありません。しかし、フィールドステーションという概念に基づき、私の知っております範囲で、ヨーロッパの事例を紹介したいと思います。

地図1では、斜線のひいている部分は大体一万八千年ぐらい前の海岸線を表しています。洞窟壁画は大体、三万年前ぐらいから一万年前ぐらい前の幅で制作されたと考えられています。その中心的な時期の一万八千年前ぐらいには、現在よりも相当陸地が広がっていたことを示しています。その中央部分にあるレ・ゼージュ=ドゥ=タヤックとは、先史時代の首都と呼ばれているところで、先史美術研究でも中心的な地域です。ここに洞窟壁画の遺跡などが集中しています。

視察では主にフランス西南部のドルドーニュ地方というところに行く予定ですが、その前に首都のパリに着くだろうと思います。パリのシンボルともいえるエッフェル塔が一番見やすいのはトロカデロという広場ですが、エッフェル塔に向かって右側にある建物が人類博物館(ミューゼ・ド・ロム)で、民族学や人類学の展示をしている博物館です。ただし、民族学関係が中心で、考古学的遺跡の展示もありますが、オリジナルの展示というのはほとんどありません。人類博物館は、国立パリ自然史博物館という研究機関の展示施設的な性格を持っているところで、実際の展示には自然史博物館の研究者が携わっているというところが特徴です。また、最新の研究速報などが展示されているところでもあり、パリに行けばエッフェル塔見物がたっぴり行きたいところです。

次に、サン=ジェルマン=アン=レイというパリの西方の古い町ですが、パリ中心部からの地下鉄の駅を下りてすぐの所に古いお城が建っています。その古城をそのまま利用して、国立古代博物館というフランスの国有品の古い遺物を展示している博物館があります。元々フランスは中央集権国家的な国で、フランス国内で発見された考古学の遺品など、従来はパリに集めており、それを所蔵しているのがこの古代博物館です。この博物館の代表的な所蔵品は、洞窟壁画とは関係ありませんが、ブラサンブイというところで出土した、おそらくビーナス像と思われるもので、大体24,000~25,000年前の作品と考えられています。この時期の作品には珍しく、目とか鼻とかの表現があるように思われ、また、頭巾をかぶっているように見えますので、頭巾をフランス語でカブーシュと呼ぶことから「カブーシュ夫人」と呼ばれています。これは、文化国家のフランスが実は最も大切にしている作品で、人間が作った作品の中で最も古い時代の顔のある作品です。ただし、展示品はレプリカで、オリジナルは金庫にしまっています。

次はラスコーが出土した壁画を作るときに使用したと考えられているランプも所蔵し

ており、それは大体 30センチの直径で、深さ 3センチぐらいのくぼみがあります。この部分に獣脂を滴たして繊維を芯として火をつけ、それを照明手段として壁画を描いたというものです。これも古代博物館が所蔵しています。ただし、これも展示品はレプリカです。この博物館は、アルシィ＝シュル＝キュールというフランス中央部の岩陰遺跡の岩面浮き彫りのオリジナルをそのままバリに持ってきて展示しています。約 23,000年前に制作されたと思われますが、このようなオリジナル作品が展示されているというだけでも見学に値する博物館といえるでしょう。また、ロック＝ドゥ＝セールという遺跡の岩面浮き彫りもありますが、こういうオリジナルな作品が展示されているだけでも、このサン＝ジェルマン＝アン＝レイという町まで足を伸ばして、博物館を見に行くべきでしょう。

次は、バリから車で 6 時間ほどの距離にある、フランス南西部のモンティニャックという村に行くこととなりますが、この村を見下ろす郊外の丘の上にラスコーという洞窟があります。ラスコーは 1940 年に発見されて、大体 1960 年代ぐらいまでは一般公開していましたが、消滅の恐れがあるので保存の問題から一般公開を禁止しています。現在では、週 1 日に 1 時間ほどだけ洞窟の扉は特別に開かれます。ほとんど閉鎖されているのと同じ状態で、団体で行ってもまず見せてくれるような状況ではありません。非常に訪問が厳しく制限されている遺跡です。ドゥリュック夫妻という、ラスコーについての専門書を出版しているような研究者でも、自由には見学できないという非常に厳しく管理されている遺跡です。

しかし、それではよくないということから、すぐ隣にラスコーⅡというレプリカが作られました。1980 年代のことです。ラスコーⅡは、地元のドルドーニュ県が、ラスコーを見るために訪れてくれた人々もラスコーが閉鎖されて以降ほとんど来なくなったため、ラスコーのすぐそばに複製を作って見せようとして作られたものです。現在では、観光バスなどで多くの観光客が訪れています。

ラスコーⅡで再現しているのは主洞という部分と奥洞と呼ばれている部分だけです。ラスコーには非常に多くの作品があつて、色を使った彩画と、刻んだ刻画というものがありますが、彩画の約 70% がこのふたつの部分に集中しているということで、この部分だけを復元すれば、ある程度ラスコーを見たこととなります。他の重要な作品は後述べます別の施設に複製が作られて設置されています。

主洞では、60 年代半ばぐらいまで一般公開されていたため、見学者用の通路が現在のもそのまま残されています。ここには、地面からの高さ 2メートルから 4メートルにかけての細長いフリーズ状の場所に、主洞を一周するように多くの作品が制作されていて、中央に立って眺め回しますと、本当に壮観というべき光景が展開します。中には長さ 5メートル近いウシの絵もあり、一方、きわめて繊細な角の表現をしたシカの画像もあります。全体にきわめて運動性に富んでおり、人類が作り出した最高の芸術作品のひとつといっても過言ではないでしょう。

現在簡単に見学できるラスコーⅡを作るにあたっては、モニク・ペイトラルという女性画家が最終的に画像を完成させました。現在では、洞窟壁画の複製を作る場合は、機械的にさまざまなテクニックを駆使していますが、ラスコーⅡが作られた 1980 年代には、まだそういうハイテクなものがなくて、逆に人間の手で最終的にレプリカが仕上げ

られていました。例えば、大きなウシやウマが描かれているところでも、最後少し筆を入れて、できるだけ本物に近いものを作っています。レプリカというのは、フィールドステーションにとって非常に重要な展示物になるわけですが、私個人の感想としましては、ラスコーⅡのように、正確に再現した上で、さらに、最終的に人間の手が入っていることから非常に線が生き生きしている、と思います。やはり、芸術作品は人間の作り出したものですから、単に機械的にハイテクを使って作り出した物だけでは不十分ではないでしょうか。正確さの上にさらに人間的な味わいが込められているという点で、ラスコーⅡは非常に優れた複製であると私は評価しております。

ラスコーでもっともよく知られている作品のひとつが、「情景」と呼ばれている部分です。右側にピゾンがいて、槍が腹部に刺さっていて、左側では人物が倒されていますが、これまでもさまざまな解釈が提出されている部分です。この作品はラスコーのなかでも非常に到達しにくいところに制作されていて、先ほど紹介しましたラスコーⅡでは再現されていません。しかし、この部分のレプリカも制作されていて、それはラスコーを少し離れたトーというところにドルドーニュ県が作った先史美術センターに展示されています。ラスコーⅡの切符を買くと必ずこの先史美術センターの切符も付いていて合わせて見に行くようになっていきます。他のレプリカも先史美術センターには展示されており、ラスコーⅡと併せて見ることで、ラスコーの洞窟壁画の全体が理解できるようになっているシステムです。この先史美術センターはフィールドステーションのひとつのモデルになるのではないかと思います。

ラスコーからそれほど遠くないところに、ルフィニャックという大きな洞窟がありますが、そこは洞窟の入口から作品のあるところまで、1キロぐらいつつと真つ暗なところが続いています。1956年に洞窟壁画は発見されましたが、洞窟内に中にレールが引いてあって、見学者もトロッコのようなものに乗って、作品の見やすいところまで15分20分ぐらいつつ、真つ暗な中をジェットコースターに乗るような気もしますが、行って、そこで作品を見るという、このようなシステムをとっている洞窟もあります。一番奥のところには、天井に黒一色の線でマンモスなど多くの動物像が制作されており、それを見上げるように観察するわけです。フランスでは、私有の洞窟壁画もあり、所有者が見学しやすいようにさまざまな工夫を凝らしているようです。

モンティニャックから次のレ・ゼジー＝ドゥ＝タヤックに行く途中に先史公園というものがあります。あまり学術的な要素はありませんが、当時の人々がどんな住居で暮らしをしていたのかというのを、ジオラマで野外に再現しています。どのようなマンモスがいて、狩人が石を投げたり、槍を持ったたりして狩猟しているのか、を想像復元して見せている場所もあり、本当にこういう状況であったかどうかはわかりませんが、先史文化理解の一助として、フィールドステーションではこのような展示も役に立つかもしれません。

次に向かうレ・ゼジー＝ドゥ＝タヤックという村は、最初にも述べましたが、この村を中心に非常に多くの旧石器時代の遺跡が集中して発見されているということで、先史時代の首都ともいわれているところです。現在では、岩陰に岩に寄り添うようにして建物が建てられています。これはこの地域の中世以来の建築様式です。このような昔からの建物を利用して博物館もられています。小さな村ですが、非常に多くの観光客を集

めていて、ホテルやレストランなどもあるところです。

レ・ゼジー＝ドゥ＝タヤックはヴェゼール川のほとりにありますが、ラスコーのあるモンティニヤックもこの川の上流にある村です。先史時代には人々はこの川を行き来して、様々な交流をしていたので、この川の流域に特に遺跡が集中しています。

レ・ゼジー＝ドゥ＝タヤックの村を見下ろす崖の上に国立先史博物館があります。小さな村ですが、この博物館には周囲の遺跡から出土したもののオリジナルがたくさん展示されていて重要です。博物館の前にはネアンデルタール人を復元した現在の彫刻家の作品も設置されています。レ・ゼジー＝ドゥ＝タヤックにはクロマニオンという地名もあって、そこはまさに、ホモ・サピエンス初期の標準的な人骨であるクロマニオン人が出土した遺跡であり、また多くのネアンデルタール人の骨が出土している遺跡もあります。そういう意味でもレ・ゼジー＝ドゥ＝タヤックというのは、重要な場所ということになります。

先史博物館には、岩塊に鋭利に深く刻んだこういう岩面刻画のオリジナルがそのまま展示されていて重要です。ラ・フェラシーというところから出土した作品には、色々な説がありますが、一般的には女性器を象ったものだろうといわれている記号的なかたちが残されています。他にも、後期旧石器時代研究の世界的にも貴重な資料が展示されていて、見逃すことのできない博物館であるといえます。

レ・ゼジー＝ドゥ＝タヤックには、もうひとつ国立の研究センターがあり、パトーという岩陰遺跡を覆うように建物があつてあります。この岩陰にはひとつだけ動物の浮き彫りが刻まれています。作品はこれだけですが、よく保存された後期旧石器時代の遺跡があつて参考になります。ここの研究センターは国立パリ自然史博物館のレ・ゼジー＝ドゥ＝タヤックにおける分館という位置づけになっており、研究者が常駐していて最先端の研究を行っていて場所でもあります。

レ・ゼジー＝ドゥ＝タヤックには多くの洞窟があつて、そのなかでも有名なのはフォン＝ドゥ＝ゴームという洞窟です。フォン＝ドゥ＝ゴームの代表的作品としては、少々保存が悪いのですが、細長いフリーズ状の場所などにビゾンが描かれていますものがあります。この洞窟はラスコーとは違って、13,000～15,000年前に制作されて以来ずっと、狭い入り口ではあつてもずっと閉じられなかったため、ある程度退色しているのは仕方ないことかもしれません。フォン＝ドゥ＝ゴームが発見されたのが1901年ですから、ちょうど100年前になります。後で見ますスペインのアルタミラが発見されたのが1879年ですが、アルタミラはすぐには旧石器時代の作品だとは認められませんでした。フランスでもスペインのアルタミラと似ている作品がこの洞窟で1901年に発見されて、ようやく1902年にアルタミラも本物であると認められたという意味で、フォン＝ドゥ＝ゴームは研究史的にも重要な遺跡です。現在では、フォン＝ドゥ＝ゴームも大体アルタミラと同じ13,000～15,000年前に制作されたと考えられています。ちなみに、ラスコーは17,000年程度前の制作と考えられています、まだまだその年代は確定しているわけではありません。

フォン＝ドゥ＝ゴームから歩いて15分ぐらいのところにレ・コンパレルという細長い洞窟があります。ここの作品は、ほとんどが線刻画といわれるもので、現在では風化も進んでいてわかりにくいですが、躍動感あふれた動物像などが多く残されています。ま

た、女性を横から見た姿を非常に図式化して表現したものではないかといわれる作品もあります。このように色をほとんど使っていない刻画中心の洞窟もレ・ゼジー＝ドゥ＝タヤックにはありますので、フゴッペ洞窟岩面刻画とは、技法的には少し違うのですが、ぜひ見たいところです。

キャブ＝プランという岩陰では、ウマなどが自然の岩の凹凸をそのまま使って浮き彫りのように制作されている量感豊かな作品があります。これらの作品は暗いところではなくて明るい岩陰に制作されていますが、現在では保護屋で覆われています。作品の前のスペースには、研究成果の展示があつて、フゴッペとある程度類似した環境にあるようです。従来古い保護屋があつたのですが、5年ほど前に新しい保護屋とフィールドステーションのようなものが設置されたばかりですので、参考になるかもしれません。

レ・ゼジー＝ドゥ＝タヤックをようやく後にして、ボルドーというワインの収穫地としても有名な都市に向かう途中に、ペール＝ノン＝ペールという、これもやはり岩陰岩面線刻画のある遺跡があります。この遺跡の代表的な作品としては、振り返るポーズをしている動物像があります。この遺跡は19世紀末に発掘されましたが、発掘される前には、作品はすべて土に覆われていました。発掘の際には、線刻画が壁面にあるということは気づかれず、20世紀になって洞窟壁画の存在が認められて改めて調べたところ、振り返るウマの作品などが確認されたということで有名です。フゴッペの場合と同様に作品が土に覆われていたわけで、最近では様々な科学的な年代測定法もありますが、20世紀初頭に後期旧石器時代の作品であると証明された非常に珍しい遺跡でもありますので、できれば見学したいと考えております。

ボルドーにはアキテーヌ博物館という総合的な博物館があります。ラスコー、レ・ゼジー＝ドゥ＝タヤックなどもアキテーヌ州という大きな行政区分の中にあつて、ボルドーがその中心的な都市になります。アキテーヌ地方から発見された色々な資料を、考古学だけでなく、フォークロアなど様々な物を展示している点で、北海道開拓記念館のようだとはいえるでしょう。ここにはローセルというところで出土した浮き彫りで「角壺を持つビーナス」と呼ばれている作品ですが、40～50センチのサイズのオリジナルが展示されているという点で非常に重要な博物館です。他にも、同じ遺跡から出土した岩面浮き彫りのオリジナルが多くあります。20世紀初頭の発見ですから、作品を制作された場に留めるのではなく、切り離して博物館に展示してしまったわけですが、その分、保存状態はよいかもかもしれません。一方、ローセルの遺跡は現在廃墟のようになっていて、正確にどの部分からこれらの作品が出土したのか、確認もできないほどになっています。

ベシュ＝メルルという洞窟は、非常に不便なところにあつて、なかなか行きにくいところですが、小さなバスであれば見学可能でしょう。ただし、1年中公開している洞窟ばかりではなく、春から秋までしか人を入れていない遺跡もあり、ベシュ＝メルルもそのひとつですので、見学できるかどうかは分かりません。ベシュ＝メルルは1923年の発見ですが、そのときに調査した先生が集められた資料や、そして現在その研究を引き継いでいる先生方の研究資料がそのまま、隣接する小さな博物館に展示されているという点で、もし行ければ勉強になる遺跡だろうと思います。ここにも多彩な作品がありますが、特に「斑点のあるウマ」と呼ばれている作品は、よく紹介されている有名なものです。それは最新の年代測定法により、約23,000年前の制作と考えられています。

次いで、フランスとスペインの国境に連なる、ピレネー山脈のふもとにニオーという洞窟があります。ニオーの洞窟の現在の入口は大きいものですが、これが約 12,000 年前の作品制作当時の入口ではなかったものの、現在はここから入れるようになっています。この入口の前に鉄で一種の構造物を作って、そこに現代美術の作品を展示する試みも行われていて、これは最近のフランスの傾向であります。芸術の普遍性を示すためではないかと考えられます。古い時代のもつを見に来た人々に、現在のアートも一緒に見せようとする点も、文化財の活用の仕方として参考になるかもしれません。

ニオーのあるタラスコン＝シュル＝アリエージュという村には、1990 年代にできた先史美術公園というものがあります。非常に広大な敷地の中に建物が建っていて、その周囲は先史時代の環境を復元する公園になっています。メインの建物以外では、それぞれの部分で様々な先史時代の経験というものができるようにしてある施設です。メインの建物の中にはニオー洞窟壁画のレプリカが展示されています。このレプリカは先ほどラスコー II とは異なり、最近のハイテクにより純粋に機械的に作成されたものです。もちろん、このニオーのレプリカはラスコー II よりもさらに正確でしょうが、一研究者としての私の主観的な意見かもしれませんが、少し冷たい感じがして、ちょっとレプリカとしてはおもしろくない、と私は考えております。

ニオーも、先に言及しましたルフィニャックと同じく、最初の作品が入り口から 500 メートル以上も奥に入ったところから始まり、「黒の部屋」と呼ばれる中心的な場所は、さらに 500 メートル以上進む必要があります。ここは、ガイドに連れられてずっと歩いてゆくのですが、照明も手持ちのライト以外にはなく、地中探検をしているかのような気分になります。作品は、ほぼ黒一色で描かれており、間違え筆遣いにより、ピゾンなどの動物の個性までもが表現されているようです。

最後に、スペインのアルタミラはラスコーに匹敵する重要性を持っています。つい最近、まったく新しいフィールドステーションが完成して、「新洞窟」と呼ばれる極めて正確なレプリカがメインになっている施設、そして様々な展示、さらに、広大な先史時代の環境を周囲に復元して、全体として博物館としているようです。今年に完成したばかりで、私自身も残念ながら未見ですが、今後のフィールドステーションを考えるためには必見の施設といえるでしょう。

アルタミラは、早くも 1879 年に洞窟壁画が発見されましたが、残念ながら学界の認めるところとはならず、それが真に旧石器時代の制作であると認定されたのは、20 世紀に入ってからです。アルタミラを代表する「大天井画」の部分は、主にピゾンが黒と赤の 2 色で積み重なるように表現されていて、その密度の高い表現は、ラスコーと並ぶ人類の芸術性の発露といえるでしょう。アルタミラには、他にも約 200 メートルにわたる洞窟全体に作品が見出されており、それらもまた、洞窟壁画の意味を考える上では重要な研究対象です。アルタミラのいくつかの作品からは、最新の科学的年代測定法により、約 14,500 年前に制作されたというデータが出ています。なお、現在、アルタミラは、年間 8500 人、一日に 30 人ないし 50 人の見学が可能です。予約しておけば、ある程度の団体でも見学できるでしょう。

アルタミラというのは、サンティジャーナ・デル・マールという村にあります。ここは中世以来の景観がよく保存されていることで、スペインでも有名な観光地です。そ

の近くのサンタンデルという町には、県立の考古学博物館があって、そこには、アルタミラ付近で発見された考古学的遺物のオリジナルが多く展示されていますので、ここにも見学の足を運べばいいでしょう。

もし、スペインまで行けない場合、日本の三重県の伊勢に「志摩スペイン村」というテーマパークがあって、そこにアルタミラの「大天井画」のおよそ半分のレプリカが展示されています。アルタミラのレプリカが完全ではないにしても、スペイン以外の場所で見られるのはここだけですので、もし国内旅行で伊勢のほうに行く機会があれば、是非ご覧になったらいいと思います。これもなかなかレプリカとしてはいいものだと思いますので、写真などでは決して味わえない臨場感を味わえる場といえるでしょう。

以上、私の知る範囲でのヨーロッパの例を見てきましたが、なぜヨーロッパなのかというのは当然の疑問でしょう。先史美術・岩面刻画というものは、世界中に分布しています。日本にも北海道の手宮とフゴッペ、また、中国にも、あるいは太平洋地域にも、世界中にあるわけです。ただ、報告中で述べましたとおり、アルタミラやフォン＝ドゥ＝ゴームの洞窟壁画の真の古さが認められて約100年、つまり先史美術というものの存在が最初に確認されたのがフランス・及びスペインという地域であって、かつ、その地域の洞窟壁画が先史美術の中でも最も古く、最も保存もよく見栄えもする、そういうものが残されているわけですから、やはりヨーロッパは特別な場所であるとはいえるのではないのでしょうか。実際、観光客も多く訪れますし、洞窟壁画を活用して文化財の理解を一般に広めようという動きなど、常に活発に行われています。ですから、なぜヨーロッパなのかという疑問を常にオーストラリアの先生方からも批判されたりするわけですが、しかし、やはり先史美術というものを研究する場合のモデルとしてヨーロッパはあると思いますので、この研究会でも、より広い視野で報告してまいりました。フィールドステーションのモデルとしても、いくつかのものを実地に調べることであれば、フゴッペのフィールドステーションのためにも資するところが多かろうと思います。以上をもって、報告とさせていただきます。



IV フゴッペ洞窟フォーラム 2002

「これからのフゴッペ洞窟」

盛岡市・仙台市における史跡の保存と活用

盛 昭 史
(余市町教育委員会 文化財課長)

1、調査地

盛岡市 史跡盛岡城
仙台市 富沢遺跡

2、調査日

平成14年9月29日～10月1日

3、調査者

余市町教育委員会 文化財課長 盛 昭史
余市町教育委員会 文化財課学芸員 浅野 敏昭

目 的

フゴッペ洞窟においては、刻画の保存上、洞窟内岩体の安定を保つことが大きな課題となっており、現在、岩体変位量・温湿度等の自動定時観測により、その挙動を把握している。

盛岡城においては石垣崩落の怖れがあるため、市教委において手動（コンタクトゲージ）による変位測定を行っており、今後におけるフゴッペ洞窟保存方策の参考とするため、その実際を調査することとした。

仙台市においては、富沢遺跡の発掘成果をもとに建築された「地底の森ミュージアム」における展示の実際、活用状況等を調査することとした。

史跡の概要

〔盛岡城〕 南部藩 20万石の居城。築城開始は1598（慶長3）年。

昭和9年に盛岡市所管となり、昭和12年に国指定史跡となる。

現在城の一角は公園整備がなされ、市民の憩いの場となっている。

築城よりおよそ400年を経て、石垣の随所で歪みや孕みが進出し、崩落の危険がでてきたため、昭和60年度より平成10年度まで、石垣の移動量調査を実施した。

〔富沢遺跡〕 後期旧石器時代（約2万年前）～中世の複合遺跡。1988年、仙台市街地の小学校建設予定地で事前発掘調査が行われた際、地下5mの地層から旧石器時代の遺物・遺構、森林跡が発見された。

「地底の森ミュージアム」はこの富沢遺跡の保存館で、館内には保存処理された森の跡や焚き火跡が復元展示され、敷地内では「氷河期の森」の再

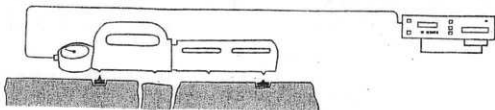
現を試みられている。

調査の概要

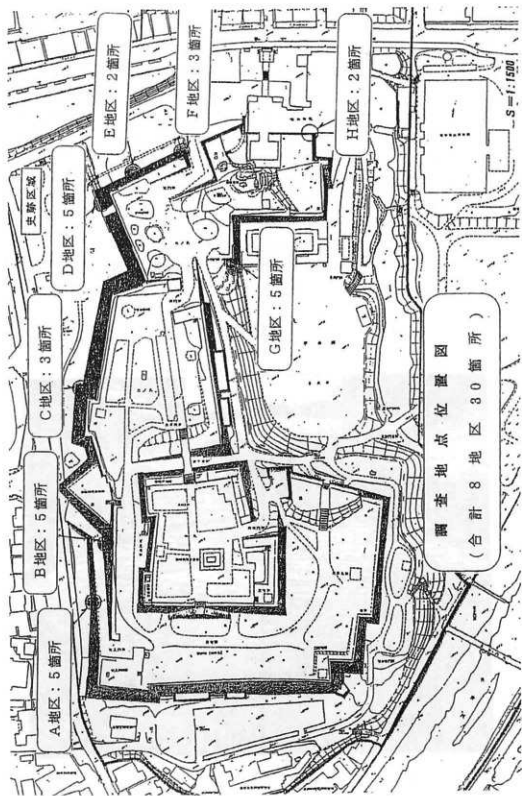
盛岡城においては、コンタクトゲージによる石垣移動量調査を実施し、また実際に操作を行った。特記すべき点は以下のとおりである。

- 1、計測方法は、石垣に金属製のチップを 10 cm～20 cm 間隔で接着し、可動式のゲージを当てて、定期的に 2 点間の間隔を測定することにより、移動量を把握するものである（下図参照）。
- 2、接着するチップは 1 cm 程度のものであり、配線が不要であることもあって、変位計に比べ目立たないものとなっている。
- 3、設置位置、計測間隔等は、機械計測に比べ自在性が高い。また、断線・停電等によるトラブルがない。
- 4、直線状のゲージで計測するため、屈曲面の測定に難がある。特にオーバハンギング状の岩体や凹凸の多い面での計測は困難である。また、高所作業には梯子が必要であり、足場が不安定な場所では計測が不可可能である。
- 5、計測の際ゲージをチップに圧着するが、結構な力で押し付けるため、チップ側が脆い場合には損傷の危険が伴う。
- 6、精度は、機械計測に比べかなり粗い。原則として 3 回測定の平均値を採っているが、熟練した作業員による計測でも、場所によっては 20 cm 間隔のチップで、各回の測定値に 3 mm 弱の異同が生じた。市教委担当者によれば、崩落危険把握のため必要とするオーダーは、センチメートル単位とのことであった。

以上の点から、フゴッペ洞窟内におけるコンタクトゲージ測定は、当面困難と判断した。しかし、測定地点やその目的によっては活用の可能性もあり、また、ランニングコストの面においても大きなメリットがあることから、参考とすべき測定方法と考える。



コンタクトゲージによる計測システム 「盛岡城跡 石垣移動量調査報告書」
盛岡市・盛岡市教育委員会 (2000. 3) より



「盛岡探跡 石垣移動量調査報告書」
 盛岡市・盛岡市教育委員会 (2000. 8) より

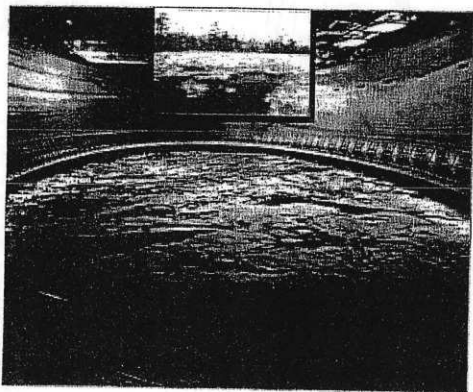
調査地点位置図

富沢遺跡においては、展示および施設活用の現状を調査した。同遺跡及び保存館は、地下鉄長町南駅より徒歩5分程度の場所にあり、周辺には住宅地が広がっている。保存館の核となっているのは約800㎡の地階展示室で、発掘された森の跡、焚き火跡がそのままの姿で展示されている（珪素化合物による保存処理）。保存館建設にあたっては、遺構面より地下水の水位が高いため、地下20mの基底礫層まで地中壁を打つなどの処置がとられ、その工程は上階のVTRで見ることができる。

1、2階は遺物展示やジオラマ、レファレンスコーナーなどとなっており、視聴覚機材も随所に見られた。

館名が示すとおり、展示は先史時代のこの地方を紹介するものとなっており、仙台市中心部にある「仙台市博物館」（伊達政宗関係資料が充実）との機能分担が図られていると思われる。

保存館の周囲では「氷河期の森」を再現するための植生が図られ、現在サハリンを北限とするグイマツなどが植えられている。



「地底の森ミュージアム」地階展示室
中央楕円形の部分が森の復元展示
天井部からスクリーンが下がっている。

東京都における史跡の保存と活用

盛 昭 史

(余市町教育委員会 文化財課長)

1、調査地

東京都

江戸東京博物館 北区飛鳥山博物館 墨田区小さな博物館

2、調査日

平成15年2月23日～2月26日

3、調査者

余市町教育委員会 文化財課長 盛 昭史

余市町教育委員会 文化財課文化財係長 乾 芳宏

目 的

フゴッペ洞窟の活用を図るため、特徴的な博物館（活動）を選定し調査を行った。

江戸東京博物館は平成5年の開館で、巨額な資金を注ぎ込んで建設したことで知られる。テーマパーク的な要素を盛り込み、ジオラマやレプリカをふんだんに使ったもので、東京国立博物館を国内の代表的博物館とすれば、同じく著名な博物館でありながら、その対極の姿を示している。

北区飛鳥山博物館は、近くにある国指定史跡中里貝塚から出土した貝層や土器等が展示されている。小さいながらも総合博物館の機能を備えており、縄文から現代までの歴史や自然、郷土芸能などもコンパクトに紹介されている。

この二つの博物館を調査することにより、今後の博物館活動や展示のあり方の参考にすることとした。

墨田区の小さな博物館は、そのユニークな活動が徐々に紹介され始めた。墨田区内には、伝統工芸品、工業製品のパーツなどを作っている工房が多く、それらの工房を経営者の協力を得て「小さな博物館」と位置づけ、一般に公開している。あわせて、優れた技術を継承し新たなものを創造することを通して、これらの産業の育成を図っている。「博物館」と名がついているが、墨田区役所の所管は教育委員会ではなく産業経済課である。フゴッペ洞窟を核とした地域活動のあり方を探るため、エコミュージアムと地域おこしを結合させたこの運動の実際を調査した。

調査の概要

東京は本年、江戸開府400年を迎える。調査を行った日、江戸東京博物館では特別展「大江戸八百八町」が開催されており、その最終日であった。特別展会場入口には長蛇の列ができ、30分待ちの入場制限が布かれるほどの盛況であった。

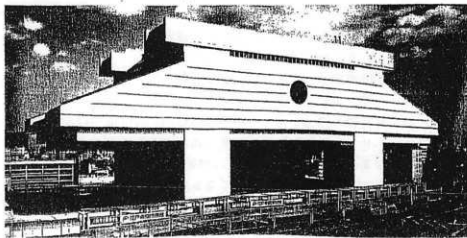
江戸東京博物館は両国国技館に隣接して建設され、JR総武線両国駅、都営地下鉄大江戸線両国駅から徒歩で2～3分の位置にある。地上7階、地下1階の巨大な建物で、常設展示はこのうち6階及び5階のフロアで、その他は収蔵庫や学習室、レストランなどとなっている。展示室は大きく3つのコーナーに分けられている。「通史ゾーン」(旧石器～戦国時代)「江戸ゾーン」「東京ゾーン」(明治～現代)である。実物展示は少なく、ほとんどがジオラマによる生活・風俗の再現である。

館内では、車椅子の貸し出し、ボランティアガイド、点字ガイドブックなどもとより、ベビーカーの貸し出し、授乳室の設置など、様々な便宜が図られている。また、小学生、都内の中学生は入館料が無料となっている。

これらの展示や便益提供からは、「家族連れ」「遊び」といったコンセプトが伺える。

また、あまりよく知られていないが、小金井市には江戸東京博物館の分館として「江戸東京たてももの館」があり、約7ヘクタールの敷地内には江戸から昭和初期にかけての農家住宅、商家などが移築されている。

施設の豪華さが話題とされることの多い博物館であるが、セミナーの開催や10数万冊に及ぶ図書の閲覧など、地道な博物館活動も活発である。

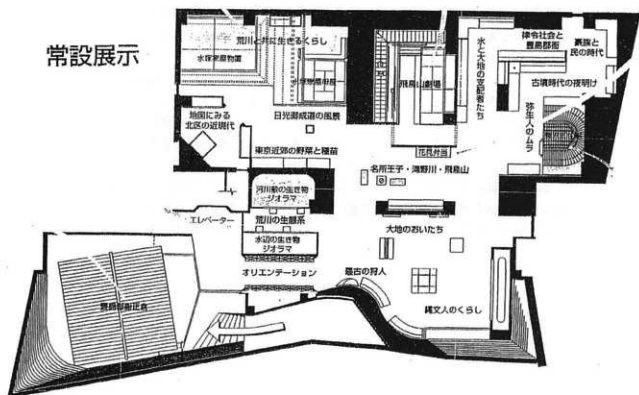


江戸東京博物館外観

北区飛鳥山博物館は平成10年3月の開館で、両隣に「紙の博物館」「渋沢史料館」が建ち、「飛鳥山の3つの博物館」として、共通入場券が販売されている。建物は3階建てで、常設展示(1F)、ホワイエ・講堂(2F)、閲覧コーナー・体験学習室(3F)の構成となっており、1Fのみが有料である。2Fホールには、すぐ近くの「縄文中期の水産加工地」とされる中里貝塚から発掘された、約5mに及ぶ貝層が剥ぎ取り展示されている。

北区の地勢は、武蔵野台地の縁辺部から東京低地へと連続しており、展示はこの地形形成から始まって荒川の生態系まで、14のテーマに沿って展開されている。レプリカやジオラマも多く使われているが、「北区」という限られた地域を対象としているためか、「郷土博物館」の要素が強く感じられた。小規模の博物館であるが、学芸員は6名配置、図書閲覧室には小学生向けの図鑑類が整備され、地域に密着した博物館活動への志向が感じられた。

常設展示



墨田区の小さな博物館は、近年「ものづくり」への関心が高まる中で脚光を浴び始めた。墨田区は隅田川の東側に位置し、13.75 km²の中に約23万人が居住している。この地域には個人経営や小企業の機械部品工場、工房が点在しており、これらの産業・文化を区内外に広くPRする目的で「小さな博物館運動」が発案された。墨田区で発行しているパンフレットには、「軟式野球資料室」「江戸小紋博物館」「屏風博物館」「プレーキ博物館」「金庫と鍵の博物館」など、20余りの「小さな博物館」がリストアップされている。これらの博物館では経営主が館長となっていて、来館者はコレクションやものづくりの現場を見るときに、館長から話を聞くことができる。また、場所によってはその場で商品を注文したり、購入したりすることもできる。

墨田区では産業経済課がこの運動を所管しており、区からの補助は上限で年間23万円（来館者数に応じて交付）、年に1回館長会議が開催されるとのことであった。

「屏風博物館」の片岡館長から、詳しいお話を伺った。

来館者については、少ない日でも1人～2人は必ずあり、時には数十人の団体もあることであった。説明に時間がとられるデメリットよりも、来館者から直接要望を聞けるメリットのほうが大きく、対話の中から思いがけないアイデアが浮かんだ事例をいくつか伺った。

「屏風」には伝統工芸のイメージが強いが、現在では和室の床の間に飾られるほかに、洋室のパーテーションに使われたり、着られなくなったお気に入りの和服の生地を屏風の柄に使う、といったように、顧客の要望に応じて様々に活用されている。一方で、製作にあたっては伝統的な技法を継承しており、からくり屏風の仕掛けも見ることができた。

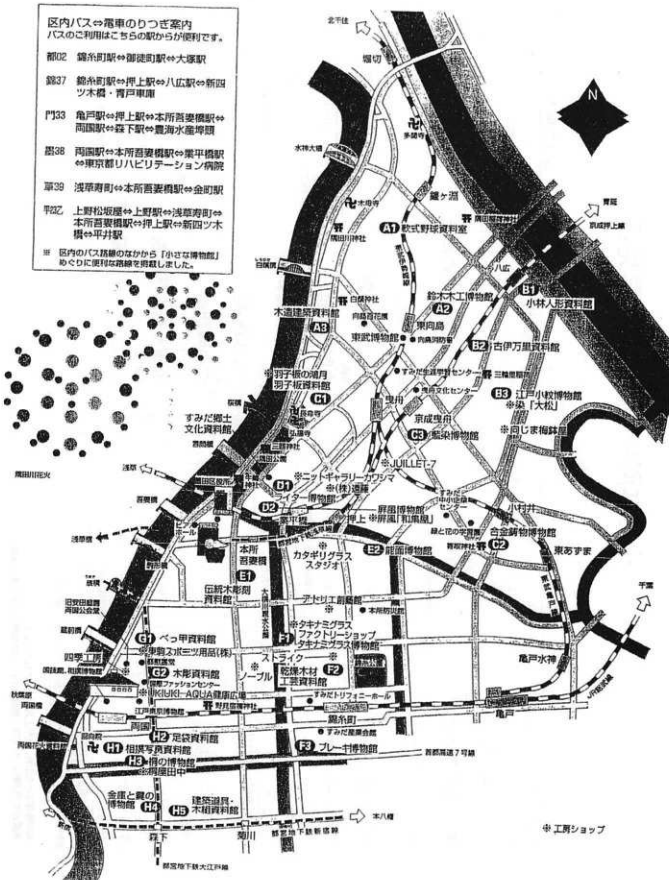
墨田区の試みは、「博物館」というコンセプトによって、地域の人・産業・文化を結合させる先進的な活動である。フゴッペ洞窟のこれから、わけても地域の方々との協同を考える上で、大きな示唆に富む調査であった。

「小さな博物館」ガイドマップ

区内バス⇔電車のりつき室内
バスのご利用はこちらの駅から便利です。

- 都02 錦糸町駅⇔御徒町駅⇔大塚駅
- 錦37 錦糸町駅⇔押上駅⇔八広駅⇔新四ツ木橋・青戸車庫
- 門33 亀戸駅⇔押上駅⇔本所吾妻橋駅⇔両国駅⇔森下駅⇔豊海水産埠頭
- 都38 両国駅⇔本所吾妻橋駅⇔業平橋駅⇔東京都リハビリテーション病院
- 都39 浅草町駅⇔本所吾妻橋駅⇔金町駅
- 平22 上野松坂屋⇔上野駅⇔浅草町⇔本所吾妻橋駅⇔押上駅⇔新四ツ木橋⇔平井駅

※ 区内のバス路線のなから「小さな博物館」めぐりに便利な路線を掲載しました。



小さな博物館 開館日早見表

博物館名	開館時間	開館日 (○印)	博物館名	開館時間	開館日 (○印)
軟式野球資料室 鹿田2-36-10	10:00~16:00 土曜は第1・3・5のみ	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	能面博物館 鹿平6-10-5	9:00~17:00 白曜は第4のみ	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
鈴木木工博物館 東向島6-36-15	10:00~16:00 春期連絡が必要	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	タキナミグラス博物館 太平1-18-19	10:00~18:30 第2月曜休	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
木造建築資料館 地通1-7-16	10:00~16:00 白曜は第4のみ	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	乾燥木材工芸資料館 鹿米2-9-11	10:00~17:00 事前連絡が必要	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
小井人形資料館 八丘6-31-2	10:30~17:00 事前連絡が必要	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	藍染博物館 京島1-29-1	13:00~17:00 白曜は事前連絡が必要	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
古伊万里資料館 八丘5-23-9 2F	11:00~18:00	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	べつ甲資料館 横綱2-5-5	10:00~17:30	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
江戸小紋博物館 八丘2-26-8	11:00~17:00 土曜は事前連絡が必要	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	木彫資料館 石原1-13-3	10:00~16:00	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
羽子板資料館 向島5-43-25	10:00~17:00 臨時休館あり	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	相模写真資料館 阿部3-13-2	10:00~17:00 商店街相模館中は毎日	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
合金鋳物博物館 文花2-4-14	9:00~17:00 第1~30金・土	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	足袋資料館 緒1-9-3	9:00~18:00	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
プレーキ博物館 江東橋1-5-5	10:00~17:00	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	桐の博物館 阿部4-1-8	10:00~18:00	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
ライター博物館 向島1-27-6 3F	10:00~18:30	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	金庫と鍵の博物館 千歳3-4-1	10:00~17:00 第1・30土日(8月降)	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
屏風博物館 向島1-31-6	9:00~17:00 臨時休館あり(5月~9月)	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	建築道具・木組資料館 潮川11-5-3	10:00~16:00 白曜は第4のみ	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
伝説木彫刻資料館 東陽町4-7-8	12:00~17:00 金曜は第1~30のみ	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○			

※ 臨時休館などのため、上記と異なる開館日もあります。
※ 祝日とせと祭日については、別紙の「小さな博物館リスト」をご確認ください。

「北陸における史跡の保存と活用」

浅野 敏昭

(余市町教育委員会 学芸員)

I はじめに

平成 15 年 2 月 12～15 日の 4 日間の日程で北陸地方の史跡の活用がいかにされているかを主眼においた調査を行った。調査地は富山県富山市北代遺跡、同富山県埋蔵文化財センター、石川県金沢市石川県立博物館、及び石川県埋蔵文化財センター、福井県越前町厨 1 号洞穴などである。ここでは富山県の史跡を中心に報告する。

II 富山県の史跡

富山県内の史跡は右の図のとおり、26ヶ所であり、北代遺跡が今回調査を行った史跡である。

(北代遺跡)

北代遺跡は縄文時代中期を主体とし早期、後晩期を含み、確認された遺跡範囲が 56,000 m²の大規模な集落遺跡である。

史跡公園は「北代縄文広場」の名称で一般公開が行なわれ、敷地内には、湧水地、竪穴住居、高床建物の復元がされ、展示ガイダンス施設（北代縄文館）と共に利用されている。

北代縄文館は鉄筋平屋の施設、234 m²（内展示室 112 m²、体験工房 76 m²）であった。体験学習としては、土器や石器づくりを行なっている（実費負担）。

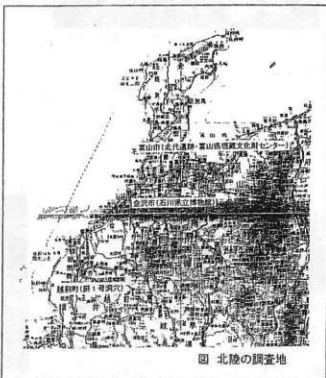


図 北陸の調査地

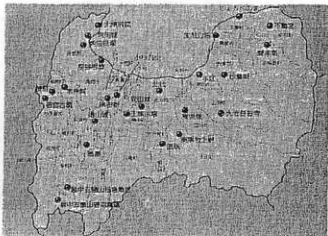


図 富山県の史跡



写真 北代遺跡の全景

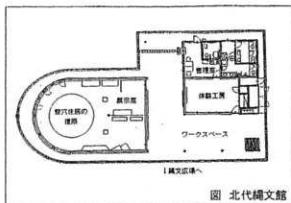


図 北代縄文館

(不動堂遺跡)

昭和の初めから知られていた遺跡であるが昭和48年、53年、54年に発掘調査が行なわれ縄文時代中期の住居跡21などが発見され、日本最大級の住居(長径17m、短径8m)を含む4棟の竪穴住居が復元され、公園として整備される。

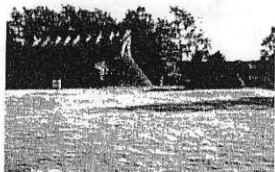


写真 不動堂遺跡の復元住居



写真 富山県埋蔵文化財センターの体験広場

(富山県埋蔵文化財センター)

県立としては全国初の埋蔵文化財センターで館内の展示室と、館外に体験広場を設けて土器製作、勾玉作りなどを体験学習として行なっている。

Ⅲ 石川県

(石川県埋蔵文化財センター)

市民への開放型の施設として、「古代の人々の生活や技術を体験し、先人の暮らしを再発見する」ことを目的とした体験学習を実施している。

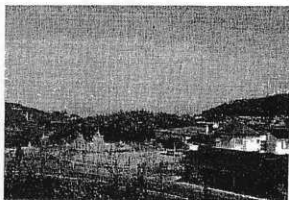


写真 石川県埋蔵文化センター古代体験広場

団体見学も目的別に4コースを準備する(施設見学コース、展示解説コース、古代体験広場コ

ース、全体コース)。

また古代体験広場は所要時間 10～60 分で複数の体験メニューから選択するコース (1 月中は①古代の衣装②古代の音 (琴、太鼓、土笛) ③火おこし④土器パズル⑤土器施文⑥ペーパークラフト (船、土面) ⑦古代機織り (縄文・弥生の布) ⑧勾玉つくり)

IV 福井県

(越前町厨 1 号洞穴)

海岸段丘下に 30 余りの洞穴群があり、そのひとつが昭和 7 年の試掘によって遺跡と判明し、昭和 42 年からの発掘によって、弥生時代からの遺跡で 4 世紀には海産物の加工や製塩が行なわれたことが判明し、古代の作業場とされている。その後は墓地として使用されていた。現在は解説看板があるのみで、フェンスを設置し、立ち入り禁止となっている。

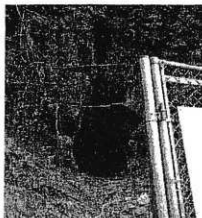


写真 厨 1 号洞穴

V 史跡の活用

日本海側に位置する北陸 3 県は、積雪条件としては北海道と類似する環境にあり、冬期間や雨天の屋外での教育普及活動をいかにするか参考となる点が多い。寒さや降雨雪の影響を受けない屋内での体験学習や企画展示による公開、教育普及活動である。

VI 史跡フゴッペ洞窟の活用

フゴッペ洞窟では史跡の整備を以下のように考えた。

- ①保存・調査と公開の同時性 → 洞窟遺跡を密閉して外界と遮断し、同時に内部の刻画をガラス越しに観察できる施設とする。内外部の環境や岩の動きを継続モニタリングし、その方法も公開する。
- ②文化財の情報発信拠点 → フゴッペ洞窟から出土した土器などを展示すると共に、富山や石川の埋蔵文化財センターが持つ情報発信の拠点機能と同じく、余市町とその周辺に点在する遺跡や文化財施設の情報を蓄積し、提供する。
- ③岩面刻画の情報発信拠点 → フゴッペ洞窟と類似する国内外の岩面刻画 (手宮洞窟、北東アジア、ヨーロッパ) についての情報を蓄積し、提供する。
- ④憩いや体験学習の場 → 史跡海側の緑地を縄文時代の植生を復元したものとし、史跡を見学するだけでなく、余市を通過する人達が憩うことの出来る場とする。展示施設のホールや緑地を利用した土器製作や刻画制作体験の場とする。

「ヨーロッパにおける史跡の保存と活用」

乾 芳 宏

(余市町教育委員会 学芸員)

1. 期 日 平成 14 年 12 月 10 日～平成 14 年 12 月 19 日
2. 調査者 菊池徹夫（早稲田大学教授）
小川 勝（鳴門大学助教授）
山田橋郎（北海道開拓記念館）
乾 芳宏（余市町教育委員会）
浅野敏昭（余市町教育委員会）
3. 目 的 ヨーロッパにおける洞窟壁画の保存と活用方法について調査・研究し、今後のフゴッペ洞窟の保存・活用を考える。

4. 内 容

(1) フランス国内の洞窟遺跡及び博物館

①国立古代博物館（パリ郊外・サンジェルマンアンレイ）

古城を転用した考古博物館。オリジナルやレプリカの壁画断片を展示が充実している。ミュージアムショップもラスコーなどの壁画に関する文献や、美術品連のグッズなど多数取り揃えている。

②アブリ・バトゥ遺跡及び屋敷博物館（フランス ベリゴール地方）

旧石器時代からの遺跡を鉄骨製天棚により支え保護する施設と博物館併設する。隣接して研究施設もある。岩壁には牛と思われる浮き彫りが施されている。ガイドツアーによる解説がある。

③クロマニヨン岩窟遺跡（フランス ベリゴール地方）

石灰岩の崖下部の岩壁にあるが、現在は剥き出しのままで、解説があるのみである。

④ラスコー洞窟（ラスコー-オリジナル・ラスコーII）（フランス ベリゴール地方）～第2回

馬や野牛などの彩色壁画が残る世界で有名な洞窟であるが、入場者の吐く息に含まれる炭酸ガスにより石灰岩が白く壁画を覆う事態に陥ったため、洞窟全体を模したレプリカをラスコーIIと称してガイド付きで公開している。

⑤トール歴史公園（フランス ベリゴール地方）

中心部の博物館でラスコーIIの複製壁画を紹介する映像紹介やベリゴール地方の洞窟壁画を紹介する。また博物館専用には、壁画に描かれた動物を飼育し、観察しながらそれらを解説することが出来る。

⑥キャンプ・ブラン遺跡（フランス ベリゴール地方）～第3回

先史学や洞窟の保護に熱意を持つ個人が管理する洞窟遺跡で、浮き彫りになった馬やレプリカの壁画を紹介する。所有者によるガイドツアー解説。

⑦フォンド・ゴーム遺跡（フランス ベリゴール地方）～第4回

石灰岩質の長大な洞窟に野牛や馬が描かれる洞窟で、この洞窟の発見によってアルタミラの傑作という疑念が払拭された。石灰岩質の岩が入場者の炭酸ガスによって白く覆われていないように、1日600人の入場回数を設けている。ガイドツアーによる解説。

⑧ニール・ノン・ペール遺跡（ボルドー市郊外）～第5回

小規模な洞窟であるが、馬や野牛などが炭酸ガスによって描かれる。ガイドによる説明がある。内部では炭酸ガス検知機が働かせ、アラームが作動すると入場が制限される。

⑨アキターヌ博物館（ボルドー市）

ボルドー市郊外にある博物館で、考古学の特別展示を開催していた。フランス国内の洞窟及び壁画

の断面についての指示を中心に見学した。

II スペイン圏内の洞窟遺跡及び博物館

①エル・カステージョ洞窟（サンタンデ-ル地方）

発見100周年を記念した洞窟保存施設の修復作業が進行中である。鍾乳洞の石灰岩質の壁面に残る壁画は野牛や人間の手が描かれた状況がある。ガイドツアーによる解説。

②ラス・モネダス洞窟（サンタンデ-ル地方）

エル・カステージョ洞窟に隣接し鍾乳洞の洞窟が中心であるが、一部に馬や鹿の壁画が残る。ガイドツアーによる解説。

③アルタミラ博物館（サンタンデ-ル地方）～第6回

世界的に有名なアルタミラ洞窟に隣接する博物館である。精巧なレブリカでアルタミラを再現した博物館であり、調査から竣工まで20億円を投じた施設である。ガイドツアーによる解説を行なう。レブリカを見学後お見聞から調査までの経緯や先史美術、考古学、人類の進化などを紹介する博物館の見学を行なうことが出来る。

④洞窟遺跡の保存現状

フランス、ペリゴール地方の洞窟遺跡は石灰岩質の洞窟に壁画が写し、各遺跡の保存上の懸案として入場者の呼吸に含まれる炭酸ガスが石灰岩質の岩壁中のカルシウムと結合し、壁画を白く覆い、復元不可能とさせる「白い病気」が深刻化した。このため例えばペール・ノン・ペール洞窟では炭酸ガスセンサーを設置、アラームが作動すれば入場制限をかけることや、フォンドゴーム洞窟では1日600名の入場者制限を最初から設けるといった対策を講じている。またフゴッブ洞窟で観察に見られる緑色微生物の繁殖も若干見られながら、ガイドツアーによる見学時以外は閉鎖がされないことから問題としてはさほど大きなものではないと感じられた。また以前調査時についてはフォンドゴームでは夏季と冬季の通風方向や湿度（第1ゾーンでは12～13℃、第2ゾーンでは13～14℃）と年間を通じてほぼ一定湿度であることが保存調査により確かめられている。

⑤公開状況

今回見学した全ての洞窟において、ガイドツアーによる見学方式を保っており、より理解が深まることや、狭い洞窟内部で壁に接触されないよう監視が可能となるといった利点があろう。各遺跡のガイドや管理人など人的な配置も満足に行われている感があった。

また各洞窟で化石を見る人々に図録や絵巻物、スライドの販売を行なうミュージアムショップも充実し、洞窟周辺の遊歩道や休憩場所など遊歩を中心とした観光地としても整備されていた。

各洞窟中のインフォメーションセンターも遺跡を歴史的観光地として紹介しており、古来や自然環境に備った地点などと絵入った各種のツアーも紹介されていた。

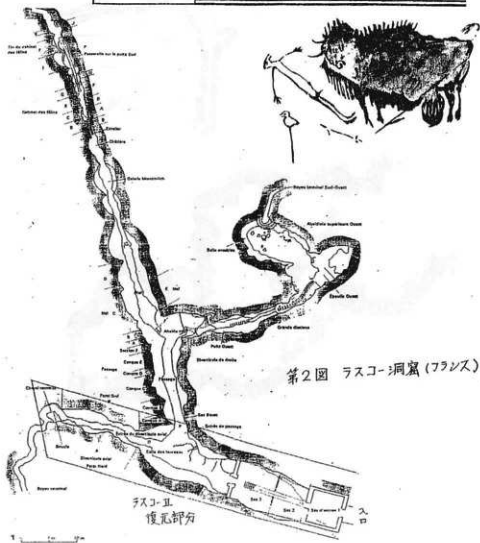
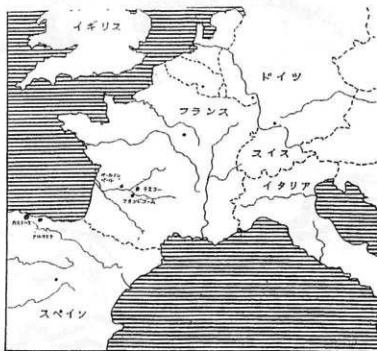
⑥フゴッブ洞窟との比較

フランス・スペインの先史遺跡のある洞窟を数箇所訪ねてきたが、石灰岩質による洞窟であるために、奥が深く、湿度が安定しているために、撮影が難しきやれ状況である。そのため洞窟内をそのままガイドが導いて説明をすることが多く、湿度による保存が危惧される時は、洞窟を併設したレブリカを案内する方法をとっている。フゴッブ洞窟の場合はもちろん石灰岩質であるために湿度が低い点で大きく異なり、保存と公開を同時に行っているために、洞窟内部がガラス越しとなり、本物の持つ迫力が失われていると言える。

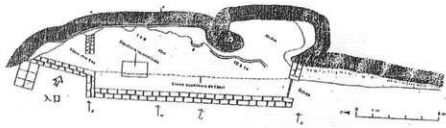
また、フランス・スペインでは、児童から一般向けの年齢に応じた考古学や先史美術の図鑑が洞窟に伴なう施設や博物館に数多く揃っており、見学後の学習がしやすい環境が整っている。日本の場合は、お土産的なものが多いが、意外と図鑑類は少なく、一般向けとなっていることが多いようである。

現状として、来客者には説明のみであるために、今後フゴッブ洞窟の図録作成、情報提供や教育普及活動が大切と思われる。

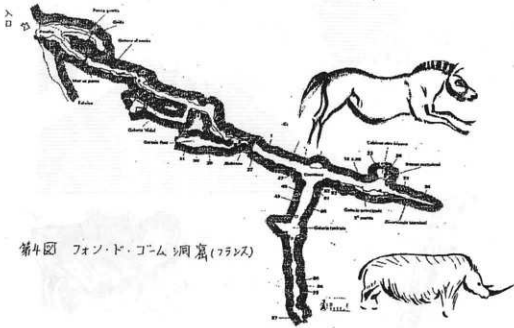
第1図
洞窟位置図



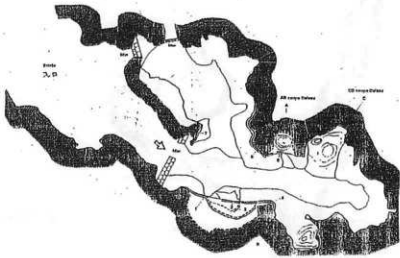
第2図 ラスコー洞窟 (フランス)



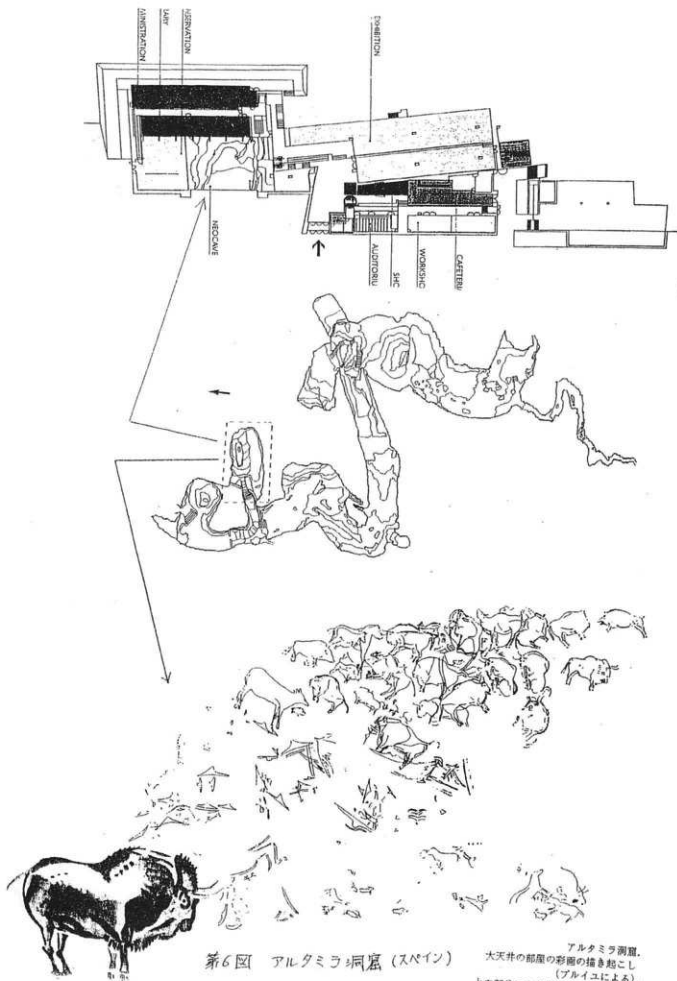
第3図 キャップ・ブラン岩窟遺跡 (フランス)



第4図 フォント・ゴーム洞窟 (フランス)



第5図 ベール・ノン・ベール洞窟 (フランス)



第6図 アルタミラ洞窟 (スペイン)

アルタミラ洞窟。
 大天井の部屋の彩画の描き起こし
 (アルイユによる)。
 上の部分に大牛の彫像と見られる

V 史跡フゴッペ洞窟関連トレンチ調査報告書

1. 業務概要

- (1) 業務名 : 平成 12 年度 史跡フゴッベ洞窟岩面刻画と文化交流のフィールドステーション作りの基礎研究
史跡フゴッベ洞窟関連トレンチ調査
- (2) 業務箇所 : 北海道余市町フゴッベ (図・1・1 参照)
- (3) 業務期間 : 平成 12 年 11 月 6 から平成 13 年 2 月 28 日まで。
- (4) 業務目的 : 遺物包含層と思われる土層構成の把握、サンプリングによる試料採取を目的としておこなうものである。(遺跡発掘調査の一環)
- (5) 業務内容 : トレンチ掘削、地質スケッチ、測量
- (6) 業務数量 : ①トレンチ掘削 (約 6.0m×5.0m・深さ 4.0m)
②地質スケッチ
③測量 (位置出し・座標)

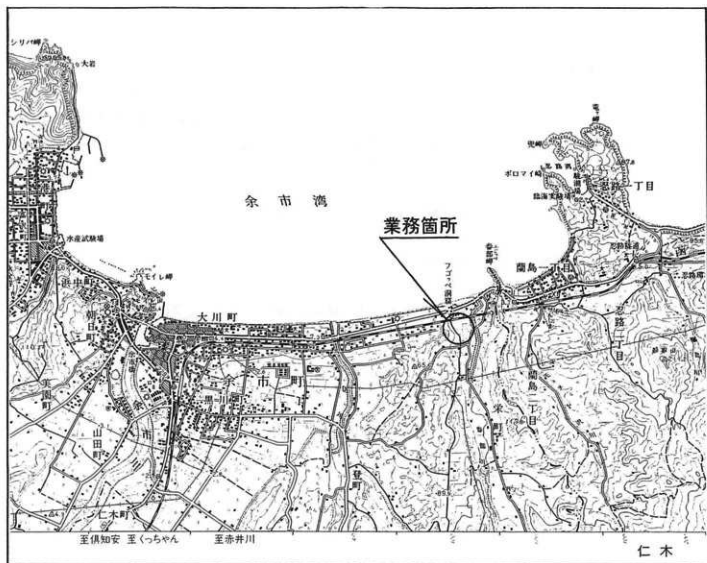


図-1-1.業務箇所図 * (縮尺S=1:50,000)

* 5万分の1地形図「小樽西部」から引用

2. トレンチ掘削

掘削位置はフゴッベ洞窟から南南東の方向、約 200m 離れたの平地で行い、掘削範囲は、約 6.0×5.0m 深さ 4.0m のトレンチ掘削を実施した。掘削位置は図-2-1 および 2-2 に示し、掘削状況を巻末資料のトレンチ掘削状況写真に示す。

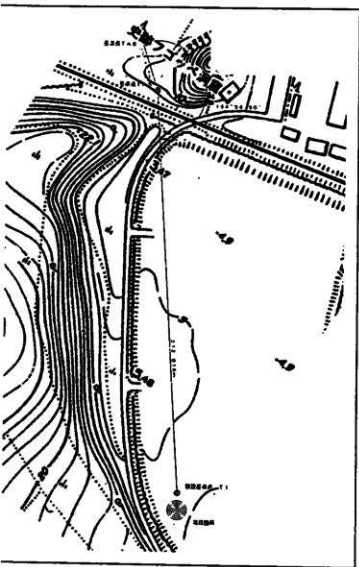


図2-1 調査位置図 S=1:2,000

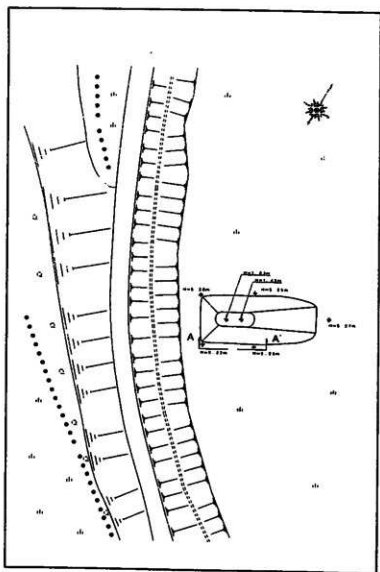


図2-2 調査位置図(拡大図)

3. 地質スケッチ

地質スケッチは、掘削した断面に座標点（測量）を示し、スケッチを実施した。地質スケッチをした断面位置（A-A'）を図3-1に示し、図3-2には地質断面図（地質スケッチ）を示す。また、巻末資料には掘削断面の土層柱状図を添付した。

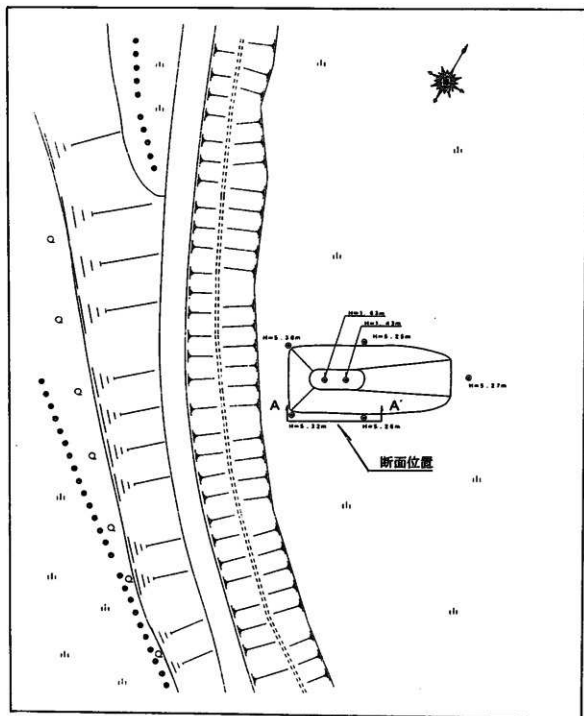
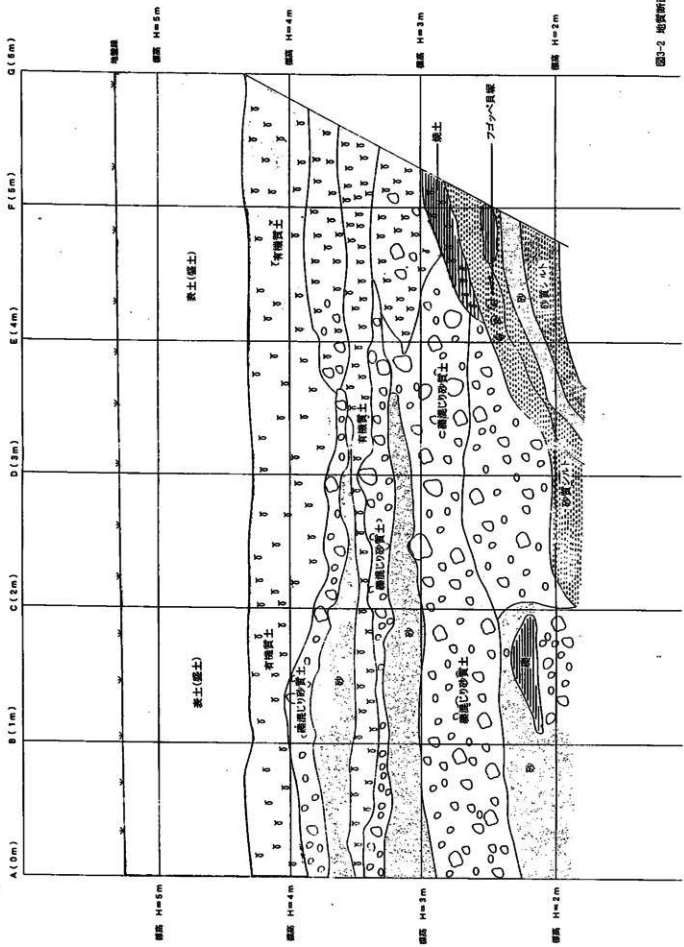


図3-1 地質スケッチ断面位置図

地質断面図 (縮尺1:200)

A

A'



4. 測量

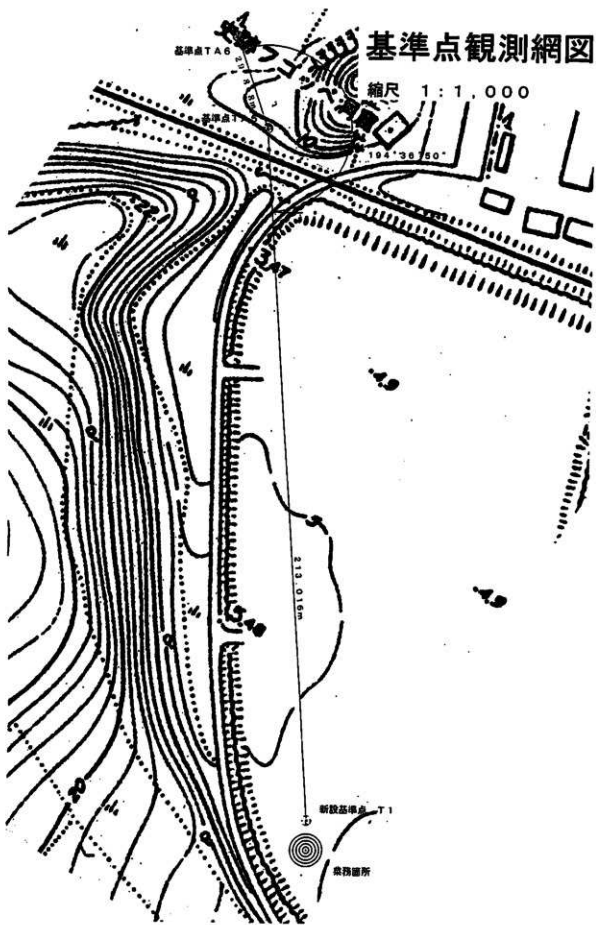
測量はフゴッペ洞窟外部で実施した測量成果内（平成 11 年度史跡フゴッペ洞窟内外部測量調査）から基準点を採用した。作業は、トレンチの掘削位置および掘削断面の実測を行った。巻末資料には計算書および測量成果表を添付した。また、測量観測野帳 1 部を別冊にして添付した。

調査位置図

縮尺 1:5,000

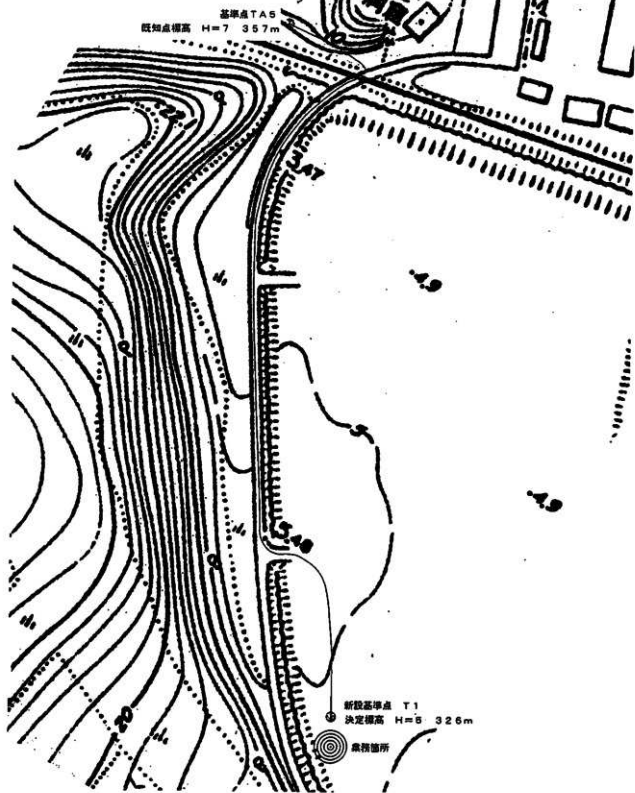


基準点観測網図



水準測量觀測經路図

縮尺 1:1,000



トレンチ掘削状況写真



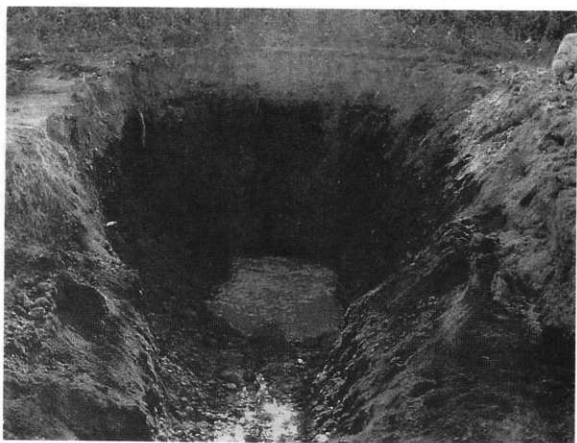
掘削前の状況



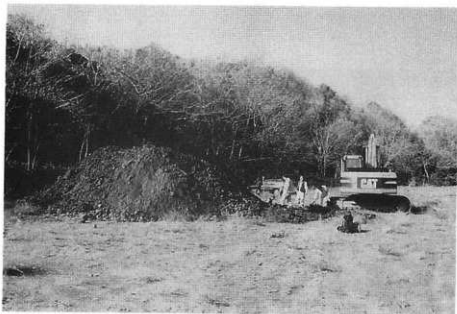
掘削状況



掘削状況(約1.0mの状況)



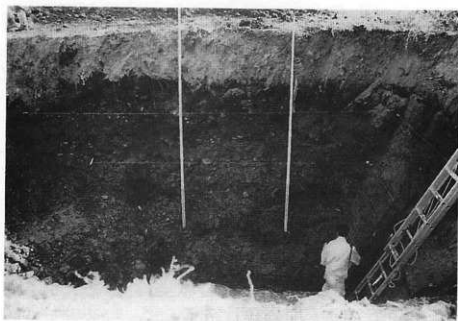
掘削完了
-186-



作業状況全景



掘削状況の確認



掘削断面の測量状況



埋め戻し状況



埋め戻し完了

柱 状 图

ボーリング柱状図

調査名 史跡227「平」河津岩面周縁と文化交流のフィールドワークに伴う基礎研究

事業・工事名 史跡フゴッペ河津周縁トレンチ調査

ボーリング地
シードNo

ボーリング名	調査位置	北緯	東経
発注機関	北海道拓居会館	調査期間	平成12年11月6日～13年2月28日
調査業者名	パブリックコンサルタント株式会社 TEL(011-222-3338)	調査場所	山形 善之 公園 芝 コブア
一口径	5.23m	代理人	安田 區
総掘進長	4.20m	試験機	ハンマー 落下器具
		エンジン	ボンプ

層 尺	層 厚	柱 状 図	土 質 区 分	色 相 対 照	相 対 高 程	記 事	標準貫入試験		試 験 名 称 お よ び 結 果	試料採取 場所 及 方 法	基 礎 日 期 月 日
							試 験 値 N	試 験 方 法			
1	4.12 ~ 5.56	○	粘土 硬		5.5		10/20 10/20/30				
2	3.95 ~ 5.56		硬質砂 中		5.5	掘削中に土砂崩入					
3	3.45 ~ 5.56		硬質砂 少		5.5	掘削中に土砂崩入、支保脚に土砂崩入する。崩落防止工に注意し掘削					
4	2.95 ~ 5.56		硬質砂 中		5.5	掘削中に土砂崩入。					
5	2.45 ~ 5.56		硬質砂 中		5.5						
6	1.95 ~ 5.56		硬質砂 中		5.5						
7	1.45 ~ 5.56		硬質砂 中		5.5						
8	0.95 ~ 5.56		硬質砂 中		5.5						
9	0.45 ~ 5.56		硬質砂 中		5.5						

測量計算書・成果表

新設基準点放射トラバナー計算書

平成 12 年 11 月 6 日

現場名：フゴツベ洞窟
 作業名：フゴツベ洞窟
 2次元斜距離開放射

器械点	視準点	観測角	方向角	距離	cos	sin	ΔX	ΔY	X	Y	点名	点番
TAS	TAS		341° 16' 24"						-86582.224	48098.92347A5		1
TAS	T1	194° 36' 50"	175° 53' 14"	213.016	-0.997424813	0.071719886	-212.467	15.277	-89794.691	48114.20071		3

逃げ点座標計算書

平成 12 年 11 月 6 日

現場名：フゴツベ洞窟

作業名：フゴツベ洞窟

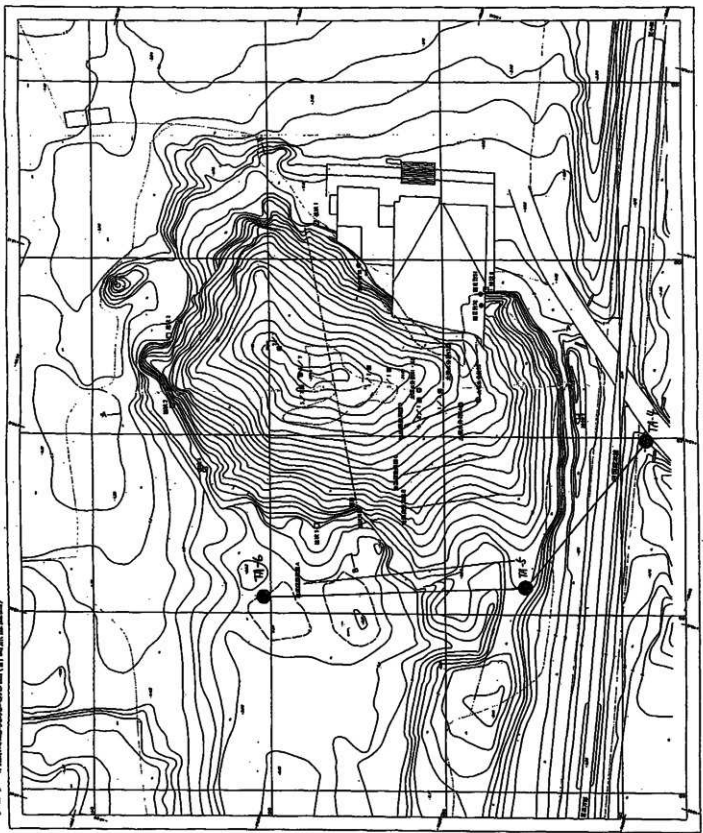
器械点	標準点	観測角	方向角	距離	cos	sin	ΔX	ΔY	X	Y	点名	点番
T1	TAS		35° 53' 14"						-89794.691	48114.200	Y1	3
T1	T2	112° 05' 45"	107° 58' 59"	12.434	-0.308735719	0.951147862	-3.839	11.827	-89798.530	48126.027	T2	4

掘削位置座標計算書

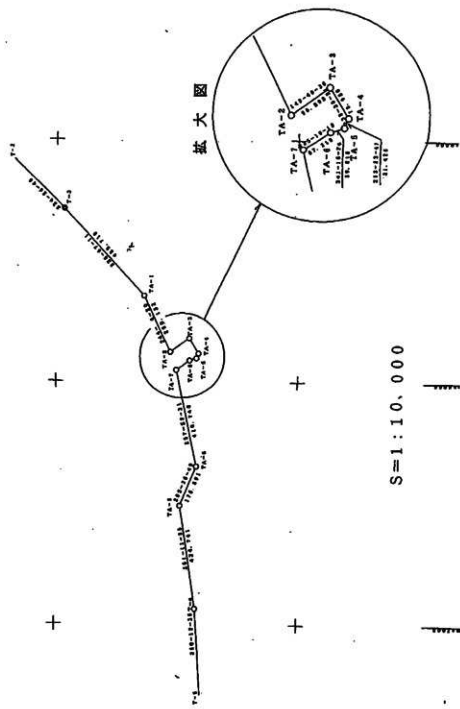
平成 12 年 11 月 6 日

現場名：新現場
作業名：新現場

器基点	視準点	観測角	方向角	距離	cos	sin	ΔX	ΔY	X	Y	点名	点番
T2	T1		287°58'59"						-89798.530	48126.02272		4
T2	1	317°51'05"	245°50'04"	11.406	-0.409374621	-0.912366384	-4.669	-10.406	-89803.199	48115.6211		5
T2	2	317°51'30"	245°50'29"	12.879	-0.409264037	-0.912415995	-5.271	-11.751	-89803.801	48114.2762		6
T2	3	318°02'20"	246°01'19"	11.571	-0.406336723	-0.913701172	-4.702	-10.572	-89803.232	48115.4553		7



基準点観測路線網 (TA路線)



VI 資料集

発見50周年記念

フゴッペ洞窟シンポジウム

—過去・現在・未来—



開催日:2000年11月18日(土)~20日(月)

場所/余市町中央公民館

主催/北海道開拓記念館、余市町・余市町教育委員会

協賛/北海道新聞社

後援/日本第四紀学会、日本考古学協会、北海道考古学会、北海道博物館協会

フゴッペ洞窟は1950年(昭和25年)8月、札幌在住の中学生が偶然に発見し、1952～1953年に本格的な発掘調査が実施された。その結果、縄文文化後半の出土遺物や日本最大の岩面刻画などが確認され、この時期の文化を知る上で多くの貴重な成果を上げている。しかも発掘終了年の11月に国指定史跡とされ、洞窟の覆い屋根を建築し1955年(昭和30年)から一般公開された。その後、洞窟に描かれた岩面刻画の風化が著しいことから本格的な史跡保存が計画され、洞窟内の温・湿度を制御する保存施設の建設が行われた。1972年(昭和47年)11月に完成し再公開され現在に至っている。

フゴッペ洞窟の研究については、岩面刻画のルーツ・製作年代、当時の気候や洞窟の環境、先史文化の交流など未開明な部分が多く、いまだに謎につつまれているのが現状である。したがって、2000年はフゴッペ洞窟の発見50年にあたり、「フゴッペ洞窟の過去・現在・未来」をテーマとしたシンポジウムを開催し、これまでの研究成果を検証し、現在から未来に向けたフゴッペ洞窟について、考古学、先史美術、民族学はもとより保存科学や関連科学などの多くの地見から、学際的かつ総合的な討論をおこなうことを目的とする。さらに、発見50年を記念し、未来にむけ文化遺産の保存と活用、洞窟の謎の解明を探る手がかりとなることを願うものである。

このシンポジウムは、文部省科学研究費補助金地域連携推進研究費「フゴッペ洞窟・岩面刻画と文化交流のフィールドステーション作りの基礎研究」の一環として実施する。

11月18日(土) 記念講演・記念報告 13:30～16:40

13:30～13:50 開催挨拶

余市町 町長 大谷 覚氏
北海道開拓記念館 館長 吉田和夫

13:50～15:20 記念講演

「フゴッペ洞窟と世界の岩面刻画」
木村重信氏(大阪大学名誉教授)

15:20～15:40 休憩

15:40～16:40 記念報告

「フゴッペ洞窟発見50年」
大塚和博氏、大塚和之助氏(発掘関係者)

11月19日(日) シンポジウム 9:00～16:30

9:00～10:00 報告

「フゴッペ洞窟の考古学的位置づけ」

乾 芳宏氏(余市町教育委員会文化財係長兼学芸係長) 考古学

10:00~11:00 報告

「フゴッペ岩面刻画の位置づけ」

小川 勝氏(鳴門教育大学・助教授) 先史美術

11:00~12:00 報告

「民族学からみたフゴッペ洞窟」

佐々木史郎氏(国立民族学博物館・助教授) 民族学

12:00~13:00 昼休み

13:00~14:00 報告

「フゴッペ洞窟の立地環境と気候」

小泉 格氏(北海道大学大学院理学研究科・理学部・教授) 地質学

14:00~15:00 報告

「フゴッペ洞窟の保存と活用」

三浦定俊氏(東京国立文化財研究所・保存科学部長) 保存科学

15:00~15:20 休憩

15:20~16:20 総合討論

「フゴッペ洞窟の過去・現在・未来」

コメンテーター/木村重信氏(大阪大学名誉教授)

菊池徹夫氏(早稲田大学文学部・教授)

福田正巳氏(北海道大学低温科学研究所・教授)

司 会/赤松守雄(北海道開拓記念館・学芸部長)

16:20~16:30 閉会挨拶

余市町教育委員会 教育長 利 輝夫氏

11月20日(月) エクスカーション 9:00~12:30

9:00~12:30 フゴッペ洞窟、よいち水産博物館、旧下ヨイチ運上家、旧余市福原漁場など
(余市町中央公民館/9:00出発、ニッカウキスキー北海道工場/12:30解散)

目 次

1	記念講演「世界の岩面刻画とフゴッペ洞窟」 木村重信(大阪大学名誉教授)	1
2	記念報告「フゴッペ洞窟発見あれこれ」 大塚以和雄・大塚誠之助(発見関係者)	8
3	報告1「フゴッペ洞窟の考古学的位置づけ」 乾芳宏(余市町文化財係長兼学芸係長)考古学	10
4	報告2「フゴッペ岩面刻画の位置づけ」 小川勝(鳴門教育大学・助教授)先史美術	15
5	報告3「民族学からみたフゴッペ洞窟」 佐々木史郎(国立民族学博物館・助教授)民族学	20
6	報告4「フゴッペ洞窟の立地環境と気候」 小泉格(北海道大学・教授)	21
7	報告5「フゴッペ洞窟の保存と活用」 三浦定俊(東京国立文化財研究所・保存科学部長)保存科学	23

フゴッペ刻画と世界の岩面画

木村重信

(大阪大学名誉教授)

1. はじめに

世界の美術には、時代、地域、民族の違いを越えて、類似した表現が多くあり、したがってそれらを比較研究することができる。しかし留意すべきは、その有効性と限界である。古い時代の美術作品を解釈する場合、私たちはとかく自らの文化的慣習に基づきがちであるが、そのような主観的解釈を避けるために、比較研究は有効である。つまり、そのことによって私たちの芸術観や宗教観に頼る度合いを小さくすることができる。また、その限界としては、比較研究によって絶対的な解答を引き出すことはできないが、芸術活動の基礎にある諸要素およびその集合体を明らかにすることに役立つことである。そこで、フゴッペ洞窟の歪状穴と人物像について、世界各地のそれらとの比較研究を行う。

2. 歪状穴

歪状穴のある石はわが国ではかつて「凹石」と呼ばれたが(坪井正五郎、鳥居龍藏)、1981年に図分直一が「歪状穴」と命名し、その後この名称が用いられている。

Vanuatu 共和国の小島 Lelepa に Feles 洞窟があり、その岩壁に多くの歪状穴が1列、2列、数列に表されている(図1)。この種の歪状穴は南太平洋や東南アジア各地に広く分布している(Marquesas, Easter, Sumatra など)(図2)。

現在知られている最古の歪状穴は、フランスの La Ferrassie における中期旧石器時代の Mousterian 期のものである(図3)。そして後期旧石器時代になると、La Ferrassie のほか、Blanchard, Cellier, Laugerie-Haute などに、新石器時代には西欧から北欧の全域に広がる。とくにスイスの Col du Torrent や Zermatt に多い。

古代エジプトにおける太陽または太陽神の象徴は、球体をほめこんだ大きな歪状穴であり、ファラオの碑にも多くの歪状穴がうがたれる(図4)。また Bolivia の Chimane 族には、深い歪状穴を伴う女性性器でおおわれた多くの丸石がある。さらにフゴッペに近い韓国や北方ユーラシアの岩面画にも、多くの歪状穴が散在する。

わが国では古代から近世まで、各種の石に歪状穴が彫られたが、古い時代のものについては発火具説、石器制作具説、堅果類割具説があり、中世以降は鳥居、常夜灯、手洗石、石段など、社寺の石造物に多いので、宗教的意味が指摘される。とくに注目すべきは、加古川下流の飯盛山テラスにうがたれた多くの歪状穴である。

これらの歪状穴の意味については諸説がある。星のある天体のイメージとか、特別な意味をもつ雨水を容れるものとか、豊饒にまつわるものとか。しかし歪状穴の意味は、旧石器時

代から現代まで、つねに一定しているとは限らない。ただ、盃状穴のある大きな石塊が群をなしている場合は、そこが祭儀の中心であったようである。

このような盃状穴と関連して、色彩による丸い斑点や、それらが連続したものがある。また、盃状穴が表と裏からうがたれた抜き穴があり、岩盤、石塊、骨角器にほどこされる。

3. 人物像

峰山巖はフゴッへの人物像を直立像と開脚立像に分け、後者の仮装人物を有翼人と有角人に分ける。これらと類似する表現が世界の岩面画に頻出するが、それらを整理すると、自然主義的人物、帯状人物、厚脚人物、線状人物、砂時計状人物に大別される。

仮装人物には鳥 (Easter など) (図 6)、獣 (Les Trois-Frères など) (図 7, 図 8) に仮装したり、仮面着用 (In Aouanrhat など) (図 9) などの例が多くある。また、手に物品を持ったり、舞踊や狩猟を行ったり、舟に乗ったり (図 10)、1 つまたは複数の指が切断された手形などがある。

中国北方系岩面画の人物像や動物像については、牛克誠は (図 11) のように整理した。

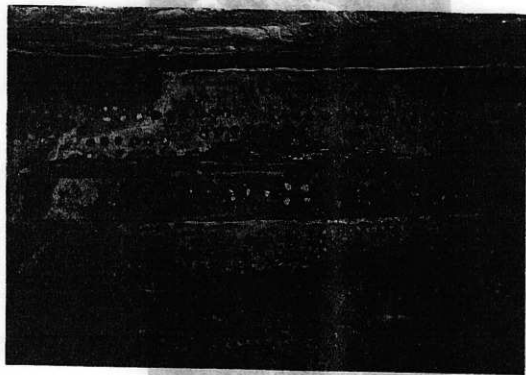


図1 盃状穴の列 Feles(ヴァヌアツ)

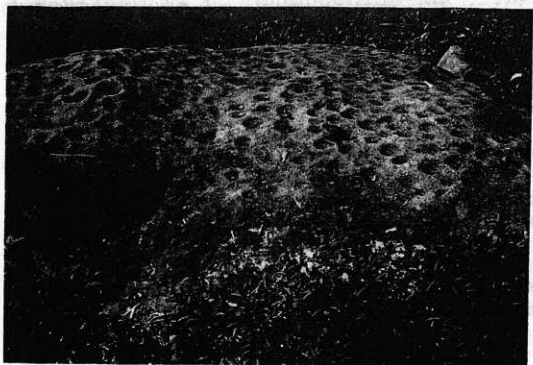


図2 盃状穴のあるドルメン Pasemah(インドネシア)



図3 盃状穴のある石 La Ferrassie(フランス)



図4 アク・エン・アトン王の石碑 Tell El Amarna(エジプト)



図5 飯盛山祭祀テラス (兵庫県)



図6 鳥人浮彫 Easter(チリ)



図7 笛を吹く呪術師 Les Trois-Freres(フランス)



図8 有角人物 Sefar, Tassili-n'Ajjer(アルジェリア)



図9 仮面をつけた人物 In Aouanrhat, Tassili n'Ajjer(アルジェリア)

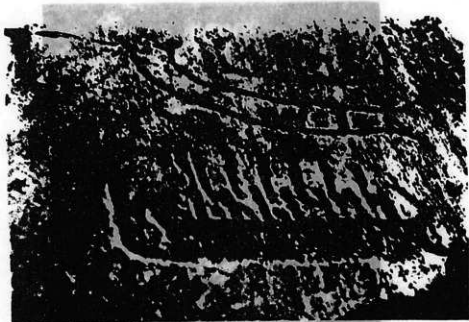


図10 舟に乗る人たち Tanun(スウェーデン)

M : 男性生殖器 一 : 男性生殖器 U : 女性生殖器 • : 女性生殖器 牝 : 雄の動物
 TT : 雄の動物 冂 : 雄の動物 ㄣ : 雌の動物 冂 : 雌の動物 冂 : 雌の動物

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
I												
II												
III												
IV												
V												
符号	M	U	一	冂	ㄣ	冂	冂	冂	冂	冂	冂	冂

図11 中国北方系岩面画における記号(牛克誠による)

フゴッペ洞窟の発見あれこれ

大塚以和雄・大塚誠之助

1. はじめに

フゴッペ洞窟が発見されてから 50 年になります。私にとって、この洞窟との出会いは生涯忘れることのできない遺跡です。

これまで、洞窟の発見については、昭和 25 年(1950)8 月、海水浴に来た札幌南高校郷土研究部の私が、偶然に発見したと言われてきました。しかし、海水浴に行つて最初に発見のきっかけとなったのは、当時中学生であった私の弟の誠之助であります。

国指定の史跡になった時、また、カプセル化された時などの催しには、何故か一度も呼んでいただけず、このことについて報告する機会を逸していました。

昭和 58 年 3 月、峰山先生が書かれた「謎の刻画フゴッペ洞窟」が出版され、そのなかでも私が発見したとドラマチックに書かれているのを読んで驚き、かつて峰山先生にお手紙を差し上げ訂正をお願いしたこともありました。

2. 考古学への興味と郷土研究部

私たち兄弟は、北方領土である国後島出身ですが、家の近くには整穴住居跡が沢山あり、遺跡が子どもの遊び場となっていたこともあり、土器片や石器などを収集したり、身近なものであります。また、戦後、網走市に引き揚げ、そこで網走市モヨロ貝塚や同郷土博物館に行つて米村喜男衛先生のお話を聞いたりする機会にも恵まれ、二人とも小学生の頃から遺跡や遺物に大変興味をもっていました。

その後、札幌市に転居し、私は今の札幌西高校である札幌二中に入学し、郷土研究部でモヨロ貝塚や礼文島の船泊遺跡、枝幸町の遺跡、斜里町の遺跡などの発掘に参加し、考古学にだんだんのめり込みました。個人的には小樽市手宮の古代文字(手宮洞窟)や忍路のストーンサークル、余市町のフゴッペ洞窟の南側の線路わきにあった旧フゴッペに関心をもって何度か訪れていました。当時、旧フゴッペは、鉄道の枕木を立てかけてあった所です。

昭和 25 年、札幌市内の高校再編成により、私は札幌南校に移ることになりました。そこで、小樽市潮陵高校から転動されてきた島田先生にお話し、郷土研究部を開部していただき瀬棚町や斜里町で遺跡の発掘を実施しました。

日曜日になると、市内の平岸区天神山遺跡に行つて土器片や石器を収集し、学校のクラブで、それをもとに活動をしていました。

3.フゴッペ洞窟の発見から発掘調査

当時、考古学に興味を持っていた札幌市中島中学3年生の弟が、蘭島に海水浴に行くことを聞き、余市町のフゴッペに行って旧フゴッペを見てくるようにと伝えました。弟が訪れた時、丸山(現在のフゴッペ洞窟)の中腹に、前年になかった穴があいていたわけです。聞くとところによると、近くの農家の人が客土のため土砂を運んだ際に、その穴が現れたと言われています。穴の規模は、丁度、子どもが腹這いでやっと入れる位で、しかも付近には、土器片が散らばり、遺物を収集することができました。

この話を聞いて私は、何かあると直感し、ただちに次の日曜日に一人で満員の汽車に乗って出かけました。そのことは、昨日のことにように思いだされます。

客土の土取りをされたのは、近くにお住まいのぶどう園を営まれている小柄さんでした。その状況をお聞きし試掘を行ってみると、洞窟遺跡であることがすぐに判断できました。ただちに島田先生に相談し、札幌南高校郷土研究部として発掘調査を始めることになりました。その翌年、弟は札幌南高校に入学するとともに郷土研究部に入部し、昭和26年からの名取武光先生を団長とするフゴッペ洞窟の総合学術調査団の発掘に、私もどもも参加することができました。

それにしても、この洞窟が壊れる前に発掘が実施でき、本格的な調査がおこなわれ保存されていることは、大変うれしく、発掘に参加でき光栄に思っております。



昭和25年(1950)発見当時のフゴッペ洞窟



フゴッペ洞窟(丸山)付近の景観

フゴッペ洞窟の考古学的位置づけ

乾 芳 宏

(余市町教育委員会・文化財係長兼学芸係長)

はじめに

フゴッペ洞窟の考古学的調査や研究は、常に小樽市手宮洞窟と相互に比較されながら進展してきたと言えます。それは、このような岩面刻画のある洞窟が北海道において2箇所のみであり、しかも近隣にあり類似性があるためです。しかし、岩面刻画の年代をはじめ、洞窟の性格については多く解明すべき問題があります。

ここではフゴッペ洞窟について考古学的立場から検討してみます。

1. 学史的な見解

フゴッペ洞窟は昭和25年(1955)に発見され、多くの遺物の出土とともに岩面刻画が見られることから古代のものであることが判明しました。その事実は手宮洞窟が明治11年(1878)に学会に紹介されて以来つづいた真偽論争に終止符を打つこととなり、両者の比較検討が可能となりました。

また、住居や墓坑の遺構を主としていた当時の考古学に新たな精神文化を加えることにもなりました。このようなものがさらに発見されるかもしれないことから洞窟遺跡について注目されることにもなりました。

2. 年代について

フゴッペ洞窟の発掘は昭和26年(1951/第1次)、28年(1953/第2次)、前庭部の発掘が昭和46年(1971/第3次)に行われています。洞窟の堆積は3mにも及び、統縄文時代の後北B、C、C-D式(後期北海道薄手縄文土器の略)、北大式と呼ばれる土器が見られ、前庭部からは後北A式に類似する土器が出土しています。

刻画の見られる岩片が後北C-D式の層に包含されていることからそれ以前の可能性があります。後北C-D式の年代については3~4世紀と推測され、最近行ったボーリング調査では洞窟の土砂堆積が進み乾燥して住めるようになったのは2世紀ごろと推定されています。

これらのことから、刻画の年代は2~4世紀のある時期に描かれたものと思われます。

手宮洞窟については平成元年(1989)・2年(1990)に保存修理に伴って前庭部と2号洞窟の発掘調査が実施され、最下層に恵山式、次に後北C-D式が出土していることから統縄文時代のものと推定されています。

3. 洞窟出土の遺物と遺構

洞窟には、刻面とともに多くの遺物が残されています。土器や石器とともに骨角器が多く出土しています。骨角器では銚頭、斧、針などが見られ、針には幾何学的な模様が彫刻されているものがあります。遺構では貝塚が厚く層をなして堆積し、炉跡も見られます。

遺物と遺構から洞窟は生業と強い係りをもっていたことが想像できます。

4. 岩壁刻面について

フゴッペ洞窟の最も特徴となるのが刻面です。手宮洞窟の刻面解釈として古代文字説が根強くありましたが、人物、動物、舟などを表現したものと考えられています。

手宮洞窟と比較すると種類が多く、彫刻について短期間なのか、長期間に渡るものなのか議論されるどころです。また、どのような道具で彫刻したのかも研究されています。

最大の謎は刻面のもつ意味であり、呪術的要素が強いと言われますが様々な分野からの検討が必要です。

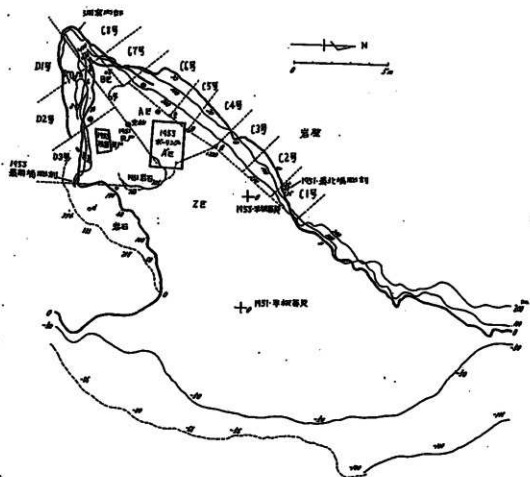
5. 洞窟と周辺の遺跡

洞窟刻面の年代は統縄文時代と考えられますが、周辺遺跡との関連を考慮しなくてはなりません。

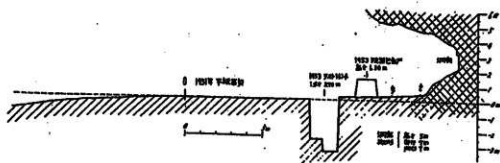
洞窟の周辺ではフゴッペ貝塚や大谷地貝塚遺跡があり、わずかに後北C 2-D式が出土しています。また西に約4 kmの大川遺跡では恵山～後北C 2-D式が多量に見られます。

小樽市では蘭島のチブタシナイ、餅屋沢遺跡があり後北C 2-D式の墓坑群が発見されています。

以上の5項目については未解決の部分が多く、北方の周辺地域との比較、様々な視点や分野からの研究によって具体的なフゴッペ洞窟人のイメージが作られるを期待します。

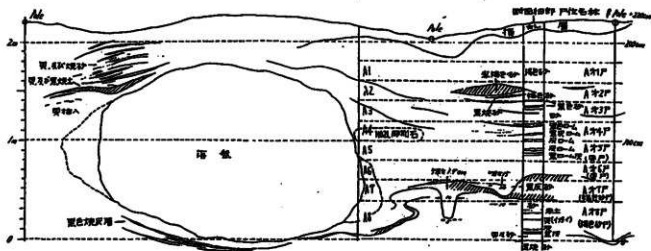


第1图 1951-1953年度 洞窟平面图

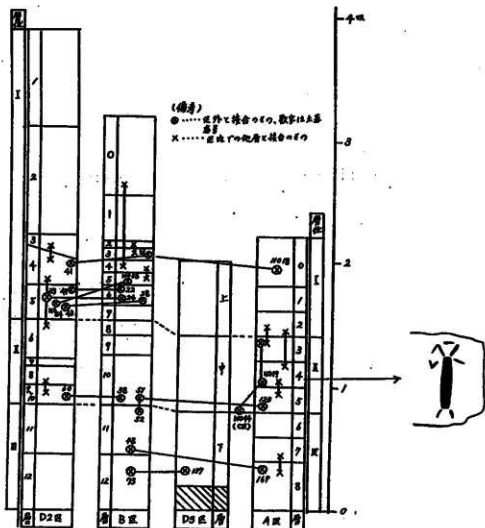


全透射断面略图

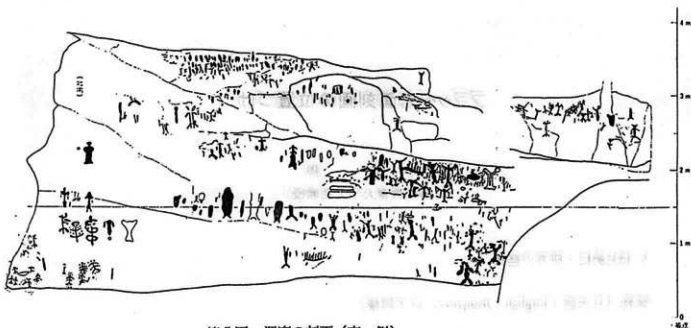
第2图 洞窟断面略图



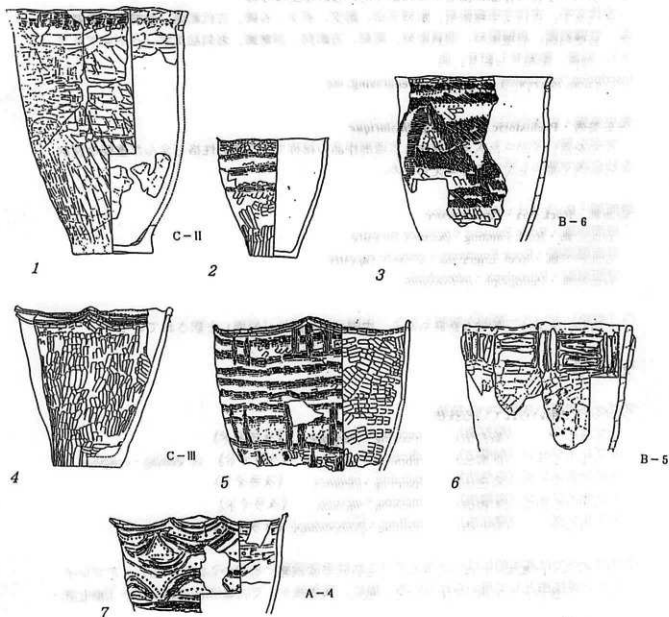
第3図 洞窟前A区断面及び層位名称図



第4図 復元可能な土器の散布状態



第5図 洞窟の刻画(南側)



第6図 洞窟出土の復元土器実測図

フゴッペ岩面刻画の位置づけ

小川 勝
(鳴門教育大学・助教授)

1. はじめに：研究の経緯

呼称 (日本語・English・française、以下同様)

フゴッペ・手宮の作品に関してこれまで用いられた主な呼称

古代文字、古代文字様彫刻、彫刻文字、彫文、石文、石碑、古代彫刻、陰刻画、陰刻壁面、岩壁刻画、岩壁彫刻、洞窟彫刻、彫刻、古彫刻、洞窟面、岩刻絵文字 (ペトログリフス)、刻画、彫刻せし記号、他
inscription, *inscription lapidaire*, wall engraving, etc

先史美術・Prehistoric art・*l'art préhistorique*

文字を用いなかった人々が制作した造形作品の総称で、文字的性格も含んだ重要な役割を社会内で果たしていたと考えられる。

岩面画・Rock Art・*l'art rupestre*

岩面彩画・Rock Painting・*peinture rupestre*

岩面線刻画・Rock Engraving・*gravure rupestre*

岩面刻画・Petroglyph・*péroglyphe*

○「岩絵」という一般的な訳語もある。中国では一般に「岩画」と訳されている。

2. 技 法

フゴッペで用いられている技法

ベッキング (敲打法)	pecking・ <i>frappage</i>	(スライド)
アブレイジョン (削磨法)	abrasion・ <i>abrasion</i>	(スライド) cf. cutting・ <i>coupage</i>
ペインティング (彩色法)	painting・ <i>peinture</i>	(スライド)
インサイジョン (彫線法)	incision・ <i>incision</i>	(スライド)
ドリリング (穿孔法)	drilling・ <i>poinçonnage</i>	(スライド)

○フゴッペでは基本的にはベッキング (これは手宮洞窟でも用いられている) とアブレイジョンが技法として用いられている。他に、現存例としては数作品にペンガラ (酸化第

二鉄)がペインティングで付加されている。また、インサイジョンとドリリングも若干の作例で認められるが、これらはアブレイジョンの範疇に属すると考えてよいだろう。

他の代表的な技法

エングレイビング (線刻法) engraving・gravure (スライド)
カービング (彫刻法) carving・sculpture (スライド)

3. 分 布

北東アジアにおける代表例

盤龜臺 (朝鮮半島南東部・慶尚南道) (スライド)
動物像 (スライド)、人物像 (スライド)、舟 (スライド)・クジラ (スライド)
川前里 (朝鮮半島南東部・慶尚南道) (スライド)
動物像 (スライド)、抽象文様 (スライド)、銘文 (スライド)
良田洞 (朝鮮半島南東部・慶尚南道) (スライド)
仮面 (スライド)
尚州里 (朝鮮半島南東部・慶尚南道)
岩面刻面 (スライド)
彦島杉田 (下関市) (スライド)
岩面刻面 (スライド)
賀蘭山・賀蘭口 (中国・寧夏回族自治区) (スライド)
動物像 (スライド)、仮面 (スライド)
Shikachi Aryan (ロシア・ハバロフスク州) (スライド)
動物像 (スライド)、仮面 (スライド)
Kir (ロシア・ハバロフスク州) (スライド)
舟 (スライド)、仮面 (スライド)
手宮洞窟 (小樽市)
岩面刻面

- 北東アジアでは紀元前5世紀を中心に、岩面刻面を制作する伝統として「タガール=オールドス=スキタイ文化複合・Tagar-Ordos-Scythians' culture complex (金元龍による)」の存在が想定される。
- フゴッペおよび手宮の岩面刻面に類似する作品は、現在まで、北東アジアでは発見されていないといえる。

4. 年 代

手宮洞窟・岩面刻面に關する従来の代表的な説

- 後北 C2・D 式土器の時代 (紀元後 3～4 世紀)

フゴッペ洞窟の形成された年代

(1999年11月のボーリング調査による・洞窟周辺5カ所) (スライド)

約6,000年前、縄文海進期(紀元前4,000年頃)

約4,000年前、縄文海進期(紀元前2,000年～同1,500年頃)

約2,000年前、弥生海進期(紀元前600年～紀元前後)

- フゴッペ洞窟は最終的に紀元後1世紀前半に形成されたと考えられる。
- 仮に弥生海進期以前に作品が制作されていたとしても、それらは弥生海進の時に消失したことだろう。
- 紀元後1世紀後半には刻画制作するための環境が整っていたと推定される。(フゴッペ岩面刻画・制作年代の上限)

フゴッペ洞窟で発見された考古学的遺物の年代

後北A～北大式土器の時代(紀元後2世紀～6世紀)

鈴谷式土器の混入(紀元後3～4世紀)

- フゴッペ洞窟で土器を残した人々は連続的な精神文化を維持していたものと推定される。
- 鈴谷式土器の存在から、紀元後数世紀間もサハリン等の北方と文化交流のあったことが認められる。もちろん、これはその時期に限られることではなく、常に人々の集団の移動はあっただろう。
- 1970年報告書において「フゴッペ式土器」と称された土器も1例出土している。

加速器質量分析法(AMS・Accelerator Mass Spectrometer)による年代

試料の貝は北海道開拓記念館所蔵によるもの

測定番号	試料	測定年代	補正年代
Beta-140911	貝	1620 ± 30	2040 ± 30
Beta-140912	貝	1590 ± 30	2030 ± 30
Beta-140913	貝	1670 ± 30	2110 ± 30
Beta-140914	貝	1600 ± 40	2020 ± 40

刻画のある剥落石片(約70個が発見されている・北海道開拓記念館所蔵)

- 発見箇所の垂直的分布・1951年平板基点(0m)をもとに、+210cm～-160cm(スライド)
- 発見箇所の水平的分布・A～D区、Z区からまんべんなく発見されている。(スライド)
- 後北式土器を残した人々は剥落した石片を放置していたと推定される。
- 後北式土器を残した人々に道具制作のために利用された痕跡が1例認められる。(スラ

イド)

○すなわち、後北式土器の時代の人々に刻画はその存在を意識されていなかったと推定される。

岩面刻画の制作年代を決定するための様々な留意点

- ベッキングとアブレイジョンによる主要な作品は、制作技法が異なっても、同様のかたちを意図したと考えられる。(スライド・数例)
- 技法はまずベッキング、そしてより柔らかい岩質に応じてアブレイジョンが用いられたと考えられる(ベッキングとアブレイジョンの混在する作品が一例認められる)。(スライド・数例)
- 分布が南壁洞口部付近に限られている「図式的人物像」は、かたちが主要作品と異なり、その位置づけは今後の課題である。そのいくつかに用いられている技法のインサイジョンはアブレイジョンに含めることができよう。(スライド・数例)
- ドリリングによる作品(南壁奥部上段)もアブレイジョンの範疇に含めることができるだろう。(スライド・数例)
- 重ねがきはベッキングによる作品間で1例のみ認められ、他に重ねがきが全く認められないことから、フゴッペの岩面刻画は基本的に同一の文化に属する人々により制作されたと考えられる。(スライド)
- 岩面刻画を制作した人々は、作品を制作する場所を聖域と見なしていたと推定される。ヨーロッパの事例からは、聖域に作品を制作した後に場所を浄めて遺物を残さないことが多いということも考えられる。それゆえ、岩面刻画の制作年代決定では、作品直下から発掘された遺物が決定的要因にならないことがあることも考慮しなければならない。
- 作品がすべて制作された後で、後北式土器を残した人々がフゴッペ洞窟を利用しはじめたのではないだろうか。
- 手宮洞窟・岩面刻画もフゴッペと同じ人々によってベッキングにより制作され、フゴッペではより柔らかい岩質に対応して、ベッキングに加えて、アブレイジョンも用いられたと考えられる。
- 現時点で、我が国ではフゴッペ・手宮以外では岩面刻画が発見されていない、という事実を重視する必要がある。
- 結論として、フゴッペ洞窟・岩面刻画は洞窟形成後作品制作が可能になった紀元後1世紀後半から後北B式土器を残した人々が洞窟を利用しはじめた紀元後2世紀中葉以前、すなわち、紀元後2世紀前半にかけてのある特定の時期に、かなり集中的に制作されたのではないかと、現時点では考えている。

5. 参考例

ポルトガル北東部・コア川下流域岩面刻画遺跡群の年代決定の問題

- 1994年以降、約25カ所の遺跡に500点以上の岩面刻画が確認されている。(スライド数例)
- 様式論的観点からは、洞窟壁画との類似から後期旧石器時代(紀元前30,000年前~同10,000年)に制作されたと考えられている。
- 新しい年代決定方法によって、より新しい年代であると見なされるようになっている。
- 「微細浸食分析」と「刻線内部分析」によりオーストラリアのベドナリク(Bednarik)は、8,500年前~4,500年前と考えた。
- 「二酸化珪素皮膜包含炭素分析」によりオーストラリアのウォッチマン(Watchman)は、1,700年前と考えた。

6. おわりに：今後の課題

- フゴッペ・手宮の岩面刻画を制作した人々はどのような集団だったのか？
紀元前後から数世紀間にどのように人々が移動していたのか、その実態を探る必要がある。
- フゴッペ・手宮の岩面刻画は何を表現しようとしたのか？
表現意図や画像解釈の研究を進めるためには、まず作者が目指したかたちを確定する必要がある。そのためには彼らが用いた技法を的確に理解しなければならない。

参考文献(抜粋)

- フゴッペ洞窟調査団(編)『フゴッペ洞窟』、ニュー・サイエンス社、1970年
- 峰山 肇(文)・掛川源一郎(写真)『謎の刻画 フゴッペ洞窟』、六興出版、1983年
- 金元龍(西谷正・訳)『韓国考古学概説(増補改訂)』、六興出版、1984年
- 小川 勝「フゴッペ洞窟の岩面刻画」『鳴門教育大学学校教育学会誌』第4号、1989年、7-12
- OGAWA, Masaru, *Rock engravings in Fugoppe Cave, Japan*, *Rock Art and Ethnography* (eds. Morwood & Hobbs), Australian Rock Art Research Association, 1992, 71-74
- 諸氏『手宮洞窟シンポジウム：波濤を越えた交流・手宮洞窟と北東アジア・記録集』(「小樽の文化財」別冊)、小樽市教育委員会、1997年
- 小川 勝「北海道開拓記念館蔵フゴッペ洞窟岩面刻画石膏型資料評価」『北方の考古学(野村崇先生還暦記念論集)』、野村崇先生還暦記念論集刊行委員会、1998年、321-330
- 小川 勝「フゴッペ洞窟の岩面刻画：美術史的研究の可能性」『余市水産博物館研究報告』第1号、余市水産博物館、1998年、27-31
- 小川 勝「北東アジアの先史岩面画：朝鮮半島東南部の事例を中心に」『民族藝術』第16巻、2000年、33-40
- OGAWA, Masaru, *Petroglyphs from Fugoppe Cave (Japan) in the context of North-Eastern Asian rock art*, paper read in the third AURA Congress, Australia, 2000
- OGAWA, Masaru, *Evaluation of historical copies in plaster: petroglyphs from Fugoppe Cave, Japan*, paper read in the third AURA Congress, Australia, 2000

民族学からみたフゴッペ洞窟

—ツングース系諸民族の図像表現とその機能—

佐々木 史郎

(国立民族学博物館・助教授)

文字を持たぬ人々が描く図像の多くが宗教、世界観、神話など彼らの精神生活と結びついているのは事実である。現代人も同様であるが、五感では捉えられない別な世界、あるいは抽象的な世界を理解しようとするとき、あるいはそれと接触しようとするとき、視覚を頼りに図像でもってそれを助けようとするのは人類に共通に見られる行為である。それゆえ、古代の図像は多くの場合、宗教や世界観と結びつけて理解されやすい。手宮洞窟やフゴッペ洞窟に描かれていた岩面刻画もまずシャマニズムなどの宗教と結びつけて考えられてきた。

しかし、これまでの研究では、そこに描かれていた個々の図像の確認（文字か、それ以外の記号や図像か、あるいは人物か、舟か、動物かなど）と周辺遺跡の図像との形の比較研究と、その伝播経路の探索に終始し、それらの岩面刻画が共通の認識を表現したものととして、共有していた人々にとっていかに機能したのかという点についての考察は十分ではなかった。また、背中に翼を持った人物像、頭に角状の突起を着けた人物像などをシャマンと解釈するのはよいが、洞窟の岩壁に描かれたシャマンたちが他の要素とともにいかなる意味を持つようになるのかということについての考察がなかった。

そこで、ここでは、それを考える手がかりとするために、シャマニズムに絵画などの図像表現が使われるシベリア、ロシア極東に住むツングース系とユカギール系の人々の例を取り上げ、彼らが毛皮、紙、布、魚皮などに描く図像の意味と、その使用方法、機能について論じてみたい。彼らはシャマニズムなどの宗教と関係した世界観や精霊群の表現手段として、また、生活の中で他人に自分の行為や気持ちを伝える手段として図像を用いる。言い換えれば人間相手にも精霊相手にも図像でもってコミュニケーションを図るのである。古代の人々と近現代の民族誌の事例とを無前提に結びつけるのはきわめて危険ではあるが、ここで明らかにするのはあくまでも、文字体系を持たない人々が図像によっていかに自らが認識する世界を描くのかということについての手がかりにすぎない。

フゴッペ洞窟の立地環境と気候

小 泉 格

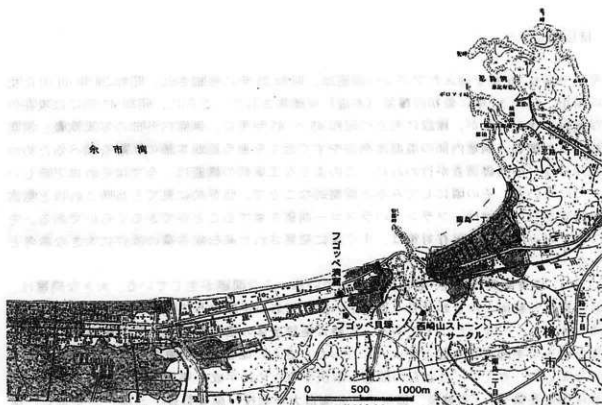
(北海道大学大学院理学研究科・教授)

フゴッペ洞窟は、砂岩と凝灰岩の互層から成る岩壁が約6,300年前(^{14}C 年代測定値)のヒブシサーマル期(海水準上昇期)などを通じて備いた波浪侵食によってえぐられてできた、余市湾を眼前にする海食洞である。トンネル状の洞窟内は深く暗く、壁面には採集や漁狩猟生活と呪術に関係した線刻画が数多く描かれていることから祭祀の場であったと考えられている。フゴッペ洞窟は、標高4.6m、推定した基盤高度0.9m、洞窟の規模(W×L×H)6m×15m×7mである。包含する文化層の ^{14}C 年代測定値は、炭化木で1,870±100y BP、炭化クルミで1,920±130y BPと1,950±120y BP、貝殻で1,410±40y BP、1,590±30y BP、1,600±40y BP、1,620±30y BP、1,670±30y BPなどである。 ^{14}C 年代測定値を補正 ^{14}C 年代値に直し、暦年代に換算する方法がまだ統一されていない現況では、 ^{14}C 年代測定値を記述する必要がある。約2~4mの遺物包含層が確認されており、遺物の主体時期は、後北式土器の出土によって 統縄文時代、及び北大式土器を含むことによって擦文時代であると考えられている。

洞窟は海に向かって開口しており、トドやアザラシなどの海獣を狩猟し、生活していた人たちが祭祀として利用したものであろう。記録(右代・赤松・山田, 1992)によれば、昭和46年に人骨が出土しているので、計測すると共にDNA分析などをしてどのような人であることを確認することと、付近にある西崎山ストーン・サークルやフゴッペ貝塚などと合わせた時空間における生活環境を復元し、先人の歴史を継承する必要がある。

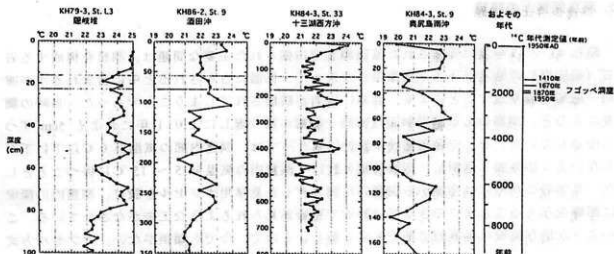
フゴッペ洞窟が利用されていた1,950年前から1,410年前までの時代(統縄文時代~擦文時代)は、奥尻島付近において年平均の表層海水温がこの時代の約1,000年前に比べて3℃も低下して20.5℃位になった寒冷気候の時代であったことが奥尻島南方沖の海底堆積物中に含まれる珪藻化石から復元されている。対馬海峡から流入した対馬暖流は本州の日本海側を北上した後、一部は津軽海峡から太平洋へ流出するが、大部分はさらに北上を続け宗谷海峡からオホーツク海へ、残りはリマン海流となって南下するわけであるが、寒冷気候の時代には日本海への対馬暖流の流入が弱体化するために、日本海を北上する暖流ベルトは勢いが弱くなり、厚さと幅が減少したと考えられる。内陸部の気候も、本州中部の尾瀬ヶ原の泥炭層に含まれる花粉の分析から統縄文時代後半に相当する古墳時代において著しく冷涼化するので、「古墳寒冷期」と呼称されている(坂口, 1982)。

約2,000年前から1,500年前の寒冷化気候が人に与えた影響を明確にするために、前の時代からこの時代へ（フゴッベ洞窟の時代に立脚すれば、過去から現在へ）、この時代から次の時代へ（現在から未来へ）、自然と人間の歴史がどのようにつながっていったかを、フゴッベ洞窟付近のみならず、洞窟や岩陰遺跡が数多く存在する積丹半島付近において海と陸における自然科学や人文科学などの総合的な学術研究を新たな21世紀の幕開け事業として再度実施することが切望される。



海に面しているフゴッベ洞窟
海水面が現在より5m上昇すると黒地の部分は海となる。

← 古水温 (°C) →



日本海を北上する対馬暖流は変動しているが、フゴッベ洞窟が利用されていた時代は対馬暖流の弱い寒冷気候の時代であった。

フゴッペ洞窟の保存と活用

三 浦 定 俊

(東京国立文化財研究所・保存科学部長)

1. はじめに

今年で発見 50 年を迎えたフゴッペ洞窟は、昭和 25 年に発掘され、昭和 28 年 11 月に史跡に指定、昭和 30 年に最初の覆屋（木造）が建築された。さらに、昭和 47 年には現在の保存施設が作られたが、建設に先立つ昭和 43～45 年度に、洞窟内外部の写真測量、洞窟基盤岩石の調査、洞窟内部の温湿度測定やすぐ近くを通る函館本線の影響を調べるための振動測定などの基礎調査が行われた。このような工事前の調査は、今ではそれほど珍しいことではないが、その頃にしてみると画期的なことで、世界的に見ても当時これほど徹底的な調査を行った例は、フランスのラスコー洞窟を挙げるができるくらいである。そのためフゴッペ洞窟の保存対策は、すぐ後に発見された高松塚古墳の保存に大きな参考となった。

しかし、保存施設は現在、老朽化が進んでいろいろな問題が生じている。大きな問題は、施設の屋根と斜面との合わせ目（取り合い部）で岩石が風化して隙間ができ、そこから水が浸入するようになったことである。同時に施設全体の密閉度が落ちて洞窟内部の温度、湿度が大きな季節変化を起こすようになった。さらに昭和 60 年頃から壁面に緑色のコケ類が発生した。そこで、これらの問題を解決するために平成 9 年度から「史跡フゴッペ洞窟保存調査委員会」（委員長 福田正己北海道大学教授、副委員長 三浦）が発足し、建築、地質、保存科学の分野の研究者が参加して、現在、基礎調査を行うとともに保存施設の改築に向けて検討を行っている。ここでは、現在のフゴッペ古墳の保存における問題を考えながら、今後の活用のあり方を検討する。

2. 洞窟保存上の課題

昭和 43～45 年度に実施された基礎調査で指摘された主要な問題は、洞窟を構成する岩石（凝灰岩）の強度が小さく空隙率が大きくて、低温にさらされると中に含まれる水が凍結—融解を繰り返すことにより、容易に岩石が破壊されてしまうことであつた。当時の調査によると、洞窟のある露岩斜面は凍結—融解の繰り返しにより 1 年におよそ 5cm ずつも後退していた。そこで保存施設の設計に当たっては、洞窟内部の気温が 0℃以下に下がらないように外部と遮断し、空調設備を設けて洞窟内の気温を 5～15℃に保つこととした。見学者のためには全室から洞窟内に突きだした見学用カプセルを設け、洞窟内の環境に影響を与えることなくできるだけ間近で壁面が見られるような工夫がなされている。このような保存施設は世界的に見ても全く新しいもので、今でも類例がない。カプセル方式

でない例として、小樽の手宮洞窟や中尊寺金色堂などが保存のための空間と観客空間をうまく分けて公開に成功している。

現在の保存調査では、洞窟内外の精密な測量、洞窟を構成する岩体の変位測定、壁面の劣化状況・表面温度・水分量の測定、発生したコケ類（微生物）の同定、洞窟内外での温湿度や土壌水分量の計測などを行っている。温湿度は平成10年11月から測定を行っているが、洞窟外の最高、最低がそれぞれ35.6℃、-7.8℃に対し、洞窟内はそれぞれ21.6℃、9.3℃である。また相対湿度は外部16%（最小）～94%（最高）、内部が83%～98%である。

現施設の耐久度を調査したところコンクリートの強度はまだ大丈夫であるが、20年から25年先には新たな対策が必要になるとの結果が得られた。現在の施設を取り壊して全く新しくすることも検討したが、解体工事による振動や衝撃が壁面に与える影響が心配され、現在の施設については取り壊さずに、ポリマーセメントモルタルを用いて補修強化する（リフリート工法）方向で検討を進めることとした。

壁面の危険度調査からは、特に崩落の恐れなど危険は見られていないが、壁面のない箇所では浮いた石も見られ、落ちて壁面を傷めることのないよう対策が考慮されている。壁面に発生したコケは藍藻（*symploca thermalis*）と緑藻（*chlorella* sp.）の2種類で、光があることにより生育しているため、コケを防止するには、明るさを必要最小限に押さえて観客がいるときだけ照明するなど、新しい施設では照明を制御することが必要である。

洞窟内部に侵入する水は、先に述べたように大部分が屋根と斜面の取り合い部からで、そこからの水の浸入を防ぐため仮の防水措置を行い、今のところ良好な結果が得られている。しかし、洞窟内を奥から入り口に向かって走る断層を通り浸入する水などもあり、水を完全に遮断することは困難である。そこで新たに、洞窟の裏山全体を覆う大屋根を建設することも一案として検討されている。しかし、そのような大きな屋根を洞窟の上から掛けしかも積雪時に洞窟へ大きな荷重がかからないようにするためには、基礎として周囲にかなりの敷地を要する。また、水分が全くなると壁面がかえって風化しやすくなる恐れもあり、なお検討が続けられている。

3. 洞窟活用上の課題

昭和47年の保存と現在の相違点は、余市町全体の都市計画の中でフゴッペ洞窟のあり方を考えながら整備を進めようとしていることである。余市町には大谷地貝塚遺跡、西崎山ストーンサークル、近接した小樽市には手宮洞窟がある。そこでフゴッペ洞窟の前には、周囲の考古遺跡との関連も含めて積丹半島の歴史を解説する、ガイダンス施設を新たに設ける。洞窟北側の空き地（史跡指定地）と国道との間に防風林を兼ねて、栗、クルミ、ミズナラなど当時人々が食料としていたと思われる実の生る樹種を植え、ボランティアの解説員の協力も得て、当時の暮らしぶりを楽しく体感させることも考えられる。その他、周囲の景観との調和、国道からの道しるべなどわかりやすい案内板の設置、車椅子での見学もできるようにすること等々、様々な角度から新しい整備の方針が検討されている。

また先に述べたように、フゴッペ洞窟の保存を再考しなければならないときが数十年先には来ると予想される。そのときのために、洞窟内外の温湿度の変化や、岩体の変位など、長期的な記録が必要な項目について観測設備を設置することも新しい施設には必要とされ

る。

この他、周辺環境の問題としてフゴッペ洞窟の目の前に北後志衛生組合の尿屎処理施設がある。フゴッペ洞窟を文化施設として今後とも充実するのなら、尿屎処理施設を移転し、跡地を駐車場などとして整備する等、都市計画の中で早急に実現していくべきである。

4. おわりに

遺跡の保存においては、その重要性を周りの人々に知ってもらうようことが大切である。そのために保存施設は遺跡を保護するだけでなく、わかりやすい解説で訪れた人々の興味をかき立て、またもう一度訪ねたくなる気持ちを起こさせるものであることが要請されている。併せて、フゴッペ洞窟を見に来た人に周辺の大谷地貝塚遺跡、西崎山ストーンサークル、少し離れた余市水産博物館、旧下ヨイチ運上家、旧余市福原漁場まで足を延ばそうという気持ちにさせるような、文化財見学の拠点にフゴッペ洞窟がなることも期待されている。保存施設の設計はそのためのハード面づくりであり、文部省科学研究費（地域連携推進研究）で北海道開拓記念館が進めている「フゴッペ洞窟・顔面壁画と文化交流のフィールドステーション作りの基礎研究」はそのためのソフト作成と、位置づけることができる。

参考文献

- 1) 史跡フゴッペ洞窟保存工事報告書、北海道余市郡余市町編（1973）

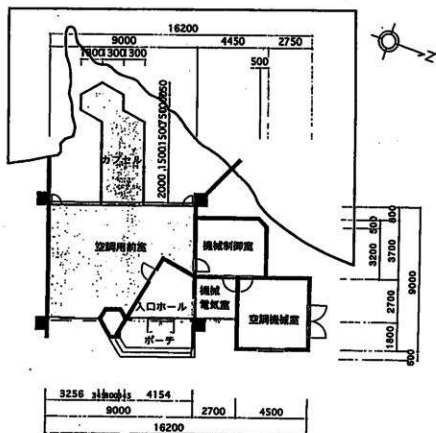


図1. 現在のフゴッペ洞窟保存施設平面図



図2. フゴツベ河川周辺の地形図

フゴツベ河川周辺の地形図 1:5000 1952年測量

エクスカージョンのご案内

時刻	見学場所
9:00	公民館出発
9:15 10:00	フゴッペ洞窟(45分)
10:20 10:50	よいち水産博物館(30分)
11:00 11:30	旧下ヨイチ運上家(30分)
11:40 12:20	旧余市福原漁場(40分)
12:30	解散 ニッカウスキー余市工場

フゴッペ洞窟

昭和25年に発見された2～3世紀頃の洞窟遺跡。内部壁面には人物、舟、動物などの岩面刻画が200以上描かれる。

よいち水産博物館

ニシンの千石場所として栄え、ニシン漁とともに発展してきた余市町の郷土資料を中心に展示。併設の歴史民俗資料館では町内で発掘された考古資料を展示しています。

旧下ヨイチ運上家

ヨイチ場所においてアイヌとの交易や漁業経営を行った請負商人、林家が請負永年間に改築した際の図面を基に復元した、道内で唯一現存する運上家建築。

旧余市福原漁場

幕末からヨイチでニシン漁を行っていた福原家所有の建物群。親方家族や漁夫が寝泊りした番家を中心に倉庫群が並び、

講師紹介

乾 芳宏

1955年北海道生まれ。1977年立正大学文学部史学科考古学専攻卒業。現在、余市町教育委員会文化財保護学芸係長。専門：日本考古学。「縄文時代前半の年代推定について」「恵山文化の北方伝播について」「北海道における天王山式期の現状と課題」など縄文に関係する論文多数。

大塚 以和雄

1932年国後島生まれ。1950年、札幌南高校在学中にフゴッペ洞窟発見に関わる。1951年からのフゴッペ洞窟発掘調査に参加する。1954年法政大学卒業。

大塚 誠之助

1935年国後島生まれ。1950年、中学校三年生の時にフゴッペ洞窟を発見する。1951年からのフゴッペ洞窟発掘調査に参加する。1960年早稲田大学第一文学部史学科卒業。現在札幌第一高等学校勤務（専任講師）。

小川 勝

1956年京都府生まれ。1988年大阪大学大学院文学研究科芸術学専攻単位取得退学。現在、鳴門教育大学美術科助教授。専門：先史美術研究（美術史学・芸術学）。『美術史のスペクトラム』（共著 光琳社出版）など多数。

菊池 徹夫

1939年北海道生まれ。1967年東京大学大学院考古学専門課程修了。現在、早稲田大学文学部教授。専門：日本考古学。文学博士。『北方考古学の研究』『考古学調査研究ハンドブック』など多数。

木村 重信

1925年京都府生まれ。1949年京都大学文学部哲学科卒業。文学博士。現在、兵庫県立近代美術館館長、民族芸術学会会長、大阪大学名誉教授。専門：民族芸術学・近代美術史。『はじめにイメージありき』『アフリカ美術探検』『世界美術史』など多数。

小泉 格

1937年秋田県に生まれ。1968年東北大学大学院理学研究科博士課程修了。現在、北海道大学大学院理学研究所教授。北海道大学総合博物館館長（併任）。専門：地質学。著書に『講座「文明と環境」10海と文明』など多数。

佐々木 史郎

1957年東京都生まれ。1985年東京大学大学院社会学研究科博士課程中退。現在、国立民族学博物館助教授。専門：文化人類学。『ロシア学を学ぶ人のために』（共著、世界思想社）『モンゴロイドの地球4 極北の探人』（共著、東京大学出版会）『北方から来た交易民』（NHKブックス）など多数。

福田 正己

1944年埼玉県生まれ。1972年東京大学大学院理学系研究科博士課程修了。現在北海道大学教授（低温科学研究所）。専門：雪氷学（凍土学）。理学博士。『寒冷地域の自然環境』（共編、北大図書刊行会）。『雪氷の構造と物性』（共著、古今書院）『極北シベリア』（岩波新書）。『極地の科学』（共編著、北大図書刊行会）など多数。

三浦 定俊

1948年鹿児島県生まれ。1973年東京芸術大学大学院修了（保存科学専攻）現在東京国立文化財研究所保存科学部部長、東京芸術大学大学院美術研究科（文化財保存専攻）教授（併任）。日本文化財科学会理事。専門：保存科学。『光学的方法による古美術品の研究』（増補版共著吉川弘文館）『平等院大観』（共著、岩波書店）『美術を科学する』（共著、至文堂）など多数。



【温泉】

- 天山温泉 ☎23-5211
- はまなす温泉 ☎22-7400
- つるかめ温泉 ☎23-7766
- 大黒温泉 ☎22-4623
- 余市川温泉 ☎22-4126
- よいち観光温泉 ☎22-3656

【交通機関】

- つばめハイヤー ☎23-3111
- みなとハイヤー ☎22-6111
- JR北海道余市駅 ☎23-3631
- 北海道中央バス余市営業所 ☎23-2175
- よいちレンタカーリース ☎23-3621

【宿泊施設】

- 真泉天山荘 ☎23-5211
- 日本海余市保養センター ☎22-7400
- クイーンズランド ☎22-2141
- アパホテルノースショア ☎22-7831
- 海本旅館 ☎22-2426
- ホテルゲンアート ☎22-6070
- 徳田精造荘 ☎22-2304
- 徳久興旅館 ☎22-6366
- 富久興旅館 ☎23-2834
- 本間旅館 ☎22-2233
- ビジネスラッツ ☎22-4632
- 昭徳旅館 ☎22-2038
- ホテル水明閣 ☎22-2636
- 民宿富恵荘 ☎22-4437
- 民宿菅谷 ☎23-2456
- 民宿菅谷 ☎23-2456
- 民宿山科 ☎23-2396
- 民宿工藤 ☎23-3637
- 民宿平安 ☎22-3674

余市町中央公民館

(〒046-0004 余市町大川町4丁目 TEL:0135-23-5001)

●駐車場に限度がありますので、公共の交通機関をご利用下さい。

参加費 無料

定員 600名

どなたでも自由に参加できますが、下記の連絡先に参加される日とお名前、住所を電話で、お申し込み下さい。また、20日(月)のエクスカージョンは、参加定員60名ですので、お早めにお申し込み願います。なお、定員になり次第締め切らせていただきます。

◎連絡先◎

北海道開拓記念館

〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2 TEL:011-898-0456 FAX:011-898-2657

よいち水産博物館

〒046-0011 余市町入舟町21 TEL:0135-22-6187 FAX:0135-23-8756

発見50周年記念

フゴッペ洞窟シンポジウム

—過去・現在・未来—

プログラム



開催日：2000年11月18日(土)～20日(月)

場所／余市町中央公民館

主催／北海道開拓記念館、余市町・余市町教育委員会

協賛／北海道新聞社

後援／日本第四紀学会、日本考古学協会、北海道考古学会、北海道博物館協会

フゴッペ洞窟は1950年(昭和25年)8月、札幌在住の中学生在が偶然に発見し、1952～1953年に本格的な発掘調査が実施された。その結果、縄文文化後半の出土遺物や日本最大の岩面刻画などが確認され、この時期の文化を知る上で多くの貴重な成果を上げている。しかも発掘終了年の11月に国指定史跡とされ、洞窟の覆い屋根を建築し1955年(昭和30年)から一般公開された。その後、洞窟に描かれた岩面刻画の風化が著しいことから本格的な史跡保存が計画され、洞窟内の温・湿度を制御する保存施設の建設が行われた。1972年(昭和47年)11月に完成し再公開され現在に至っている。

フゴッペ洞窟の研究については、岩面刻画のルーツ・製作年代、当時の気候や洞窟の環境、先史文化の交流など未開明な部分が多く、いまだに謎につつまれているのが現状である。したがって、2000年はフゴッペ洞窟の発見50年にあたり、「フゴッペ洞窟の過去・現在・未来」をテーマとしたシンポジウムを開催し、これまでの研究成果を検証し、現在から未来に向けたフゴッペ洞窟について、考古学、先史美術、民族学はもとより保存科学や関連科学などの多くの地見から、学際的かつ総合的な討論をおこなうことを目的とする。さらに、発見50年を記念し、未来にむけ文化遺産の保存と活用、洞窟の謎の解明を探る手がかりとなることを願うものである。

このシンポジウムは、文部省科学研究費補助金地域連携推進研究費「フゴッペ洞窟・岩面刻画と文化交流のフィールドステーション作りの基礎研究」の一環として実施する。

11月18日(土) 記念講演・記念報告 13:30～16:40

13:30～13:50 開催挨拶

余市町 町長 大谷 寛氏
北海道開拓記念館 館長 吉田和夫

13:50～15:20 記念講演

「フゴッペ刻画と世界の岩面画」
木村重信氏(大阪大学名誉教授)

15:20～15:40 休憩

15:40～16:40 記念報告

「フゴッペ洞窟発見あれこれ」
大塚以和雄氏・大塚誠之助氏(発見関係者)

11月19日(日) シンポジウム 9:00～16:30

9:00～10:00 報告

「フゴッペ洞窟の考古学的位置づけ」
乾 芳宏氏(余市町教育委員会文化財係長兼学芸係長) 考古学

10:00~11:00 報告
「フゴッベ岩面刻画の位置づけ」
小川 勝氏(鳴門教育大学・助教授)先史美術

11:00~12:00 報告
「民族学からみたフゴッベ洞窟」
佐々木史郎氏(国立民族学博物館・教授)民族学

12:00~13:00 昼休み

13:00~14:00 報告
「フゴッベ洞窟の立地環境と気候」
小泉 格氏(北海道大学大学院理学研究科・理学部・教授)地質学

14:00~15:00 報告
「フゴッベ洞窟の保存と活用」
三浦定俊氏(東京国立文化財研究所・保存科学部長)保存科学

15:00~15:20 休憩

15:20~16:20 総合討論
「フゴッベ洞窟の過去・現在・未来」
コメンテータ/木村重信氏(大阪大学名誉教授)
菊池徹夫氏(早稲田大学文学部・教授)
福田正己氏(北海道大学低温科学研究所・教授)
司 会/赤松守雄(北海道開拓記念館・学芸部長)

16:20~16:30 閉会挨拶
余市町教育委員会 教育長 利 輝夫氏

11月20日(月) エクスカーション 9:00~12:30

9:00~12:30 フゴッベ洞窟、よいち水産博物館、旧下ヨイチ運上家、旧余市福原漁場など
(余市町中央公民館/9:00出発、ニッカウキスキー北海道工場/12:30解散)



【温泉】

- 天山温泉
- はまなす温泉
- つるかめ温泉
- 大原温泉
- 余市川温泉
- よいち観光温泉

【交通機関】

- つばめハイヤー
- みなとハイヤー
- JR北海道余市駅
- 北海道中央バス余市営業所
- よいちレンタカーリース

- ☎23-5211
- ☎22-7400
- ☎23-7768
- ☎22-4623
- ☎22-4126
- ☎22-3658

【宿泊施設】

- 異泉天山楽 ☎23-5211
- 日本海余市保養センター ☎22-7400
- クイーンズランド ☎22-2141
- プチホテルノースショア ☎22-7831
- 海本旅館 ☎22-2425
- ホテルザアンター ☎22-6070
- 民宿希留荘 ☎22-2304
- 徳島屋旅館 ☎22-6369
- 寛久美旅館 ☎23-2834
- 本間旅館 ☎22-2233
- ピタースラップ ☎22-4632
- 留居旅館 ☎22-2038
- ホテル水明閣 ☎22-2838
- 民宿富重荘 ☎22-4437
- 民宿寛谷 ☎23-2458
- 民宿豊浜 ☎23-2458
- 民宿山科 ☎23-2396
- 民宿工藤 ☎23-3837
- 民宿平安 ☎22-3874

余市町中央公民館

(〒046-0004 余市町大川町4丁目 TEL:0135-23-5001)

●駐車場に限度がありますので、公共の交通機関をご利用下さい。

参加費 無 料

定員 600名

どなたでも自由に参加できますが、下記の連絡先に参加される日とお名前、住所を電話で、お申し込み下さい。また、20日(月)のエキスカーションは、参加定員60名ですので、お早めにお申し込み願います。なお、定員になり次第締め切らせていただきます。

● 連絡先 ●

北海道開拓記念館

〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2 TEL:011-898-0456 FAX:011-898-2657

よいち水産博物館

〒046-0011 余市町入舟町21 TEL:0135-22-6187 FAX:0135-23-8755

【余市】古代人が刻んだ200以上の絵「契師(こくかり)」が公開されている後志管内余市町の国指定史跡「フゴッペ洞窟(どうくつ)」の発見50周年を記念した「フゴッペ洞窟シンポジウム」が18、19の両日、同町中央公民館で開催される。

縄文時代(約1500—2000年前)の遺跡。1950年夏に発見され、内部には人物や動物、舟など200以上の刻画が描かれている。

シンポジウムは、北海道洞窟記念

「フゴッペ」の魅力語る

洞窟発見50周年

18、19日にシンポ

館と余市町教委が主催。18日午後1時半に開会、木村信重・大阪大名舎教授が「フゴッペ刻画と世界の岩面画」と題し講演。札幌の大塚以和雄さん、大塚誠之助さん兄弟が発見当時のエピソードなどを報告する。19日は午前9時から小川勝・昭門教育大助教授(先史美術)や佐々木史郎・国立民族学博物館教授(民族学)ら5人が研究報告。同3時すぎから総合討論「フゴッペ洞窟の過去・現在・未来」。入場無料で、問い合わせは洞窟記念館☎011・898-0456へ。

フゴッペ洞窟
「神聖な場所」
発見50周年シンポ
の国指定史跡「フゴッペ洞窟」の発見50



フゴッペ洞窟のシンポジウムで記念講演する木村信重・大阪大名舎教授

フゴッペ洞窟

「神聖な場所」

発見50周年シンポ

14周年を記念し、氏代介が「契師(こくかり)」の発見50周年シンポジウムで、洞窟の魅力を語り、その重要性を説いた。契師(こくかり)の発見50周年シンポジウムが18日から19日の日程で、洞窟記念館(余市町)で開催される。

18日は考古学愛好者など約100人が参加。木村信重(大阪大名舎教授)が「フゴッペ洞窟の発見と世界の岩面画」と題し講演。札幌の大塚以和雄さん、大塚誠之助さん兄弟が発見当時のエピソードなどを報告する。19日は午前9時から小川勝・昭門教育大助教授(先史美術)や佐々木史郎・国立民族学博物館教授(民族学)ら5人が研究報告。同3時すぎから総合討論「フゴッペ洞窟の過去・現在・未来」。入場無料で、問い合わせは洞窟記念館☎011・898-0456へ。

で、同町中央公民館で開催された。洞窟(船六)高さ55尺、奥行き17尺は一九五〇年に発見された。縄文時代の約二五〇〇—一千年前の遺跡で、内層には、利をまとったシャーマンらしい人物や動物、舟など二〇〇以上の刻画があり、一画記で描かれたとみられている。

18日は考古学愛好者など約100人が参加。木村信重(大阪大名舎教授)が「フゴッペ洞窟の発見と世界の岩面画」と題し講演。札幌の大塚以和雄さん、大塚誠之助さん兄弟が発見当時のエピソードなどを報告する。19日は午前9時から小川勝・昭門教育大助教授(先史美術)や佐々木史郎・国立民族学博物館教授(民族学)ら5人が研究報告。同3時すぎから総合討論「フゴッペ洞窟の過去・現在・未来」。入場無料で、問い合わせは洞窟記念館☎011・898-0456へ。

込に掘られた直線状の穴について「女性や命の再生を表現したもの」とみられ、神聖な場所だったことを示している」と解説した。

洞窟(船六)高さ55尺、奥行き17尺は一九五〇年に発見された。縄文時代の約二五〇〇—一千年前の遺跡で、内層には、利をまとったシャーマンらしい人物や動物、舟など二〇〇以上の刻画があり、一画記で描かれたとみられている。

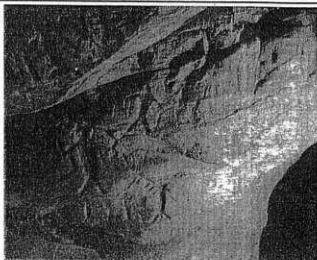
19日は午前九時から小川勝・昭門教育大助教授(先史美術)や佐々木史郎・国立民族学博物館教授(民族学)ら5人が研究報告。同3時すぎから総合討論「フゴッペ洞窟の過去・現在・未来」。入場無料で、問い合わせは洞窟記念館☎011・898-0456へ。

2000年(平成12年)10月29日(日曜日)

余市のフゴッペ洞窟

刻削の2世紀以上の作か

国の新指定を受けている後志管内余市町のフゴッペ洞窟(ふごく)で、古代人が岩壁に刻んだ絵「刻削」(こくが)の制作年代が従来の説より100年近く、紀元一世紀ごろと推定されていたのではな
いか、と専門家を道開拓記念館を中心とする研究グループが打ち出した。十一月十九日、刻削発見から五十周年を記念して余市町中央公民館で開かれる「フゴッペ洞窟シンポジウム」で発表される。



道開拓記念館
グループ新説

ボーリング土質調査

従來說より100—200年古く

刻削の年代は従来、洞窟で陳地化していったことが内から出土した土器の制作年代に照らし、縄縄文時代後半の三—四世紀に描かれたと推測されてきた。昨年十一月、研究グループは余市町教委とともに、洞窟の成り立ちを推定するため周辺の五カ所を深さ四、五

代に波及洗われてきたもので、研究グループは推定すればその一世紀後、地面が乾燥して人が住めるような洞窟となり、中に入つて刻削を描けず状態になったと推測している。

はまでボーリング調査し、土質の解析を進めた。その結果、紀元前六世紀から紀元前後にかけて進んだ洞窟周辺が、紀元一世紀ごろ、裾野攻めは、「刻削は重なりながら描かれた部分がない、同降し、土質のたい積が重なり人物や創作意図が描いた

部
フゴッペ洞窟の刻削の一
部
フゴッペ洞窟(後志管内い)の境と推測され、五
余市町にある洞窟は、高さ三メートル、幅約十メートル、
五、六メートルの洞窟、
一九五〇年、岩壁に刻ま
れた絵が発見され、翌五
一からの調査で三箇所の特
に入や動物、舟など二百以
上の刻削が見つかった。現
在保存のための調査が行
術(じじゅ)や祭祀(さい)と
われている。

期間で一気にかかれた可能性を指摘している。

フィールドステーションとして のフゴッペ洞窟



日 時/2001年11月24日(土) 10時~15時

場 所/余市町中央公民館

主 催/北海道開拓記念館、余市町、余市町教育委員会
後 援/北海道新聞社、日本考古学協会、北海道考古学会
北海道博物館協会

目 次

報 告 1 「奈良周辺における史跡の保存と活用」 盛 昭史 (余市町教育委員会 文化財課長)	1
報 告 2 「九州における史跡の保存と活用」 乾 芳宏 (余市町教育委員会 文化財兼学芸係長)	6
報 告 3 「ハバロフスク州の岩面刻面とその活用」 浅野 敏昭 (余市町教育委員会 学芸員)	10
報 告 4 「ロシア極東地域の岩面刻面とその活用」 右代 啓視・糸田雄二 (北海道開拓記念館 学芸員)	14
報 告 5 「ヨーロッパの岩面刻面とその活用」 小川 勝 (鳴門教育大学 助教授)	19
フォーラム「フィールドステーションとしてのフゴッペ洞窟」	21
コメンテーター	
菊池 徹夫氏 (早稲田大学文学部 教授)	
福田 正巳氏 (北海道大学低温科学研究所 教授)	
利 輝夫氏 (余市町教育委員会 教育長)	
赤松 守雄 (北海道開拓記念館 学芸部長)	
司 会	
右代 啓視 (北海道開拓記念館 学芸員)	

奈良周辺における史跡の保存と活用

盛 昭 史

(余市町教育委員会・文化財課長)

はじめに

史跡フゴッベ洞窟は、昭和25年の発見以来すでに半世紀を迎え、現在第2次の保存工事に向けて調査が行われています。余市町には4件の国指定文化財がありますが、その中でもフゴッベ洞窟は最も観覧者が多い施設です。これは、洞窟が国道沿いの余市の玄関口にあたる場所に立地しているという地の利によるところもありますが、刻画そのものが秘めている謎の部分が、多くの人を惹きつけていると考えられます。手宮洞窟や大甕文化との関連、そして描かれた刻画の意味するもの、こういった未だ完全には解明されていない問題が、考古学への関心の高まりとあいまって、人々の興味を呼び起こすのでしょう。

フゴッベ洞窟の保存と活用を図るうえでは、言うまでもなく調査・研究の推進が必要です。そのことによって、この史跡の文化財としての価値が高まってゆくからです。同時に、地域の中でフゴッベ洞窟の社会的価値を高めてゆく努力も欠かすことはできません。地域の中で、文化財と共存し、それを守ってゆく主体をどのように形成してゆくか。フゴッベ洞窟の恒久的な保存と活用を図るうえでは、この点が非常に重要となります。

このような観点から、今回先進地である奈良県明日香村の調査を行いました。

明日香村の概要

人口動態等

	行政面積 (km ²)	人 口 (人)				1次産業%		2次産業%		3次産業%	
		元 年	11 年	増減%	元	11	元	11	元	11	
奈良市	211.60	843,580	868,303	105	3.0	1.8	26.4	24.9	70.6	73.3	
橿原市	39.52	113,914	123,977	109	3.2	1.9	34.8	32.5	62.0	65.6	
明日香村	24.08	7,436	7,115	96	18.9	13.3	27.6	27.4	53.5	59.3	
余市町	140.56	25,709	23,976	93	20.1	16.4	24.3	23.9	55.6	59.7	

「全国市町村要覧」(第一法規)

明日香村と隣接する橿原市、及び奈良市の人口動態等を掲げました。道内の自治体と比

較すると、明日香村は共和町（7,452人）、今金町（7,167人）と同規模となっています。

明日香村の就業構造は、ほぼ余市町と同様の傾向を示しています。一方、行政面積には大きな差があり、明日香村は余市町の約6分の1となっています。この狭い地域の中に古墳や石造物、古寺が集中しています。

調査のポイント

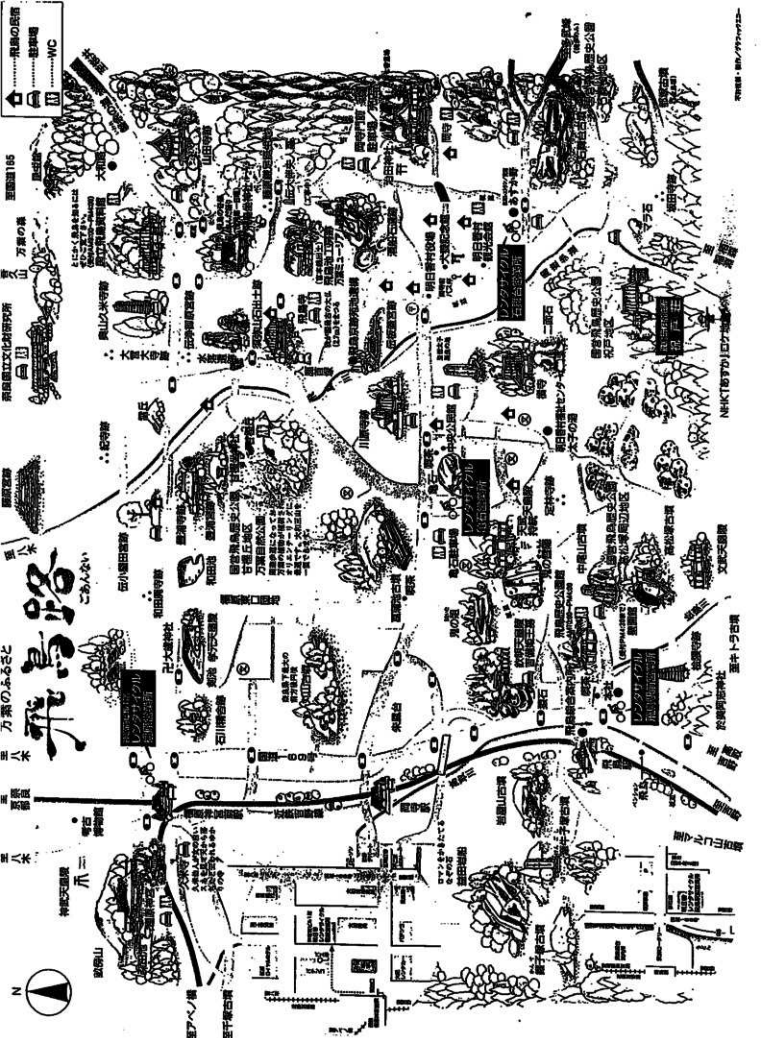
調査にあたっては、フゴッペ洞窟への応用を念頭に以下の点をポイントに設定しました。

- ・ 飛鳥地方へのアクセスはどうなっているか。
- ・ 観覧料金の体系はどうなっているか。
- ・ パンフレットや土産品にはどのようなものがあるか。
- ・ 案内所や案内板はどのように設置されているか。
- ・ 宿泊施設やレストラン、トイレなど、観光客のための施設整備の状況。

調査を改めて

2日間に渡る調査の結果を、以下に列挙します。

- ・ 調査時期が1月下旬であったことから、改めて積雪の問題を痛切に感じました。奈良地方においては、積雪に対する対処が全く不要です。整備面・管理面・活用面の全てにおいてこの差異は大きく、明日香村の方式をそのまま余市に適用することはできません。
- ・ 明日香村ではレンタサイクルサービスが充実しています。複数の業者が、乗り捨てのシステムやバンクなどトラブルへの対応体制を確立して運営しており、サイクリングロードや駐輪場などの基盤も整備されています。レンタサイクルの需用が多いのは、飛鳥駅までの便がいいこと（近鉄電車）、また、文化財相互の位置が近く自転車や徒歩での見学が実用的であること、などによるものと思われます。
- ・ 案内所、案内板は随所にあり、パンフレット類も充実していました。一方、土産物は地元の農産品が主で、いわゆる観光土産品的なものはほとんどありませんでした。
- ・ 高松塚古墳、石舞台古墳の周囲は、国の特別史跡として環境整備が行われていました。一方、亀石や鬼の俎・雪隠は特別な保存施設はなく、道端に道祖神のように置かれていました。それが周囲の風景と溶け込んで、印象的でした。
- ・ 飛鳥地方を巡り、最後に奈良文化財研究所飛鳥資料館に行くと、そこで総合的な知識を得ることができます。飛鳥資料館が地域の総合的なガイダンス施設の役割を果たしており、大変参考になりました。余市町においては、水産博物館がこのようなセンター的な役割を果たすべきと考えます。



- 飛鳥の店
- 駐車場
- 遊歩道
- WC

飛鳥路

力業のふるさと

ごあんない



●吉備姫王墓の猿石 (さるいし)

4体の内、3体には裏にも顔があり、いずれも猿に似ていることからこの名があるが、製作年代や目的は謎のままである。

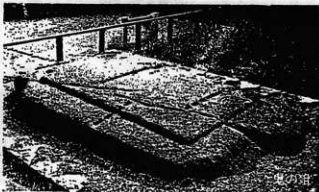


●鬼の雪隠(せつちん)

欽明天皇陵の東の小丘の斜面に鬼の俎と道をはさんで並んでいる。もとは古墳の石室の一部だったが古墳が壊され、現在の姿になって残ったとされる。

●鬼の俎(まないた)

長さ約4m、幅約2m、厚さ約1mの巨大な花崗岩。鬼の雪隠とともに古墳の石材であったと考えられている。



●亀石(かめいし)

花崗岩の巨大な自然石に、亀に似た彫刻がほどこされている。



トピックス

亀石にまつわる不気味な伝説。

亀石は、以前は北向き、次に東面した。そして現在南に面しているが、西の方を向いた時、大和一元は泥の海と化す。というこわい伝説が村に伝わっている。

●酒船石(さかふねいし)

平らにした石の表面に奇妙な彫刻がほどこされた巨大な花崗岩。酒造りに使用したとのいい伝えからこの名がついた。付近で石組溝や木樋が発掘されており、宮殿内への大導水施設の一部との説がある。



●亀形石造物

全長約2.4m、全幅約2mの大きさがあり、小判形石造物から流れ出た水が、亀の鼻を通り尻尾より出ていく仕組みになっている。誰かいつ何の為に作ったかは飛鳥ミステリーのひとつである。



●石舞台(いしぶたい)古墳

我が国最大級の石室を持つ方形墳。築造には相当優れた巨石運搬技術が要求されたことを物語っている。蘇我馬子がこの付近に住んでいたと、墓が巨大であったという記録から一般に馬子の墓とされている。



●高松塚(たかまつづか)古墳

飛鳥の西南、檜隈(ひのくま)の里の文武天皇陵近くであり、昭和47年に彩色壁画(国宝)が発見され一躍有名になった。被葬者についてはかなり高貴な人物とされ、一説に天武天皇の皇子である忍壁(おさかべ)親王との見解があるが、あくまでも推論の域を脱していない。

●キトラ(亀虎)古墳

高松塚古墳の南にある円墳。昭和58年と平成10年の内部調査で天文図と、四神像のうち3体(玄武・白虎・青龍)が確認された。キトラの名の由来については、土地名のキタウラがなまってキトラとなった説と、盗掘口より古墳内をのぞいたところ、亀と虎の絵が見えたのでキトラと名付けられたという説がある。

「ハバロフスク州の岩面刻画とその活用」

浅野 敏昭

(余市町教育委員会 学芸員)

ハバロフスク州とアムール川

ハバロフスク州は南端がサハリン島南端とほぼ等しい緯度で、サハリンを縦に約2倍した長さ日本の約2.2倍の78万km²の面積を持ち、そこに160万人が暮らします。人口密度は1.3/km²、平野部は総面積の約3割弱、山岳地帯が多く冷帯の針葉樹を主とした森林であるタイガが広がり、天然資源や森林資源が豊富な地域です。1月の平均気温が-22℃という厳しい気象条件の地でもあります。

アムール川中流沿岸にある都市、ハバロフスク市は人口61万人、1652年に創建され、極東地方の教育・文化などの中心地です。

アムール川はロシアと中国の国境を流れ、間宮海峡に注ぎます。中国名は黒竜江と呼ばれ、流路延長4,416km、水源は降水で多くの浮遊物を含み黒く濁っています。11月初冬には結氷し4月末まで続きます。支流が多く、最長の支流はアムール川右岸に注ぐウスリー川(897km)です。

昨年開始された岩面刻画の調査は、州都ハバロフスク市にあるハバロフスク州郷土博物館の協力のもとに行われました。

アムール川流域の主な岩面刻画

昨年から訪れている調査地は、シカチ・アリヤン、シェレメチェヴォ、キーヤの3地点です。これらアムール川流域の岩面刻画は、19世紀末には報告がなされていますが、本格的な調査はA.P.オクラドニコフによるものです。

A.P.オクラドニコフによる『黄金のトナカイ 北アジアの岩壁画』(加藤九許訳)にはバイカル湖周辺や、アムール川流域の「岩絵」が紹介されており、アムール川流域の「岩絵」ではシカチ・アリヤン、シェレメチェヴォが紹介されています。A.P.オクラドニコフが岩面刻画を調査するために極東地方に訪れたのは1935年のことで、その後名著『アムール川下流域のペトログリフ』が著されました。

ハバロフスク州の先住民分布

19世紀後半、アムール川河口までの左岸にはナナイ、ウリチ、ネギダール、ウデヘ、オロチ、ニヴヒなどが生活しており、1989年にはナナイが最も多く約12,000人、最も少ないのはネギダール587人となっています。人類学的特徴からニヴヒが他と分けられ、言語学的特徴からネギダールが他と分けられます。

極東地方の先住民の生業は狩猟、漁労、植物の採集によっていました。

信仰はアニミズム(事物には靈魂(アニマ)など霊的なものが存在し、諸現象はそのアニマの働きによるものとする考え方。精霊信仰、靈魂信仰)。霊にはセヴェン(普通の霊)とアンパン(悪霊)とが存在し、霊と人間の仲介役がシャーマンであるという考え方は現在でも、極東地方の先住民の間で根強く残っています。

1 シカチ・アリヤン遺跡

ハバロフスク市より北東約60km、アムール川の右岸に位置するナナイの居住する村、シカチ・アリヤン村に位置する遺跡で、玄武岩の岩塊に人面、シカ、小舟が描かれています。水際にあるため時期によって

は水没する岩塊もあり、氷により転がってしまうものもあります。

刻画の時期は、新石器時代以降とも言われています。

2 シェレメチェヴォ遺跡

ハバロフスク市南西に約80 kmのロシアと中国の国境にあるシェレメチェヴォ村は、アムール川の支流、ウスリー川の右岸に位置します。岩面刻画は、高さ4~5mの黒い岩壁（黒色安山岩）に人面、舟、水鳥などが描かれています。多くが駁打法（叩いて点を造り連続させる方法）で描かれています。人面はつり目で顔の周囲には炎が立ち上るかのような、特徴的なものがあり、その顔のデザインはハバロフスク地方で飲まれているミネラルウォーターのラベルにも使用されています。

3 キーヤ遺跡

ハバロフスク市より南に約40 kmのベレヤスラフカ村近く、ウスリー川の支流キーヤ川の右岸に位置する岩面刻画。悪魔のいるところという名もついています。シェレメチェヴォと同様の岩壁に描かれる岩面刻画は13点程度が確認でき、中には刻画にペンガラで彩色をしたものが1点あります。最初の発見は19世紀末、ルドルフ・マーク氏によるもので、軍人のアルフタンも調査を行っています。

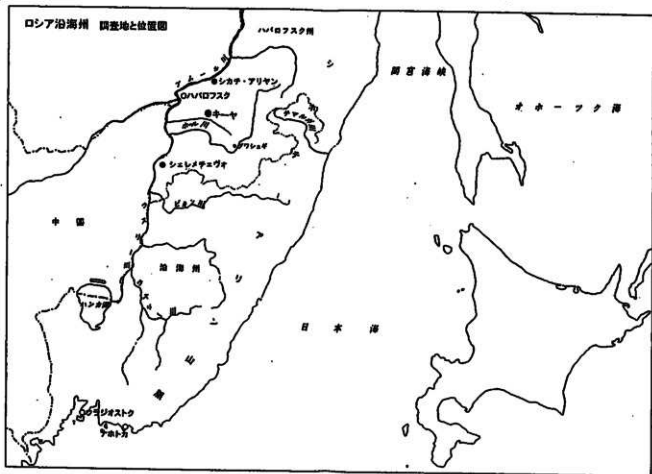




図1 シカチ・アリヤンの岩面刻画

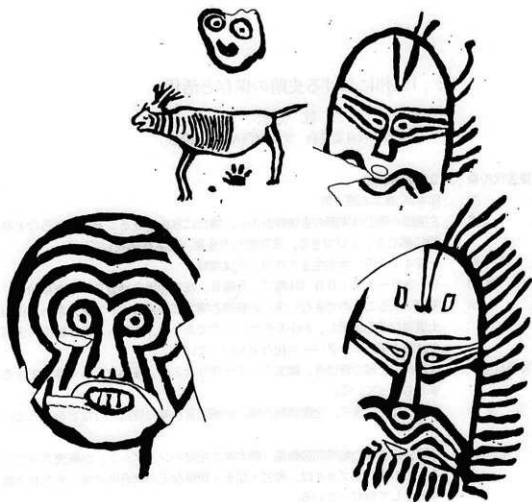


図2 シェレメチェヴォの岩面刻画

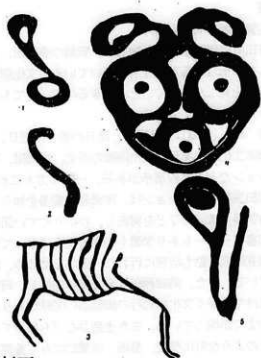


図3 キーヤの岩面刻画

「九州における史跡の保存と活用」

乾 芳宏

(余市町教育委員会 文化財係長兼学芸係長)

1. 肥後古代の森・県立装飾古墳館

- 1) 場 所 熊本県 鹿本郡鹿央町
- 2) 環 境 古墳館の周辺は実際の古墳群があり、墳丘に自由に登ることができるなど身近に感じることができる。また地元の食堂、売店も隣接している。
- 3) 入 館 料 一般410円、大学生250円、他は無料
- 4) 開 館 時 間 9:30~17:00 (休館日 月曜日、祝日の場合は翌日、年末年始)
- 5) 展 示 実際に見ることのできない多くの装飾古墳内部の宝物大レプリカがあり、出土遺物などを展示し、わかりやすいものであった。また、3Dの映画、全国の装飾古墳のデータベース化なども行っている。
- 6) 教育普及活動 古代画、土器の野焼き、縄文クッキー作りなどの、家族で楽しく参加できる事業も行っている。
- 7) 研究活動 古代たたらへの復元、全国装飾古墳の地域別資料集の継続刊行などを行っている。
- 8) 販 売 品 全国装飾古墳の地域別図録集「熊本県文化財ハンドブック」が販売されている。このハンドブックは、考古・歴史・民俗などが総合的にまとめられた参考書として役立つ。
- 9) 評 価 周辺の環境とともに、古墳館のレプリカ展示、ユニークな教育普及活動、装飾古墳についてのたゆまぬ情報収集など参考になることが多い。しかし、交通の便が良くないこと、場所がわかりにくいことは残念である。

2. 県立九州陶磁文化館

- 1) 場 所 佐賀県西松浦郡有田町
- 2) 環 境 有田町は伊万里の里と知られ、駅前の商店街、橋の欄干などに陶磁器の町としての伝統工芸が現在も息づいている。文化館は駅からも近く、町のたたずまいを見ながら行くことができるので、とても気軽に入ることができる。
- 3) 開 館 時 間 9:30~17:00
- 4) 入 館 料 無 料 (休館日 月曜日、祝日の場合は翌日、年末年始)
- 5) 展 示 陶磁文化館の展示は九州陶磁の歴史、古陶磁、現代の陶芸、柴田夫妻コレクションなどの常設展示がある。一般の方々にわかりやすく解説されている。柴田夫妻コレクションは、陶磁器の変遷を知る上でその量は圧巻である。
- 6) 教育普及活動 特別展、講演会などを実施し、わかりやすい図録はとても参考となる。また図書コーナーもあり学習もできるようになっている。
- 7) 研究活動 調査研究活動も活発に行われ、国内をはじめ、海外の陶磁器について調査している。また、陶磁器研究会を毎年開催し、研究成果を発表している。
- 8) 販 売 品 受付では多く文化館刊行の陶磁器の図録があり、小学生向けから専門的なものまで揃っている。また土産品なども扱っている。
- 9) 評 価 このような町に歴史、美術、産業的にみて重要な陶磁器資料を収集・展示し

ている博物館が設置されているのはふさわしい。

3. 吉野ヶ里歴史公園

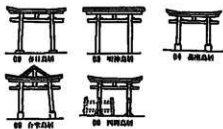
- 1) 場 所 佐賀県神埼郡神埼町
- 2) 環 境 吉野ヶ里遺跡の保存と活用を図る目的で設置された歴史公園で、我が国初の文化財保存と公園としての機能を併せ持つ歴史公園として、総面積 117h a の整備が進められている。
遺跡の発見・整備により、吉野ヶ里公園駅ができ、田園風景を歩きながら約 20分で公園に着くことができる。
- 3) 開館時間 9:30~17:00
- 4) 入館料 無料(年中無休)
- 5) 展 示 現在は南内郭、北内郭の弥生時代集落が復元されており、竪穴住居、物見やぐら、高床倉庫、楼閣等を見ることができる。平成4年に事業が着手以来、弥生時代後期の環壕集落を総合的、本格的に復元しており、一般の人にそのイメージを実感させている。
- 6) 評 価 見学の時は未だ公園の造成中であり、詳細に見学はできなかった。
日本最大の環壕集落であり、「魏志倭人伝」に記された邪馬台国を彷彿とさせる魅力があり、考古学関係者をはじめ一般の方も家族連れで弥生時代にタイムスリップさせてくれる。弥生時代の生活の様子を想像させてくれる遺跡である。

(全体を通して気づいた点)

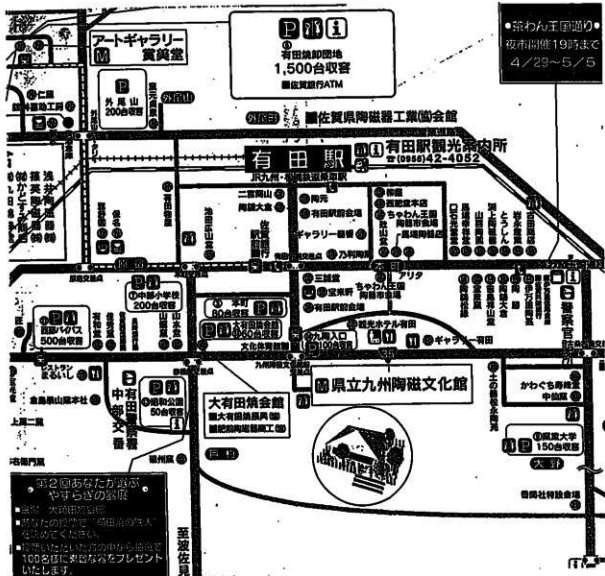
- ・見学地の交通機関、交通の便などについて詳しい説明書、案内板が必要である。
- ・来館者に応じた児童、一般、学生、専門者用などのパンフレットがあると後日学習ができるので役に立つと思われる。
- ・一般の方が見ることの出来ない遺跡の場合は、実物大レプリカは大きな効果があり、ミニチュアがあることによって全体を知ることができ、貸出などにも利用できる。
- ・博物館への興味や関心をひくために映像などの機械も必要であるが、やはり実物資料の価値が重要であり、博物館の特徴をもたせることが必要である。
- ・博物館で展示は説明を読ませることよりも、まず見ることに主眼をおき、体験もできることが望ましい。
- ・資料に対する調査研究は常に必要であり、新しい情報を一般に提供することによって、繋がりが広がると思われる。
- ・史跡や文化財、博物館において地元の人向けの定期的なイベントや公開講座などの催しを行って常に人が出入りするよう場を提供することが重要と思われる。
- ・その場所や博物館に何回も足を運んでもらうためには、常設展示のみでは無理であり、特別展示、教育普及活動、出版物の刊行などを通して、理解してもらうことが必要である。そのために学芸員をはじめとする職員の対応は重要と思われる。



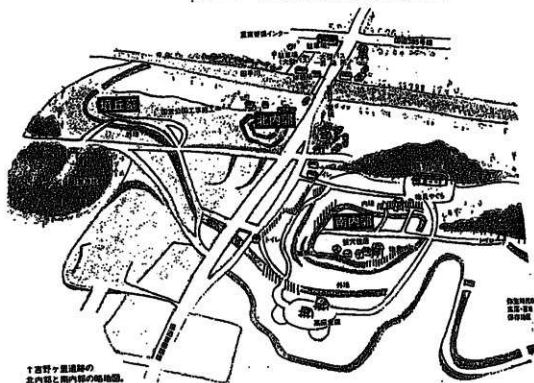
期日	時間	内容	定員
5月13日(土)	10:00-12:30	～滑石を削り、磨いて勾玉ペンダントを作る～	100
5月27日(土)	10:00-12:30	～滑石を削り、磨いて勾玉ペンダントを作る～	100
6月10日(土)	10:00-14:00	～薪の糸取りと草木染めで古代の染め物を再現する～	30
6月24日(土)	10:00-12:30	～滑石を削り、磨いて勾玉ペンダントを作る～	100
7月8日(土)	10:00-14:00	～滑石を削り、磨いて勾玉ペンダントを作る～	100
7月22日(土)	10:00-12:30	～滑石を削り、磨いて勾玉ペンダントを作る～	30
7月29日(土)	13:00	～滑石を削り、磨いて勾玉ペンダントを作る～	50
～30日(日)	-12:00	～古代の「食」や「衣」を楽しみながら実体験する～	
8月12日(土)	10:00-14:30	～土の糸取りと草木染めで古代の染め物を再現する～	30
8月26日(土)	10:00-14:30	～土の糸取りと草木染めで古代の染め物を再現する～	30
9月9日(土)	10:00-14:00	～滑石を削り、磨いて勾玉ペンダントを作る～	30
9月23日(土)	10:00-14:30	～滑石を削り、磨いて勾玉ペンダントを作る～	30
10月14日(土)	10:00-13:00	～土を練って縄文土器を作り、野焼きする～ *野焼きは、11月11日(土)	30
10月28日(土)	10:00-12:00	～木の灰を焼き、焼き石でタッキーを焼き上げる～	30
11月25日(土)	10:00-12:00	～滑石を削り、磨いて勾玉ペンダントを作る～	30
12月9日(土)	10:00-14:00	～古代、中世から始まった陶器を作成する～ *色絵り・窯入れは11月13日(土)	30
1月27日(土)	10:00-13:00	～土を練って縄文土器を作り、野焼きする～ *野焼きは、2月24日(土)	30
2月10日(土)	10:00-12:00	～滑石を削り、磨いて勾玉ペンダントを作る～	30



第1図 肥後古代の森・県立装飾古墳館の関連資料



第2図 県立九州陶磁文化館と周辺地図



第3図 吉野ヶ里遺跡の概略図

ロシア極東地域の岩面刻画とその活用

右代啓視・添田雄二

(北海道開拓記念館・学芸員)

極東地域の岩面刻画は、これまでバイカル湖周辺域、アムール川流域などで確認され、さらに極北地域にも存在することが、今回の調査で明らかになった。

これらはフゴッペ洞窟の岩面刻画の系統を知る上で重要な調査であり、大陸の北からの影響なのか、それとも南からの影響なのかを探る手がかりとなるものと考えられる。

ここでは、これまで一般的に知られていない極東地域の岩面刻画について、2000年と2001年に実施した調査から報告することとする。

I 東シベリア海沿岸域の岩面刻画

ベクティメリ川河岸の岩面刻画／これまで11の岩面刻画の遺跡が確認されている。

岩面刻画群は、113点が確認されている。

刻画の種類／①頭にキノコ状のカサをもつ人物像。

②トナカイ、ヘラジカ、イヌなどと思われる動物。

③クジラ、アザラシなどと思われる海獣。

④舟と思われるもの（海獣猟を行っているもの）。

⑤トナカイに轡をひかせているもの。

*ベンガラを使用している。

II オホーツク海北西岸域の岩面刻画

マーヤ川河岸の岩面刻画／これまで3の岩面刻画の遺跡が確認されている。

刻画の種類／①人物像。

②シカなどの動物。

*刻画もあるが、主にペイント（ベンガラなど）による画が多い。

III ウスリー川流域の岩面刻画／これまで3の岩面刻画の遺跡が確認されている。

ここでは、あまり知られていなかったスッパイ岩面刻画について報告する。

刻画の種類／①人物像。

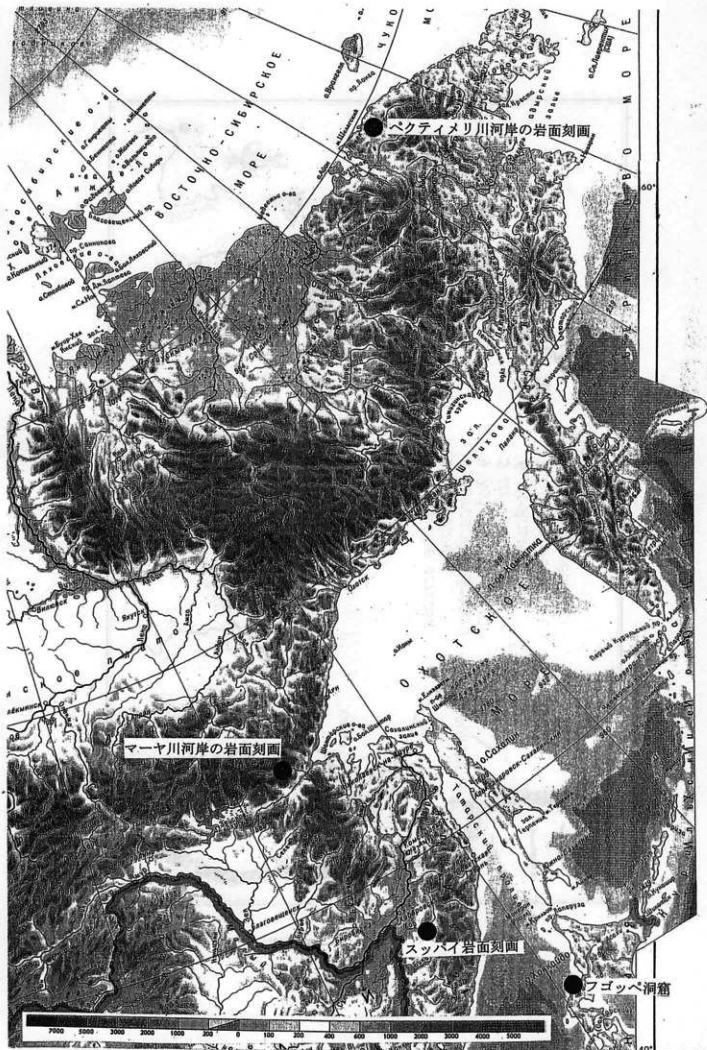
②舟。

③騎馬人物像。

*ベンガラを使用している。

その他の情報／①カフエン川の洞窟に岩絵がある。

②マギーリニ川の支流に岩絵がある。

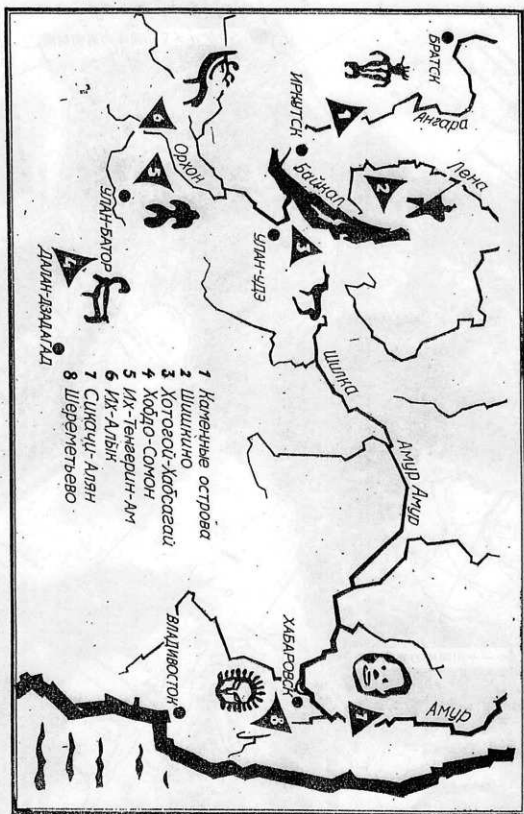


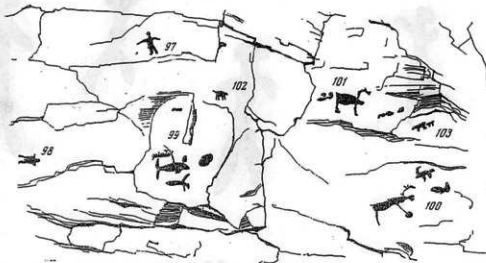
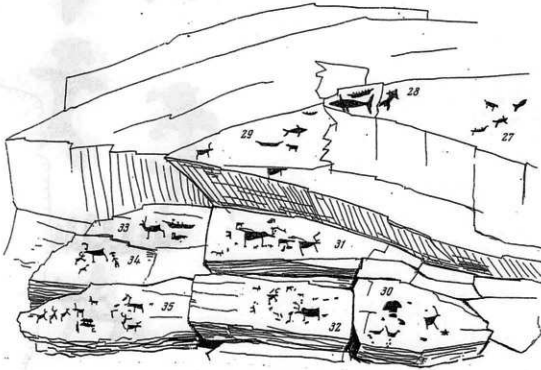
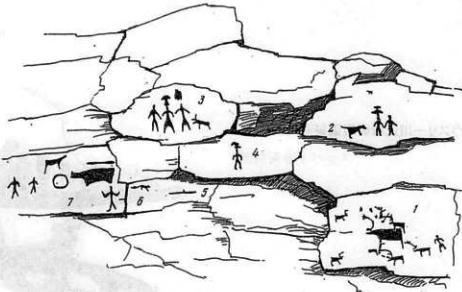
ベクティメリ川河岸の岩面刻画

マールヤ川河岸の岩面刻画

スツパイ岩面刻画

フゴッベ洞窟

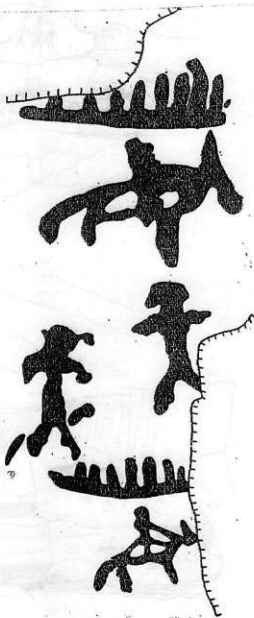




ベクティメリ川河岸の岩面刻画

ウスリー川流域の岩面刻画／

スツパイ岩面刻画



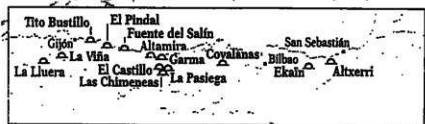
ヨーロッパの岩面刻画とその活用

小川 勝

(鳴門教育大学 助教授)

はじめに、フランコ=カンタブリア美術・洞窟壁画のフィールドステーションを中心に、

1. バリ(Paris)市
人類博物館(Musée de l'Homme)
国立自然史博物館(Museum National d'Histoire Naturelle)
 2. サン=ジェルマン=アン=レイ(Saint-Germain-en-Laye)市
国立古代博物館(Musée des Antiquités Nationales)
 3. ペリグー(Périgueux)市
ペリゴール博物館(Musée du Périgord)
 4. モンティニャック(Montignac)村
ラスコー II(Lascaux II)
 5. ドルドーニュ(Dordogne)県
ル・トー先史美術センター(Centre d'Art Préhistorique du Thot)
ルフィニャック洞窟(Grotte de Rouffignac)
トゥルサック先史公園(Préhisto-parc à Tursac)
 6. レ・ゼジエ=ドゥ=タヤック(Le Eyzies-de-Tayac)村
国立先史学博物館(Musée National de Préhistoire)
パトー岩陰(Abri Pataud)
フォン=ドゥ=ゴーム洞窟(Grotte de Font-de-Gaume)
レ・コンバレル洞窟(Grotte des Combarelles)
キャブ=ブラン岩陰(Abri du Cap-Blanc)、etc...
 7. ボルドー(Bordeaux)市
ペール=ノン=ペール洞窟(Grotte de Pair-non-Pair)
アキテーヌ博物館(Musée d'Aquitaine)
 8. キャブルレ(Cabrerets)村
ベシュ=メルル洞窟(Grotte du Pech-Merle)
 9. タラスコン=シュル=アリエージュ(Tarascon-sur-Ariège)村
ニオー洞窟(Grotte de Niaux)
ピレネー先史美術公園(Parc Pyrénéen de l'Art Préhistorique)
 10. サンティジャーナ=デル=マール(Santillana del Mar)村
アルタミラ洞窟・博物館(Cuevas y Museo de Altamira)
 11. サンタンデル(Santander)市
県立先史学・考古学博物館(Museo Provincial de Prehistoria y Arqueología)
- おわりに、先史美術研究センターとしてのヨーロッパ



フォーラム
「フィールドステーションとしてのフゴッペ洞窟」



コメンテーター

- 菊池 徹夫氏 (早稲田大学文学部 教授)
福田 正巳氏 (北海道大学低温科学研究所 教授)
利 輝夫氏 (余市町教育委員会 教育長)
赤松 守雄 (北海道開拓記念館 学芸部長)
司 会
右代 啓視 (北海道開拓記念館 学芸員)

メ モ



【温泉】

- 天山楽温泉 ☎23-5211
- はまなす温泉 ☎22-7400
- つるかめ温泉 ☎23-7788
- 大黒温泉 ☎22-4623
- 余市川温泉 ☎22-4126
- よいち観光温泉 ☎22-3656

【交通機関】

- つばめハイヤー ☎23-3111
- みなとハイヤー ☎22-8111
- JR北海道余市駅 ☎23-3631
- 北海道中央バス余市営業所 ☎23-2175
- よいちレンタカーリース ☎23-3821

【宿泊施設】

- 真泉天山楽 ☎23-5211
- 日本海余市保養センター ☎22-7400
- クイーンズランド ☎22-2141
- プチホテルノースシア ☎22-7831
- 薄水旅館 ☎22-2425
- ホテルサンアート ☎22-6070
- 民宿希羅荘 ☎22-2304
- 徳島屋旅館 ☎22-6369
- 富久興旅館 ☎22-2834
- 本間旅館 ☎22-2233
- ビジネスラッツ ☎22-4632
- 藤原旅館 ☎22-2038
- ホテル水明閣 ☎22-2836
- 民宿富恵荘 ☎22-4437
- 民宿常吉 ☎23-2458
- 民宿豊浜 ☎23-2458
- 民宿山科 ☎23-2396
- 民宿工藤 ☎23-3837
- 民宿平安 ☎22-3874

余市町中央公民館

(〒046-0004 余市町大川町4丁目 TEL:0135-23-5001)

● 連絡先 ●

北海道開拓記念館

〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2 TEL:011-898-0456 FAX:011-898-2657

よいち水産博物館

〒046-0011 余市町入舟町21 TEL:0135-22-6187 FAX:0135-23-8755

フィールドステーションとしての フゴッペ洞窟

2001年11月24日(土)

10:00 ~ 15:30

余市町中央公民館

余市町大川町4丁目

報告者

盛 昭史氏 (余市町教育委員会 文化財課長)
乾 芳宏氏 (余市町教育委員会 文化財兼学芸係長)
浅野 敏昭氏 (余市町教育委員会 学芸員)
右代 啓視・添田 雄二 (北海道開拓記念館 学芸員)
小川 勝 氏 (鳴門教育大学 助教授)

コメンテーター

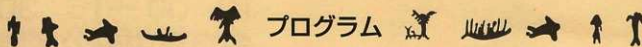
菊池 徹夫氏 (早稲田大学文学部 教授)
福田 正己氏 (北海道大学低温科学研究所 教授)
利 輝夫氏 (余市町教育委員会 教育長)
赤松 守雄 (北海道開拓記念館 学芸部長)

主催●北海道開拓記念館、余市町、余市町教育委員会
後援●北海道新聞社、日本考古学協会、北海道考古学会、北海道博物館協会
定員●100名 (事前応募)
参加●無料
申し込み・お問い合わせ●よいち水産博物館 〒046-0011 余市町入舟町21 TEL:0135-22-6187 FAX:0135-23-8755

フゴッペ洞窟は、1950(昭和25)年に北海道余市町で発見された遺跡である。発掘調査によって縄文文化後半の出土遺物や日本最大の岩面刻画などが確認され、この時期の文化を知る上で重要な遺跡として知られている。1953(昭和28)年に国指定史跡とされ、1955(昭和30)年から一般公開された。その後、刻画の風化が著しいことから、洞窟内の温・湿度を一定に制御する保存施設を整備し、1972(昭和47)年に再公開され現在に至っている。

フゴッペ洞窟については、岩面刻画のルーツ、制作年代、当時の環境、先史文化の交流など未解明な部分が多く、いまだ謎につつまれているのが現状である。昨年、発見50年を記念し、「フゴッペ洞窟の過去・現在・未来」をテーマとしたシンポジウムを開催した。このシンポジウムでは、考古学、先史美術、民族学、保存科学など各分野におけるこれまでの研究成果から、フゴッペ洞窟の学術的重要性と今後の活用について総合的な討論が行われた。今回のフォーラムでは、シンポジウムの成果と国内外で行われた最新の調査結果をふまえ、「フィールドステーションとしてのフゴッペ洞窟」をテーマとし、未来にむけた文化遺産の保存と活用について討論することを目的とする。

このフォーラムは、文部科学省科学研究費補助金地域連携推進研究費「フゴッペ洞窟・岩面刻画と文化交流のフィールドステーション作りの基礎研究」の一環として実施する。



プログラム

10：00～10：20 開会挨拶 利 輝夫氏（余市町教育委員会 教育長）

10：20～10：50 報告1 「奈良周辺における史跡の保存と活用」
盛 昭史氏（余市町教育委員会 文化財課長）

10：50～11：20 報告2 「九州における史跡の保存と活用」
乾 芳宏氏（余市町教育委員会 文化財兼学芸係長）

11：20～11：50 報告3 「ハバロフスク州の岩面刻画とその活用」
浅野 敏昭氏（余市町教育委員会 学芸員）

11：50～13：00 昼食・休憩

13：00～13：30 報告4 「ロシア極東地域の岩面刻画とその活用」
右代 啓祝・添田 雄二（北海道開拓記念館 学芸員）

13：30～14：00 報告5 「ヨーロッパの岩面刻画とその活用」
小川 勝 氏（鳴門教育大学 助教授）

14：00～14：10 休憩

14：10～15：20 フォーラム「フィールドステーションとしてのフゴッペ洞窟」
菊池 徹夫氏（早稲田大学文学部 教授）
福田 正己氏（北海道大学低温科学研究所 教授）
利 輝夫氏（余市町教育委員会 教育長）
赤松 守雄（北海道開拓記念館 学芸部長）

15：20～15：30 閉会挨拶 吉田 和夫（北海道開拓記念館 館長）

フゴッペ
洞窟
フォーラム
2002

これからの

フゴッペ洞窟



- と き 平成 15(2003)年 3 月 29 日(土)
- と ころ 余市町中央公民館
- 主 催 北海道開拓記念館
余市町 余市町教育委員会
- 後 援 北海道新聞
北海道博物館協会

フゴッペ洞窟フォーラム 2002

「これからのフゴッペ洞窟」開催要項

目 的

フゴッペ洞窟の学術的重要性と今後の活用について、国内外の調査をふまえ、「これからのフゴッペ洞窟」をテーマとした総合的な討論をすることを目的とする。

なお、このフォーラムは、文部科学省科学研究費補助金地域連携推進研究費「フゴッペ洞窟・岩面刻画と文化交流のフィールドステーション作りの基礎研究」の一環として実施する。

内 容

第1部 報 告

13:10 ~ 14:30

「盛岡市・仙台市における史跡の保存と活用」

余市町教育委員会 盛 昭史

「東京都における史跡の保存と活用」

余市町教育委員会 盛 昭史

「北陸における史跡の保存と活用」

余市町教育委員会 浅野 敏昭

「ヨーロッパにおける史跡の保存と活用」

余市町教育委員会 乾 芳宏

第2部 フォーラム「これからのフゴッペ洞窟」

14:40 ~ 16:25

コメンテーター 余市町教育委員会教育長

利 輝夫

パネラー

早稲田大学文学部教授

菊池 徹夫

北海道大学低温科学研究所教授

福田 正己

鳴門教育大学助教授

小川 勝

北海道開拓記念館 特別学芸員

赤松 守雄

北海道開拓記念館事業部長

氏家 等

北海道開拓記念館主任学芸員

山田 悟郎

第55回特別展 洞窟遺跡を残した

The 55th special exhibition "Jokai-jomon People who left Cave Sites" / Historical Museum of Hokkaido
続縄文の人びと



2002

9/13(金) - 11/3(日)

休 日：毎週月曜ただし、9/22(開館日)、9/24・10/15
 開館時間：9:30 - 16:30(入館は16:00まで)
 観覧料金：特別展一般300円/小学生、高校・大学100/80円
 小・中学校50/40円
 解説展料金一般50/450円/大学180/140円
 ※10名以上の団体料金は、観覧料に引き下げられ、小学生は無料
 小・中学生の団体観覧料金は無料

9/21(土) 13:30-15:30
 特別展関連講演会

「岩面刻画の謎をさぐる一洞窟を利用した人びと」
 講師：木村重徳氏(大阪大学名誉教授)
 場所：かでる2・7(札幌市中央区北2西7)
 料金：無料(事前申し込み/定員150名)

9/29(日) 9:00-17:00
 特別展関連ハス見学会

「洞窟遺跡を訪ねる」
 講師：石代啓規、平川善祥、鈴木琢也(当館学芸員)
 料金：無料(事前申し込み/定員40名)

11/3(日) 13:30-15:30
 文化の日特別講演会

「続縄文文化のイメージ」
 講師：宇田川 洋氏(東京大学教授)
 料金：無料(事前申し込み/定員100名)

8/28(水)-11/29(金)
 体験学習行事「大昔の人びとのくらし」

「続縄文文化のころー」
 場所：体験学習室



北海道開拓記念館

後援/北海道教育委員会、札幌市教育委員会、JTB北海道、北海道新報社、朝日新聞北海道支社
 毎日新聞北海道支社、読売新聞北海道支社、NHK札幌放送局、HBC、STV、HTB
 UHB、TVh、日本考古学協会、北海道考古学会、日本洞窟考古学

001-0006 札幌市厚別区厚別町小野町53-2
 TEL:011-898-0156 FAX:011-898-2657
<http://www.hokkaido-kaikoku.jp>

第55回特別展

洞窟遺跡を残した
続縄文の人びと

2002

9/13(金) - 11/3(日)

日本で発見されている洞窟遺跡は約700カ所ともいわれ、そのうち北海道では約70カ所が確認されています。この展示会では、約2,300年前にはじまった続縄文時代の洞窟遺跡に焦点をあて、この時代の人びとがどのように洞窟を利用し、後の文化でどう変化していったかを見ていきます。さらに、洞窟の成因や、そのころの自然環境と人との関わりについても探ります。

また、当館が発掘調査をおこなった「大成町貝取洞2洞窟遺跡」や日本最大級の岩面刻画で知られている国指定史跡「フゴッベ洞窟」の未公開資料も展示いたします。



□余市町フゴッベ洞窟岩面刻画(続縄文時代)



□余市町フゴッベ洞窟(続縄文時代)



□鳥牧村栄磯洞窟(縄文時代中期～続縄文時代)



□鳥牧村栄磯洞窟出土の装飾品(続縄文時代)

貝取洞2洞窟



□鳥牧村チャランケチン出土の恵山式土器(続縄文時代)



□大成町貝取洞2洞窟(続縄文時代)



□余市町フゴッベ洞窟出土の骨角器(続縄文時代)



□羅臼町オタフク岩洞窟出土の骨角器(アイヌ文化期)



□羅臼町マッカウス洞窟(続縄文時代)



□オタフク岩洞窟出土のトビニクイ式土器(続縄文文化)



●洞窟遺跡
0 50 100km



□オタフク岩洞窟出土の縄文土器(続縄文文化期)



□豊浦町小幌洞窟(続縄文時代～アイヌ文化期)



□大成町貝取洞2洞窟出土の遺物(続縄文時代)

展示構成

I 恵山文化と洞窟遺跡

- 1 2000年前の地震と洞窟遺跡
- 2 洞窟を利用した続縄文人
- 3 洞窟で営まれた生業
- 4 洞窟で発見された遺物
- 5 貝製平玉と琥珀製平玉

II 後北文化と洞窟遺跡—岩面刻画の謎—

- 1 フゴッベ洞窟と岩面刻画
- 2 手宮洞窟の岩面刻画
- 3 岩面刻画のひろがり
- 4 北と南の交流

III その後の洞窟遺跡

—オホーツク・縄文文化から、アイヌ文化—

- 1 北からの文化の波及—オホーツク文化—
- 2 縄文文化の洞窟遺跡
- 3 南からの文化の波及
- 4 アイヌ文化と洞窟遺跡

第55回特別展 洞窟遺跡を残した


続縄文の人びと

The 55th special exhibition "Zoku-Jomon People who left Cave Sites" / Historical Museum of Hokkaido



2002

北海道開拓記念館



開催にあたって

北海道開拓記念館では、平成2～7年（1990～1995）の5ヵ年間で、「北海道南部における縄文時代の洞窟遺跡の性格に関わる諸問題の究明」をテーマに大成町貝取洞2洞窟遺跡の発掘調査を実施いたしました。また、併行して行なわれた海外学術交流研究「北の歴史・文化交流研究事業」の一環としてロシア共和国のハバロフスク州郷土博物館、サハリ州郷土博物館と同遺跡で共同発掘調査を行い学際的な研究を進めてきました。さらに、平成12年より文部科学省科学研究費地域連携推進研究費を受け「フゴッペ洞窟・岩面刻画と文化交流のフィールドステーション作りの基礎研究」を進めております。

この展示会は、これらの研究成果の一部を公開するものであり、北海道の洞窟、洞穴、岩陰などといわれる洞窟遺跡に焦点をあて、縄文時代（2,300年前～6世紀ころ）を見直す企画したものです。このころ、本州では食料獲得の社会から食料生産の社会へと大きく社会構造が変化する時期となっています。北海道では、食料生産の社会を受け入れず、独自の文化である「縄文文化」を展開させ、本州の文化とは違う、もう一つの日本文化をあゆみはじめたのです。さらに、その背景となったのは「弥生海進期」とよばれる温暖な気候であり、一層、縄文文化を発展させたものと考えられます。

「縄文文化」の力強い脈動と当時の環境を、この展示会や展示資料カタログをとおしてご理解していただければ幸いに存じます。

平成14年9月

北海道開拓記念館

	001	開催にあたって	
	002	目次	
	003	文化年表・環境変遷	
	004	洞窟遺跡の分布図	
概説	005	はじめに	右代啓視
	006	縄縄文時代の洞窟遺跡	右代啓視
	008	過去2,000年の古環境と人とのかかわり	添田雄二/赤松守雄
	010	縄縄文時代に利用された植物	山田悟郎
	012	フゴッペ洞窟の岩面刻画	乾 芳宏/浅野敬昭
	014	世界の岩面刻画とフゴッペ洞窟・岩面刻画	小川 勝
	016	洞窟遺跡に見る縄縄文以降の諸文化 ーアイヌ文化形成論の視点からー	菊地徹夫
第1章	018	I 恵山文化と洞窟遺跡	
	019	1 2,000年前の地震と洞窟遺跡	
	020	2 洞窟を利用した縄縄文人	
	021	3 洞窟で営まれた生業	
	022	4 洞窟遺跡で発見された遺物	
	029	5 貝製平玉と琥珀製平玉	
第2章	030	II 後北文化と洞窟遺跡ー岩面刻画の謎ー	
	031	1 フゴッペ洞窟と岩面刻画	
	040	2 手宮洞窟の岩面刻画	
	042	3 岩面刻画のひろがり	
	043	4 北と南の交流	
第3章	044	III その後の洞窟遺跡ーオホーツク・糠文文化からアイヌ文化ー	
	045	1 北からの文化の波及ーオホーツク文化ー	
	047	2 糠文文化の洞窟遺跡	
	050	3 南からの文化の波及	
	051	4 アイヌ文化と洞窟遺跡	
第4章	053	IV フゴッペ洞窟と岩面刻画ー過去の記録からー	
リスト	062	展示シナリオ	
	066	謝辞	

□凡 例

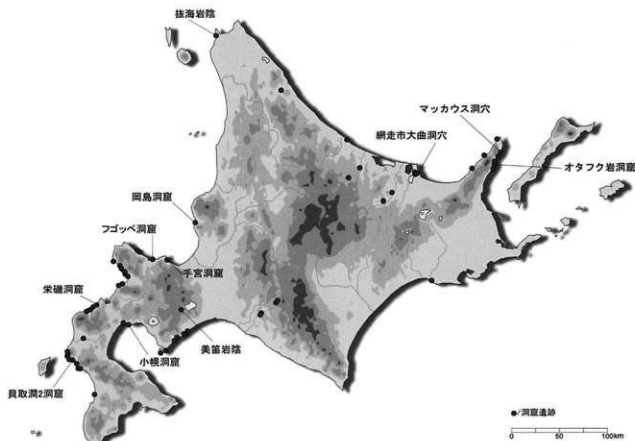
- この図録は、北海道開拓記念館が平成14年（2002）9月13日（金）～11月3日（日）まで開催する第55回特別展「洞窟遺跡を拓いた地縄文の人びと」に際して作成したものである。
- 巻末に展示シナリオ（展示図録、写真、蒸気物リスト）を掲載した。この図録は、展示資料目録を兼ねるものである。
- 展示資料の写真はできるだけ掲載したが、紙面の都合で掲載できなかったものもある。また、展示会において、実物資料だけでなく写真パネルとして展示したものに、展示構成上重要な資料は本図録にその写真を掲載した。
- 写真・図などの名称の明にある番号は、巻末の展示シナリオの資料番号と一致する。なお、実際の展示は、展示シナリオの準じて、資料番号によって行われているが、本図録における写真の掲載順序は展示シナリオのそれとは一致しない。
- 図録に写真を掲載した資料でも、資料の保存などの都合などで閉館中に展示交換することがある。

文化年表・環境変遷

		北海道	環境変遷	本州(東北)
4世紀	縄文時代	食料獲得社会	弥生海進期 海面高+1.5~2m	食料生産社会の成立 東北北部に弥生文化が広がる(砂沢)
3世紀	続前	恵山文化 (タンネトウL系、宇津内・緑ヶ岡系、砂沢系) 下田ノ沢文化	2000年前の北海道南西地震	弥生時代 (二枚橋・牛腰Ⅱ) (田舎館) (念仏間) (天王山) 東北に後北式土器が広がる
2世紀		(二枚橋系、興津) 貝取洞2洞窟遺跡		
1世紀	縄文	小椋洞窟 (後北B、南川Ⅲ、宇津内Ⅱa)	寒冷期	東北に後北式土器が広がる
1世紀		フゴッペ洞窟遺跡 手宮洞窟遺跡		
2世紀	時後	(後北C、南川Ⅳ、宇津内Ⅱb)	小海進期	古墳時代 (雄勝) (南小島) 東北に北大式土器が広がる (引田) (栗園)
3世紀		後北文化 (後北C、D、鈴谷、天王山系)		
4世紀	代	同島洞窟遺跡 (北大Ⅰ)	古墳末海進期 海面高+1m	古墳時代 東北に北大式土器が広がる (引田) (栗園)
5世紀		オホーツク文化期 (北大Ⅱ) 抜海岩陸遺跡 円頭・方頭大刀が広がる		
6世紀	擦文文化	オホーツク文化期 (北大Ⅱ) 抜海岩陸遺跡 円頭・方頭大刀が広がる	寒冷期	奈良時代 660/阿倍臣、肅慎を討つ(國分寺下層) 669/陸奥大地震 (表杉ノ入) (須恵器・五所川原)
7世紀		オホーツク文化期 (北大Ⅱ) 抜海岩陸遺跡 円頭・方頭大刀が広がる		
8世紀	文化	オホーツク文化期 (北大Ⅱ) 抜海岩陸遺跡 円頭・方頭大刀が広がる	平安海進期 海面高+2m弱	平安時代 9世紀末の冷涼化 915/十和田火山灰 10世紀前半/白根山火山灰降下 10世紀末/厚黒山火山灰降下
9世紀		オホーツク文化期 (北大Ⅱ) 抜海岩陸遺跡 円頭・方頭大刀が広がる		
10世紀	期	オタフク岩洞窟遺跡 五所川原産の須恵器が広がる	寒冷期	鎌倉時代 南北朝時代 室町時代 安土桃山
11世紀		オタフク岩洞窟遺跡 五所川原産の須恵器が広がる		
12世紀	ア	1456~1457/ コシャマインの戦い	小温暖期	十三湊、安東氏の最盛期
13世紀				
14世紀	イ	1456~1457/ コシャマインの戦い	小温暖期	十三湊、安東氏の最盛期
15世紀				
16世紀	又	1669/ シャクシャインの戦い 円空、岩屋洞窟で 仏像を彫る	小氷期 1640/駒ヶ岳-d火山灰降下 1663/有珠-a火山灰降下 1667/樽前-b火山灰降下 1694/駒ヶ岳-c火山灰降下 1739/樽前-a火山灰降下 1741/渡島大島火山灰降下 1856/駒ヶ岳-c火山灰降下	江戸時代 1695/津軽・盛岡藩の凶作 1755/奥羽宝暦の飢饉 1784/奥羽天明の飢饉 1832/天保の飢饉
17世紀				
18世紀	文	1669/ シャクシャインの戦い 円空、岩屋洞窟で 仏像を彫る	小氷期 1640/駒ヶ岳-d火山灰降下 1663/有珠-a火山灰降下 1667/樽前-b火山灰降下 1694/駒ヶ岳-c火山灰降下 1739/樽前-a火山灰降下 1741/渡島大島火山灰降下 1856/駒ヶ岳-c火山灰降下	江戸時代 1695/津軽・盛岡藩の凶作 1755/奥羽宝暦の飢饉 1784/奥羽天明の飢饉 1832/天保の飢饉
19世紀				
20世紀	化	千歳美笛岩陸遺跡	1994/北海道南西沖地震	明治 大正 昭和 平成

※表の○は、主な土器の型式を示した。

洞窟遺跡の分布図



□北海道の洞窟遺跡一覧

網走市大曲洞穴遺跡
 網走市向陽下洞穴遺跡
 網走市向陽ヶ丘洞穴遺跡
 網走市緑町洞穴遺跡
 斜里町オロンコ洞穴遺跡
 斜里町知床峠洞穴遺跡
 斜里町はさみ岩洞穴遺跡
 羅臼町マッカウス洞穴遺跡
 羅臼町トビニタイ神社洞穴遺跡
 羅臼町トビニタイ洞穴遺跡
 羅臼町キキリベツ洞穴遺跡
 羅臼町オタフク岩窟遺跡
 置戸町静山洞穴遺跡
 北見市美里洞穴遺跡
 釧路市春採洞穴遺跡
 平取町三十三号1号洞穴遺跡
 平取町三十三号2号洞穴遺跡
 平取町アベツ1号洞穴遺跡
 平取町アベツ2号洞穴遺跡
 白老町虎杖浜洞穴1号遺跡
 白老町虎杖浜洞穴2号遺跡
 白老町虎杖浜洞穴3号遺跡
 登別市ランボック洞穴遺跡
 登別市クッタラ洞穴遺跡

室蘭市増市洞穴遺跡
 室蘭市イタンキ洞穴遺跡
 豊浦町小幌洞窟遺跡
 洞爺村岩屋洞穴遺跡
 蘭越町昆布洞穴遺跡
 今金町今金洞穴遺跡
 乙部町三ツ谷貝塚遺跡
 泊村照岸洞穴遺跡
 泊村茶津1号洞穴遺跡
 泊村茶津2号洞穴遺跡
 泊村茶津3号洞穴遺跡
 泊村茶津4号洞穴遺跡
 泊村茶津5号洞穴遺跡
 泊村兜洞穴遺跡
 泊村糸泊洞穴遺跡
 泊村稲荷神社下洞穴遺跡
 泊村モヘル洞穴遺跡
 泊村有戸洞穴遺跡
 泊村茅沼洞穴遺跡
 泊村洗井洞窟遺跡
 泊村白別洞穴遺跡
 神忠内村神忠内洞穴遺跡
 神忠内村観音洞穴遺跡
 神忠内村バクチ岩遺跡
 神忠内村柿崎洞窟遺跡

泊村龍神沢洞穴遺跡
 共和町免足岩陰遺跡
 積丹町美国1洞穴遺跡
 積丹町美国2洞穴遺跡
 小樽市手宮洞窟遺跡
 余市町フゴッペ洞窟遺跡
 浜益村岡島洞窟遺跡
 稚内市技海岩陰遺跡
 紋別市オンネコムケ洞穴遺跡
 大成町湯の尻洞穴遺跡
 大成町貝取洞窟遺跡
 大成町貝取洞2洞窟遺跡
 大成町貝取洞岩陰遺跡
 大成町貝取洞2岩陰遺跡
 大成町長磯洞穴遺跡
 熊石町タコ洞穴遺跡
 熊石町鮎川洞窟遺跡
 島牧村栄磯岩陰遺跡
 島牧村栄磯洞穴遺跡
 島牧村カルウス1号洞穴遺跡
 島牧村カルウス2号洞穴遺跡
 島牧村水富洞窟遺跡
 長万部町静狩洞穴遺跡
 遠軽町瞰望岩洞穴遺跡
 千歳市美笛岩陰遺跡

はじめに

右代啓視

洞窟遺跡といえば、石灰岩などからできた山が地下水による溶解作用で、山の内部が空洞化したところに、人が生活していたことを想像することができる。しかも洞窟の内部は、外光が閉ざされた暗闇で、火を使いながら、生活していたことをイメージすることができる。

これらを示す身近な洞窟遺跡としては、中国北京の南西約50kmの郊外にある周口店洞窟がある。この洞窟遺跡からは、人骨が発見され北京原人 (*Homo erectus*) とされている。洞窟は、30～60万年前ごろ（前期旧石器時代）到北京原人が利用したといわれ、生活の痕跡を示す尖頭器・削器・チャップパーとよばれる石器が出土していることは有名である。さらに、フランスのラスコー (Lascaux) は後期旧石器時代（約15,500年前）の洞窟遺跡で、その内部にウシ・シカ・野牛・オオカミなどの岩面画が描かれている。また、北スペインのアルタミラ (Altamira) は後期旧石器時代（約14,500～16,500年前）の洞窟遺跡であり、ウシ・シカ・野牛・ウマなどが岩面画として描かれている。これらの岩面画はクロマニヨン人 (Modern *Homo sapiens*) が描いたとされ、考古学・人類学はもとより、これらの岩面画は先史美術としても古くから注目され、よく紹介される洞窟遺跡である。

日本では、このような古い時代の洞窟遺跡は少なく、縄文時代のはじめに洞窟を生活や墓、信仰の場として利用することが多くなる。また、地下水による溶解作用でできた洞窟の利用は少なく、海食、河川による侵食などで形成された洞窟や洞穴 (Cave) や岩陰 (Rock Shelter) などが多いのも特徴である。ラスコーやアルタミラのような暗闇の洞窟利用というよりは、日差しが入り込むようなところを意図的に使用していたことがうかがえる。

現在、日本の洞窟遺跡は、約700カ所ともいわれ、そのうち北海道では76カ所が確認されている。北海道の洞窟遺跡は、縄文時代に利用されたものが圧倒的に多く確認され、ほとんどが海食による洞窟で、

ハイアロクラスタイト（水中火砕岩）が分布する海岸域で多く発見されている。これらの洞窟は、縄文海進最盛期（約6,000～5,500年前）の時期に形成された海食洞 (Sea Cave) であることが、これまでの調査で明らかにしてきた。しかしながら、それらの調査から過去のプレート移動による地殻変動や温暖と寒冷による地形の変化などで、洞窟遺跡が破壊されて消失したものと発見されず埋没しているもの、あるいは海底に沈んでいるものが多くあることが考えられる。このことから、地域によっては古い時代の洞窟遺跡についても発見される可能性があると思われる。

しかも、日本最大級の岩面刻画で知られている余市町フゴッペ洞窟は、出土した遺物はもとより、そこに描かれた岩面刻画はラスコーやアルタミラなどに匹敵するほどのものであり、それが手宮洞窟とともに北海道に存在することは、意義深いものでもある。



この展示会の目的は、このようなことから約2,300年前からはじまった縄文時代の人びとが残した洞窟遺跡に焦点をあて、この時代の人びとがどのように洞窟を利用し、生活が営まれていたか、さらに後の時代ではどう変化したか、そのプロセスをみい出すことにある。さらに、洞窟の形成や、そのところの自然環境と人とのかかわりについても探ろうとするものである。

また、この展示会では、当館がこれまで進めてきた「北海道南部における縄文時代の洞窟遺跡の性格に関わる諸問題の究明」をテーマとする特別研究である大成町貝取洞2洞窟遺跡の発掘調査（平成2～7年のうちの5ヵ年）、さらに平成12年より文部科学省科学研究費地域連携推進研究費を受け、余市町と連携をとりながら進めている「フゴッペ洞窟・岩面刻画と文化交流のフィールドステーション作りの基礎研究」の成果の一部でもある。

この展示会をとおして洞窟遺跡からみた違った縄文時代の文化にふれていただければ幸いである。

縄文時代の洞窟遺跡

右代啓視

日本の歴史上、食料獲得の時代から食料生産の時代へと大きく移行した縄文時代から弥生時代への画期のころ、北海道では食料生産の文化を受け入れることなく、独自の縄文文化（2,300～1,500年前）を展開した。本州の弥生文化などとの接触からわずかな鉄器が伝わり、生業にかかわる骨角器や儀礼的な道具などが急激に発展したのもこの時期である。また、このころ弥生海進期とされる温暖な気候が影響していたことも知られている。これまで、縄文時代の遺跡からは住居址の発掘例が少なく、圧倒的に墓が多く確認されている。また、札幌市K135遺跡からは、食料の捕獲、加工生産にかかわる可能性の強い遺構が確認されることなど、縄文時代後半の人びとは特に移動性の強い集団であったといわれている。しかもこの時期、北海道ではハイアロクラスタイト（水中火砕岩）が分布する海岸域で、洞窟（海食洞）を利用する傾向が強くなる。この洞窟遺跡は一般的な遺跡（Open Site）と比べ、貝塚がのこされることから貝殻や獣骨、魚骨は勿論のこと、骨角器や装飾品、人骨など、遺物の保存状態が良好である。このことから洞窟の利用状況が理解され、過去のデータを具体的に読みとれる特徴がある。したがって、洞窟遺跡という視点から縄文時代の文化をみると違った側面が読みとれることができる。

1 恵山文化の洞窟遺跡

恵山文化は北海道の南西部に文化の中心を持ち、北は礼文島、猿払村など、南は東北地方にも拡がりをみせる。集落遺跡としては瀬棚町瀬棚南川、上磯町茂別などの遺跡があるが、北海道南西部の海岸域には特に洞窟遺跡が多く分布する。その中でも積丹半島、島牧村・大成町から熊石町にかけての地域に洞窟遺跡が多く分布する。そこには新第三紀の約500万年前～1千万年前の間に形成されたハイアロクラスタイトが分布する海岸域である。この地域の洞窟遺跡を調査した結果、これまで積丹半島には23の洞窟遺跡があり、島牧村・大成町から熊石町にかけては14の洞窟遺跡が分布していることが明らかとなっ

た。これらの洞窟遺跡の形成は、基盤高度や現汀線距離、洞窟を使用した年代などから、現在よりも約3m海水面が上昇した縄文海進最盛期の時期に侵食と堆積作用によって形成された海食洞であることが明らかとなった。発掘調査が行われた洞窟遺跡は少ないが、縄文時代後・晩期、縄文時代、縄文文化期にいたる時期に使用され、特に縄文時代の恵山文化の人たちの痕跡が多いことが明らかである。

幸い、この地域にある大成町貝取洞2洞窟遺跡を、平成2～7年（1990～1995年）にかけ発掘調査する機会を得た。この調査から、興味深い結果を得ることができた。洞窟の形成は縄文海進最盛期に求められるが、この洞窟は標高約14mの位置にあり、他の洞窟やノッチ（海岸にのこされた海食痕）などと比較しても約10mも高所にある。この洞窟を人が利用しはじめたのが紀元前後ころであり、洞窟が形成されてから数千年の間に、約10mも隆起したまな地帯でもある。また、記憶に新しい南西沖地震（平成5年7月12日）も起こり、奥尻島を含むこの地域は大きな震災にみまわれたことも知られる。この洞窟の堆積した土層を調べると2,000年前ころに、南西沖地震をはるかに越える大地震が発生していたことが明らかになった。すなわち、洞窟の形成以降に、基盤のブロック別な差別的運動および同一ブロック内での傾動運動が発生する地域であった。しかも、洞窟から出土した貝殻を調べると暖かい地域に生息する貝がみられ、地震などの災害を避け温暖な時期（弥生海進期）に利用していたと考えられる。そこから、出土した遺物は縄文時代前半の恵山文化のものであり、シカの肩甲骨を使って占いをを行ったト骨、北海道に生息していないイノシシの牙、鉄で加工した骨角器が出土し、石組み炉の周りではベンガラをつくった跡、貝製平玉（首飾り・腕飾りなどの玉）がつくられたことなど興味深い資料が得られた。貝殻や動物骨などからこの洞窟は、1年をつうじ使用されていたのではなく、狩猟や漁業、貝などの採集を行う時期に洞窟を利用していたことが明らかに

なった。しかも、こどもの歯が出土したことから、家族単位で洞窟におとずれていたことも推測できる。これらは、恵山文化の人たちが季節的に集落から洞窟に訪れ、狩猟・採集活動や装飾品の加工、祭祀などを行っていたと考えられる。また、食料や毛皮の加工も行われていた可能性も考えられる。発掘が実施された茶津洞窟遺跡群などからは、人骨が出土することから埋葬の場としても利用していたことが明らかである。

2 後北文化の洞窟遺跡

統観文時代後半である後北文化の洞窟遺跡は、小樽市手宮洞窟遺跡や余市町フゴッベ洞窟遺跡がある。日本の洞窟遺跡として手宮洞窟の岩面刻画は最も古くから知られており、慶応2年(1866)に洞窟の近くで石切りをしていた石工の長兵衛が発見したとされている。明治時代以降になると、この洞窟は学術的に注目され、そこに描かれていた岩面刻画をめぐって、「神代文字」、「神世の文字」などとされる文字説や、さらに偽物説までだされるなど、さまざまな見解がだされた。例えば明治11年(1878)にはJ.ミルンが岩面刻画を調査して、古代文字との類似を指摘している。また、同年に榎本武揚が東京帝国大学で、この岩面刻画について報告しているなど、世界的に知られるようになった。「手宮古代文字」などといわれるのも、このころの名残である。

その文字説は、昭和25年(1950)にフゴッベ洞窟が発見されるとともに、総合的な学術調査が昭和26年から2カ年間にわたり実施され否定されることとなり、抽象的な絵画であるとされるにいたった。その発掘資料は、昭和43年(1968)北海道百年記念事業事務局に寄贈され、現在は当館に所蔵されている。刊行された『フゴッベ洞窟』(フゴッベ洞窟調査団、1970)を手がかりに、この資料を再検討すると①統観文時代末期～擦文文化期はじめには岩面刻画のほとんどが貝塚で埋もれていたこと、②弥生系土器や鈴谷式土器がみられること、③後北式土器には赤、黒、白の彩色が施されているものがあること、④岩面刻画に彩色を施したベンガラがウバガイなどの殻に付着していたこと、⑤鉄器で加工された骨角器があること、⑥占いで使用した卜骨があること、⑦石器は小型のスクレーパーが多くなること、さらには、⑧岩面刻画を描いたときに使用した可能性がある特

徴的な角斧(シカ角製)や骨斧(クジラ骨)がある。すなわち、フゴッベ洞窟は交流の拠点であり、キャンプサイト的な狩猟・採集活動はもとより、恵山文化期よりも祭祀的な要素が強くなる。さらに、岩面刻画の制作年代については、貝塚の堆積状況や遺物などから1～4世紀ごろの間に描かれたと推測できる。この時期の後北文化は、北はサハリン、東は南千島まで、南は新潟まで分布域を広げる力を持っていた。

3 その後の洞窟遺跡

オホーツク文化期や擦文文化期の洞窟遺跡は、統観文時代に比べその数は少なくなる。日本海側ではフゴッベ洞窟をはじめ、神恵内村観音洞穴1・2号、浜益村岡島洞窟、稚内市抜海岩陰、オホーツク海側では羅臼町オタフク岩洞窟などがある。その中でもフゴッベ洞窟は、擦文文化のはじめころも利用されていた。しかも、旭川市博物館に所蔵されている河野コレクションには、フゴッベ洞窟採集のオホーツク式土器があり、昭和46年(1971)の発掘に際して出土した円頭大刀、方頭大刀などとともに7世紀の安倍臣比羅夫の遠征による肅慎征討(『日本書紀』斉明紀)との関連も考えられる。

オホーツク文化や擦文文化の洞窟遺跡は、墓あるいは捕獲した動物の解体にともなう送り場的な場所としての要素が強くなると考えられる。それらの状況を示す洞窟遺跡としては、オタフク岩洞窟がある。この洞窟からは6体のヒグマの頭骨が集められ、その頭頂部に穿孔した状態で発見されている。アイヌ文化に見られる「送り儀礼」に類似するもので、擦文文化期にすでに存在していたとされている。また、擦文文化のトビニタイ期にあたる人骨(墓)や銚先、釣針などの骨角器が各時期をつうじ出土している。

アイヌ文化の洞窟遺跡の調査例は少ないが、千歳市美富岩陰遺跡がある。ここにはヒグマの頭骨が13体分が集められ、その頭頂部に穿孔した状態で発見されている。その他にも、焚き火の跡やクマの糞、カンジキ、陶器なども発見されている。このようにアイヌ文化期になると洞窟遺跡は、送り場あるいは儀礼・信仰的な場として定着していったと考えられる。洞窟遺跡は、アイヌ語の「アフルバル」、すなわち「あの世の入口」という伝説や信仰につながっていったのかもしれない。

過去2,000年の古環境と人とのかかわり

添田雄二／赤松守雄

人類が誕生して以降、その主な活動の舞台は中緯度から低緯度の沿岸地域と言われ、しかも、そのような場所で高度な人間社会を構築してきた背景には、環境変動が大きな要因であったと考えられている。日本列島は中緯度地域に位置し、旧石器文化はもとより縄文文化期以降の遺跡が多数発見されている。この日本列島に強い影響を与えてきた自然的要因としては、モンスーン変動と対馬暖流の脈動があげられる。特に、地球上で最大の海流「黒潮」から分岐する対馬暖流は、島国である日本列島とそこに生活する人々に大きな影響を与えてきた。

約1万年前、氷河期が終わり、地球は徐々に温暖な環境へ移行し始めると、極地の氷が融水となって海へ流出したため、地球規模で海水準の上昇（海進）がおこった。これにより、約9,000年前には対馬暖流が本格的に日本海へ流入し始めた。北海道各地に残されている自然貝殻層の分布や貝塚の構成種を検討した結果、対馬暖流は、約7,500年前に津軽海峡および日本海沿いの石狩低地帯北部域、利尻島、礼文島に到達し、オホーツク海沿いに南下したことが明らかとなった。さらに、この暖流は知床岬を通過して、根室湾から根室半島あるいは国後水道を通過して太平洋側に流出し、約6,900年前には北海道東部の釧路に到達した。この温暖化にともなう海面の

急激な上昇によって、沿岸部の低地には海水が進入した。なかでも石狩低地帯北部域では、現海岸線から約17km離れた地点まで海水が進入し、5kmほど内陸の地点では、約7,000年前のヒゲクジラの骨（写真-1）が発見されている。

約6,000～5,500年前になると、現在より3～4℃気温が上昇し、縄文海進最盛期を迎えた。その結果、海面が現在より約3m上昇し、沿岸部の各低地には内湾のような環境が広がった。マガキをはじめとする温暖水系貝類（現在、北海道より南に生息している貝類）は、この頃に北海道全域まで分布を拡げていたとされている（札幌市は現在の秋田市付近、釧路市は青森市付近の気温となった）。

一方、北海道各地の沿岸では、高海面による波浪浸食がおこり、岩壁に洞窟（海食洞）の原形が形成された。このような、縄文時代の高海水準期とその後の地震などの崩落によって形成された洞窟は、やがて人々の生活の場の場として利用されることとなった。

また、対馬暖流の流入は、氷河期に乾燥していた日本列島に雪や雨といった水資源をもたらし、温暖湿潤な気候のもと、「木の実」という食料を有する落葉広葉樹林を分布させることとなった。



写真1 ヒゲクジラ頭骨



写真2 稚内市声間川の自然貝殻層

この対馬暖流は約1,800年周期の強勢期を持つことが、日本海海底堆積物を用いた微細藻類（珪藻）分析や北海道周辺における約1万年前以降（完新世）の貝類群集解析によって明らかにされている。

縄文時代がはじまった約2,300年前は、対馬暖流の強勢期にあたり温暖な環境が広がっていた。この温暖期は「弥生温暖期」または「弥生海進期」と呼ばれ、当時の北海道の沿岸には、マガキやウネナシトマヤガイといった、温暖水系種貝類が生息していたことが明らかにされている。稚内市の声間川沿いに分布する自然貝殻層（写真-2）や大成町貝取取洞2洞窟遺跡およびサハリン南部の鈴谷北貝塚から出土した貝類やその炭素年代値から、当時の海面は現在より約1.5～2 m上昇していたこと、陸上域における年平均気温が現在より約2℃高温であったことが明らかにされている。この時期に本州で展開されていた弥生文化が農耕を主体としていた背景には、温暖な環境のもとで稲の収穫が十分にできたことが指摘されている。さらに、福井県の湖沼堆積物から得られた詳細な古環境復元からも、一時的な寒冷期をはさむものの約2,000年～1,600年前は温暖期であったとされている。また、泊村掘株神社遺跡中の旧汀線堆積物（波食台）からは、6世紀前後が海進期に相当することが報告されている。

近年、北海道とサハリンのオホーツク海沿岸域において、貝塚や自然貝殻層の古環境解析、海底や海跡湖周辺の堆積物を用いた珪藻分析などが行われた結果、平安海進期（8世紀と10世紀）の存在が明らか

かにされた。この時期は、本州以南はもちろん、世界的に温暖であったことが知られ、ヨーロッパでは中世温暖期（Medieval Warm Period）と呼ばれている。また、10世紀以降の環境については、サロマ湖西部（低地）の堆積物を用いた珪藻分析から、12～14世紀末の海退期、14世紀末～16世紀末の海進期、16世紀末以降の海退期の存在が確認されている。このうち、15～16世紀の海進期に相当するものとして、サロマ湖東部キムアネツ崎の堆積物からマガキが産出している。さらに、オホーツク海沿岸域に温かい水塊を運んでくる宗谷暖流が、16世紀前後に活発に脈動していたことが同海知床沖20kmの海底堆積物による珪藻分析から明らかになっている。この後に訪れた海退期（寒冷期）は、「江戸の海退」と呼ばれ、この影響によって各地で凶作が続き、天明や天保の大飢饉がおこったとされている。また、北海道では、松前藩の圧政に対してシャクシャインを中心とするアイヌ民族の戦い（1669年）がおこり、この戦いの遠因として、寒冷期と火山災害（駒ヶ岳、有珠山、樽前山の噴火による大量の降灰）による自然環境の悪化があげられている。この時期は、小氷期（Little Ice Age）と呼ばれ、ヨーロッパを中心に世界的に寒冷であったことが知られている。

このように、日本列島における完新世の環境変動は、約1,800年周期による対馬暖流の強弱とその間におこる数十年～数百年オーダーの環境変化が重要な要素となっている。それは人々の生活はもちろん、当時、各地で展開されていた文化の画期にも大きな影響を与えていたと思われる。



写真3 根室半島に分布する湖沼での地質調査

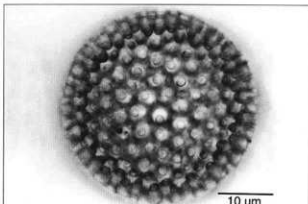


写真4 珪藻類（海生種）

縄文時代に利用された植物

山田悟郎

1 水稲稲作圏外の北海道

津軽海峡に面した上磯町の沖積低地上に、恵山文化期の下添山遺跡がある。恵山文化期の遺跡の多くが海岸線沿いの台地や砂丘上に位置するなかで、下添山遺跡だけは内陸の沖積地を流れる、添山古川の旧河道に囲まれた微高地上に位置した遺跡である。水稲稲作が可能な沖積地に立地した恵山文化期の遺跡が他にないことから、1991年に北海道教育委員会によって遺跡の範囲確認を含めた試掘調査が行われた。調査にあたり、北限の弥生水田である青森県垂柳遺跡や田舎館遺跡を発掘した青森市教育委員会の遠藤正夫氏、プラントオバール研究の第一人者である宮崎大学の藤原宏志氏などが招かれ、水田跡の確認調査や土壌試料を採取してのプラントオバール分析や花粉分析が行われたが、水田につながる資料を得ることはできなかった。

最新の統計資料では、青森市の年平均気温が9.6℃、津軽海峡を隔てた函館市の年平均気温が8.3℃で、年平均気温で1.3℃の違いが見られる。ちなみに、札幌市の年平均気温が8.0℃で函館市と札幌市では0.3℃の違いしか見られない。津軽海峡を挟んだ両岸での1.3℃という年平均気温差が、縄文時代の人々が北海道で水稲稲作に挑戦するにあたっての大きな障害となった可能性が高い。こうして、稲作農耕を基盤とした本州以南の弥生文化とは異なった、縄文文化と呼ばれる非稲作文化が形成され、本州以南とは異なった歩みが始まったのである。

2 縄文文化期に利用された植物

縄文時代の25遺跡から、表に示した植物遺体の出土が報告されている。その内訳は野生植物22種類、栽培植物6種類とクッキー状炭化物1種類の29種類である。22種類の野生植物は、オニグルミ、クリ、コナラ亜属のドングリ、トチノキ、ヒシ属などの堅果皮や子葉と、キハダ、ブドウ属、マタビ属、サクラ属、ミズキ、ホウノキ、クワ、キイチゴ属、ヘ

ビイチゴ属、ガマズミ属、ガンコウラン、ニワトコ属、ウルシ属等の果実に含まれる種子、タデ属、アカザ属、タラノキ属、ササ属等の種子で、栽培植物はヒエ属、ゴボウ、アサ、オオムギ、コメ、ソバなどの穎果や種子、花粉である。なおクッキー状炭化物は植物質が主となったものであるが、その成分は不明である。

出土した野生の堅果類や果実等の種子すべてが縄文時代に既に利用が確認されていたもので、縄文時代になって新たに食料として組み入れられたものはみられず、野生植物の利用状況は縄文時代とほぼ同様であったものと考えられる。

オニグルミの子葉からは脂肪、クリ、トチノキ、コナラ亜属のドングリ、ヒシ属の子葉や、ササ属の穎果からは澱粉、キハダやヤマブドウなどの果実からはビタミンと糖分が摂取できる。タラノキ属（タラノキ・ウド）についてはその新芽と根茎部を利用していただけと推定される。

利用法が不明なのは、縄文時代の遺跡からも数多くの出土例が報告されているニワトコ属、ウルシ属、アカザ属、タデ属である。ただ、アイヌ民族がニワトコ属の果実を薬用に、アカザ属、タデ属の種子を食用として利用した記載があるが、ウルシ属の種子については利用法が不明である。

ヒエ属、ゴボウ、アサ、ソバは縄文時代から既に北海道に存在し、ヒエ属は縄文時代早期から、ソバは縄文時代前期末から中期初頭にかけて、ゴボウとアサは縄文時代後期から利用されていた。縄文時代になって新たに出現したのがオオムギとコメで、オオムギは後半期になってから、コメについては末期の遺跡から出現しはじめ、北海道にも徐々に栽培された穀物の利用が浸透してきたことを示すものとなっている。ソバは縄文時代前期末頃頃から出現し始めるが、縄文時代に入ってから出土遺跡数の増加がみられる。ただ、ソバを含めた栽培植物の出土

が確認された遺跡は、内陸での恵山式土器の分布北限であった石狩低地帯以南にとどまり、その北に栽培植物が進出するのは縄文時代中期以降まで待たねばならない。非稲作文化であった北海道ではあったが、道南から道央にかけて徐々に農耕文化の影響が浸透しはじめていた様子が伺える。

3 貝取調2 洞窟遺跡から出土した植物遺体

1990～1995年にかけて5回の発掘調査が行われた、縄文時代恵山文化期の大成町貝取調2 洞窟遺跡は、貝層から貝製平玉などの微細な遺物が出土する可能性が強いことから、掘りあげた土壌は現地ですりかけられ、見逃された人工・自然遺物が採取された。篩の目をくぐった土壌は館に持ち帰られフローテーション作業を行い、さらに微細な遺物も採取された。結果として表に示したようにオニグルミの堅果皮やキハダの種子など12種類の野生植物の堅果皮や種子と栽培植物であるゴボウの種子が検出されたのである。

これまでに縄文時代から縄文時代にかけての数多くの貝塚や洞窟遺跡の発掘調査が行われてきたが、動物遺体(貝・魚骨・哺乳動物骨)については綿密な調査研究がなされてきたものの、植物遺体につい

ては目に触れやすいオニグルミなどの大型植物遺体についてその出土が報告される程度であった。微細な植物遺体についてはあまり省みられず、わずかに利尻富士町役場前遺跡、泊村茶津貝塚などで、貝(骨)層から採取した土壌のフローテーション作業によって得られた植物遺体の出土が報告されていただけであった。

一方、貝取調2 洞窟遺跡の貝層から検出された12種類の植物のなかで、オニグルミの堅果皮は脂肪に富んだ子葉を食用するにあたって生じた残滓、キハダ、ブドウ属、マタタビ属、クワ、ヘビイチゴ属、ガズミ属種子については果実を食用するにあたって生じた残滓である。タラノキ属(ウド・タラノキ)については、遺跡周囲に分布していたものの新芽や茎部が利用されたであろうと推定できるが、ニトコ属、ウルシ属、タデ属、アカザ属については植物のどの部位が利用されていたのかは不明である。タラノキ属を除けば夏から秋にかけて成熟する堅果や果実が洞窟内で利用されていたことを示している。

栽培種であるゴボウについては、種子は薬用として、葉や根茎は食用できる植物であるが、当時どのように利用されていたかは不明である。

番 号	遺 跡 名	時 代	遺 跡 類	野 生 植 物												栽 培 植 物			
				オニグルミ堅果皮	オニグルミ堅果	コナラ堅果	ヒシバ堅果	アザミ堅果	クワ堅果	ヘビイチゴ堅果	ガズミ種子	タラノキ種子	ニトコ	ウルシ	タデ	アカザ	ゴボウ種子	アサギ	アサギ
1	奥町尾内内遺跡	恵山文化期	遺物包含層	○															
2	上磯町下流山遺跡	恵山文化期	遺物包含層	○															
3	奥町町東端山遺跡	恵山文化期	遺物包含層	○															
4	上磯町改築遺跡	恵山文化期	住居跡・土壌	○															
5	白根町アサギ遺跡	恵山文化期	遺物包含層	○															
6	上磯町大川4遺跡	恵山文化期	焼土	○															
7	上磯町長力川遺跡	恵山文化期	遺物包含層	○															
8	神楽町南川遺跡	恵山文化期	住居跡	○															
9	伊達山南有線4遺跡	恵山文化期	住居	○															
10	伊達山モヤマ遺跡	恵山文化期	溝状遺構	○															
11	宮小牧町アサギ遺跡	恵山文化期	土壌	○															
12	札幌市137遺跡(佐々木内)	恵山文化期	住居跡・焼土・土壌	○															
13	札幌市1117遺跡	恵山文化期	焼土・炭化物集中	○															
14	札幌市137遺跡(支那館内)	恵山文化期	住居跡	○															
15	Asa町山根山遺跡	恵山文化期	住居	○															
16	江別町(野)大遺跡	恵山～後北文化期	低地遺物包含層	○															
17	江別町(野)中1遺跡	後北文化期	遺物包含層	○															
18	札幌市(野)13遺跡	後北文化期	遺物包含層	○															
19	札幌市(野)13遺跡	後北文化期	焼土・土壌	○															
20	小樽市(野)13遺跡	後北文化期	土壌	○															
21	北見市(野)13遺跡	後北文化期	土壌	○															
22	余市町(野)13遺跡	後北文化期	遺物包含層	○															
23	札幌市(野)13遺跡第2次調査	後北文化期	埋没中庭	○															
24	利尻富士町役場遺跡	縄文文化期	住居跡	○															
25	札幌市(野)13遺跡	縄文文化期	焼土	○															

植物遺体の出土一覧

フゴッペ洞窟の岩面刻画

乾 芳宏／浅野敏昭

(余市水産博物館・学芸員／余市水産博物館・学芸員)

1 フゴッペ村の丸山

フゴッペ洞窟は北海道西部根干半島の基部、余市町栄町(旧字名は眷部村)にある標高30m弱の独立丘の東面に開口する洞窟で、昭和26年(1951)に発見されるまでは、付近の農家による客土によって洞窟上端の土砂が取り去られて開口した小さな穴が開いているだけであった。その独立丘は「丸山」、アイヌ語では「小さなこぶ」という意味のポントコンボと呼ばれ、かつては背後の山並みと連続した舌状の突端部であったと思われるが、明治37年(1904)の鉄道敷設工事の際に切り通され、完全な独立丘となった。もっとも明治12年(1879)の「余市郡略図」を見れば、丸山は独立丘のごとく表現されており、背後の山並みとの連なりは低いものであったものと思われる。

2 旧フゴッペ彫刻

昭和2年(1927)10月、既に開通していた国鉄函館本線の保線工事による土砂除去の作業中、丸山南側岩壁に9点の刻画と「彫刻せる人面」が発見され、「旧フゴッペ彫刻」或いは「眷部古代文字」と呼ばれた。刻画の点数については発見当初は10点が確認されたとの記録もある。それらは昭和8年(1933)刊行の『余市町郷土誌』によれば、岩壁に「十字を印」し、小樽市手宮洞窟の「古代文字と同一系統」かどうかは不明であるが、手宮の刻画は「曲線形」であり、フゴッペのそれは「直線形なるも稍曲線なるもの三字を含む」ものであると紹介された。

3 フゴッペ洞窟の発見

昭和25年(1950)の夏、当時札幌市内の中학생であった大塚誠之助氏が小樽市蘭島にキャンプに来ていた合間にこの丸山を訪れた。兄の以和雄氏から旧フゴッペ彫刻を見ることを勧められてのことであった。少年が「古代文字」を見た際、丸山中腹に高さ30cm程の小さな穴が開いているのを認め、付近で土器片を採集、兄にそのことを伝えた。兄は所属して

いた札幌南高等学校郷土研究部の活動として顧問であった島田善造氏の指導の下、同年8～10月までの週末を利用して洞窟入口の発掘を行った。しかし、高校生による発掘作業を進めることに不安を感じた島田氏は、北海道大学助教授の名取武光氏に相談、翌昭和26年(1951)から、2次にわたる発掘調査が名取武光氏を団長とするフゴッペ洞窟調査団が編成され行われた。その後、昭和28年(1953)11月14日付で国の史跡指定を受け、木造の覆屋による保護措置が講じられたが、約20年を経過した頃には冬季の凍結等による刻画の劣化が懸念されたため、最初の保存調査事業が昭和43年(1968)に開始された。洞窟内部の環境調査や地質調査などを行ない、昭和46年(1971)の第2次発掘調査を経て、翌年、ガラス越しに刻画を観察できるカプセル方式を採用した新保存施設が完成した。新保存施設は踏査の結果から、洞窟を外部環境から遮断し内部温度を一定に保つことにより湿度も安定させることを目指した画期的な施設であった。しかし1970年代半ばから、壁面に緑色微生物が繁殖し、また内部への水の浸入が顕著となり、刻画の劣化が懸念されたため、平成10年(1998)から施設の改修工事を視野に入れた第2次保存調査事業が開始された。現在も継続中の保存調査事業に伴い、平成13年(2001)に遺跡の広がりを確認するためのトレンチ調査が丸山周囲で行なわれ、また平成14年(2002)には、増築する部分の発掘調査が実施され現在に至っている。

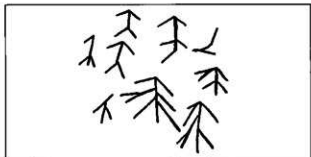


図1 旧フゴッペ彫刻(フゴッペ洞窟調査団、1970)

4 フゴッペ洞窟の発掘調査

フゴッペ洞窟は過去に洞窟内の発掘調査が2回、前庭部の発掘調査が1回、最近では史跡整備に伴って2回の周辺発掘調査を実施している。昭和28年(1958)のフゴッペ洞窟発掘調査により、明治以降続いていた手宮洞窟にある岩面彫刻の真贋論争については、考古学的資料であるとの決着となり、両遺跡は縄文時代の貴重な遺跡であることが判明した。

この洞窟の発見を契機に、積丹半島の洞窟遺跡は注目を浴び、小樽市博物館や大学などが主体となって照岸、茶津洞窟などの発掘調査が行われたが、刻面の発見には至らなかった。

昭和46年(1981)の発掘調査は洞窟の前庭部分であることから洞窟との関係を知る上で重要であった。

洞窟の使用年代は縄文時代の後北B～C₂・D式ころとされていたが、古骨と思われる鹿の肩甲骨が後北A式とともに出土したことは大きな成果であり、また7世紀代の墓坑も新たに発見されている。

2001(平成13)年の発掘調査は史跡整備に伴うもので丸山周辺に12ヶ所の1.5m×10mのトレンチを設定した。そのほとんどは縄文時代終末から縄文時代初頭と思われる北大式に相当するもので、焼土が数ヶ所確認されている。

2002(平成14)年の発掘調査はガイダンス施設建設のための敷地を対象としたものである。

標高約4mから2.6mまでの砂丘の調査となり、出土遺物はわずかに後北C式土器が見られたが、その大半は周辺調査と同様に縄文時代終末から縄文時代初頭の北大式と呼ばれる時期であり、径1mほどの焼土が20ヶ所ほど確認された。

5 フゴッペ洞窟についての疑問点

数回に及ぶ調査例から洞窟について改めて基本的な疑問点について記したい。

この岩面刻画はいつ、誰が、何処に居住し、どのような道具を使って、何の目的で残されたものなのかという疑問は年齢を問わず誰もが抱くものである。「いつ」の年代であるかは1953年の発掘調査時に刻画の研究のみに固執して発掘調査が進められると、洞窟の崩壊は避けられないとの団長の見解から壁際を基底まで発掘しなかったことが今日まで尾を引い

ている理由であるが、現状では後北A式まで遡る可能性があると留めておきたい。「誰が」については、小樽・余市のみの発見例であることから、北方から来た海洋民説も考えられるが、遺物の分析からはその可能性が低く、在地の後北人が主体となっていたと考えたい。

「何処に居住していたのか」については周辺および前庭部調査からその痕跡は確認されていない。おそらく縄文時代前半は洞窟前までは波打ち際であり、居住に適していない可能性がある。「どのような道具で彫刻をしたのか」については当時の社会として鉄器、石器、骨角器などがある。特に鹿角・鯨骨を加工した斧は特徴的であるが、一つの道具のみに限定せず岩質によって選択していることも考えられる。

「何の目的で彫刻されたのか」については発掘当初から今日まで最大の課題である。この刻画全体が、一時に彫刻されたものか、長期に渡って彫刻されたものかも解決されず、大陸との類例も判然としていないが、刻画を見ると多くは人物を表現したもので有角・有翼人、舟、シャチまたはクジラのような動物、列点などが見られることから狩猟の場面や呪術的な要素が含まれた構成であると理解されるが、色々な分野との総合的調査が必要であり、今まきに行われている現状である。

不思議なことに発掘調査は解明の糸口になるはずであるが、また新たな疑問点が浮上するのであり、フゴッペ洞窟人が私たちに残したメッセージを未来永劫、果たして理解できるのか興味津々である。

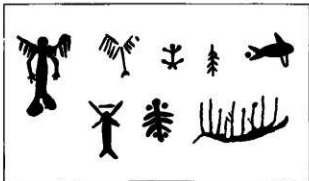


図2 フゴッペ洞窟岩面刻画(峰山, 1983)

(参考文献)

- 峰山 巖 1983『謎の刻画フゴッペ洞窟』
フゴッペ洞窟調査団編 1970『フゴッペ洞窟』

世界の岩面刻画とフゴッペ洞窟・岩面刻画

小川 勝

(専門教育大学・助教授)

余市町フゴッペ洞窟・岩面刻画は、美術作品としては、先史岩面画（Prehistoric Rock Art）というジャンルに属する。わが国では、1866年に発見された小樽市の手宮洞窟と、このフゴッペ洞窟の2遺跡においてしか本格的な先史岩面画が認められていない。しかし、先史岩面画は世界各地に分布しているきわめて普遍的な美術ジャンルのひとつである。それが日本においては、かろうじて北海道釧路半島の東端部に二つ見いだせるというよいだろう。北海道以外の日本列島においては、本州西部、南西諸島や小笠原諸島などを含めて先史岩面画が発見されているが、それらはいずれも断片的であり、今後のより詳しい調査・研究が望まれる。



先史岩面画のひとつである洞窟壁画は人類が作り出した最も古い美術ジャンルであり、1994年に南フランスで発見されたショーヴェ洞窟の壁画からは、科学的年代測定で現在より32,000年前に制作されたというデータが出ている。洞窟壁画の中ではフランスのラスコー洞窟やスペインのアルタミラ洞窟など有名だが、それらは写実的な動物像などの表現から、美術の長い歴史においてもきわめてすぐれた美術作品であると認められている^(註1)。フゴッペ洞窟・手宮洞窟もラスコー洞窟・アルタミラ洞窟につながる先史岩面画であり、人類のはるかな旅の足跡が、北海道にも残されているのである。

そもそも先史岩面画とは、自然の岩面を平面にならすことなく、凹凸や亀裂をそのままにした場所に、着色したり刻みつけたりした美術作品であり、例えば高松塚古墳の壁画のような人工的に作られた墳墓の壁画とは空間的特質が異なり、自然の要素がより強いといえるだろう。制作した人々も、より自然に近い生活をしてきたと考えられ、木村重信（大阪大学名誉教授）は、先史岩面画は、狩猟採集民や牧畜民など、定住せず移動しながら生活していた人々に

よるものであると考えている^(註2)。フゴッペ洞窟・岩面刻画を制作した人々が、一体どのような生活をしてきたのか、なかなか難しい問題だが、より自然に近い移動民だったということが議論の出発点になるのではないだろうか。

先史岩面画は、鍾乳洞の奥深く、暗黒の閉じられた場所に制作されている洞窟壁画以外は、岩陰や露天の岩塊に制作されていることが多く、その保存条件は必ずしも良好とはいえない。何千年もの間、風雨にさらされ風化し、温度差から破損し、また、その芸術的価値が認められない場合は、人為的にも破壊されたことだろう。それゆえ、世界各地でも、比較的保存がよい作品は、現在では人間が住みにくい乾燥化した地帯にあることが多く、日本のような湿润で人口密度の高い地域では、先史岩面画は残りにくいとも考えられる。手宮洞窟の場合、岩面が比較的硬く、制作以降ほとんど露出していたとしても、ゆるやかに風化しつづければ現状程度には保存されたのだろう。フゴッペ洞窟はもともと脆弱な水中火砕岩の岩面に制作されているが、数百年後には貝塚などを含む堆積物に埋没して、わずか50年前に発見された時には、その世界的にもシャープな造形がほぼ制作当時のまま新鮮なカタチが残っていたのである。



さて、フゴッペ洞窟・岩面刻画の真価を正しく理解するためには、作品を制作するための技法を知る必要があるだろう。手宮洞窟においては、上で述べたとおり、硬い岩質のためベッキング（敲打法）という、岩面を敲いて表面を剥離させ、その連続で練やかたちを作り上げていく方法だけが用いられている。これは硬い岩面に対して石器で刻みつける世界的にも普通の方法であり、北東アジアのシベリアなどでもよく見いだされる技法である。

一方、フゴッペ洞窟の柔らかい岩質に対して制作者たちが独自に工夫した技法がアプレイジョン（削

磨法)である。これは、岩面を鋭利な道具で切りつけて、えぐり取り、削り取った面を更に道具で磨き上げて、意図するかたちにする方法である。アブレイジョンによるかたちはきわめてシャープな輪郭線をもち、力強く輝いているかのようである。

もう一つ、フゴッペ洞窟・岩面刻画が世界的に注目されるのは、表現されている内容であり、私自身の調査・研究により、全画像800弱のうち90パーセント以上が人物像であると考えている。これほど人物像が集中的に制作されている先史岩面画遺跡は世界にもあまりなく、そのことを重視してフゴッペ洞窟・岩面刻画の制作動機や意味内容も考えなければならぬだろう。そもそも、先史美術は文字を記録として用いなかった人々が作ったものであり、一体何が表されているのか知るのとはとても難しいが、かえってそうだからこそ、かつて手宮洞窟に対して論じられた古代文字説をはじめとして、多くの人々による様々な独自の解釈が試みられてきたのだろう。



北東アジアの先史岩面刻画を調べても、フゴッペ洞窟・手宮洞窟の人物像に似ている作品はなく、わずかに数例だけある舟の表現が、大陸との関連性を物語っているようである。さらに、フゴッペ洞窟には数十の小さな穴が穿たれている部分があり、これらを盃状穴と見なすと、世界中に類似があることから、フゴッペ洞窟の性格を考えるためのひとつの鍵となるだろう。ただし、盃状穴の制作動機や意味内容は、それぞれの地域ごとに様々であり、何か特定できるものがあるわけではない。

ただ、盃状穴が何らかのお祭りや儀礼と関わるのは確かであり、フゴッペ洞窟・手宮洞窟も似たような役割を担っていたのだろう。そのような場所で、人物像が集中的に表現されているということは、どういう意味を持つのだろうか。もともと、洞窟壁画をはじめとして、先史岩面画の制作動機として、動

物などを多く狩猟するための呪術説が一般的であり、フゴッペ洞窟・手宮洞窟に関しても、これまで呪術説が有力だったようである。一方、近年、呪術説を発展させたシャーマニズム説が洞窟壁画をはじめとする世界の先史岩面画に関して提起されていて、注目を浴びているところである(註3)。シャーマニズムとは、本来シベリアで見出された、超越物との交感者に関わる概念であり、それが世界中の類例に適用されたものである。それゆえ、シベリアに近いフゴッペ洞窟・手宮洞窟についても、シャーマニズムは真剣に検討されるべきテーマといえるだろう。

ただし、先史岩面画の解釈は、きわめて困難であり、これが正解というものを見いだすのは簡単ではない。しかし、フゴッペ洞窟・手宮洞窟は2,000年近い歳月を隔てて、現在の私たちのもとに再び現れた奇跡のような存在であり、その真の姿を探求するのは、それを受け継いだ私たちの責務といえる。その際、いうまでもないことだろうが、フゴッペ洞窟・手宮洞窟・岩面刻画の制作年代や世界の先史岩面画における位置づけを前提にして、厳格な議論を展開すべきである。

〈註〉

- 註1：『アルタミラ洞窟壁画』、A.ベルトラン監修、大高保二郎・小川勝訳、岩波書店、2000年。
 註2：例えば、『民族芸術学：その方法序説』、木村重信編著、日本放送出版協会、1986年、14～20ページを参照。
 註3：『Les Chamanes de la Préhistoire: Transe et Magie dans les Grottes Ornées』、J.Clottes et D.Lewis-Williams, Seuil, Paris, 1996.

洞窟遺跡に見る縄文文化以降の諸文化

—アイヌ文化形成論の視点から—

菊地徹夫

(早稲田大学・教授)

北海道の洞窟遺跡といえば、まずは手宮・フゴッペということになろう。他に類例を見ない、謎めいた岩面刻画をもつ洞窟遺跡だ。それから礼文華小幌洞窟、私が学生の時に初めて参加した思い出かい遺跡だ。石附喜三男さんとよく話題にした神恵内観音洞窟。浦坂周一さんが掘った羅臼オタフク岩も面白い。大場利夫氏は、昭和42年(1967)、「北海道地方の洞穴遺跡」(日本考古学協会洞窟遺跡調査特別委員会『日本の洞窟遺跡』所収)で、道内の洞穴遺跡の分布図を掲げ、網走市大曲以下その時まで知られていた都合35カ所を示し、そのいくつかについて概観された。そして、縄文期では「住居の遺構」のほか、貝塚、埋葬人骨を伴うものが多く、縄文文化期でも「住居」や貝塚を伴うが、そのうち恵山式期では貝塚に埋葬人骨を伴うのに対し、前北式・後北式文化ではこれが見られない。つまり、「恵山式文化の人々は洞穴を墳墓とし、前北式ないし後北式文化の人々は洞穴を祭場として」利用したが、フゴッペこそそうした「祭祀の場所」の好例であり、また、縄文文化期については縄文期と同様に考えられるが資料不足で明確には言えない、と書かれている。こうした大場氏の見とおしは、35年を経た今も妥当だろうか。

まずは虻田郡豊浦町字礼文華の小幌洞窟。ここは昭和36年(1961)夏に、大場利夫、峰山巖、竹田輝雄氏らによって発掘が行われ、その結果は北大解剖教室調査団の名で『北方文化研究報告代18輯』(1963)に掲載されている。この時ちょうど学部2年だった私は、夏休みに参加させていただいた。小幌は、今なお「秘境」断然1位、洞窟(礼文華岩屋)までの崖道も名だたる難所で、マニアの間で有名だが、当時は外界と隔離された小幌の入り口に面して、漁師の福沢さんのお宅が一軒あり、我々はその間に泊めていただいて発掘を行った。開口部に近いA地点と奥壁沿いのB地点の2カ所にトレンチが設けられた。両地点とも比較的上層に土器や北大式や

擦文土器が、下層に恵山式が多かった。A地点では全体的に擦文土器が、B地点では古手の恵山式土器が卓越していた。恵山式はその早期つまり二枚橋並行期から後期つまり南川IV群ぐらまでの型が、ほぼ層位的に認められた。この洞窟では、いずれもB地点で人骨が計7個体分出土しているが、この調査時に発見された人骨は第4号人骨1体で、北西頭位の仰臥屈葬であった。これらは恵山期の埋葬人骨とみてよい。

積丹半島から渡島半島西海岸にかけての沿岸一帯には、成人、幼児の人骨を出土した泊村茶津洞窟群、照岸洞窟、共和村発足岩陰、それに4個体分の人骨の出土した島牧村栄磯など、多くは縄文後・晩期から縄文末期、とくに恵山式を主とし、後北式や擦文式をわずかに伴う海蝕洞窟遺跡が多いようだ。北海道開拓記念館が1990年以来発掘調査を続けた大成町の貝取洞2洞窟でも、やはり恵山式中・後期(南川Ⅲ～Ⅳ群)を中心とする時期の遺物が出土し、貝製平玉や鉄器を用いた骨角器製作の跡が認められたという。乳歯が2本検出されたというから、ここにも埋葬人骨のあることは確かだろう。

同じ縄文文化でも、後北式系文化を主とする洞窟遺跡としては、やはり小樽の手宮洞窟と余市のフゴッペ洞窟ということになろう。これら二つの洞窟の岩面刻画は、この地域に本拠を持ちながら、非定住的で移動性に富み、北はサハリンから南は新潟まで勢力圏を広げていた後北式系縄文文化のものである。岩壁刻画のモチーフのほとんどは人物像であることから、よくいわれるように、ユーラシア各地に見られるような狩猟儀礼に伴うものではなく、シャーマニズム的祭祀や祖霊崇拝にまつわる、この地域特有の歴史の所産であろう。この岩壁のモチーフは擦文文化を経て後のアイヌ文化のイトクバヤシロシへと継承されると私は考えている。フゴッペの付近からはオホツク系土器や大刀なども出土していて、7世紀の阿倍比羅夫による北征の記録なども

想起される。縄文文化では、横丹半島の西側、神恵内村の観音洞窟がある。最も多くを占める縄文土器は層位的に時期区分でき、下層には統縄文土器が、最上層には中世陶器や近世アイヌの遺物などがある。縄文期以降の離頭結も多数出土し型式分類が試みられ、アイヌのキテの系統論が論じられている。

北海道の洞窟遺跡は、一方、オホーツク文化の分布域、道東の知床半島沿岸に集中する。羅臼町のオタフク岩洞窟では下層から統縄文、オホーツク、トビニタイ、縄文、およびアイヌの各文化層が認められ、6個体分の穿孔されたヒグマの頭骨の集積が見られた。アイヌのクマ送りを彷彿させるこの例を「縄文文化のクマ送り」の証拠と主張する向きもあるが、これは共伴したとされる土器の特徴や時期・地域から言って、やはり、いわば「縄文文化」された時期のオホーツク系の人々に帰すべきものであろう。つまり、このクマ送り遺構は、時期的にはもちろん縄文期のものということではできようが、「縄文文化本来の伝統」ではなかろう。オホーツク系土器の文化は道東ばかりではない。稚内市抜海や、日本海岸浜益村岡島洞窟などからも出土している。

千歳市美笛、これは洞窟というより岩陰だが、やはり穿孔されたヒグマの頭骨13個などが並べられた状態で、11本のイナウなどの祭具とともに発見されている。ヒグマには成獣も含まれ、明らかにアイヌの山猟にかかわるクマ送りの跡だが、20世紀前葉ごろのものだろうという。

北海道の洞窟遺跡は、縄文後・晩期以降、統縄文期、とくに恵山式期に圧倒的に多く利用されている。洞窟は居住というよりは、漁労・狩猟・採集などの拠点、あるいは種々の工作・作業などの場として季節的に利用された。また貝層の形成および多くの場合人骨を伴うことから、墓葬を含む広い意味での送り場的な色彩が強いように思われる。洞窟や岩陰は、一般的な堅穴住居などと違い極めて限定されたものだから、日常的な施設としてではなく、より限定的で特殊な行為の場として利用されたのだろう。

後北式期には、洞窟の非日常的な特殊目的での利用の傾向はむしろ強まった。手宮・フゴッペ洞窟を見ても、岩面刻画など一般的な生活の場としての利用は考えにくい。しかし、それは恵山式期までのよ

うに、縄文的な送りの場というよりは、むしろ、地域共同体、部族共同体全体に関わる祖霊崇拜的な、シャーマニスティックな儀礼の行われた神聖な場だったのではないか。手宮・フゴッペ洞窟こそは、まさにこの日本海沿岸で石狩河口を間近に控え、手宮は高島岬、フゴッペはシリバ岬というそれぞれ明確なランドマークをもつ景観の中、特殊な歴史地理的背景の中に存在したものであろう。したがって、たとえば浜益近辺、岩内、寿都、瀬棚、奥尻、上ノ国、さらには津軽海峡を越えて、十三澳周辺（市浦・鯉ヶ沢）男鹿半島周辺、烏山山麓、それに佐渡・弥彦周辺などに、こうした岩面刻画の存在する可能性は皆無ではない。

オホーツク文化の洞窟でも、やはり定住というよりは移動性の高いキャンプなどでの利用が考えられる。オタフク岩のクマ送りの跡は、オホーツク文化の堅穴住居によくみられる家屋内祭祀としての骨塚の変形した姿であり、また後のアイヌ文化のイオマンテとも無関係ではありえず、だから美笛のイワクテとも思想的には結びつくであろう。これに対し、観音洞窟に見る縄文文化の様相は、縄文文化の堅穴住居集落と同様、いわば極めて日常生活的であり、観念的傾向はあまり感じられない。

要するに、洞窟遺跡という場を通して見ると、①縄文後・晩期、恵山文化の、埋葬人骨を含む貝塚的モノ送りの思想、②後北式・縄文文化と受け継がれるシャーマニズムと祖霊祭祀（そこでは火が特別の意味を持ったであろう）、③オホーツク文化のクマ送り儀礼の伝統、の3つが識別できそうである。これらは後のアイヌ民族の精神文化にどうつながって行くのだろう。アイヌ文化の中核とされるイオマンテのような送りの思想は、当然①と③に関係するであろう。とくにオホーツク文化からは狩猟儀礼やトーテムの要素も受け継いだであろう。そして②からは、アイヌのアベフチカムイの観念などが導かれるのではないか。アイヌの言い伝えでは、洞窟はあの世の入口という。非日常という点で暗示的である。

近世アイヌ文化の形成という観点からは、もちろんこれらの他に、本州からのヤマト＝シャモ系文化の直接・間接の影響もあろう。そういえば小幌洞窟（礼文華厳屋洞窟）には円空仏があった。

I 恵山文化と洞窟遺跡

北海道西南部の海岸域では、縄文時代の前半（2,300年前～2世紀ころ）の洞窟遺跡が37カ所発見されている。この地域に分布する洞窟遺跡は、縄文海進最盛期（約6,000～5,500年前）の時期に形成された海食洞である。洞窟を利用した人たちは恵山文化を担った人びとであり、狩猟・採集活動、墓、儀礼的な場として季節的に訪れ使用していた。これらの背景には、弥生海進期とよばれる温暖な気候であったことも知られている。

恵山文化の大成町貝取洞2洞窟遺跡では、シカの肩甲骨を使って占いをおこなった卜骨、北海道に生息していないイノシシの牙、鉄で加工した骨角器が出土し、石組み炉の周りやペンガラがつくられていたこと、貝製平玉（首飾り・腕飾りなどの玉）をつくっていたことなど、洞窟内での生活状況を知ることができる。



87 大成町貝取洞2洞窟遺跡発掘状況（縄文時代・恵山文化）



88 大成町貝取洞2洞窟遺跡（縄文時代・恵山文化）



89 大成町貝取洞2洞窟遺跡発掘状況（縄文時代・恵山文化）



89 大成町貝取洞2洞窟遺跡発掘状況（縄文時代・恵山文化）

1 2,000年前の地震と洞窟遺跡

洞窟遺跡が多く発見される北海道西部の海岸域は、新第三紀の約500万年前～1千万年前の間に形成されたハイアロクラスタイト（水中火砕岩）が分布する地域である。この地域にある大成町貝取洞2洞窟遺跡の発掘調査では、約2,000年前に大地震が発生していたことが明らかになり、それは南西沖地震をはるかに上まわるものであった。しかも、この洞窟遺跡は標高約14mにあり、ほかの洞窟などからみても約10mも高所にある。人が利用しはじめた紀元前後ころまでの数千年の間に隆起したことがわかる。この地域では基盤のブロック別な差別的運動および同一ブロック内での傾動運動が発生したことによるものであり、恵山文化の人のびとは地震にみまわれることなく、弥生海進期の温暖な時期に洞窟を利用していたと考えられる。



30 大成町貝取洞2洞窟遺跡の南西沖地震での崩落状況



30 大成町貝取洞2洞窟遺跡の南西沖地震での崩落状況



29 大成町貝取洞2洞窟遺跡土層判ざと目（結構文時代・恵山文化）

2 洞窟を利用した縄文人

洞窟遺跡からは、埋葬された縄文時代の人骨が出土することがある。これらの人骨は、洞窟内の岩壁際に埋葬する例が多くみられ、特に洞窟の利用が多かった恵山文化の人たちの骨が発見されている。人骨は、泊村茶津4号洞穴遺跡などで発見され、縄文人ゆずりの特徴をかねそなえた低く膨りの深い顔立ちであった。その特徴をそなえた伊達市南有珠7遺跡出土の人骨は、恵山文化の壮年の男性で保存状態の良いものである。また、噴火湾沿岸域の豊浦町礼文華貝塚からは、渡来系弥生人と縄文人の特徴を合わせもつ人骨が発見されているものの、縄文人の形質を受け継いでいる人たちであったと考えられる。



32 恵山文化人の頭骨 伊達市南有珠7遺跡（縄文時代・恵山文化）
札幌医科大学医学部解剖学第二講座所蔵



33 恵山文化人の乳歯 大成町貝取層2洞窟遺跡（縄文時代・恵山文化）



89 大成町貝取層2洞窟遺跡発掘状況（シカ下顎骨の出土）



89 大成町貝取層2洞窟遺跡発掘状況（石器で加工された、括弧と土器の出土）

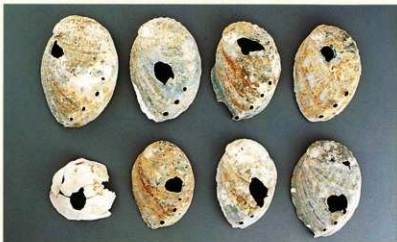
3 洞窟で営まれた生業

海岸線沿いに分布する恵山文化の遺跡には貝塚が伴うことが多い。そこからシカやヒグマなどの陸獣骨、オットセイやクジラ類などの海獣類、各種魚骨、貝類やウニ類が出土するとともに、銚先や釣り針などの骨角器、擬似餌と推定されている石器も出土し、陸や海での狩猟・漁労が活発に行われていたことがうかがわれる。

貝取洞2洞窟遺跡からもシカやヒグマ、タヌキ、ウサギ等の陸獣骨、アシカやオットセイ、クジラ類などの海獣骨、ソイ、ニシン、タラ、カレイ類などの魚骨と、アワビやイガイなどの岩礁性の貝類やキタムラサキウニなどが発掘され、洞窟をベースに狩猟・漁労活動が活発に行われていた様子がうかがえる。また、出土した植物遺体は、堅果類や果実類の採集活動も行われていたことも示すものである。



36-44 骨角器 (36骨製銚先・37骨角器未製品・38骨製刺突器・39骨製釣針・40アワビの骨製釣針・41骨製針・42骨製裝飾品・43イノシシの牙・44骨製道具 (クジラ骨))
大成町貝取洞2洞窟遺跡 (縄文時代・恵山文化)



45 ヤスで突かれた貝殻 (アワビ、ベンケイガイ) 大成町貝取洞2洞窟遺跡 (縄文時代・恵山文化)



89 ゴザ状織物の出土状況
大成町貝取洞2洞窟遺跡 (縄文時代・恵山文化)

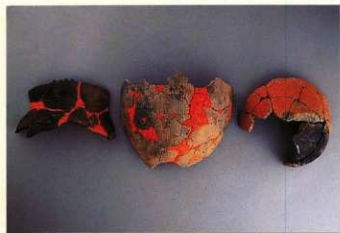
4 洞窟遺跡で発見された遺物

縄文の人たちは、一年中洞窟で生活していたわけではなく、食料獲得のため洞窟を使用しながら狩猟や漁労、さらに貝類や堅果類や果実類などを採集していたと考えられる。それは、洞窟遺跡から出土する土器や石器、骨角器、さらに貝殻や動物の骨、炭化物などからうかがえる。

また、洞窟遺跡からは、狩猟や漁労などを占った卜骨や埋葬された人骨も発見される。朱色をしたベンガラや貝製平玉などの装飾品、石器、骨角器なども洞窟内でつくられていた。しかし、洞窟内では、土器をつくることはなかった。洞窟を使用した人びとは、その前浜でシカ肉や魚、貝などの食料を加工し、母村である集落に運んでいたのかもしれない。



91-95 石器 (91石錐・92スクレイパー・93ナイフ・94台石・95石斧)
大成町貝取遺跡2洞窟遺跡(縄文時代・恵山文化)



96 恵山式土器片 大成町貝取遺跡2洞窟遺跡(縄文時代・恵山文化)



99 卜骨 大成町貝取遺跡2洞窟遺跡(縄文時代・恵山文化)



98 恵山式土器 鳥牧村チャラングチャシ(縄文時代・恵山文化)
鳥牧村教育委員会所蔵



97 鳥牧村栄礎岩陰遺跡 鳥牧村栄礎岩陰遺跡(縄文時代中期~縄文時代・恵山文化)



101・102・104 石器(101ナイフ・102石鏃・104スクレイパー)
鳥牧村栄礎岩陰遺跡(縄文時代・恵山文化)
鳥牧村教育委員会所蔵



25・26 貝輪(25ペンケイガイ・26ユキノカワ)
鳥牧村栄礎岩陰遺跡(縄文時代晩期)
鳥牧村教育委員会所蔵



12・13・16・19・23・105・108・109 骨角器(12骨製針・13骨製刺突器・
16骨製刺突器・19骨製の針鈎・23骨製の針軸・105骨製針・106
骨製刺突器・109骨製針)
鳥牧村栄礎岩陰遺跡(縄文時代中期~縄文時代)
鳥牧村教育委員会所蔵



16・20・24・106・110 骨角器・骨製装飾品(16骨製装飾
品・20ヘラ状骨角器・24骨製装飾品・106ヘラ状骨
角器・110骨製装飾品(カワツノ))
鳥牧村栄礎岩陰遺跡(縄文時代・恵山文化)
鳥牧村教育委員会所蔵



15・22・107 骨製箭先 鳥牧村栄礎岩陰遺跡(縄文時代中期・晩期・
縄文時代・恵山文化) 鳥牧村教育委員会所蔵



14 骨製槍先 鳥牧村栄礎岩陰遺跡
(縄文時代中期) 鳥牧村教育委員会所蔵



111 豊浦町小根川窟遺跡（遠景）（縄文時代・恵山文化）



111 豊浦町小根川窟遺跡（近景）（縄文時代・恵山文化）



112 恵山式土器 豊浦町小根川窟遺跡
（縄文時代・恵山文化）北海道大学文学部所蔵



112 恵山式土器 豊浦町小根川窟遺跡
（縄文時代・恵山文化）北海道大学文学部所蔵



112 恵山式土器 豊浦町小根川窟遺跡
（縄文時代・恵山文化）北海道大学文学部所蔵



123 骨角器 豊浦町小根川窟遺跡（縄文時代・恵山文化）北海道大学文学部所蔵



113 弓 豊浦町小根川窟遺跡
（縄文時代・恵山文化）
北海道大学文学部所蔵



125 泊村茶津2号洞穴遺跡 (縄文時代・恵山文化)



127 泊村茶津4号洞穴遺跡 (縄文時代・恵山文化)



132 横丹町美田阿庭遺跡群 (遺厩) (縄文時代)



132 横丹町美田1号穴遺跡 (近景) (縄文時代)



129-131 骨角器 (129骨製括先・130骨製刺突部・131骨角器未製品)
泊村茶津2号洞穴遺跡 (縄文時代・恵山文化) 小樽市博物館所蔵



128 恵山式土器 泊村茶津4号洞穴遺跡 (縄文時代・恵山文化) 小樽市博物館所蔵



133-139 土器・石器 (133恵山式土器片・134石鏃・135ナイフ・136削片石器・137つまみ付ナイフ・138スクレイパー・139石斧) 横丹町美田1号穴遺跡 (縄文時代・恵山文化) 小樽市博物館所蔵



140 縄文の集落模型（縄文時代・恵山文化）国立歴史民俗博物館所蔵

集落では、食事の準備がおこなわれている。当時は、弥生海進期とよばれる温暖な気候で、背後の森林には木の実や動物たちが生息し、川や海には貝や魚など自然の恵みが豊富であったと考えられる。



□ 竪穴住居のようす

縄文時代前半、恵山文化の住居。

寒い冬を乗り越えるため半地下式の住居をつくり、寒気が室内にはいらないように長い入口をつくる工夫がみられる。



□ 埋葬を行っている恵山文化人



141 恵山式土器 瀬棚町南川遺跡 (結縄文時代・恵山文化)



141 恵山式土器 瀬棚町南川遺跡 (結縄文時代・恵山文化)



141 恵山式土器 瀬棚町南川遺跡 (結縄文時代・恵山文化)



141 恵山式土器 瀬棚町南川遺跡 (結縄文時代・恵山文化)



142-146 石器 (142石錐・143石製裝飾品・144ナイフ・145石紡・146石輪)
瀬棚町南川遺跡 (結縄文時代・恵山文化)



149 恵山式土器 七飯町長万川日遺跡 (結縄文時代・恵山文化)



149 恵山式土器
七飯町長万川日遺跡
(結縄文時代・恵山文化)



149 恵山式土器 七飯町長万川日遺跡
(結縄文時代・恵山文化)



149 恵山式土器 七飯町長万川日遺跡 (結縄文時代・恵山文化)



148 恵山式土器
恵山町曹湊漁業協同組合前遺跡
(結縄文時代・恵山文化)



147 恵山式土器 森町森川町貝塚
(結縄文時代・恵山文化)



148 恵山式土器 恵山町曹湊漁業協同組合前遺跡
(結縄文時代・恵山文化)



148 恵山式土器 恵山町曹湊漁業協同組合前遺跡
(結縄文時代・恵山文化)

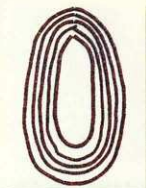
5 貝製平玉と琥珀製平玉

縄文時代前半の北海道では、石狩低地帯を境に南西部域と北東部域で土器に地域差がみられる。南西部に中心を持つ恵山文化と、北東部に中心を持つ宇津内・下田ノ沢文化に大きく分かれる。

この時期の装飾品として代表的なのが貝製平玉と琥珀製平玉である。琥珀製平玉は、余市町大川遺跡、江別市元江別1遺跡、同日豊平川河畔遺跡、芦別市滝里遺跡、常呂町常呂川河口遺跡、美幌町元町3遺跡などから千点をこえる単位で出土し、宇津内・下田ノ沢文化や恵山文化にもみられる。一方、エゾタマキガイを材料とした小形の貝製平玉は、恵山文化や本州の弥生文化にも見られるものである。この時期、北の琥珀製玉と南の貝製平玉という異なった文化の流れがみられる。



163 琥珀製平玉 余市町大川遺跡
(縄文時代・恵山文化)
余市町教育委員会所蔵



162 琥珀製平玉 余市町大川遺跡
(縄文時代・恵山文化)
余市町教育委員会所蔵



154-157 貝製品 (154貝製平玉・155貝製平玉半製品・156貝製鼓動品・157貝の破片 (エゾタマキガイ)) 大成町貝取層2 洞窟遺跡 (縄文時代・恵山文化)



158 石鏃 大成町貝取層2 洞窟遺跡 (縄文時代・恵山文化)
159 メノウ割片 大成町貝取層2 洞窟遺跡 (縄文時代・恵山文化)



150 宇津内式土器 羅臼町神町遺跡 (縄文時代)
羅臼町教育委員会所蔵



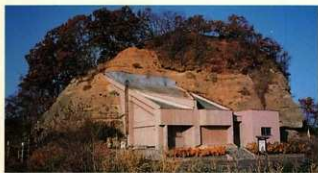
150 宇津内式土器 羅臼町神町遺跡 (縄文時代)
羅臼町教育委員会所蔵



152 下田ノ沢式土器 羅臼町幾田遺跡 (縄文時代)
羅臼町教育委員会所蔵

II 後北文化と洞窟遺跡—岩面刻画の謎—

縄文時代後半である後北文化の洞窟遺跡は、小樽市手宮洞窟遺跡や余市町フゴッベ洞窟遺跡に代表される。日本の洞窟遺跡としても手宮洞窟の岩面刻画は最も古くから知られており慶応2年(1866)に発見され、古代文字説や偽物説までだされた。昭和25年(1950)にフゴッベ洞窟が発見されるとともに総合的な学術調査が昭和26年から2カ年間にわたり実施され、その手宮洞窟の文字説は否定されフゴッベ洞窟の岩面刻画と同様に抽象的な絵画であるとされた。出土した遺物などからフゴッベ洞窟は交流の拠点であり、キャンプサイトのな狩猟・採集活動はもとより祭祀的な意味合いが強いとされている。さらに、岩面刻画の制作年代は貝塚の堆積状況や遺物などから1~4世紀ころのものと考えられる。この時期の後北文化は、北はサハリン、東は千島列島南部まで、南は新潟まで分布を拡げる力を持っていた。しかし、岩面刻画の系譜ははまだ謎につつまれている。



168 余市町フゴッベ洞窟遺跡 (縄文時代・後北文化)



169 余市町フゴッベ洞窟遺跡の岩面刻画 (舟) (縄文時代・後北文化)



169 余市町フゴッベ洞窟遺跡の岩面刻画 (人物像など) (縄文時代・後北文化)



169 余市町フゴッベ洞窟遺跡の岩面刻画 (人物像など) (縄文時代・後北文化)



169 余市町フゴッベ洞窟遺跡の岩面刻画 (人物像など) (縄文時代・後北文化)

1 フゴッペ洞窟と岩面刻画

昭和25年(1950)に発見されたフゴッペ洞窟は、間口6m、奥行7mのハイアロクラスタイト(水中火砕岩)の海蝕洞窟で、発見された翌26年、28年、46年の三度にわたって発掘調査が行われ、貝層、灰層、砂層が互層して洞窟内を埋めるように堆積した約6.5mの遺物包含層中から、縄文時代後半(2~6世紀)の後北式土器、石器、骨角器、獣骨、魚骨、貝類などの豊富な遺物や層位が異なった炉跡が発掘されている。

フゴッペ洞窟を特徴づけたのは、敲打法、削磨法、彫線法、穿孔法で刻まれた約800点におよぶ岩面刻画である。岩面刻画は人物像、動物の仮装をした人物像、舟、四足獣、魚を表したものからなり、狩猟暦、豊猟・豊漁などの祈願をこめて描かれたものと考えられている。描かれた時期については、1~4世紀ごろと考えられる。

この洞窟遺跡は、昭和28年(1952)に国指定史跡となっている。



168 余市町フゴッペ洞窟遺跡の岩面刻画(人物像など)(縄文時代・後北文化)



169 余市町フゴッペ洞窟遺跡の岩面刻画(人物像など)(縄文時代・後北文化)



169 余市町フゴッペ洞窟遺跡の岩面刻画(人物像など)(縄文時代・後北文化)



169 余市町フゴッペ洞窟遺跡の岩面刻画(人物像など)(縄文時代・後北文化)



168 余市町フゴッベ洞窟遺跡の岩面刻画（人物像など）（縄文時代・後北文化）



169 余市町フゴッベ洞窟遺跡の岩面刻画（人物像など）
（縄文時代・後北文化）



190 余市町フゴッベ洞窟遺跡の岩面刻画片（不明刻画）
余市町フゴッベ洞窟遺跡跡南部（縄文時代・後北文化）



169 余市町フゴッベ洞窟遺跡の岩面刻画（人物像など）（縄文時代・後北文化）



173 後北式土器 余市町フゴッペ洞窟遺跡 (結構文時代・後北文化)



173 後北式土器
余市町フゴッペ洞窟遺跡
(結構文時代・後北文化)



173 後北式土器
余市町フゴッペ洞窟遺跡
(結構文時代・後北文化)



173 後北式土器
余市町フゴッペ洞窟遺跡
(結構文時代・後北文化)



173 後北式土器 余市町フゴッペ洞窟遺跡
(結構文時代・後北文化)



173 後北式土器 余市町フゴッペ洞窟遺跡 (結縄文時代・後北文化)



173 後北式土器
余市町フゴッペ洞窟遺跡
(結縄文時代・後北文化)



173 後北式土器
余市町フゴッペ洞窟遺跡
(結縄文時代・後北文化)



173 後北式土器
余市町フゴッペ洞窟遺跡
(結縄文時代・後北文化)



173 後北式土器 余市町フゴッペ洞窟遺跡
(結縄文時代・後北文化)



173 後北式土器
余市町フゴッペ洞窟遺跡
(結縄文時代・後北文化)



173 後北式土器 余市町フゴッペ洞窟遺跡
(結縄文時代・後北文化)



173 後北式土器
余市町フゴッペ洞窟遺跡
(結縄文時代・後北文化)



199 下骨とともに出土した土器（複製） 余市町フゴッペ洞窟遺跡前庭部（続縄文時代・後北文化）



200 下骨（複製）
余市町フゴッペ洞窟遺跡前庭部
（続縄文時代・後北文化）



174 彩色のある後北式土器片 余市町フゴッペ洞窟遺跡 (結縄文時代・後北文化)



198 ベンガラがついた土器 余市町フゴッペ洞窟遺跡 (結縄文時代・後北文化)



177-184 石器 (177石斧・178スクレイパー・179ナイフ・180台石・181くぼみ石・182砥石・183ベンガラがついた鏝・184研ぎ盤) 余市町フゴッペ洞窟遺跡 (結縄文時代・後北文化)



176 北大式土器 余市町フゴッペ洞窟遺跡 (結縄文時代・後北文化)



175 フゴッペ式土器片 余市町フゴッペ洞窟遺跡 (結縄文時代・後北文化)



197 ベンガラがついたウバガイ 余市町フゴッペ洞窟遺跡 (結縄文時代・後北文化)



201-205 石器 (201石斧・202スクレイパー・203ナイフ・204石輪・205石砥) 余市町フゴッペ洞窟遺跡前庭部 (結縄文時代・後北文化) 余市町教育委員会所蔵



185 骨製針先 余市町フゴッペ洞窟遺跡 (結縄文時代・後北文化)



193 角斧・194 骨斧
余市町フゴッペ洞窟遺跡 (結縄文時代・後北文化)



186-188・192 骨角器 (186骨製の針・187骨製弓矢・188骨製括弧・
192骨製の突器) 余市町フゴッペ洞窟遺跡
(結縄文時代・後北文化)



196 ヤスで突かれた貝殻 (アワビ、マガキ) 余市町フゴッペ洞窟遺跡 (結縄文時代・後北文化)



190 骨製の針・191 骨製の針先 余市町フゴッペ洞窟遺跡
(結縄文時代・後北文化)

180 刻線のある骨製の針
余市町フゴッペ洞窟遺跡
(結縄文時代・後北文化)





171 岩面刻面片 余市町フゴッペ洞窟遺跡 (結縄文時代・後北文化)



171 岩面刻面片 余市町フゴッペ洞窟遺跡 (結縄文時代・後北文化)



171 岩面刻面片
余市町フゴッペ洞窟遺跡
(結縄文時代・後北文化)



171 岩面刻面片 余市町フゴッペ洞窟遺跡
(結縄文時代・後北文化)



171 岩面刻面片 余市町フゴッペ洞窟遺跡
(結縄文時代・後北文化)



171 岩面刻面片 余市町フゴッペ洞窟遺跡
(結縄文時代・後北文化)



171 岩面刻面片 余市町フゴッペ洞窟遺跡
(結縄文時代・後北文化)



172 刻面片 余市町フゴッペ (結縄文時代・後北文化(7))
旭川市博物館所蔵



207 後北式土器 共和町免足岩陰遺跡（続縄文時代・後北文化）
小樽市博物館所蔵



211 後北式土器
羅臼町免田遺跡（続縄文時代・後北文化）
羅臼町教育委員会所蔵



209 ラッコ形土器 共和町リヤムナイ遺跡（続縄文時代・後北文化）
小樽市博物館所蔵



210 クマ形土器 共和町免足岩陰遺跡（続縄文時代・後北文化）
小樽市博物館所蔵

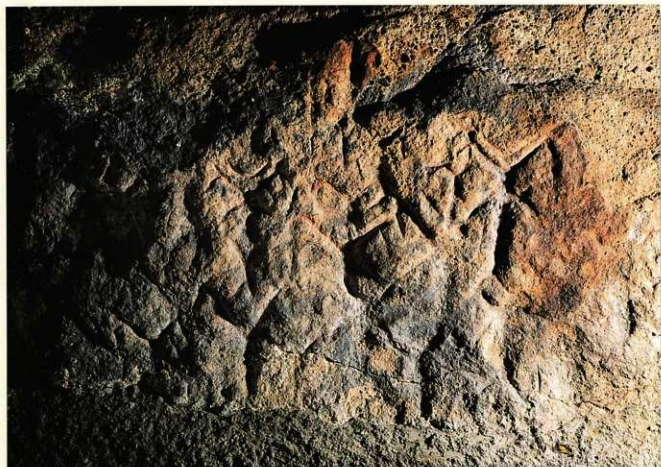


208 北大式土器 共和町免足岩陰遺跡（続縄文時代・後北文化）
小樽市博物館所蔵

2 手宮洞窟の岩面刻画

小樽市手宮洞窟の岩面刻画は、慶応2年（1866）に洞窟の近くで石切りをしていた石工の長兵衛が発見したといわれている。この岩面刻画は、明治13年（1880）にイギリス人のジョン・ミルンがイギリスの学会誌に「ルーン文字説」として発表されてから、さまざまな文字説が報告された。現在、この岩面刻画は後に発見された余市町フゴッペ洞窟の岩面刻画とともに、文字説は否定され信仰的な意味をもつ岩面刻画であるとされている。

この洞窟は平成元～2年（1989～90）に小樽市教育委員会によって発掘調査が行われ、後北式土器とともに刻みの付いた岩片が出土したことから、岩面刻画が描かれた年代は後北C₂・D式土器を使用していたころと考えられている。この洞窟遺跡は、大正10年（1921）に国指定史跡となり、平成7年（1995）にはフゴッペ洞窟に続く全国二番目のカプセル方式の施設が完成し、一般に公開されている。



214 小樽市手宮洞窟遺跡の岩面刻画（縄文時代・後北文化）小樽市教育委員会所蔵



□史跡「手宮洞窟」（一般公開されているカプセル方式の施設）



216 刻画が描かれた陶器 小樽窯（小樽市）
（明治～昭和）



221 河野広道ノート（関拓史の模写） 河野本道氏所蔵



217 刻画が描かれた陶器 北窯（江別市）
（大正～昭和）



221 河野広道ノート（えはがき） 河野本道氏所蔵



219 刻画が描かれた陶器
小樽焼（小樽市）（大正）



216 刻画が描かれた陶器 石狩焼（昭和）

3 岩面刻画のひろがり

日本の岩面刻画は、北海道の余市町フゴッベ洞窟と小樽市手宮洞窟の2ヶ所だけである。これらは、ペトログリフとかロックアートと呼ばれ、世界各地の洞窟や岩壁に先史時代の絵画がのこされている。中でもフランスのラスコー洞窟遺跡や北スペインのアルタミラ洞窟遺跡などの岩面刻画や岩面画が有名である。これらは考古学や人類学はもとより、先史美術の研究の対象となっている。隣接するアジア大陸には、朝鮮半島やバイカル湖周辺域の岩面刻画、アムール川流域のサカチアリャンの岩面刻画、ウスリー川流域のシェルメチュエヴォ、キーヤ、スックバイなどの岩面刻画、オホーツク海北西海岸域マヤ川河岸の岩面刻画、東シベリア海沿岸域のベクティメリ川河岸の岩面刻画などがみられる。しかし、フゴッベ洞窟や手宮洞窟の岩面刻画のもつ意味や、大陸の岩面刻画との関連性についてはいまだ解明されていない。



237 サカチアリャンの岩面刻画 ロシア共和国・サカチアリャン遺跡（新石器時代～鉄器時代）

マスク

トナカイ



238 岩面刻画のひろがり



239 シェルメチュエヴォの岩面刻画 ロシア共和国・シェルメチュエヴォ遺跡（新石器時代～鉄器時代）

舟

マスク



239 キーヤの岩面刻画 ロシア共和国・キーヤ遺跡（新石器時代～鉄器時代）

マスク

マスク

4 北と南の交流

フゴッペ洞窟では後北文化の遺物のほか、サハリンの鈴谷文化の土器や柱状石斧、東北地方の弥生系土器が出土している。これらは3～4世紀のころのもので、北海道全域に後北文化が広がるとともに、北はサハリン、東は千島列島南部、南は新潟まで分布を広げる力を持っていた。また、鈴谷文化の土器や東北地方の弥生系土器は、石狩低地帯に分布する遺跡からも発見されている。

しかも、フゴッペ洞窟では、鉄器で加工された骨角器などがみられることから、これらの文化と接触し鉄器などを入手していたと考えられる。このことからフゴッペ洞窟は、交流の拠点でもあったことがうかがわれる。



243 弥生系土器片 余市町フゴッペ洞窟遺跡 (結構文時代)



241 鈴谷式土器片
余市町フゴッペ洞窟遺跡前庭部
(結構文時代)
余市町教育委員会所蔵



244 鈴谷式土器片
余市町フゴッペ洞窟遺跡
(結構文時代)



242 鈴谷式土器片
千歳市末広遺跡
(結構文時代)
千歳市教育委員会所蔵



246 石斧
余市町フゴッペ洞窟遺跡
(結構文時代)

Ⅲ その後の洞窟遺跡—オホーツク・擦文文化からアイヌ文化—

オホーツク文化や擦文文化の洞窟遺跡は、縄文時代の埋葬や食料獲得を中心とするこれまでの洞窟の利用にかわり、捕獲した動物の送り場の要素が強くなる。それは、集落と動物の解体場をつなぐ中間的な位置に洞窟遺跡が位置づけられる。しかも、大陸や本州との交易の活発化にともない、洞窟遺跡の役割は精神的にも重要な役割を担っていた。オタフク岩洞窟遺跡で発見された6体分のヒグマの頭骨の例は、それを物語るものである。

アイヌ文化の洞窟遺跡では、千歳市美笛岩陰遺跡のヒグマの頭骨が13体分集められ送られた例から、送り場あるいは儀礼・信仰的な場として定着した状態を示している。洞窟遺跡は、アイヌ語の「アフルバル」、すなわち「あの世の入口」という伝説や信仰につながっていったのかもしれない。



264 稚内市我海岩陰遺跡（オホーツク文化・擦文文化期）



□羅臼町マックス洞窟遺跡



264 浜益村同島洞窟遺跡（オホーツク文化・擦文文化期）



□羅臼トビニタイ神社洞窟遺跡



□羅臼町キキリベツ洞窟遺跡



□羅臼町トビニタイ洞窟遺跡

1 北からの文化の波及—オホーツク文化—

オホーツク文化の洞窟遺跡は、知床半島など北海道東部のオホーツク海沿岸域のほか、稚内市^{びろかい}抜海岩陰遺跡や浜益村岡島洞窟遺跡など日本海の海岸域にもみられる。また、利尻島・礼文島はもとより、天売島・焼尻島、さらに奥尻島までオホーツク文化の影響がおよんでいた。

中でも余市町フゴッペ洞窟遺跡で採集されたオホーツク式土器は、北からの影響を示すものであり、その時に洞窟が使用されていたと考えられる。また、フゴッペ洞窟では、縄文文化はじめの遺物や本州産の円頭大刀や方頭大刀などの鉄器が出土している。

これらは、北から南に拡がるオホーツク文化の脈動と南の文化との接触を物語っている。



251 オホーツク式土器 羅臼町オタフク岩洞窟遺跡
(オホーツク文化期) 羅臼町教育委員会所蔵



251 オホーツク式土器
羅臼町オタフク岩洞窟遺跡
(オホーツク文化期)
羅臼町教育委員会所蔵



251 オホーツク式土器
羅臼町オタフク岩洞窟遺跡
(オホーツク文化期)
羅臼町教育委員会所蔵



251 オホーツク式土器 羅臼町オタフク岩洞窟遺跡
(オホーツク文化期) 羅臼町教育委員会所蔵



251 オホーツク式土器
羅臼町オタフク岩洞窟遺跡
(オホーツク文化期)
羅臼町教育委員会所蔵



251 オホーツク式土器
羅臼町オタフク岩洞窟遺跡
(オホーツク文化期)
羅臼町教育委員会所蔵



249 羅臼町オタフク岩洞窟遺跡 (オホーツク文化期)



250 羅臼町オタフク岩洞窟遺跡発掘状況 (オホーツク文化期)



250-261 石器 (255石先・259石錘・257石軸・258ナイフ・259柄鎌車・260スクレイパー・261石斧) 羅臼町オタフク岩洞窟遺跡 (オホーツク文化期)
羅臼町教育委員会所蔵



252-254 骨角器 (252骨製石先・253骨製約針・254骨棒)
羅臼町オタフク岩洞窟遺跡 (オホーツク文化期)
羅臼町教育委員会所蔵



262 オホーツク式土器 余市町フゴッペ洞窟遺跡 (オホーツク文化期) 旭川市博物館所蔵



262 オホーツク式土器 余市町フゴッペ洞窟遺跡 (オホーツク文化期) 旭川市博物館所蔵

2 擦文文化の洞窟遺跡

擦文文化の洞窟遺跡は、神恵内村観音洞窟、浜益村岡島洞窟、羅臼町オタフク岩洞窟、余市町フゴッベ洞窟など海岸域にみられるが、縄縄文時代に比べてその数は少なくなる。これらの洞窟遺跡からは、土器、石器、骨角器などのもとより、埋葬された人骨や貝殻、動物の骨などが出土する。

特に、羅臼町オタフク岩洞窟遺跡では、穿孔されたヒグマの頭骨6体が集積された状態で発見された。その方法は、アイヌ文化の送り儀礼に類似している。このように擦文文化期の洞窟遺跡は、墓あるいは動物の解体にともなう送り場的な役割を担っていたと考えられ、縄縄文時代の洞窟遺跡とはことなつた使われかたをしている。



250 羅臼町オタフク岩洞窟遺跡発掘状況
(オホーツク文化期)
羅臼町教育委員会所蔵



□骨角器の出土状況 羅臼町オタフク岩洞窟遺跡
(擦文文化期) 羅臼町教育委員会所蔵

209-272 骨角器 (269骨製匙先・270骨製弓矢・271骨製刺突器・272骨製計入れ)
羅臼町オタフク岩洞窟遺跡 (擦文文化期) 羅臼町教育委員会所蔵



266 クマの送り場 羅臼町オタフク岩洞窟遺跡（縄文文化期）羅臼町教育委員会所蔵



268 縄文土器 羅臼町オタフク岩洞窟遺跡（縄文文化期）羅臼町教育委員会所蔵



267 縄文土器
羅臼町オタフク岩洞窟遺跡
（縄文文化期）
羅臼町教育委員会所蔵



267 縄文土器
羅臼町オタフク岩洞窟遺跡
（縄文文化期）
羅臼町教育委員会所蔵



267 縄文土器
羅臼町オタフク岩洞窟遺跡
（縄文文化期）
羅臼町教育委員会所蔵



266 土器器片 浜益村岡島洞窟遺跡（縄文文化期）旭川市博物館所蔵



265 縄文土器片 浜益村岡島洞窟遺跡（縄文文化期）旭川市博物館所蔵



□人骨の出土状況 羅臼町オタフク岩洞窟遺跡（トビニタイ期）
羅臼町教育委員会所蔵



274 トビニタイ式土器 羅臼町オタフク岩洞窟
（トビニタイ文化期）羅臼町教育委員会所蔵



273 トビニタイ式土器 羅臼町オタフク岩洞窟遺跡
（トビニタイ期）羅臼町教育委員会所蔵



275-277 石器（275石鏃・276スクレイパー・277石鏟）
羅臼町オタフク岩洞窟遺跡（トビニタイ期）
羅臼町教育委員会所蔵



273 トビニタイ式土器 羅臼町オタフク岩洞窟遺跡
（トビニタイ期）羅臼町教育委員会所蔵



278-283 骨角器（278骨鏃・279骨製銃先・280骨製中柄・281骨製刺突器・282骨製弓筈・283骨製針入れ）
羅臼町オタフク岩洞窟遺跡（トビニタイ期）羅臼町教育委員会所蔵

3 南からの文化の波及

「日本書紀」の斉明紀には律令政府の役人、阿倍臣比羅夫が7世紀に二百艘の船を率いて渡島に遠征した記事があり、北海道と本州の接触を物語っている。比羅夫の船団は、大河の流れこむ海岸で渡島蝦夷と肅慎の争いに遭遇し、渡島蝦夷から助けを求められ肅慎と戦ったとされている。

フゴッベ洞窟前庭部の墓に副葬された円頭大刀や方頭大刀、刀子、鉄鎌は、本州の古墳時代末（7世紀代）のものであり、北海道では例をみないものである。また、フゴッベ洞窟ではオホーツク文化の土器も採集されている。これらは、「日本書紀」の記事にみられる「渡島遠征」を彷彿とさせるものである。



□方頭大刀・円頭大刀の出土状況
余市町フゴッベ洞窟遺跡前庭部（縄文文化期）
伊達市教育委員会所蔵



292 刀子（複製）
余市町フゴッベ洞窟遺跡前庭部
（縄文文化期）

288 方頭大刀（複製）
余市町フゴッベ洞窟遺跡前庭部
（縄文文化期）

290 円頭大刀（複製）
余市町フゴッベ洞窟遺跡前庭部
（縄文文化期）



294 鉄鎌（複製）
余市町フゴッベ洞窟遺跡前庭部
（縄文文化期）

4 アイヌ文化と洞窟遺跡

アイヌの人びとが洞窟（岩陰）を利用した例として、千歳市美笛岩陰遺跡がある。この岩陰を利用した時期は定かではないが、穴ごもりしていたヒグマを3～6月に捕殺し、その頭骨13体を岩陰の開口部に向けた状態で丁重に並べられている。送られたヒグマの年齢は2～24歳と幅が広く、その頭骨の頭頂部には雄は左、雌は右と人為的な穿孔があり、頭骨の中に削りかけを充填したものが2例みられる。この送り場の北西20mの岩陰には、割板を井桁状に組み合わせた小熊用の檻が置かれていた。

この様な例は北海道の各地にみられ、岩陰を信仰的な場として利用していたことがうかがえる。また、アイヌの人びとには、洞窟をあの世の入口という伝説や信仰がある。



307-311 骨角器 (307骨鏃・308骨製忌先・309骨製計入れ・310骨製計・311骨製中柄)
羅臼町オアフク岩洞窟遺跡 (アイヌ文化期) 羅臼町教育委員会所蔵



313 骨角器 (骨製中柄) 豊浦町小幌洞窟遺跡 (アイヌ文化期)
北海道大学文学部所蔵



207 千歳市美笛岩陰遺跡 (アイヌ文化期) 千歳市埋蔵文化財センター所蔵



□クマ送り 千歳市美笛岩陰遺跡 (アイヌ文化期)
千歳市埋蔵文化財センター所蔵

□クマの檻 千歳市美笛岩陰遺跡 (アイヌ文化期)
千歳市埋蔵文化財センター所蔵



299 送られたクマの頭骨 千歳市美笛岩陰遺跡（アイヌ文化期）千歳市教育委員会所蔵



302 木簡
千歳市美笛岩陰遺跡（アイヌ文化期）
千歳市教育委員会所蔵



305 クマの木製箱
千歳市美笛岩陰遺跡（アイヌ文化期）
千歳市教育委員会所蔵



304 縄之徳利
千歳市美笛岩陰遺跡（アイヌ文化期）
千歳市教育委員会所蔵



300 クマの器入れ
301 まな板
千歳市美笛岩陰遺跡（アイヌ文化期）
千歳市教育委員会所蔵



303 カンジキ
千歳市美笛岩陰遺跡（アイヌ文化）
千歳市教育委員会所蔵



306 丸太
千歳市美笛岩陰遺跡（アイヌ文化）
千歳市教育委員会所蔵

IV フゴッペ洞窟と岩面刻画—過去の記録から—

余市町フゴッペ洞窟の発見は昭和25年（1950）8月であり、当時札幌中島中学校3年生であった大塚誠之助氏が発見者であった。翌年、北海道大学人類学研究室の名取武光氏を団長とするフゴッペ洞窟調査団により総合的な学術調査が実施された。その調査団のなかに奥野義扶氏がいた。洞窟の記録を担当した同氏は、写真撮影、岩面刻画の模写、岩面刻画の石膏の複製などの仕事を担っていた。当時、小樽商業大学2年生で日曜日ごとに母校の小樽潮陵高校の中村先生と岩面刻画の計測や模写の作業を行った。昭和27年からは一人での作業になったという。

岩面刻画の模写は、『フゴッペ洞窟』（フゴッペ洞窟調査団、1970）で刊行され、岩面刻画の石膏の複製は、現在、北海道開拓記念館に收藏され活用されている。洞窟が発見された当時の写真は、自宅に大切に保管されていた。同氏は大学卒業後、興味をもっていた生物学（昆虫）や考古学をすっぱりやめ家業の奥野商店を継いだ。昭和44年9月25日に37歳という若さで他界された。

このたび、同氏の母、奥野美重子氏ならびに夫人の奥野淑枝氏の御厚意で、奥野義扶氏が昭和26～29年にかけて撮影した写真を紹介することができることとなった。

□発見当時のフゴッペ洞窟遺跡
（昭和26年ころ）



□フゴッペ洞窟遺跡（南側より）



□発掘調査の着手前



□発掘調査の状況



□発掘調査状況



□発掘調査状況



□遺物の出土状況（土器片）



□遺物の出土状況



□貝塚地層断面



□貝塚地層断面



□岩面刻画（南壁・人物像など）



□具塚地層断面



□岩面刻画（人物像など）



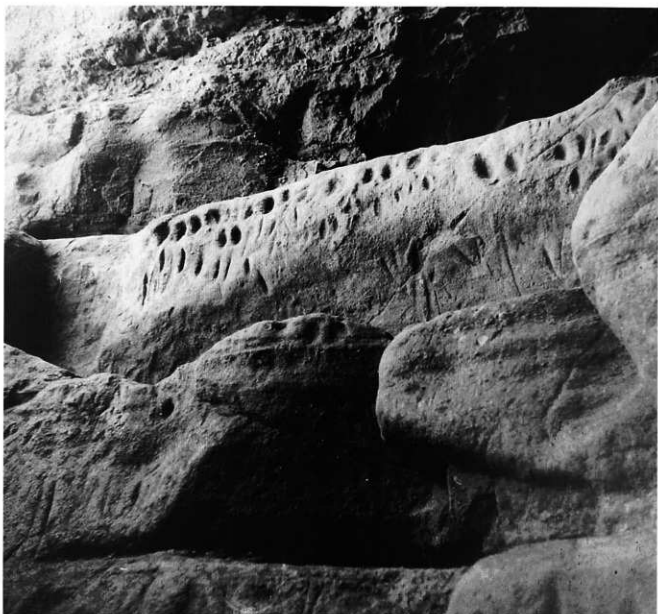
□岩面刻画（南壁・人物像、盃状穴など）



□岩面刻画（舟）



□岩面刻画（人物像）



□岩面刻画（南壁・人物像、盃状穴など）



□岩面刻画（南壁・人物像など）



□岩面刻画（南壁）



□岩面刻画（南壁・人物像など）



□岩面刻画（南壁・人物像など）



□岩面刻画（南壁）



□岩面刻画（南壁）



□岩面刻画（北壁・人物像など）



□岩面刻画（北壁・人物像）



□岩面刻画（北壁）



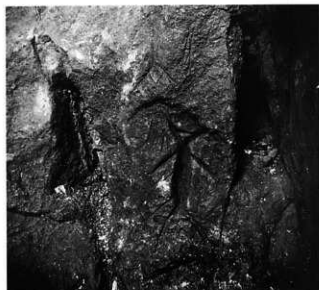
□岩面刻画（北壁・人物像など）



□岩面刻画（北壁・人物像など）



□岩面刻画（南壁・人物像など）



□岩面刻画（南壁・人物像など）



□岩面刻画（南壁・人物像など）



□岩面刻画片（フゴッペ洞窟前庭部）



□岩面刻画片（フゴッペ洞窟遺跡出土・人物像）



□岩面刻画？（フゴッペ洞窟前庭部）



□岩面刻画？



□岩面刻画？（小樽市塩谷麓洞出土）



□岩面刻画？

展示シナリオ

凡例

- 展示は、1 恵山文化と洞窟遺跡、2 後北文化と洞窟遺跡 - 岩間洞窟の謎 -、3 目その後の洞窟遺跡 - オホツツ・横文化からアイヌ文化 - の、3つのテーマで構成されている。
- 遺跡名の洞窟、竈穴、岩陰などについては、原則として北海道教育委員会の環境文化財保護地図資料カードの記載に統一したが、考古学的な遺跡であることを示すため、洞窟、竈穴、岩陰のあとに遺跡をつけて示した。
- 「No.」は、展示の順番であり、実物資料以外の解説パネル、図パネル、写真パネルなど全てに示した。
- 「名称」は、原則として各所蔵機関が使用している資料名にかかわらず統一的に示した。
- 「形態」は、「タイトル」= タイトルパネル、「文字」= 解説パネル、「図」= 図・表パネル、「写真」= 写真パネル、「実物」= 複製、「復元」、「模型」、「造作物」の3種類に区分して示した。
- 「遺跡・地域」は、考古資料が出土した遺跡名および出土した地域を示した。
- 「時代」は、資料の時代、時期、文化を示した。
- 「大きさ」は、資料の計測値をそれぞれに示し、完形土器は器高、他の資料は、最大値を示した。複数の資料については、最小~最大値を示した。単位は、全てcmとした。
- 「所蔵」には、所蔵機関、所有者、写真提供機関、写真提供者などを示した。

No.	名称	形態	数	遺跡・地域	時代	大きさ	所蔵
1	洞窟にあたって	写真	1				
2	大成町日取洞窟2 洞窟遺跡の発掘状況	写真	1	日取洞窟2 洞窟遺跡	縄文時代	縦160.0×横180.0	北海道洞窟協会
3	文化年表	図	1				
4	過去2000年の古墳場と文化	文字	1				
5	行楽館	写真	2				北海道洞窟協会
6	洞窟遺跡の分布図	図	1				北海道洞窟協会
7	北海道の洞窟遺跡	写真	35				北海道洞窟協会
8	内丹土器式土器	実物	2	島牧村雲霧岩陰遺跡	縄文時代中期	高9.10.5-27.7	島牧村教育委員会
9	石皿	実物	1	島牧村雲霧岩陰遺跡	縄文時代中期	縦16.2	島牧村教育委員会
10	石皿	実物	1	島牧村雲霧岩陰遺跡	縄文時代中期	縦14.6	島牧村教育委員会
11	縄文土器	実物	4	島牧村雲霧岩陰遺跡	縄文時代中期	縦8.1-8.5	島牧村教育委員会
12	骨製鉢先	実物	2	島牧村雲霧岩陰遺跡	縄文時代中期	縦7.8-7.9	島牧村教育委員会
13	骨製鉢先	実物	3	島牧村雲霧岩陰遺跡	縄文時代中期	縦2.8-3.6	島牧村教育委員会
14	骨製鉢先	実物	1	島牧村雲霧岩陰遺跡	縄文時代中期	縦33.5	島牧村教育委員会
15	骨製鉢先	実物	3	島牧村雲霧岩陰遺跡	縄文時代中期	縦4.9-7.9	島牧村教育委員会
16	骨製鉢先	実物	2	島牧村雲霧岩陰遺跡	縄文時代中期	縦6.1-6.3	島牧村教育委員会
17	島崎式土器	実物	2	島牧村雲霧岩陰遺跡	縄文時代後期	高3.6.9-7.1	島牧村教育委員会
18	骨製貯け鉢	実物	1	島牧村雲霧岩陰遺跡	縄文時代後期	縦7.8	島牧村教育委員会
19	骨製貯け鉢	実物	1	島牧村雲霧岩陰遺跡	縄文時代後期	縦6.5	島牧村教育委員会
20	へら状骨製土器	実物	1	島牧村雲霧岩陰遺跡	縄文時代後期	高21.6	島牧村教育委員会
21	大崎式土器	実物	1	島牧村雲霧岩陰遺跡	縄文時代後期	高3.20.1	島牧村教育委員会
22	骨製鉢先	実物	1	島牧村雲霧岩陰遺跡	縄文時代後期	縦6.5	島牧村教育委員会
23	骨製貯け鉢	実物	1	島牧村雲霧岩陰遺跡	縄文時代後期	縦9.4	島牧村教育委員会
24	骨製鉢先	実物	1	島牧村雲霧岩陰遺跡	縄文時代後期	縦6.5	島牧村教育委員会
25	貝輪(マンアイガイ)	実物	3	島牧村雲霧岩陰遺跡	縄文時代後期	縦6.7-7.5	島牧村教育委員会
26	貝輪(エネノカヤ)	実物	3	島牧村雲霧岩陰遺跡	縄文時代後期	縦2.9-3.5	島牧村教育委員会
27	1 恵山文化と洞窟遺跡	写真	1				
28	2000年頃の地層と洞窟遺跡	文字	1				
29	大成町日取洞窟2 洞窟遺跡土層断面と地形	実物	1	大成町日取洞窟2 洞窟遺跡	縄文時代	縦122×横320	北海道洞窟協会
30	大成町日取洞窟2 洞窟遺跡の南西沖積層での遺物状況	写真	1	大成町日取洞窟2 洞窟遺跡	縄文時代	縦11.0-1.1	北海道洞窟協会
31	洞窟を利用した縄文文化	文字	1				
32	恵山文化人の顔	実物	1	伊達市南有林7 洞窟遺跡	縄文時代	縦24.6	札幌洞窟文化研究会 洞窟文化研究会
33	恵山文化人の乳歯	実物	2	大成町日取洞窟2 洞窟遺跡	縄文時代	縦1.0-1.1	北海道洞窟協会
34	洞窟で生まれた牛乳	文字	1				
35	シカの骨格標本	実物	1		現代	高8.189.0	北海道洞窟協会
36	骨製鉢先	実物	2	大成町日取洞窟2 洞窟遺跡	縄文時代	縦2.3-3.5	北海道洞窟協会
37	骨角器土製品	実物	1	大成町日取洞窟2 洞窟遺跡	縄文時代	縦3.2	北海道洞窟協会
38	骨製貯け鉢	実物	9	大成町日取洞窟2 洞窟遺跡	縄文時代	縦5.0-19.6	北海道洞窟協会
39	骨製貯け鉢	実物	5	大成町日取洞窟2 洞窟遺跡	縄文時代	縦2.3-3.9	北海道洞窟協会
40	高アツツの骨製貯け鉢	実物	1	大成町日取洞窟2 洞窟遺跡	縄文時代	縦9.0	北海道洞窟協会
41	骨製貯け鉢	実物	1	大成町日取洞窟2 洞窟遺跡	縄文時代	縦3.1	北海道洞窟協会
42	骨製貯け鉢	実物	4	大成町日取洞窟2 洞窟遺跡	縄文時代	縦1.8-6.4	北海道洞窟協会
43	インシツの骨	実物	1	大成町日取洞窟2 洞窟遺跡	縄文時代	縦3.1	北海道洞窟協会
44	骨製貯け鉢(クワツツ)	実物	1	大成町日取洞窟2 洞窟遺跡	縄文時代	縦13.7	北海道洞窟協会
45	ヤムで食われた貝輪(アワビ、ペンタガイ)	実物	2	大成町日取洞窟2 洞窟遺跡	縄文時代	縦4.6.8.1-10.2	北海道洞窟協会
46	魚貝類(1)	実物	1	恵山町	縄文時代	縦16.5	北海道洞窟協会
47	クマシ(骨片)	実物	1	大成町日取洞窟2 洞窟遺跡	縄文時代	縦7.1	北海道洞窟協会
48	クマシ(骨片)	実物	1	大成町日取洞窟2 洞窟遺跡	縄文時代	縦7.7	北海道洞窟協会
49	クマシ(骨片)	実物	1	大成町日取洞窟2 洞窟遺跡	縄文時代	縦16.5	北海道洞窟協会
50	ヒツツ(中手骨)	実物	1	大成町日取洞窟2 洞窟遺跡	縄文時代	縦7.7	北海道洞窟協会
51	ヒツツ(前脚骨)	実物	1	大成町日取洞窟2 洞窟遺跡	縄文時代	縦3.8	北海道洞窟協会
52	オットセイ(骨片)	実物	1	大成町日取洞窟2 洞窟遺跡	縄文時代	縦12.3-18.4	北海道洞窟協会
53	ウサギ(骨片)	実物	1	大成町日取洞窟2 洞窟遺跡	縄文時代	縦9.4	北海道洞窟協会
54	クワツツ	実物	1	大成町日取洞窟2 洞窟遺跡	縄文時代	縦11.2	北海道洞窟協会
55	メソコ(骨片)	実物	1	大成町日取洞窟2 洞窟遺跡	縄文時代	縦12.9	北海道洞窟協会
56	メソコ(足骨)	実物	1	大成町日取洞窟2 洞窟遺跡	縄文時代	縦14.3	北海道洞窟協会
57	メソコ(肋骨)	実物	2	大成町日取洞窟2 洞窟遺跡	縄文時代	縦12.3-18.4	北海道洞窟協会
58	メソコ(肋骨)	実物	1	大成町日取洞窟2 洞窟遺跡	縄文時代	縦9.4	北海道洞窟協会
59	メソコ(肋骨)	実物	1	大成町日取洞窟2 洞窟遺跡	縄文時代	縦1.9	北海道洞窟協会
60	メソコ(足骨)	実物	1	大成町日取洞窟2 洞窟遺跡	縄文時代	縦5.7	北海道洞窟協会

No.	名称	形態	場所・地域	時代	大きさ	所蔵
51	カネ	彫像	大塚町貞取郡2 4回道跡	縄縄文時代		北海道歴史記念館
52	カネ	彫像	大塚町貞取郡2 4回道跡	縄縄文時代		北海道歴史記念館
53	コシホガシガシ	実物	1 大塚町貞取郡2 4回道跡	縄縄文時代		北海道歴史記念館
54	カタムラサキカムの紐(上げ)	実物	1 大塚町貞取郡2 4回道跡	縄縄文時代		北海道歴史記念館
55	カタムラサキカムの紐	実物	1 大塚町貞取郡2 4回道跡	縄縄文時代		北海道歴史記念館
56	カタムラサキカムの紐	実物	1 大塚町貞取郡2 4回道跡	縄縄文時代		北海道歴史記念館
57	鳥打	実物	1 大塚町貞取郡2 4回道跡	縄縄文時代		北海道歴史記念館
58	アイナ	実物	1 大塚町貞取郡2 4回道跡	縄縄文時代		北海道歴史記念館
59	ソウ	実物	1 大塚町貞取郡2 4回道跡	縄縄文時代		北海道歴史記念館
60	ナラ	実物	1 大塚町貞取郡2 4回道跡	縄縄文時代		北海道歴史記念館
61	ホウ	実物	1 大塚町貞取郡2 4回道跡	縄縄文時代		北海道歴史記念館
62	ムシ	実物	1 大塚町貞取郡2 4回道跡	縄縄文時代		北海道歴史記念館
63	ウツ	実物	1 大塚町貞取郡2 4回道跡	縄縄文時代		北海道歴史記念館
64	カネ	実物	1 大塚町貞取郡2 4回道跡	縄縄文時代		北海道歴史記念館
65	マツノヤス	実物	1 大塚町貞取郡2 4回道跡	縄縄文時代		北海道歴史記念館
66	タカ石	実物	3 大塚町貞取郡2 4回道跡	縄縄文時代		北海道歴史記念館
67	タカ石の型	実物	3 大塚町貞取郡2 4回道跡	縄縄文時代		北海道歴史記念館
68	キハダの紐	実物	3 大塚町貞取郡2 4回道跡	縄縄文時代		北海道歴史記念館
69	ブドウの種子	実物	1 大塚町貞取郡2 4回道跡	縄縄文時代		北海道歴史記念館
70	マツタビの種子	実物	1 大塚町貞取郡2 4回道跡	縄縄文時代		北海道歴史記念館
71	タラの種子	実物	1 大塚町貞取郡2 4回道跡	縄縄文時代		北海道歴史記念館
72	ゴボウの種子	実物	1 大塚町貞取郡2 4回道跡	縄縄文時代		北海道歴史記念館
73	トウモロコシ	実物	1 伊達市南台6 道跡	縄縄文時代		北海道歴史記念館
74	藤の種子	実物	1 伊達市ボンマ道跡	縄縄文時代		北海道歴史記念館
75	ブドウの種子	実物	1 伊達市ボンマ道跡	縄縄文時代		北海道歴史記念館
76	ホノキの種子	実物	1 伊達市ボンマ道跡	縄縄文時代		北海道歴史記念館
77	縄で織られた遺物	文字	1			
78	大塚町貞取郡2 4回道跡	写真	2 大塚町貞取郡2 4回道跡	縄縄文時代		北海道歴史記念館
79	大塚町貞取郡2 4回道跡	写真	4 大塚町貞取郡2 4回道跡	縄縄文時代		北海道歴史記念館
80	山土	実物	3 大塚町貞取郡2 4回道跡	縄縄文時代	高さ(8.9~16.4)	北海道歴史記念館
81	石	実物	22 大塚町貞取郡2 4回道跡	縄縄文時代	幅2.3~4.3	北海道歴史記念館
82	スタライバー	実物	1 大塚町貞取郡2 4回道跡	縄縄文時代	幅1.7	北海道歴史記念館
83	ナイフ	実物	6 大塚町貞取郡2 4回道跡	縄縄文時代	幅3.4~6.2	北海道歴史記念館
84	石	実物	2 大塚町貞取郡2 4回道跡	縄縄文時代	幅6.9~10.3	北海道歴史記念館
85	石	実物	1 大塚町貞取郡2 4回道跡	縄縄文時代	幅10.9	北海道歴史記念館
86	トビ(ほっこつ)	実物	1 大塚町貞取郡2 4回道跡	縄縄文時代	幅18.9	北海道歴史記念館
87	鳥打村栗焼石	写真	1 鳥打村栗焼石	縄縄文時代		北海道歴史記念館
88	山土	実物	3 鳥打村チャラントカシ	縄縄文時代	高さ7~16	鳥打村教育委員会
89	石	実物	3 鳥打村チャラントカシ	縄縄文時代	幅3.9~7.5	鳥打村教育委員会
90	ナイフ	実物	2 鳥打村チャラントカシ	縄縄文時代	幅5.6~8.1	鳥打村教育委員会
91	ナイフ	実物	1 鳥打村栗焼石	縄縄文時代	幅1.1	鳥打村教育委員会
92	石	実物	2 鳥打村栗焼石	縄縄文時代	幅2.7~3.6	鳥打村教育委員会
93	石	実物	1 鳥打村チャラントカシ	縄縄文時代	幅7.2	鳥打村教育委員会
94	スタライバー	実物	1 鳥打村栗焼石	縄縄文時代	幅7.7	鳥打村教育委員会
95	骨製	実物	1 鳥打村栗焼石	縄縄文時代	幅10.3	鳥打村教育委員会
96	ヘチ(長竹)	実物	1 鳥打村栗焼石	縄縄文時代	幅19.8	鳥打村教育委員会
97	骨製	実物	2 鳥打村栗焼石	縄縄文時代	幅5.9~7.5	鳥打村教育委員会
98	骨製	実物	2 鳥打村栗焼石	縄縄文時代	幅9.9~13.9	鳥打村教育委員会
99	骨製	実物	1 鳥打村栗焼石	縄縄文時代	幅6.6	鳥打村教育委員会
100	骨製	実物	1 鳥打村栗焼石	縄縄文時代	幅4.4	鳥打村教育委員会
101	骨製	実物	1 鳥打村栗焼石	縄縄文時代	幅24.0~27.3	北海道大学文学部
102	山土	実物	3 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代	幅15.5~30.2	北海道大学文学部
103	石	実物	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代	幅2.6	北海道大学文学部
104	石	実物	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代	幅4.9~8.7	北海道大学文学部
105	ナイフ	実物	6 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代	幅6.2	北海道大学文学部
106	石	実物	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代	幅5.7~7.4	北海道大学文学部
107	石	実物	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代	幅2.2	北海道大学文学部
108	つまみ付ナイフ	実物	2 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代	幅6.5~7.9	北海道大学文学部
109	石	実物	4 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代	幅8.9~13.0	北海道大学文学部
110	石	実物	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代	幅11.8	北海道大学文学部
111	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
112	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
113	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
114	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
115	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
116	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
117	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
118	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
119	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
120	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
121	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
122	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
123	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
124	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
125	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
126	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
127	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
128	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
129	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
130	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
131	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
132	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
133	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
134	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
135	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
136	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
137	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
138	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
139	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
140	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
141	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
142	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
143	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
144	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
145	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
146	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
147	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
148	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
149	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
150	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
151	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
152	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
153	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
154	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部
155	骨角	写真	1 豊浦町小幡貞取	縄縄文時代		北海道大学文学部

国語遺跡を残した被爆文の人びと

No.	名称	形態	数	遺跡・地域	時代	大きさ	所蔵
146	石橋	実物	1	海防町南川遺跡	被爆文時代	高さ4.2	北海道歴史記念館
147	泰山式土器	実物	1	赤井山古墳群	被爆文時代	高さ32.3	北海道歴史記念館
148	泰山式土器	実物	3	赤井山古墳群並岡町合納遺跡	被爆文時代	高さ39.5-27.5	北海道歴史記念館
149	泰山式土器	実物	5	七瀬町万石川遺跡	被爆文時代	高さ4.0-28.5	北海道歴史記念館
150	宇津内式土器	実物	2	藤井町明道遺跡	被爆文時代	高さ5.3-13.5	藤井町教育委員会
151	宇津内式土器	実物	1	藤井町レジャージ川南川遺跡	被爆文時代	高さ40.5	藤井町教育委員会
152	宇津内式土器	実物	1	藤井町徳田遺跡	被爆文時代	高さ21.1	藤井町教育委員会
153	経智平式と被爆製平瓦	文字	1				
154	経智平瓦	実物	16	大城町日取遺跡1副遺跡	被爆文時代	径4.0-0.8	北海道歴史記念館
155	経智平瓦複製品	実物	5	大城町日取遺跡2副遺跡	被爆文時代	径40.4-0.8	北海道歴史記念館
156	経智平瓦複製品	実物	5	大城町日取遺跡2副遺跡	被爆文時代	径1.0-2.4	北海道歴史記念館
157	瓦の破片(エフタナギイ)	実物	20	大城町日取遺跡2副遺跡	被爆文時代	径1.3-1.7	北海道歴史記念館
158	石橋	実物	8	大城町日取遺跡2副遺跡	被爆文時代	径4.0-3.3	北海道歴史記念館
159	メノウ割片	実物	1式	大城町日取遺跡2副遺跡	被爆文時代		北海道歴史記念館
160	被爆製平瓦	実物	1000	戸部市鹿野堂井遺跡	被爆文時代	径6.0	戸部市教育委員会
161	石片	実物	2	戸部市鹿野堂井遺跡	被爆文時代	径13.4	戸部市教育委員会
162	被爆製平瓦	実物	50	赤井山古墳群	被爆文時代		赤井町教育委員会
163	被爆製平瓦	実物	12	赤井山古墳群	被爆文時代		赤井町教育委員会
164	被爆製平瓦	実物	12	新野中河野遺跡	被爆文時代		江刺市教育委員会
165	日高北文化と被爆遺跡-富田町南の遺-						
166	フゴッペ副瓦と竹筒割製	文字	1				
167	余市町フゴッペ副瓦遺跡19号カラ	複製	1	余市町フゴッペ副瓦遺跡	被爆文時代	縦500×横600×高さ300	余市町教育委員会
168	余市町フゴッペ副瓦遺跡	写真	2	余市町フゴッペ副瓦遺跡	被爆文時代		北海道歴史記念館
169	余市町フゴッペ副瓦遺跡の断面複製	写真	8	余市町フゴッペ副瓦遺跡	被爆文時代		北海道歴史記念館
170	余市町フゴッペ副瓦遺跡の断面複製	写真	1	余市町フゴッペ副瓦遺跡	被爆文時代		北海道歴史記念館
171	副瓦割製片	実物	19	余市町フゴッペ副瓦遺跡	被爆文時代	高さ11-65.0	北海道歴史記念館
172	副瓦割製片	実物	1	余市町フゴッペ	被爆文時代(?)	径23.2	旭川市博物館
173	東北式土器	実物	13	余市町フゴッペ副瓦遺跡	被爆文時代	高さ3.8-30.9	北海道歴史記念館
174	彩色のある東北式土器片	実物	20	余市町フゴッペ副瓦遺跡	被爆文時代	高さ2.9-12.8	北海道歴史記念館
175	フゴッペ式土器片	実物	1	余市町フゴッペ副瓦遺跡	被爆文時代	径19.8	北海道歴史記念館
176	東北式土器	実物	1	余市町フゴッペ副瓦遺跡	被爆文時代	高さ14.0	北海道歴史記念館
177	石片	実物	8	余市町フゴッペ副瓦遺跡	被爆文時代	径7.1-12.0	北海道歴史記念館
178	スレイバー	実物	4	余市町フゴッペ副瓦遺跡	被爆文時代	径3.3-4.9	北海道歴史記念館
179	ナイフ	実物	1	余市町フゴッペ副瓦遺跡	被爆文時代	径10.3	北海道歴史記念館
180	竹筒	実物	1	余市町フゴッペ副瓦遺跡	被爆文時代	径18.2	北海道歴史記念館
181	くぼみ石	実物	1	余市町フゴッペ副瓦遺跡	被爆文時代	径12.7	北海道歴史記念館
182	磁石	実物	3	余市町フゴッペ副瓦遺跡	被爆文時代	径16.8-20.9	北海道歴史記念館
183	ペンガラのついた鏡	実物	1	余市町フゴッペ副瓦遺跡	被爆文時代	径19.0	北海道歴史記念館
184	硬幣型	実物	1	余市町フゴッペ副瓦遺跡	被爆文時代	径16.3	北海道歴史記念館
185	竹筒割製片	実物	22	余市町フゴッペ副瓦遺跡	被爆文時代	径4.9-10.1	北海道歴史記念館
186	竹筒割製片	実物	5	余市町フゴッペ副瓦遺跡	被爆文時代	径3.3-12.6	北海道歴史記念館
187	竹筒割製片	実物	3	余市町フゴッペ副瓦遺跡	被爆文時代	径8.1-8.4	北海道歴史記念館
188	竹筒割製片	実物	1	余市町フゴッペ副瓦遺跡	被爆文時代	径5.3	北海道歴史記念館
189	割製のある竹筒割製片	実物	1	余市町フゴッペ副瓦遺跡	被爆文時代	径14.6	北海道歴史記念館
190	竹筒割製片	実物	10	余市町フゴッペ副瓦遺跡	被爆文時代	径7.3-18.7	北海道歴史記念館
191	竹筒割製片	実物	1	余市町フゴッペ副瓦遺跡	被爆文時代	径7.3	北海道歴史記念館
192	香筒割製片	実物	5	余市町フゴッペ副瓦遺跡	被爆文時代	径7.1-21.8	北海道歴史記念館
193	海舟	実物	7	余市町フゴッペ副瓦遺跡	被爆文時代	径8.6-14.8	北海道歴史記念館
194	竹筒	実物	3	余市町フゴッペ副瓦遺跡	被爆文時代	径7.3-15.1	北海道歴史記念館
195	ト行(ぼっこ)	実物	1	余市町フゴッペ副瓦遺跡	被爆文時代	径15.4	北海道歴史記念館
196	ヤスで突かした土器(アソビ、社屋)	実物	3	余市町フゴッペ副瓦遺跡	被爆文時代	径10.0-13.5	北海道歴史記念館
197	ペンガがいた土器(アソビ)	実物	1	余市町フゴッペ副瓦遺跡	被爆文時代	径16.0	北海道歴史記念館
198	ペンガがいた土器	複製	3	余市町フゴッペ副瓦遺跡	被爆文時代	径4.6-9.5	北海道歴史記念館
199	ト行(ぼっこ)とともに出土した土器	複製	2	余市町フゴッペ副瓦遺跡前庭部	被爆文時代	高さ26.5-27.3	北海道歴史記念館
200	ト行(ぼっこ)	複製	2	余市町フゴッペ副瓦遺跡前庭部	被爆文時代	径19.5-23.1	北海道歴史記念館
201	石片	実物	2	余市町フゴッペ副瓦遺跡前庭部	被爆文時代	径5.0-5.5	余市町教育委員会
202	スレイバー	実物	18	余市町フゴッペ副瓦遺跡前庭部	被爆文時代	径1.8-9.3	余市町教育委員会
203	ナイフ	実物	11	余市町フゴッペ副瓦遺跡前庭部	被爆文時代	径2.6-7.2	余市町教育委員会
204	石橋	実物	3	余市町フゴッペ副瓦遺跡前庭部	被爆文時代	径4.8-9.1	余市町教育委員会
205	石橋	実物	6	余市町フゴッペ副瓦遺跡前庭部	被爆文時代	径1.8-3.1	余市町教育委員会
206	高野町発掘土器遺跡	写真	1	高野町発掘土器遺跡	被爆文時代		北海道歴史記念館
207	東北式土器	実物	1	高野町発掘土器遺跡	被爆文時代	高さ24.5	小樽市博物館
208	東北式土器	実物	1	高野町発掘土器遺跡	被爆文時代	高さ28.0	小樽市博物館
209	ラッパ形土器	実物	1	高野町ヤマトイ遺跡	被爆文時代	高さ2.2	小樽市博物館
210	ラッパ形土器	実物	1	高野町発掘土器遺跡	被爆文時代	高さ2.2	小樽市博物館
211	東北式土器	実物	1	高野町発掘土器遺跡	被爆文時代	高さ14.0	藤井町教育委員会
212	子室副瓦の断面複製	文字	1				
213	小樽市子室副瓦遺跡の断面複製	複製	1	小樽市子室副瓦遺跡	被爆文時代	高さ約40×横約110	瀬川町高島自然史会
214	小樽市子室副瓦遺跡の断面複製	写真	1	小樽市子室副瓦遺跡	被爆文時代		小樽市教育委員会
215	小樽市子室副瓦遺跡の断面複製	図	1	小樽市子室副瓦遺跡			
216	朝晩が壊れた陶器	実物	2	小樽市	昭和	高さ1.8-6.4	北海道歴史記念館
217	朝晩が壊れた陶器	実物	2	瓦葺(小樽市)	大正～昭和	高さ7.5-13.0	北海道歴史記念館
218	朝晩が壊れた陶器	実物	1	小樽市(小樽市)	明治～昭和	高さ5.7	北海道歴史記念館
219	朝晩が壊れた陶器	実物	1	小樽市(小樽市)	大正	高さ13.6	北海道歴史記念館
220	朝晩が壊れた陶器	実物	1	小樽市	大正～昭和	高さ16.9	北海道歴史記念館
221	河野氏遺跡 ノート	実物	1式				河野本道氏
222	子室副瓦の土器・粘り(河野常吉氏撮影)	写真	1式				河野本道氏
223	歴史地理 新設巻 第4号	実物	1		大正12年10月1日	縦22cm	河野本道氏
224	寺谷の古代文字	実物	1		大正14年4月18日	縦14.5cm	河野本道氏
225	小樽発掘 下宮古代文字 副発掘図録行状	実物	1		大正15年9月3日	縦17cm	河野本道氏
226	高野町発掘 下宮古代文字 副発掘図録行状	実物	1		昭和13年1月18日	縦22cm	河野本道氏
227	高野町発掘 下宮古代文字 副発掘図録行状	実物	1		昭和13年4月11日	縦22cm	河野本道氏
228	高野町発掘 下宮古代文字 副発掘図録行状	実物	1		昭和13年7月22日	縦16.5cm	河野本道氏
229	小樽発掘 下宮古代文字 副発掘図録行状	実物	1		昭和13年1月10日	縦22.3cm	河野本道氏
230	小樽発掘 下宮古代文字 副発掘図録行状	実物	1		昭和13年8月5日	縦20.5cm	河野本道氏

No.	名称	形態	数	用途・地域	時代	大きさ	所蔵
230	小樽近代文字	実物	1		昭和19年11月	縦25cm	河野本道氏
231	小樽の近代文字	実物	1		昭和19年11月	縦18.6cm	河野本道氏
232	小樽と近代文字	実物	1		昭和23年1月25日	縦18.3cm	河野本道氏
235	定本下野原国志代文字	実物	1		昭和23年4月15日	縦18.5cm	河野本道氏
236	下野原朝のひまわり	刷	1				
237	マカシナシの行商刷	写真	6	ロシア共和国・マカシナシ	新石器時代～鉄器時代		北海道歴史記念館
238	シュムナシの行商刷	写真	6	ロシア共和国・シュムナシ	新石器時代～鉄器時代		北海道歴史記念館
239	モーラの岩画刷	写真	3	ロシア共和国・モーラ	新石器時代～鉄器時代		北海道歴史記念館
240	長と南の交流	文字	1				
241	約谷式土器片	実物	1	余市町ゾゴベ川流域	縄文時代	高さ0.1	余市町教育委員会
242	約谷式土器片	実物	1	千歳市栄定遺跡	縄文時代	縦6.5	千歳市教育委員会
243	約谷式土器片	実物	1	江刺川流域	縄文時代	縦18.2	江刺市教育委員会
244	約谷式土器片	実物	1	余市町ゾゴベ川流域	縄文時代	高さ3.8	北海道歴史記念館
245	赤牛系土器片	実物	15	余市町ゾゴベ川流域	縄文時代	高さ0.5～8.0	北海道歴史記念館
246	石斧	実物	1	余市町ゾゴベ川流域	縄文時代	縦14.4	北海道歴史記念館
247	最古の後の縄文遺跡	写真	1				
248	モロツツ遺文文化からアイヌ文化へ	テキスト	1				
249	北からの文化の流	文字	1				
249	糠川町オホツツ古銅器遺跡	写真	1	糠川町オホツツ古銅器遺跡	オホツツ文化		糠川町教育委員会
250	糠川町オホツツ古銅器遺跡発掘状況	写真	1	糠川町オホツツ古銅器遺跡	オホツツ文化		糠川町教育委員会
251	オホツツ式土器	実物	6	糠川町オホツツ古銅器遺跡	オホツツ文化	高さ16.4～35.0	糠川町教育委員会
252	竹製短刀	実物	2	糠川町オホツツ古銅器遺跡	オホツツ文化	縦8.1～8.4	糠川町教育委員会
253	竹製短刀	実物	3	糠川町オホツツ古銅器遺跡	オホツツ文化	縦8.7～19.7	糠川町教育委員会
254	竹製短刀	実物	1	糠川町オホツツ古銅器遺跡	オホツツ文化	縦35.6	糠川町教育委員会
255	短刀	実物	1	糠川町オホツツ古銅器遺跡	オホツツ文化	縦3.9	糠川町教育委員会
256	石鏃	実物	6	糠川町オホツツ古銅器遺跡	オホツツ文化	縦2.4～3.4	糠川町教育委員会
257	石鏃	実物	1	糠川町オホツツ古銅器遺跡	オホツツ文化	縦4.6	糠川町教育委員会
258	ナイフ	実物	2	糠川町オホツツ古銅器遺跡	オホツツ文化	縦4.8～5.2	糠川町教育委員会
259	短刀	実物	1	糠川町オホツツ古銅器遺跡	オホツツ文化	縦5.3	糠川町教育委員会
260	石斧	実物	2	糠川町オホツツ古銅器遺跡	オホツツ文化	縦11.9～12.5	糠川町教育委員会
262	オホツツ式土器	実物	1	余市町ゾゴベ川流域	オホツツ文化	縦6.8	旭川市博物館
263	オホツツ式土器	実物	3	小樽市北原	オホツツ文化	縦12.1～15.8	旭川市博物館
264	旭川市北原古銅器遺跡	写真	1	旭川市北原古銅器遺跡			北海道歴史記念館
265	縄文文化と銅器遺跡	文字	1				
266	ノラの通り	写真	1	糠川町オホツツ古銅器遺跡	縄文文化	高さ13.8～26.7	糠川町教育委員会
267	縄文土器	実物	3	糠川町オホツツ古銅器遺跡	縄文文化	高さ10.3	糠川町教育委員会
268	縄文土器	実物	1	糠川町オホツツ古銅器遺跡	縄文文化	高さ10.3	糠川町教育委員会
269	竹製短刀	実物	6	糠川町オホツツ古銅器遺跡	縄文文化	縦4.7～6.1	糠川町教育委員会
270	竹製短刀	実物	1	糠川町オホツツ古銅器遺跡	縄文文化	縦6.7	糠川町教育委員会
271	竹製短刀	実物	1	糠川町オホツツ古銅器遺跡	縄文文化	縦6.0	糠川町教育委員会
272	竹製短刀	実物	1	糠川町オホツツ古銅器遺跡	縄文文化	縦7.5	糠川町教育委員会
273	トビニティ式土器	実物	2	糠川町オホツツ古銅器遺跡	トビニティ期	高さ30.8～31.4	糠川町教育委員会
274	トビニティ式土器	実物	5	糠川町オホツツ古銅器遺跡	トビニティ期	高さ19.2～24.5	糠川町教育委員会
275	石鏃	実物	6	糠川町オホツツ古銅器遺跡	トビニティ期	縦2.6～7.4	糠川町教育委員会
276	トビニティ期	実物	3	糠川町オホツツ古銅器遺跡	トビニティ期	縦2.5～6.3	糠川町教育委員会
277	石鏃	実物	1	糠川町オホツツ古銅器遺跡	トビニティ期	縦9.9	糠川町教育委員会
278	竹製短刀	実物	2	糠川町オホツツ古銅器遺跡	トビニティ期	縦13.9～15.8	糠川町教育委員会
279	竹製短刀	実物	1	糠川町オホツツ古銅器遺跡	トビニティ期	縦5.3	糠川町教育委員会
280	竹製短刀	実物	2	糠川町オホツツ古銅器遺跡	トビニティ期	縦10.3～14.2	糠川町教育委員会
281	竹製短刀	実物	3	糠川町オホツツ古銅器遺跡	トビニティ期	縦4.4～5.7	糠川町教育委員会
282	竹製短刀	実物	1	糠川町オホツツ古銅器遺跡	トビニティ期	縦5.2	糠川町教育委員会
283	竹製短刀	実物	9	糠川町オホツツ古銅器遺跡	トビニティ期	縦9.0～14.9	糠川町教育委員会
284	浜島村岡島古銅器遺跡	写真	1	浜島村岡島古銅器遺跡	縄文文化		北海道歴史記念館
285	縄文土器片	実物	8	浜島村岡島古銅器遺跡	縄文文化	縦5.4～11	旭川市博物館
286	土版器片	実物	3	浜島村岡島古銅器遺跡	縄文文化	縦7.5～10.2	旭川市博物館
287	南からの文化の流	文字	1				
288	刀組大刀	複製	1	余市町ゾゴベ川流域	縄文文化	長さ57.8	北海道歴史記念館
289	刀組大刀	複製	1	余市町ゾゴベ川流域	縄文文化	長さ60.7	北海道歴史記念館
290	刀組大刀	複製	1	余市町ゾゴベ川流域	縄文文化	長さ49.7	北海道歴史記念館
291	刀組大刀	複製	1	余市町ゾゴベ川流域	縄文文化	長さ52.5	北海道歴史記念館
292	刀	複製	1	余市町ゾゴベ川流域	縄文文化	長さ17.8	北海道歴史記念館
293	刀組大刀	複製	1	余市町ゾゴベ川流域	縄文文化	長さ35.0	北海道歴史記念館
294	鉄鏃	複製	2	余市町ゾゴベ川流域	縄文文化	縦11.9～12.2	北海道歴史記念館
295	刀組大刀	複製	2	余市町ゾゴベ川流域	縄文文化	縦18.3	北海道歴史記念館
296	アイヌ文化と銅器遺跡	文字	1				
297	千歳市美原古銅器遺跡	写真	3	千歳市美原古銅器遺跡	アイヌ文化		千歳市埋蔵文化財センター
298	千歳市美原古銅器遺跡シラカバ	写作物	1	千歳市美原古銅器遺跡	アイヌ文化		北海道歴史記念館
299	シラカバ	実物	9	千歳市美原古銅器遺跡	アイヌ文化	縦37.5～37.0	千歳市埋蔵文化財センター
300	シラカバ	実物	1	千歳市美原古銅器遺跡	アイヌ文化	縦78.0	千歳市埋蔵文化財センター
301	まな板	実物	2	千歳市美原古銅器遺跡	アイヌ文化	縦58.0～63.5	千歳市埋蔵文化財センター
302	木筒	実物	3	千歳市美原古銅器遺跡	アイヌ文化	縦32.0～47.5	千歳市埋蔵文化財センター
303	カンジキ	実物	1	千歳市美原古銅器遺跡	アイヌ文化	縦46.7	千歳市埋蔵文化財センター
304	杖と短刀	実物	2	千歳市美原古銅器遺跡	アイヌ文化	縦13.7～17.0	千歳市埋蔵文化財センター
305	ツマの本製	実物	1	千歳市美原古銅器遺跡	アイヌ文化	縦140.6、横113.8、高さ63.0	千歳市埋蔵文化財センター
306	丸太	実物	8	千歳市美原古銅器遺跡	アイヌ文化	長さ76.0～161.0	千歳市埋蔵文化財センター
307	竹鏃	実物	2	糠川町オホツツ古銅器遺跡	アイヌ文化	縦7.7～15.8	糠川町教育委員会
308	竹製短刀	実物	6	糠川町オホツツ古銅器遺跡	アイヌ文化	縦4.0～9.9	糠川町教育委員会
309	竹製短刀	実物	1	糠川町オホツツ古銅器遺跡	アイヌ文化	縦5.5	糠川町教育委員会
310	竹製短刀	実物	3	糠川町オホツツ古銅器遺跡	アイヌ文化	縦4.7～7.0	糠川町教育委員会
311	竹製短刀	実物	4	糠川町オホツツ古銅器遺跡	アイヌ文化	縦8.0～11.3	糠川町教育委員会
312	短石	実物	1	糠川町オホツツ古銅器遺跡	アイヌ文化	縦14.8	糠川町教育委員会
313	竹筒	写真	1	糠川町小樽古銅器遺跡	アイヌ文化		北海道大学文学部

□謝 辞

展示会開催にあたり、展示資料の調査、資料借用などで、下記の諸機関ならびに関係諸氏の皆様にご協力、ご指導をいただいた。また、大成町貝取調2洞窟遺跡の発掘調査に際しては、大成町、同教育委員会ならびに調査に参加いただいた方々、さらに文部科学省科学研究費地域連携推進研究費での「フゴッペ洞窟・岩面刻画と文化交流のフィールドステーション作りの基礎研究」を進めるにあたりご協力をいただいた余市町、同教育委員会ならびに関係者の皆様にご協力、ご助言をいただきました。記して厚くお礼申し上げます。

□協力機関/旭川市博物館、芦別市星の降る里百年記念館、江別市教育委員会、江別市郷土資料館、小樽市教育委員会、小樽市博物館、国立歴史民俗博物館、札幌医科大学医学部解剖学第二講座、札幌市埋蔵文化財センター、島牧村教育委員会、大成町、大成町教育委員会、滝川市美術自然史館、千歳市教育委員会、千歳市埋蔵文化財センター、北海道教育委員会、北海道大学文学部北方文化論講座、余市町教育委員会、余市水産博物館、羅臼町教育委員会

□協力者/青野友哉氏（伊達市教育委員会学芸員）、石神 敏氏（小樽市教育委員会学芸員）、石川直章氏（小樽市博物館学芸員）、上野秀一氏（札幌市市民局生活文化部文化財課文化財係長）、宇田川 洋氏（東京大学教授）、大谷敏三氏（千歳市埋蔵文化財センター長）、奥野淑枝氏、奥野美重子氏、川崎みどり氏、木村重信氏（大阪大学名誉教授）、小泉格氏（北海道大学名誉教授）、河野本道氏、小杉康氏（北海道大学助教授）、正源 昭氏（豊浦町教育委員会社会教育課長補佐）、新林裕子氏、瀬川拓郎氏（旭川市博物館学芸員）、半井 仁氏（滝川市美術自然史館学芸員）、長谷山隆博氏（芦別市星の降る里百年記念館学芸員）、福田茂夫氏（豊浦町教育委員会学芸員）、福田正己氏（北海道大学教授）、松村博文氏（札幌医科大学助教授）、三浦定俊氏（独立法人東京文化財研究所保存科学部長）、吉崎昌一氏（札幌国際大学教授）、浦坂周一氏（羅臼町教育委員会）

◆
第55回特別展「洞窟遺跡を残した縄縄文の人びと」

□開催期間/2002年9月13日(金)～11月3日(日)

□会場/北海道開拓記念館

□主催/北海道開拓記念館

□後援機関/北海道教育委員会・札幌市教育委員会・JR北海道・北海道新聞社・朝日新聞北海道支社・毎日新聞北海道支社・読売新聞北海道支社・NHK札幌放送局・HBC・STV・HTB・UHB・TVh・日本考古学協会・北海道考古学会・日本第四紀学会

◆
□展示構成・資料解説

右代啓視（チーフ）、平川善洋、山田悟郎、添田雄二、鈴木琢也、為岡 進

□図録執筆者

菊池徹夫（早稲田大学教授）、小川 勝（鳴門教育大学助教授）、乾 芳宏（余市水産博物館学芸員）、浅野敏昭（余市水産博物館学芸員）、赤松守雄、右代啓視、平川善洋、山田悟郎、添田雄二、鈴木琢也、為岡 進
□写真撮影/為岡 進 □展示協力/石田 努
□展示設計/亀谷 隆 □図録デザイン/亀谷 隆◆
□特別展開通事業

○特別展開通講演会/「岩面刻画の謎をさぐる-洞窟を利用した人びと-」 日時：9/21(土) 13:30-15:30 場所：かでる2・7 講師：木村重信氏（大阪大学名誉教授）

○特別展開通バス見学会/「洞窟遺跡を訪ねる」

日時：9/29(日) 9:00-17:00

講師：右代啓視・平川善洋・鈴木琢也

○文化の日特別講演会/「縄縄文文化のイメージ」

日時：11/3(日) 13:30-15:30 場所：北海道開拓記念館・講堂

講師：宇田川 洋氏（東京大学教授）

○体験学習行「大昔の人びとのくらし-縄縄文文化のころ-」

日時：8/28(水)・11/29(金) 場所：北海道開拓記念館・体験学習室

◆
第55回特別展「洞窟遺跡を残した縄縄文の人びと」The 55th special exhibition
"Zoku-Jomon People who left Cave Sites"

発行/2002年9月13日

編集・発行/

北海道開拓記念館

〒004-0006 札幌市中央区南一条西5丁目5-2

TEL:011-898-0456 FAX:011-898-2657

http://www.hmh.pref.hokkaido.jp

印刷/中西印刷株式会社

〒007-0823 札幌市東区東東条3条1丁目1-34

TEL:011-781-7501

©Historical Museum of Hokkaido



フゴッヘ洞窟遺跡岩面刻画

□ The National Designated Fugoppe Cave Remains, Yoichi Town, Hokkaido, Japan □

国指定史跡 フゴッペ洞窟



1950-2003

余市町教育委員会

はじめに

フゴッペ洞窟は、1950年（昭和25）に中学生により発見され、現在、日本最大級の岩面刻畫のある重要な遺跡として評価されている。しかも、この洞窟に描かれている岩面刻畫は、時代を異にするがスペインのアルタミラ洞窟、フランスのラスコー洞窟などの岩面画に匹敵するほどに、その価値が認められることとなった。

フゴッペ洞窟の岩面刻畫は、約800点にもおよぶ人物像や動物、舟などが描かれ、洞窟内から土器、石器、骨角器など多量の遺物が出土している。これらの岩面刻畫や遺物は、縄文時代の精神文化や生活を探る上で重要な遺跡であり、1953年（昭和28）に国指定史跡とされた。その後、遺跡保存のために木造の保存施設が建設されたが、岩面刻畫の保存・保護が重要視され1972年（昭和47）に日本最初のカプセル方式による保存施設が完成し一般公開された。多くの見学者が利用される中、保存施設の老朽化が深刻な問題となり、この施設の改修を2003年（平成14）から行い展示施設の充実をはかった。

これまでより、洞窟内のおよぼす岩面刻畫の持つ迫力が実感でき、余市町の文化財の情報はもとより、世界の岩面刻畫を発信できる施設を目指すこととした。さらに、この貴重な遺跡を人類の遺産として未来永劫に保存・保護し、縄文時代のフゴッペ洞窟人の社会や文化の探求を目的に考古学はもとより、先史美術や関連科学などの学際的な研究を進めていきたいと考えている。このカタログをとおして、「国指定史跡フゴッペ洞窟」を理解して下されば幸いである。

余市町教育委員会



□フゴッペ洞窟の位置

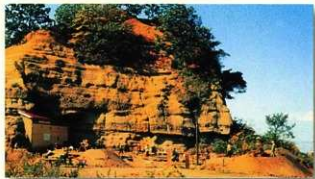
Introduction

Fugoppo Cave was discovered in 1950 (Showa 25) by a junior high school student, and it is now recognized as an important remains which possess petroglyph on cave walls which is one of the largest scale in our country. The value of these petroglyph has been regarded to be compared with those in Altamira Cave in Spain and Lascaux Cave in France of different ages.

The petroglyph of Fugoppo Cave contains about 800 pictures of people, animals and boats, and abundant remains of potteries, implements of stones and bones were excavated from this cave. These petroglyph and remains are important in search of considering the spiritual culture and life of the Zoku-Jomon Period, and in 1953 (Showa 28) this cave was recognized as one of the national designated remains. Later wooden facility was constructed in order to preserve the remains, and the preservation and protection of the petroglyph were regarded especially important. In 1972 (Showa 47) a preservation facility was constructed as the first capsule type facility in our country and it was opened to the general public. Many people visited this facility, but the superannuation of the facility became a serious problem. The repair of this facility has been continued since 2003 (Heisei 14) and after renewing, the facility was even more completed.

Consequently one can convince more real the interiors of the cave and the petroglyph and obtain information of the cultural properties of Yoichi Town. And this facility aims to give information petroglyph to the world. We hope to preserve and protect eternally this important remains as a property of mankind, and continue interdisciplinary investigations on the archaeology of the society and culture of the Fugoppo cave people in the Zoku-Jomon Period as well as prehistorical arts and related sciences. We will be happy if all visitors here will understand "the national designated Fugoppo Cave Remains" by reading this catalogue.

Board of Education of Yoichi Town



□フゴッペ洞窟の発掘調査（1971年）

目次

I	国指定史跡フゴッペ洞窟	1
II	洞窟を利用した人びと	6
III	利用された道具	8
IV	北と南の交流	13
V	描かれた岩面刻畫	15
VI	岩面刻畫のひろがり	17

I 国指定史跡フゴッペ洞窟

フゴッペ洞窟^{ふごっぺ}は、北海道の積丹半島の入口でもある余市町栄町（旧：峯部村^{みねべ}）に位置している。標高約30mの丘陵先端部の東面に開口する幅約6m、高さ約7m、奥行き約7m岩陰洞窟である。

発見されるまでの洞窟は、付近の農家が客土をおこなっていたため、洞窟周辺の土砂が取り去られ、洞窟の上部がわずかに見えていただけといわれている。洞窟の発見は1950年（昭和25）の夏、札幌の中学生であった大塚誠之助氏が、その洞窟から遺物を採集したことにある。洞窟の状況を兄に説明し、兄が所属していた札幌南高等学校郷土研究部の活動として発掘調査が行われた。これをうけ1951・1953年には、フゴッペ洞窟調査団が組織され、学術的な発掘調査が実施された。

フゴッペ洞窟は、岩面刻画群^{がんめんこくわ}の発見や貴重な遺物が多量に出土したことから、縄文時代の重要な遺跡であるとされ、1953年（昭和28）11月14日に国指定史跡となった。



□余市湾とフゴッペ洞窟（右側）



□旧フゴッペ岩面刻画

この岩面刻画は、1927年（昭和2）に函館本線の保線工事の際、丸山の南側で発見された。これを「フゴッペ古代文字」として櫛をめぐらし一般公開されていたが、1971年（昭和46）ころ丸山の土砂崩れにより埋没していた。2002年（平成13）の史跡保存整備事業の発掘調査にともない位置、岩面刻画などの確認調査が行われ、現在は岩面刻画の風化をさけるため埋設し保存することとなった。



□フゴッペ洞窟の発掘調査（1950年）

昭和25年の秋、札幌南高等学校郷土研究部の活動として発掘調査が行われた。



□学術調査前のフゴッペ洞窟（1951年）

昭和26年、フゴッペ洞窟調査団が組織され、発掘調査開始前のようすである。



□発掘調査のようす（1951年）

巨大な崩落礫を砕いているようすがうかがわれる。また、木材で崩落などを防ぐ、養生が見られる。この崩落礫の下は1953年に発掘されている。



□昭和26年頃の発掘調査のようす



□昭和26年頃の発掘調査のようす



□遺物の出土状況



□遺物の出土状況



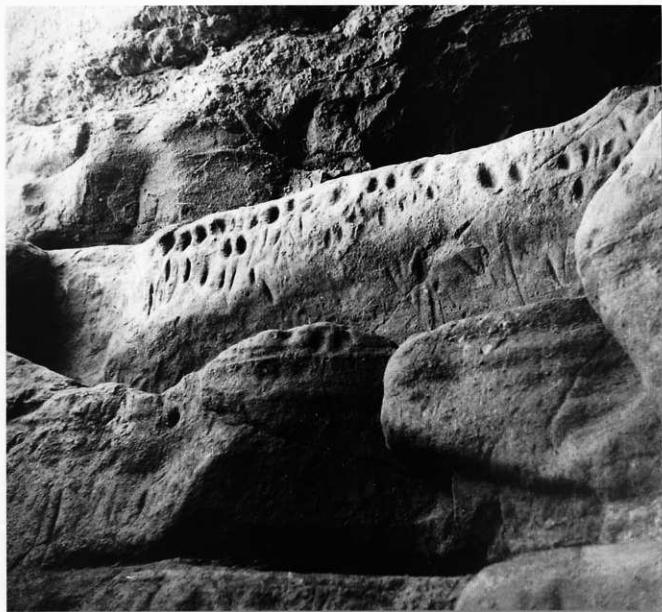
□具塚地層断面



□具塚地層断面



□昭和30年頃のフゴッベ洞窟



□南壁の岩面刻画（人物像、蛋状穴）



□昭和43年頃のフゴッペ洞窟



□昭和47年～平成13年のフゴッペ洞窟



□北壁の岩面刻画（人物像）

II 洞窟を利用した人びと

本州では稲作を基盤とした弥生文化が成立し、その後、古墳文化へと移行する。一方、北海道では縄文時代がおわり金属器を導入しつつ、狩猟・採集に重点をおいた統縄文文化が6世紀ころまで続いた。

フゴッペ洞窟内では、厚さ約6.5mの砂層、貝層、灰層などが入り混じって堆積し、下の層からは^{カタマガイ}炉跡が確認されている。遺物は、土器、石器、^{こつがき}骨角器などが出土し、おもな土器は後北式土器（後期北海道式^{うすて}薄手縄文土器の略）で1～4世紀ころとされるものである。自然遺物の貝類はコタマガイ、マガキ、エゾタマキガイ、マクラガイなどの二枚貝や巻き貝、また魚類はヒラメ、カレイ、ソイなどの沿岸魚、鳥類はアホウドリ、アビ、シギなど、哺乳類はシカが多く、キツネ、タヌキ、オオカミなどが出土している。

このことからフゴッペ洞窟を利用した人びとは、狩猟・漁労を行いながら岩面刻画を描き、それにかかわる^{さいし}祭祀・儀礼などを洞窟内で行っていたと考えられる。



□後北式土器（統縄文時代）



□後北B式土器
（統縄文時代）



□後北C1式土器
（統縄文時代）



□後北C2・D式土器
(統縄文時代)



□後北C2・D式土器
(統縄文時代)



□後北C2・D式土器
(統縄文時代)



□後北C2・D式土器
(統縄文時代)



□後北式土器 (統縄文時代)

III 利用された道具

フゴッペ洞窟人は一年中、洞窟で生活していたわけではなく、狩猟や漁労の時期、あるいは貝や山菜、堅果類などを採集する時期、それらにともなう祭祀・儀礼の時にこの洞窟を使用していたと考えられる。

洞窟内から出土した土器は、深鉢や注口のついた浅鉢などで、中には彩色された特殊な土器もみられる。また、石器は石鏃・石槍・スクレイパー（削器・掻器）・石斧・砥石など、骨角器は鈎頭・鈎針・針・刺突具・角斧など、狩猟や漁労の道具がみられる。中でも鉄器で刻線を施した鈎頭、針などは、縄文文化を知る上で貴重な遺物である。また、岩面刻画を描いた道具として、ベンガラが付着した土器、貝（ウバガイ）、石皿と角斧は特徴的な遺物である。フゴッペ洞窟を利用した人びとは、それらの道具を巧みに使用していたことがうかがえる。



□刻線のある骨製針
(縄文時代)



□スクレイパー・ナイフ・石鏃・石槍ほか (縄文時代)



□石斧・くほみ石・砥石・台石ほか (縄文時代)



□骨製銚先 (統縄文時代)



□骨製釣針・弓筈・銚管・刺突器 (統縄文時代)



□骨製針・針入 (統縄文時代)



□ヤスで突かれたアワビ (統縄文時代)



□ヤスで突かれたカキ (統縄文時代)



□ヤスで突かれたカキ (統縄文時代)



□⁴⁰⁵² 卜骨が納められていた後北C1式土器 洞窟前庭部出土（統縄文時代）



□⁴⁰⁵² 鹿の肩甲骨を使用した卜骨
洞窟前庭部出土
(統縄文時代)

□フゴッベ式土器片
(統縄文時代)



□北大式土器
(統縄文時代)



□岩面刻画片
洞窟前庭都出土
(統縄文時代)



□骨斧・角斧（統縄文時代）



□ベンガラのついた土器（統縄文時代）



□ベンガラのついたウバガイ（統縄文時代）



□彩色のある後北式土器片（統縄文時代）

IV 北と南の交流

フゴッペ洞窟からは統縄文時代後半の後北文化の遺物のほか、サハリンの鈴谷文化の土器や柱状石斧が出土するとともに、東北地方の弥生系土器が出土している。この北の鈴谷文化の土器と南の弥生系土器は、3～4世紀ころの遺物でフゴッペ洞窟人と文化的な接触、あるいは交流が行われていたことがうかがわれる。

その後、捺文文化期になると洞窟前庭部に墓がつくられ、その副葬品として円頭大刀や方頭大刀、刀子、鉄鎌が出土している。この大刀は本州の古墳時代末、7世紀代のものであり、「日本書紀」の記事にみられる「阿倍臣比羅夫の渡島遠征」を彷彿とさせるものでもある。



□弥生系土器（天王山式土器・統縄文時代）

□柱状石斧
洞窟前庭部出土
（統縄文時代）



□鈴谷式土器片
洞窟前庭部出土（統縄文時代）



□鈴谷式土器片
（統縄文時代）



□刀子
洞窟前庭部・墓出土
(権文文化期)



□方頭大刀
洞窟前庭部・墓出土
(権文文化期)



□円頭大刀
洞窟前庭部・墓出土
(権文文化期)



□鉄鏃
洞窟前庭部・墓出土
(権文文化期)

V 描かれた岩面刻画

フゴッベ洞窟を特徴づけたのは、^{こうだ}敲打法、^{さくま}削磨法、^{ちゆうせん}彫線法、^{せんこう}穿孔法で刻まれた約800点におよぶ岩面刻画である。岩面刻画は人物像、動物の仮装をした人物像、舟、^{しそくじゆう}四足獣、魚などが表現され、狩猟暦、豊猟・豊漁などの祈願をこめて描かれたものと考えられている。

岩面刻画が描かれた時期は1～4世紀ころと考えられるが、長期間にわたって描かれたものか、短期間に描かれたものなのかは不明である。これらを彫刻する道具は、^{つの}角斧や^{せき}石斧などがあり、木の枝、あるいは骨なども考えられる。また、ベンガラがついたウバガイや土器、^{いし}石皿なども道具の一つとして使われていた。



□北壁の岩面刻画（人物像など）
（統縄文時代）



□北壁のベンガラが塗られた岩面刻画（人物像など）
（統縄文時代）



□北壁の岩面刻画（人物像など・統縄文時代）



□南壁の岩面刻画
(有翼人、人物像など)
(縄縄文時代)



□南壁の岩面刻画
(有角人、人物像など)
(縄縄文時代)

VI 岩面刻画のひろがり

日本の岩面刻画は、北海道の余市町フゴッペ洞窟と小樽市手宮洞窟の2ヶ所だけしか知られていない。これらをペトログリフとか、ロックアートと呼び、過去に人類が洞窟や岩壁に残した絵画を指す言葉で、世界各地域に多くみられる。中でもフランスのラスコー洞窟や北スペインのアルタミラ洞窟などの岩面刻画や岩面画は有名で、考古学や人類学はもとより、先史美術の研究の対象となっている。

隣接するアジア大陸には、朝鮮半島やバイカル湖周辺域、アムール川流域のサカチアリヤン、ウスリー川流域のシェルメチュェヴォ、キーヤ、スックパイなどの岩面刻画、さらにオホーツク海北西海岸、東シベリア海沿岸域まで岩面刻画がみられる。舟や人物像などの共通したものもあるが、フゴッペ洞窟や手宮洞窟の岩面刻画のもつ意味や大陸の岩面刻画との関連性についてはいまだ解明されていない。



□サカチアリヤンの岩面刻画 ロシア共和国・サカチアリヤン道跡（新石器時代～鉄器時代） マスク

トナカイ



□岩面刻画のひろがり



□シェルメチュェヴォの岩面刻画 ロシア共和国・シェルメチュェヴォ道跡（新石器時代～鉄器時代）片

マスク



□キーヤの岩面刻画 ロシア共和国・キーヤ道跡（新石器時代～鉄器時代）

マスク

マスク



□北壁の岩面刻画



□南壁の岩面刻画

□フゴッベ洞窟のあゆみ



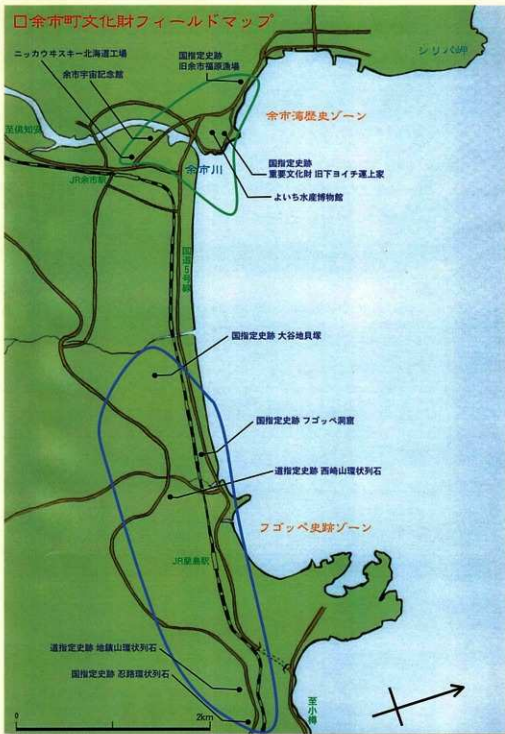
- 1904年**
(明治37) **鉄道敷設工事の実施**
フゴッベ洞窟の丸山は、鉄道工事により背後の台地と切り離され、現在のJR函館本線により分断。
- 1927年**
(昭和2) **岩部古代文字(旧フゴッベ岩面刻画)の発見**
国鉄函館本線保線工事の土砂除去作業中、丸山の南側に岩面刻画を発見。当時、「岩部古代文字」と呼ばれ、その名残が裏の踏切に残る。
- 1950年**
(昭和25) **フゴッベ洞窟と岩面刻画の発見**
当時、札幌の中学生であった大塚誠之助氏が、洞窟の入口付近で土器片を採集。兄の大塚以和雄氏に伝え、兄が所属する札幌南高等学校郷土研究部の顧問島田善造氏にことの重要さが連絡される。秋、同部活動として、発掘調査を実施。
- 1951年**
(昭和26) **フゴッベ洞窟第1次発掘調査**
北海道大学の名取光武助教授を団長とした発掘調査団を組織。学術的な発掘調査を開始。
- 1953年**
(昭和28) **フゴッベ洞窟第2次発掘調査**
発掘調査団による第2次の発掘調査を実施。洞窟内の岩面刻画の実測、石膏による型取り作業が中心となった調査。
- 国指定史跡になる**
11月14日に指定を受ける。
- 1955年**
(昭和30) **一般公開はじまる**
木造の覆屋を建設し、一般に公開。
- 1968年**
(昭和43) **フゴッベ洞窟第1次保存事業の実施**
岩面刻画の劣化が懸念され、洞窟内外の基礎調査を実施。**旧フゴッベ岩面刻画の消滅**
これまで、公開されていた旧フゴッベ岩面刻画(丸山の南側で発見された岩面刻画)が崩落のため埋没。
- 1970年**
(昭和45) **フゴッベ洞窟調査団編『フゴッベ洞窟』刊行**
昭和26・28年に実施された学術的な発掘調査報告書が刊行。
- 1971年**
(昭和46) **フゴッベ洞窟前庭部の発掘調査**
保存施設新築のための発掘調査を実施。ト骨の納められた土器、7世紀代の方頭大刀・円頭大刀が副葬された墓を発掘。
- 1972年**
(昭和47) **フゴッベ洞窟新保存施設完成**
日本初、カプセル方式の保存施設が完成。一般に公開。**フゴッベ洞窟調査団編『フゴッベ洞窟発掘調査概報』の刊行**
昭和46年の発掘調査の概要報告が刊行。
- 1998～2003年**
(平成10～15) **フゴッベ洞窟保存調査事業の実施**
施設の老朽化、岩面刻画の剥落などから改修にむけた保存調査を開始。史跡フゴッベ洞窟保存調査委員会を設置し、保存方法など検討。
- 2000～2002年**
(平成12～14) **文部科学省科学研究費による学術研究を実施**
北海道開拓記念館と余市町教育委員会が連携した「フゴッベ洞窟・岩面刻画の文化交流とフィールドステーション作りの基礎研究」を実施。
- 2001～2002年**
(平成13～14) **史跡整備の発掘調査を実施**
洞窟前庭部や洞窟周辺の発掘調査を実施。旧フゴッベ岩面刻画の確認調査も合わせて実施。
- 2004年**
(平成16) **史跡フゴッベ洞窟保存施設の改修と一般公開**
旧フゴッベ洞窟保存施設の改修工事が終了。一般に公開。

□文化年表・環境変遷

		北海道	環境変遷	本州(東北)
4世紀	縄文時代	食料獲得社会	弥生海進期 海水面+1.5~2m	食料生産社会の成立 東北北部に弥生文化が拡がる(砂沢)
3世紀	統	恵山文化 (タンネトウシ系、 宇津内・ 下田ノ沢文化 (二枚橋系、興津)		弥生時代 (田舎館 (念仏間 (天王山) 東北に後北式土器が 拡がる
2世紀		後北文化 (後北B、南川Ⅲ、 宇津内Ⅱa) フゴッペ洞窟遺跡 手宮洞窟遺跡 (後北C、南川Ⅳ、 宇津内Ⅱb) (後北C=D、 鈴谷、天王山系)	2000年前の北海道南西地帯	
B. C. 1世紀 A. D. 1世紀	縄		寒冷期	
2世紀	文		小海進期	
3世紀	時		古墳寒冷期	古墳時代 (塚墓) (南小泉) 東北に北大式土器が 拡がる
4世紀		後	古墳末海進期 海水面+1m	
5世紀	代	オホーツク文化期 (北大Ⅰ) (北大Ⅱ) 円頭・方頭大刀が 拡がる	寒冷期	
6世紀	擦		平安海進期 海水面+2m弱	奈良時代 660/阿倍臣、 肅慎を討つ (国分寺下層)
7世紀			9世紀末の冷涼化 915/十和田火山灰 10世紀前半、 白頭山火山灰降下	平安時代 869/陸奥大地震 (表杉ノ入)
8世紀		文	五所川原産の須恵器が 拡がる	平安海進期 10世紀末/摩周火山灰降下
9世紀	化		寒冷期	鎌倉時代
10世紀	期		小温暖期	南北朝時代
11世紀	ア		1640/駒ヶ岳-d火山灰降下 1663/有珠-a火山灰降下 1667/樽前-b火山灰降下 1694/駒ヶ岳-c火山灰降下 1739/樽前-a火山灰降下 1741/渡島大島火山灰降下 1856/駒ヶ岳-c火山灰降下	室町時代 十三湊、 安東氏の最盛期
12世紀		イ	1456~1457/ コシヤミンの戦い	小水期
13世紀	エ			江戸時代 1695/津軽・ 盛岡藩の凶作 1755/奥羽宝暦の飢饉 1784/奥羽天明の飢饉 1832/天保の飢饉
14世紀		ウ	1669/ シャクシャインの戦い 円空、岩屋洞窟で 仏像を彫る 1789/ クナシリ・メナシの戦い	
15世紀	文			明治
16世紀	化			大正
17世紀				昭和
18世紀				平成
19世紀			1994/北海道南西沖地震	
20世紀				

※表の○は、主な土器の型式を示した。

□余市町文化財フィールドマップ



□よいち水産博物館 (余市町)



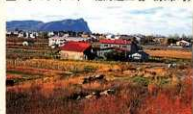
□旧余市福原漁場 (余市町)



□旧下ヨイチ運上家 (余市町)



□ニッカウスキー北海道工場 (余市町)



□大谷地貝塚 (余市町)



□西崎山環状列石 (余市町)



□地鎮山環状列石 (小樽市)



□忍路環状列石 (小樽市)



□国指定史跡 手宮洞窟

小樽市手宮洞窟の岩面刻画は、慶応2年(1866)に洞窟の近くで石切りをしていた石工の長兵衛が発見したといわれている。イギリス人ジョン・ミルンの「ルーン文字説」など、さまざまな文字説が報告されたが、現在、この文字説は否定され、縄文時代に描かれた岩面刻画であるとされている。この洞窟は、大正10年(1921)に国指定史跡となり、一般に公開されている。



国指定史跡 フゴッペ洞窟

□ The National Designated Fugoppa Cave Remains, Yachi Town, Hokkaido, Japan □

- 住所／〒046-0001 余市町栄町87番地
- 電話／0136-22-6170
- 協力／北海道開拓記念館・小樽市教育委員会
- 写真／為岡 進・今 和明・奥野義扶・大塚以和雄
- 執筆／浅野敬昭・乾 芳宏・右代啓視・鈴木琢也
添田雄二・山田信郎
- 編集／余市町教育委員会・北海道開拓記念館
- 発行／2003.3.20
- このカタログは、文部科学省科学研究費補助金地域連携推進
研究費「フゴッペ洞窟・岩面刻画と文化交流のフィールドス
テーション作りの基礎研究」(研究代表者：赤松守雄、課題
番号：12791004)の研究成果の一部である。